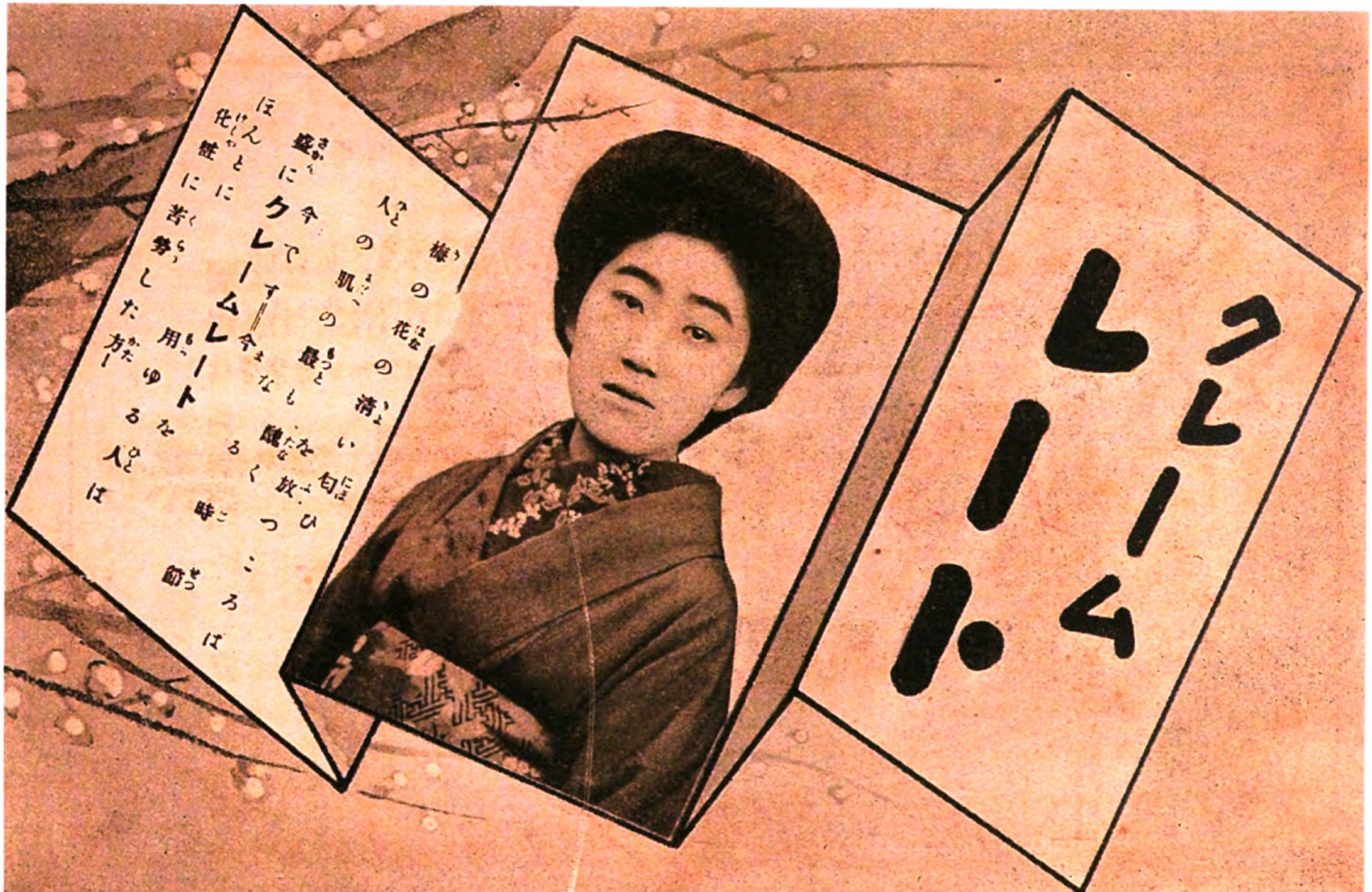
二月一日發行

女學世界

明治三十三年十二月廿五日（第三種郵便物認可）
明治四十四年一月二十三日印刷納本（毎月一回二十三日印刷納本）



第
第三號
博文館


梅の花の清い匂ひを放つころは
人の肌、の最も醜くなる時節
盛に今です――今
ほんとにクレームレートを用ゆる人は
化粧に苦労した方―
クレームレート

二月十日より開會

雛人形陳列會

雛祭もいよ〳〵近づいて參りましたから、今回以上の如く新製各種の雛人形及び附屬品一切を陳列販賣致します。お兒様方を御連れ遊ばし、御遊覧くださる様御願ひ申上げます。



東京駿河町

三越呉服店

女學世界 第拾壹巻第參號 二月號目次


御料洗粉
凜冽なる寒風をも恐れず清雅の姿、
馥郁たる香を以て萬人の注視を集むる者は
二月の梅園と
乳精と美艶劑とに依て精製せられたる
御料洗粉を愛用せらるゝ美人とであらう

女(いの一)

女（いの二）

●大好評初版一萬忽賣切再版五千成る

伯爵東久世通禧閣下題辭　●子爵仁禮景助閣下序文

渡邊審也畫伯　木村光太郎畫伯挿畫　植松保君裝飾　晴光館編輯部編纂

現代娛樂全集

送料東京市內四錢各地十六錢朝臺樺滿各四十錢

四六判千四百頁總六號ルビ付寫眞書[illegible]百挿入三色版口繪四頁美本二萬部限特價金一圓八十錢（定價金二圓五十錢）特製（總革天金分）特價金二圓八十錢（定價金三圓五十錢）

●本書の內容は總て獨習指南的にして師匠を要せざる珍書

●老幼男女貴賤上下の區別なくあらゆる娛樂全部を網羅す

●紳士淑女の社交上及家庭に於ける唯一慰安の好材料集也

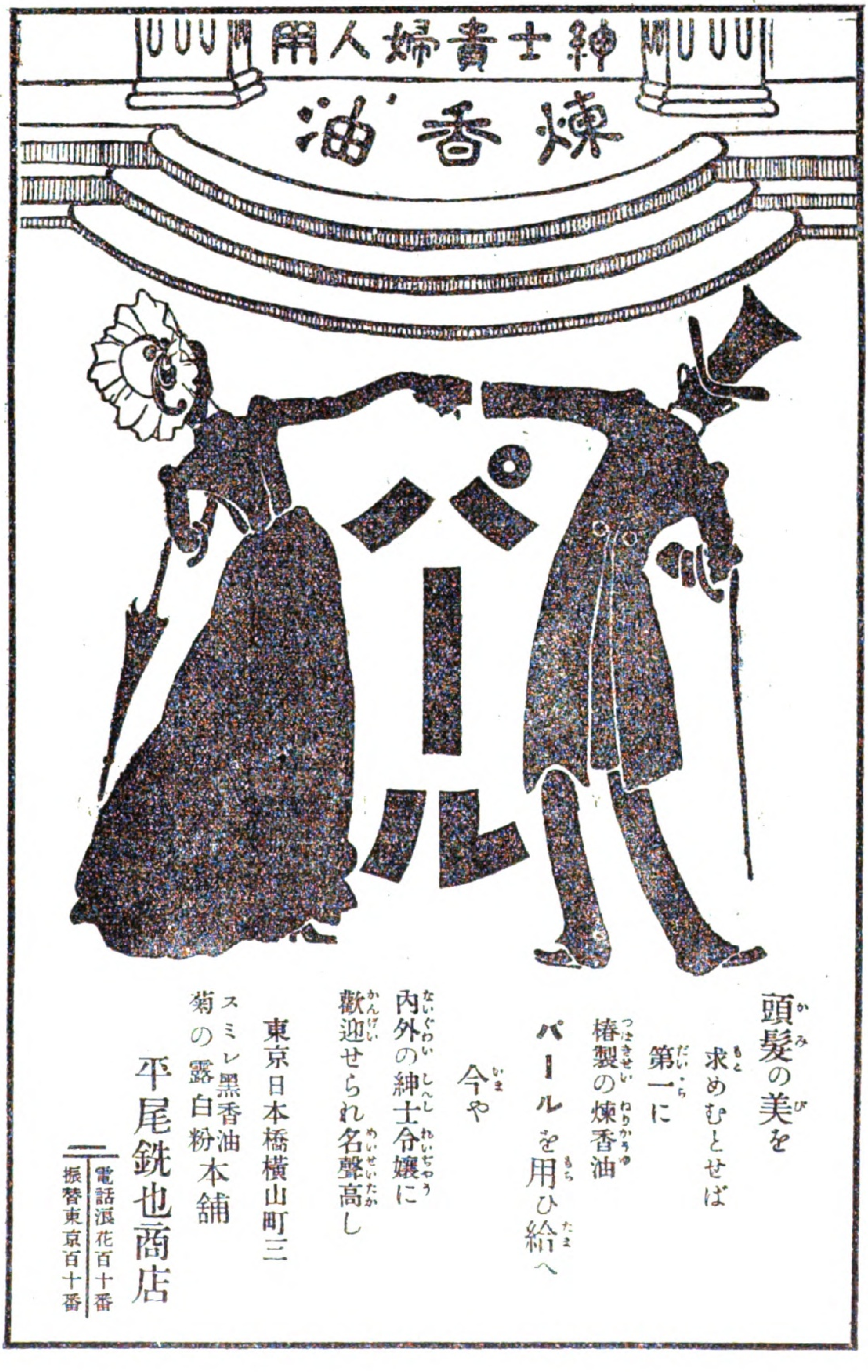
内容一斑

網編物。遊戲（百數十種）。生花。歌（四十種）。謠曲。占ひ。運動。運動會。宴會。御伽噺。音樂。香道。講談。樂器（三十種）。飼鳥。加留多。考物。曲藝。繪畫。菓子製造。活動寫眞。玩具。競馬。拳。劍術。幻燈。劍舞。骨董。五目並。昆蟲採集。造花。裝飾。サンドウ。柔術。刺繡。自轉車。芝居。將棊。寫眞。洒落。狩獵。書道。植物採集。双六。相撲。水泳。體操。刀劍。茸狩。玉突。地口。茶湯。釣魚。手品。登山。謎々。庭作。年中行事。能樂。能狂言。花火。一口噺。ピンポン。フートボール。福引。舞踏。ベースボール。ボートレース。盆景。盆栽。蟲飼。問答。養魚。燒物。落語。旅行。ローンテニス。圍棊。園藝。園遊會（附錄）化粧。料理。外數十項を五十音順に網羅せし珍書

發行所　東京市京橋區新肴町十四番地　電話京橋一七八五　振替東京一七五二五　晴光館書店

賣捌　東京。北隆。東京。文林。至誠。春祥。大洋。林平。目黑。文星。勉强。二松。日本（其他各書店）

女（いの三）



紳士貴婦人用
煉香油
パール
頭髪の美を
求めむとせば
第一に
椿製の煉香油
パールを用ひ給へ
今や
内外の紳士令嬢に
歡迎せられ名聲高し
東京日本橋横山町三
スミレ黒香油
菊の露白粉本舗
平尾銑也商店
電話浪花百十番
振替東京百十番

寒月



田中製版所三色版

女(ろの一)

一躍婦人雜誌界の第一

婦女界

本誌の二大呼物（每號掲載）

▲**夫婦論**
戀愛は神聖なりや、結婚は幸福なりや　羽仁もと子

▲**女**（貌と才と德）　文學博士　三宅雄二郎

●**六年を費して法華經八卷を寫す**　跡見花蹊

●**妖怪學上より見たる家庭**　文學博士　井上圓了

●**妻、母、主婦としての我が苦心**　宮田多賀子

●**家を上手に持つ工夫**　羽仁もと子

●**今様ふだん着姿いろいろ**
▲不斷着のえらび方▲不斷着のい
▲着物仕立方▲着こなし方

▲歌ものがたり　遠山稻子
▲二葉幼稚園を觀る
▲女子大學火事演習の記
▲風邪とは何か（濱川醫學士）
▲柴田女史宅の稽古初め
▲文藝その月々
▲初午の話
▲婦人と圖書館

▲**口繪**
▲樂しきまとゐ（上村松園女史）▲霜の朝（岡野榮）▲御名代として御渡英の東伏見宮妃殿下▲世紀に冠絶したる美人シッドン夫人▲跡見花溪女史と其の手寫にかゝる法華經▲居間、書齋、庭園に於ける棚橋刀自▲片山醫學博士の家庭▲新婚の加納子爵世嗣夫妻（以下略す）

一冊金十五錢（郵稅一錢五厘）六冊金九十錢　十二冊金一圓七十五錢（郵稅共前金）

位を占めたる本誌の二月號

婦女界

◎男子の品行問題

▲男子の不品行は何に原因するか▲男子は何故に節操を守る能はざるか▲男子の不品行を豫防するの道ありや▲男子の不品行に對する婦人の態度如何▲これらの問題に對して或は切實なる經驗の上より、或は科學、宗敎、敎育の立場より、最も明快適切なる解釋を與ふ▲夫の放蕩に苦しみ、或はその素行を疑ひて煩悶せるもの、及びすべての結婚生活にある男女、將に結婚生活に入らんとする男女は、必ず一讀せよ。

東京市神田區表神保町二　**同文館**　振替貯金口座東京一三五

女(ろの三)


千代田
香油
発売元
東京市馬喰町
山岸三之助
電浪花三七九三
振替二〇五〇〇
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
特製 金七十錢
大瓶 金三十五錢
中瓶 金二十五錢
小瓶 金十七錢


純白 浮き
スワン石鹸
純良なる家庭用浮石鹸
▲定價 二個續(壹本) 廿二錢
製造所 英國ポルトサンライト市 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
發賣元
東京馬喰町四丁目
山岸三之助
振替口座二〇五〇〇番

女、ろの四)

初音



天沼よ祢子筆

婦人諸病の自宅治療法

子宮病血の道の一般的の容體と云へば、凡て黴菌性の子宮病には痛みがある其痛みが急に始まり又急に劇しい時がある、黴菌性でない方は多くは慢性であつて何時始まつたとなしに次第に惡くなる、氣分や面色が惡く、ぶら〳〵して居る婦人の多くは即ち此病人である何んにしても一般共通とも云ふべき病狀は白帶下、腰の痛み、下腹の痛みである、又下腹が張る樣な、筋張る樣な、引緊る樣な容體となれば、又足が引つれて痛むと云ふ人もある、之れ等の病狀は又月經と關係がない人もある、又多くの婦人が月經になる前に白帶下が增すもので月經時に痛みのある人は勿論のことである其他に頭痛、逆上、眩暈、肩の凝り、手足や腰等が冷える、消化が不良で胃が惡く、便通が惡るい、神經が過敏になり物事が氣にかゝり、過ぎ去つた事や取り越し苦勞をして喜怒哀樂の感情が動き易く何事にも疲勞し易く仕事が倦み易く、短氣となり氣不性で氣六ケしくなる、記憶が惡くなると云つた樣に種々の病狀が起つて來るのみならず、此樣な容體に苦しむ婦人には姙娠せない場合が多いので、子供はなし身體は諸所惡いのが何時治るのか知れないので、鬱々として樂まず不快な月日を送る樣になる、甚だしきに至りては可哀想に艶麗花の如き美人や花嫁をして此苦痛をなさしめ、小便は度々したくなる又其度每に痛みを覺え、而して陰門の周圍は白帶下の爲めに濕はされ不潔にして臭氣あり、子宮內膜炎を起し終に腹膜炎を起して一命を失ふことがある萬一九死の中に一命を拾ふことが出來ても、芳顏の美人又見るカゲもなくしをれて快活の氣象はいつしか變じて憂鬱症となり子寶などは得ることが出來ず其身の不幸を泣き喞つ婦人は多數である、實に子宮病血の道ヒステリー病者程氣の毒なものはない、然るに世間には此の弱點に乘じ妻の病氣が治つた藥とか何處で發見したとか影も形もないことを云つて自己の粗藥を賣付けるものあるとのことだ、日々多數の患者が訴へて救を求めに來る賢明なる婦人諸君は此の樣な山師の甘言に迷はぬがよい、此婦人病の化學的の治療法に就てはハガキにて東京市京橋區弓町二二大日本化學研究所へ申込みあれば症候や病理や治療法や不姙の原因等を詳述せる療法書冊子を無代で進上します。

女（はの一）

喘息治療 血清液分與

遠隔試用者は醫士を經て申込事
詳細は別册呈す(貳錢要)

自宅毎日診察

東京芝區三田通り春日下
三田醫院 奥山伸

梅毒性諸疾患 慢性重症トラホーム
チブス豫防発疫は從前の通り

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液(モウセイエキ)



禿、脱毛、薄毛、生際悪き人試みよ……

本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舗 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

見よ◉月經なき女子◉病める婦人

▲効驚…藥力最精實…効能確保…有効無害…

●本劑は専門博士が學理と實驗より發見せられたる物

博士賞賛良藥 改良 月經 女月丸



其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて専用する最良藥なり二三月の月經閉止月經滞り經不順は一二劑にて必す流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢

◉肥滿病新藥

(米國新輸入)

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと／＼肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人◉ぶと／＼ふとり◉血太り◉肉太り◉酒太り◉水太り◉顔赤◉にきび◉ふき出物多き輕症一二劑如何程の悪性も四劑を連服せば色は[illegible]となり[illegible]美顔窈窕たる美人となる

諸嬢姉の福音

美人となる



やせる藥

る事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

價 一劑一圓五十錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 四劑五圓半 送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 振替第壹〇六七七番 小宮愛生堂

女(はの二)

婦人畫報

二月一日發行　二月の卷　一冊廿五錢　郵税二錢　六冊税共壹圓五拾錢　十二冊税共二圓八拾八錢

畫報

▼梅の宿（二頁大附録）中澤弘光筆
▼英國へ御差遣の東伏見宮兩殿下
▼聞香：：▼盆景▼令孃鑑
▼山内侯爵夫人：：▼京都の髪かたち
▼徳川繍子孃と高橋春子孃▼山と海
▼跡見花蹊女史新築の應接間と玄關前
▼久我誓圓尼公猊下の御染筆
▼宮中女官の年賀狀いろいろ
▼クリスマスの遊びと合奏
▼花園女史邸に於る新年の歌の會
▼理想的の室内裝飾
▲貴婦人新年互禮會
▼婦人の仕事いろいろ
▼組式：：▼禮法のしをり
▼女學校の授業はじめ
▼名流婦人のかるた會
▼愛國婦人會新年互禮會
▼新婚の高橋是賢夫妻と奥田竹松氏夫妻
▼育成園に於ける園兒の世話
▼衛生試驗所製作の食料品模型
▼溝口伯嗣子と室町伯爵の新夫人
▼高橋義雄氏新夫人と日向輝武氏夫人
▼戊申婦人倶樂部新年會
▼奈良と京都の女學校
▼女學生の假裝▼玩具の色々

讀物

◎良妻賢母の新意義　法學博士　新渡戸稲造
◎貴婦人と社會風俗　法學博士　小河滋次郎
◎社會事業と婦人　文學博士　三宅雄二郎
◎日本婦人の美德　文學博士　三上參次
◎婦人は男に非ず　法學博士　上杉愼吉
◎國家的思想　下田歌子
◎名婦かゞみ　いね子
◎婦人と法律　法學博士　川名兼四郎
◎和歌初學鴬の歌　佐佐木信綱
◎薪と炭の話　農學士　今村猛雄
◎鐵筆の修業　江木栄子
◎美人の資格　梶田半古
◎皇后陛下の御歌　遠山稲子謹記
◎我子の教育一　小金井きみ子
◎我子の教育二　加藤つね子
◎油物と甘い物　農學士　西村雷三
◎寡婦となりて孤兒の世話　鎮代子
◎訪問の心得　中島義式
◎二月の自然と人事　森しづか
◎會津女の風俗　みすゞ野
◎家具の手入れ　宮川すみ子
◎一家の主婦と料理　櫻井ちか子
◎與娘十五個條　書記官長　林田龜太郎
◎花嫁と實際問題　文學士　下田次郎
◎花嫁になる前の準備　文學博士　元良勇次郎

增刊 現代名流婦人

定價廿五錢
郵税二錢

東京麹町區飯田町四丁目四番地
東京社
電話番町二三三九番
振替口座一一八一八番

女（はの三）

二月一日より

雛人形陳列會



十八金の梅に白金の月

十三圓半



銀臺金消の鼠柳

四圓卅錢



十八金製眞珠の櫻

十二圓半



銀臺金消の蝶

三圓



十八金眞珠巴水

十一圓半

東京京橋
南傳馬町

大西白牡丹

電話京橋三十番。三十一番

振替口座東京九二九三番

女(ばの四)

妹と姉



岡野榮畫

最も貴重なる智識を最も單純に意得し得るは本會の特色なり

女子手藝講義録

壹ケ年修了

少額の費を以て家庭に最も有効なる手藝の最新智識を完全に修得せしむるは本會の講義録なり講師は斯道の大家なり世界の技術と斬新の考案を最新式の說明を以て講述す

共立女子職業學校
櫻友會内
普及會編

會費			
普通科		高等科	
壹ケ月	金參拾錢	壹ケ月	金參拾五錢
半ケ年	金壹圓七拾錢	半ケ年	金壹圓九拾九錢
壹ケ年	金參圓廿四錢	壹ケ年	金參圓七十八錢

圖解入　石版彩色及木版圖入

無料進呈　入會規定　内容見本

會員募集

社交上精神上家政上の成効を希望する婦女子は速に入會せよ

入會申込所
東京日本橋
大倉書店
電話本局四一四番 二二〇四番
振替口座東京二三八番



日本輸入品に限り包装紙に斜に「アイボリー石鹸」と記入し一見模造悪質石鹸と判別に容易ならしむ御購求の節「アイボリー石鹸」に御注意を乞ふ

家庭月報

月刊 第三年
第一號 既刊
定價一ヶ年分
金三十錢（郵稅共）

弁號附錄として『あやにしき』を添呈す眞面目を以て主眼とする本誌は敢て誇大の言を弄せず眞に國家の前途を憂慮する者は速に本誌を讀め

發行所 愛知縣北設樂郡段嶺村豊邦 美德館 振替口座東京一三五一六番

眞に美容を希ひ美髪を望む者は……先づ……

衛生化粧 最新美髪法 を讀め

本書の内容は
◎しらが、赤毛染の話◎毛のなき所に毛の生える話
◎ちゞれ毛くせ直しの話◎毛髪の洗ひやうの話
◎抜毛どめふけとりの話　其他毛髪化粧に關する秘法
にて郵券貳錢封入御申込なれば直ちに無代贈呈
……次ぎに……

理想的 最新製劑 ちゞれ毛くせ直し ペント を用ひよ

本劑は一度之れを使用すれば如何なるちゞれ毛くせ毛も立處に直伸し永く使用すれば殆んど根本的に全治す

定價十二個入九十錢六個入四十七錢　送料東京市内四錢　地方八錢

……また……

內務省免許
生毛強壯 ユフトニック

本劑は最も進歩したる毛髪劑にして根本的に毛髪を美化するにあり、されば本劑を服用せば、身體を强健にし、血行を良行ならしむ、皮脂線の分泌を盛んにし、毛根の營養を能くし、毛髪の發育を助くるを以て、薄毛、細毛、赤毛、白髪等に連用せば奇効あり。

十日分金壹圓 小包料金八錢
卅日分金貳圓五拾錢 小包料金拾六錢

發賣元 東京本所區外手町八七 深澤國華堂（振替東京二一〇八二五）

女(にの二)

德富蘆花氏原著
中澤弘光氏編畫

不如歸畫譜

名著不如歸世に出でゝ百餘版を重ぬ本書房蘆花先生に乞て編畫を中澤畫伯に囑し三年の丹靑を經て始めて本畫譜を江湖に捧るを得たり畫趣本文の詩趣と相俟つて妙言ふべからず裝幀印刷又た畫集中一頭地を拔く誰か一度本書を手にして亦措き得るものぞ

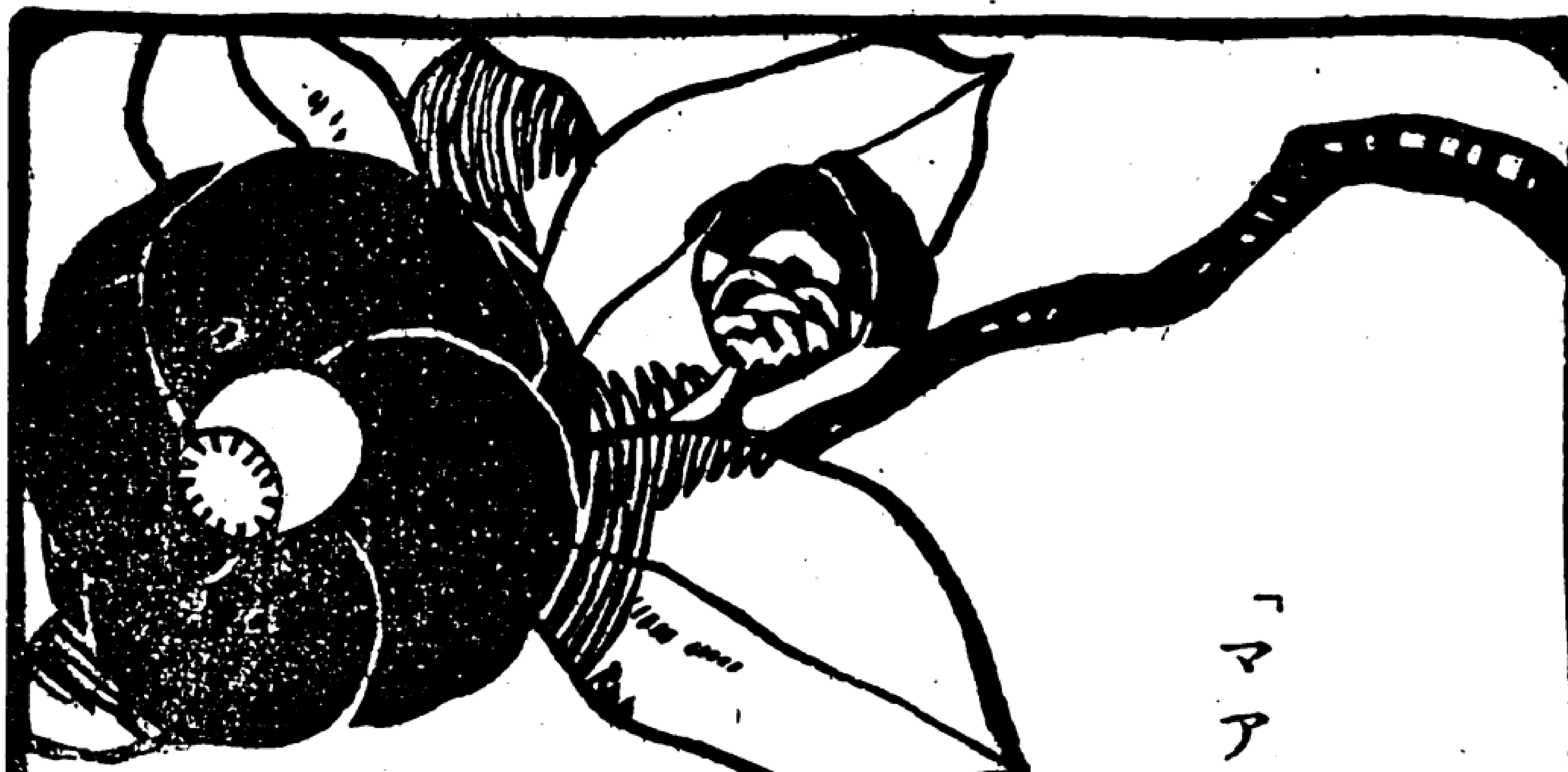
表紙四色版貼込手摺木版密書六菱入
挿畫全部百七十葉裝幀善美製本堅牢
定價金壹圓五拾錢送費金拾四錢

發行　東京市神田區小柳町　左久良書房

江村



河崎蘭香筆



椿

「マァ　どうでせう　御庭の椿の花の綺麗なこと
私　花の中では一番椿がいゝと思ひます
あの青い葉や赤い花　造花に拵らへて見
たらどんなに　いゝ花になるでせう」

（皆樣花の樣な御氣質になりたいと思召すならば
たえず造花を御拵らへ遊ばせ）

東京市日本橋區橫山町一丁目拾六番地
合資會社　天野卯兵衛商店
特長電話浪花（一六四三番）
電信略號【アマウ】
振替口座（東京）【四九七〇】

女（ほの一）

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒症　りん病　生殖器諸病　神經衰弱症　婦人病　わきが　ぢ

東京淺草瓦町　廿八淺草橋通　瓦町停留場横

中央醫院

りん病・梅毒・婦人病

子宮病　血の道　月やく（とまりたる病）　子なき婦人

腦病　生殖器病　神經衰弱

記憶力思考力減衰症等　生殖器病萎縮遺精早漏夢精發育不充分症等

わきが・ぢ疾・皮膚病

ただれぢ　あなぢ　きれぢ　でぢ等　にきび　たむし等

▲病狀記し郵券六錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地　淺草橋通瓦町　電車停留場橫

中央藥院

リウマチス全治　秘訣

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悅に勝へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ

東京府下大森停車場東大畑　河奈とめ女

竹柏會は佐佐木信綱氏指導のもとに清新なる和歌に志ある人々のため添削質疑に應じ又毎月一日雜誌『心の花』を發行す入會規則書は郵券二錢『心の花』見本は郵券十二錢を送られなば直に發送すべし

東京神田小川町一　電話本局二一一四　竹柏會

●圖書目錄

御入用の方は往復ハガキにて御申越次第即時送呈仕候

東京本町　博文館

懷妊避妊自由自在

全壹册　拾五錢　送料貳錢

子なき人は本書を讀みて懷妊の法を知るべく又子が出來て困る人は避妊の法を知るべく實に本書は懷妊避妊を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵券代用必一割增

大阪市東區鎗屋町壹　和泉屋

女(ほの二)

婦人世界

二月一日發行　六卷　第二號　一冊　五拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共一圓五錢　一年分同二圓五錢

◎試驗に迫りて狼狽する女學生……下田歌子

◎支那人に嫁した日本婦人……吳乙女子

◎私の百道樂……江木夫人　渡邊默禪

◎歷史實譚　松尾多勢子……

◎新形束髮の結ひ方……伊賀虎子　弦齋夫人

◎食物上の大改良……

◎辨財天は嫉妬深き神樣……武田豐四郎

▼日本には何故に婦人解放問題が起らぬか……鳩山春子

◎人情論……村井弦齋

▼手紙を書くにはこの心掛けが肝要なり……渡邊白水

◎姙娠を言ひ當てる千里眼婦人……竹內龜代子

◎小兒病の豫防……

◎家庭衞生談……加藤博士　村井弦齋

◎紅淚記……

◎家事經濟の執り方……伊藤鎭代　嘉悅孝子

◎新夫人の日常生活……岩崎德子

◎細川忠興の妻……井上博士　古城貞吉　幸田露伴　藤澤古雪　後閑菊野　栗塚龍子　その他

東京京橋南紺屋町十二番地　實業之日本社（郵便振替貯金口座二二六番）　賣捌　全國書店

女（ほの三）


鉛氣ない
白の高尚な
大學白粉
荒れたる肌も美しくなる
大學化粧水

薔薇花



河崎蘭香筆

毛髮の艶を美しくする

椿製ランラン香油

ランラン香油は髮をさらりとして常に御使用被下候はゞ決して臭氣を發しませぬ



東京市内……到る所油店小間物店有……

價（大瓶金廿五錢 小瓶金十八錢）

發賣元

大阪市新町

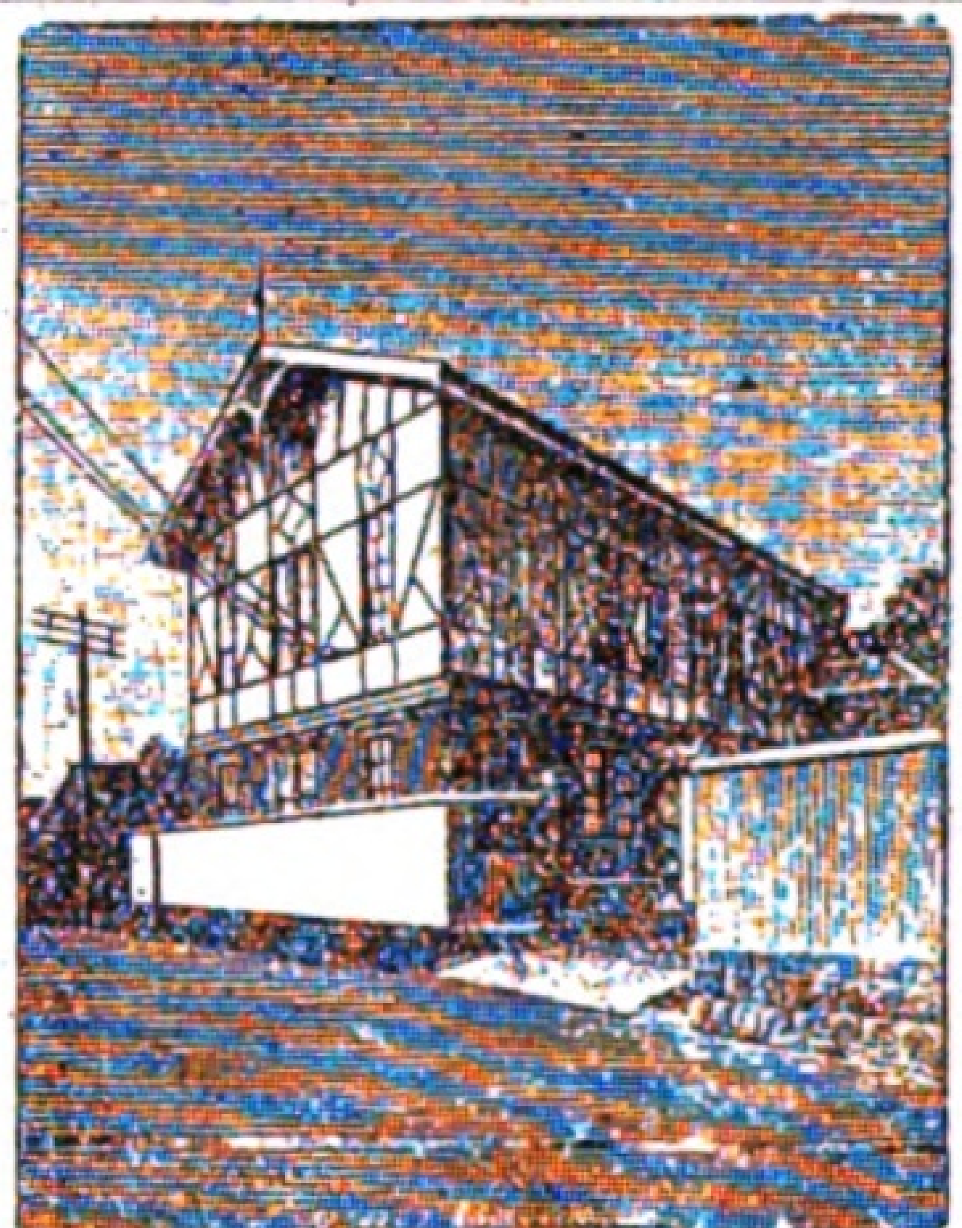
福田源次郎商店

電話西千六百〇一番 振替大阪一四八五番

東京市日本橋區馬喰町三の廿二

福田號支店

女（一〇）



女（への三）



都の花石鹸

芳香の高雅にして品質の純良なるは紳士淑女の愛用と名譽の金牌とに依り知らる

▲全國到る處の化粧品雜貨店に販賣せり

大阪 野村製

女(への四)

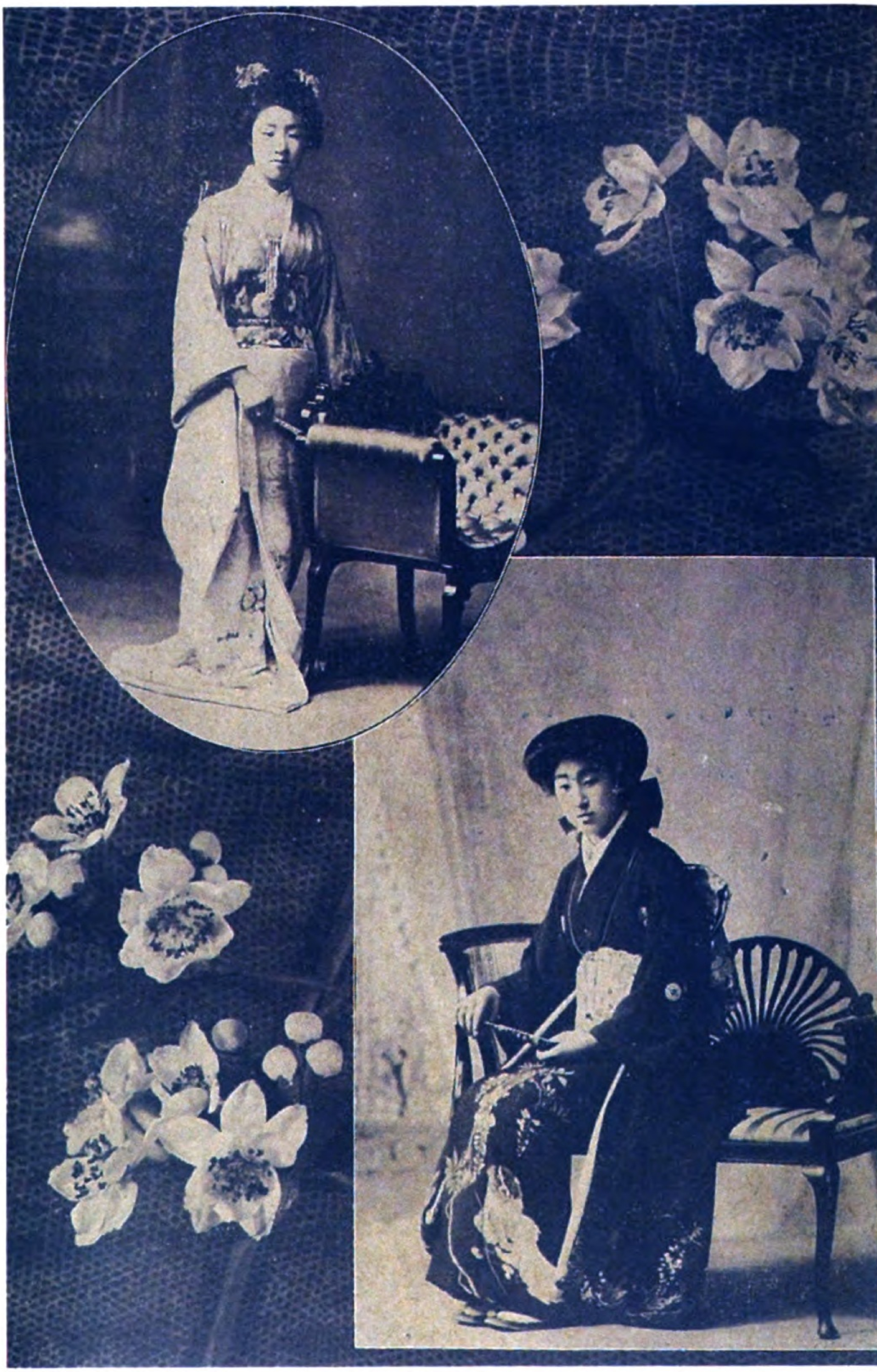
島津公爵夫人伊楚子



夫人は舊薩摩藩主島津忠重公の令夫人にして侍從長内大臣德大寺實則侯の第四令嬢なり

夫人と令孃

右圖、九條良政男（道實公令弟）夫人千代子（大谷光瑩伯令孃）



左圖、池田詮政侯令孃溫子（荏原郡大崎村池田侯爵家）

女(その一)

眞美



目下世界到る所の貴婦人令孃間に盛に愛用せられつゝある「シモンクレーム」は色を白くし、きめを細かに艶を出し手足のあれや唇のあれを防ぎ𛀁ヾシモヤケを治する等無比の理想的美顔劑なり

(各地化粧店品にあり)

Crème Simon

シモン・クレーム

眞美

生田流 井上胡蝶著

箏曲新譜

卷之一定價送料共壹圓七十錢海外は外に送料貳十錢增し

本書購求者は歌曲中不詳あらば質義自由なり曲譜は鶴の聲黒髮六段亂夕顏八段越後獅子千鳥新高砂茶音頭新雪月花巖上の松春の曲小督の曲其他名曲六種各調子の合せ方より彈琴に必用なる事項は悉く詳細に說明し樂譜は西洋音樂に通せざる人にても容易に彈奏し得らるべき最も見易き新譜を用ひたり苟も琴を習はんと欲する人一度習ひて忘れたる人は六段一曲を師に就きて習はるべき費用にて貳十の名曲を集めたる美麗なる文明的箏曲の譜本琴の良師を求め得玉ふべし

發行所 福岡市外馬出一、一〇三

箏曲通信教授所

◎子を持つ親 病人ある家人は是非必要 特許品

改良 ね 小便袋

定價◎乳兒用 九拾五錢◎中人用 壹圓貳拾錢◎大人用 壹圓九拾五錢 特別製品各拾五錢上り



送料各拾錢

衞生最良德用輕便ね小便袋は洗濯の世話なく手數を省き小便は袋の外へ洩れず蒲團を汚す事なく常に淸潔なれば小兒病人老人の最も必要にして、おきは本品の特長なり(男女の區別あれば御注文の節御注意を乞ふ)れ、きたち、すわり等に毫も差支な

ルーデーサック (十二個 五十錢 三十個 一圓) (五十個 一圓半 送料 八錢)

子宮サック (特製 七十錢 二個 一圓廿錢) (三個 一圓六十錢 送料 八錢)

註文切手代用必ず一割增 振替口座東京八一九八番

發賣元 大阪市東區京橋二丁目 常盤號ゴム部

東京市京橋大鋸町 女子文壇社出版 （振替口座第一二七九番）

最寄書店品切の時は々接出版元へ御申込を乞ふ

女子文壇

二月一日第七巻第二號發行要目

☞ 若き婦人の信頼すべき好雑誌

創作○散文○小説○詩○和歌○俳句等數百篇 **雜録**○都下の大工場に通ふ女の一人（べに江）○歌舞伎座の印象（夕ぼし）○常をとめ（美耶子）○奥の都會、仙臺市（ふゞき野）○初雪日記（玉あられ）○地方女教師の受くる誘惑（無名女）其他 **口繪**大下氏水彩畫・洗馬氏着色畫石版刷、皇族、紳士夫人及令嬢其他の光澤紙刷寫眞共十頁頗美

女子文壇増刊

婦人ノート

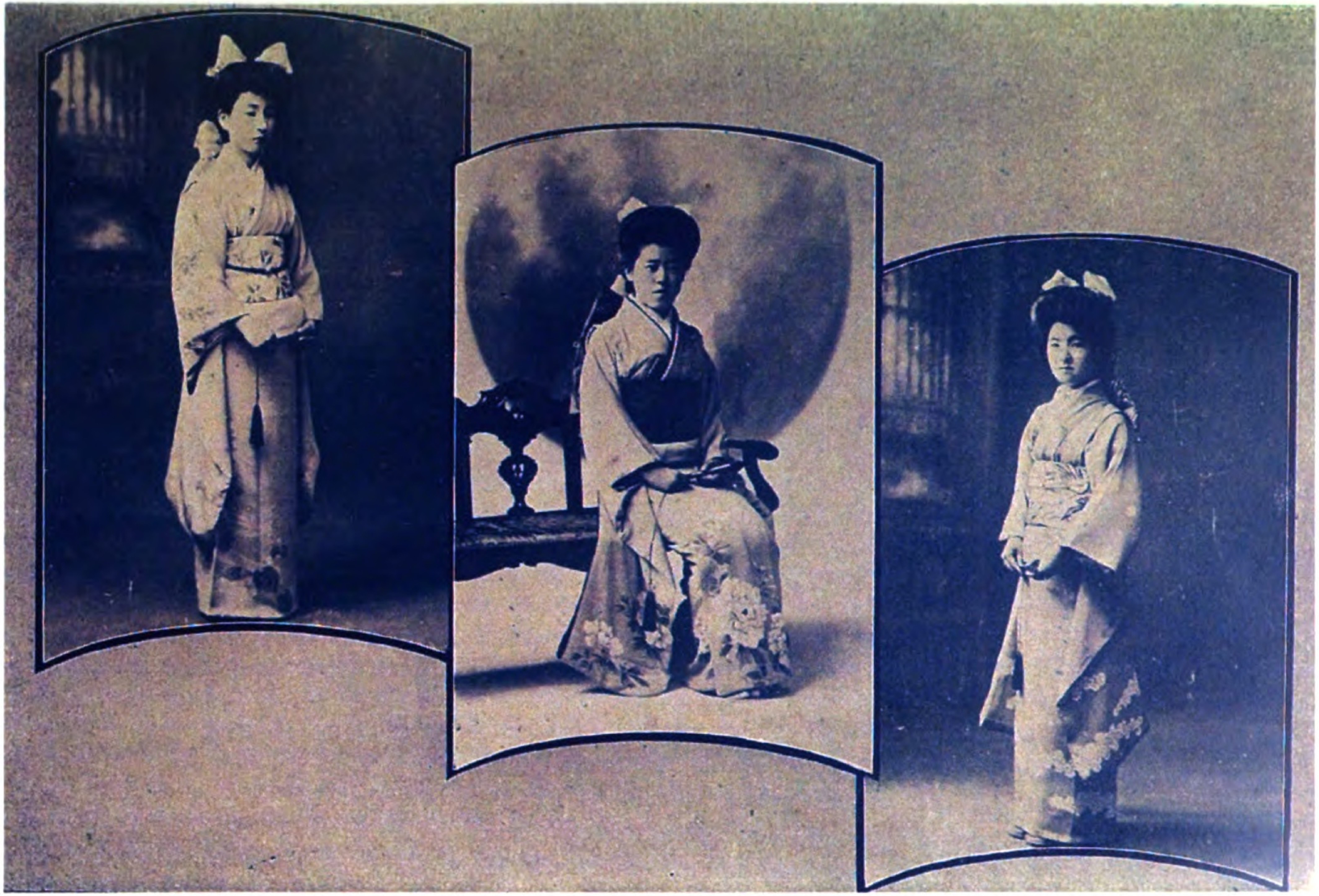
二月十日 第一増刊

●紙數二百頁美裝 定價金貳拾錢 郵税壹錢五厘

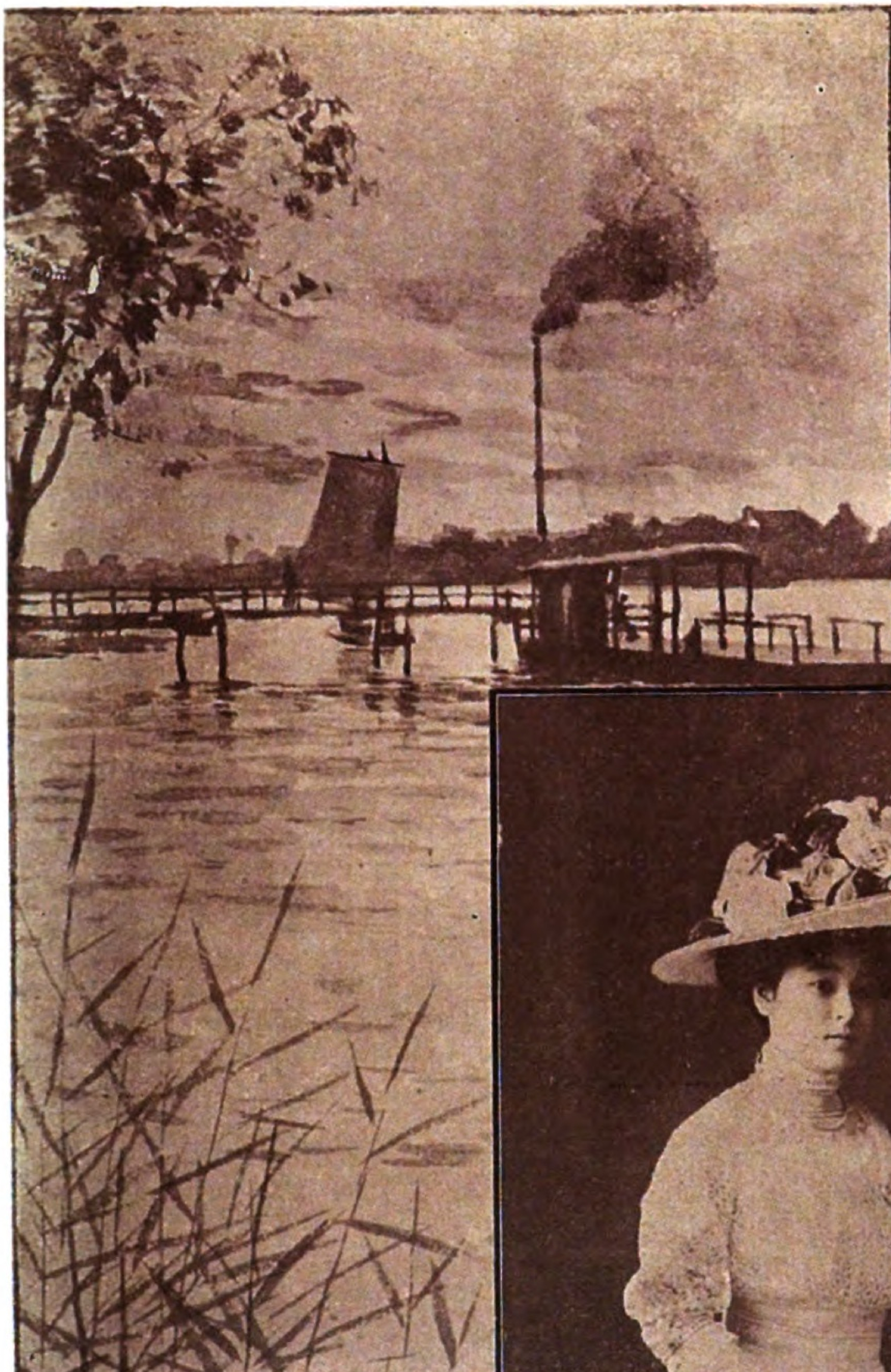
女（への三）

◀毎月一日發行 年四同日増刊 定價一冊十五錢 郵税壹錢五厘 半年（増刊とも八錢）壹圓參拾四錢▶

令嬢かゝみ(一)



右圖、理學博士佐々木忠次郎氏令孃雪子
中圖、大使館一等書記官西源四郎氏令孃朝子
左圖　海軍中將寺垣猪三氏令孃清子



墨堤の雪



日本銀行副總裁高橋是清氏令孃和喜子

女(ちの一)

● 婦人科 明治療院

殊に月經障害、内膜炎、姙娠、膀胱病、ヒステリ

東京淺草 七軒町二

院長 平田章之丞

生殖器病 專門治療從前通り

▲新宮藥館 五大賣藥

天下一品 美身術

美蔘散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらふとり、酒ぶとり、顏赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ゐて害なく身體美容となる有効保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓(五週)三圓廿錢送費八錢



◀にせ物あり乞御注意▶

器械不要 簡易複寫インキ

大好評 ▲定價二オンス 堅牢裝鑵入共送料 金參拾錢(郵券代用一割增)

下谷坂本町二の廿四 中村屋

中風 全治保証藥 ヘミフレギー丸

此藥は大學院各博士が協力發明の方劑にして効驗拔群禮狀山の如き一大保證藥也

價 ●十五日分一圓廿錢●卅日分二圓廿五錢●六十日分四圓廿錢●百日分七圓五十錢●小包送料八錢

らい病 根治新藥 レプラ丸

本劑は獨逸國醫學博士ポルマルセイ氏が癩病の病源より探究し多年の辛苦と數萬の患者に施藥實驗を經て終に成功したる靈藥にして如何なる難症と雖も本劑に依て全治するを得る一大奇藥也●にせ物注意あれ

價一劑廿五日用三圓二劑五圓五十錢四劑十圓小包料八錢

毛のはへる藥

多年實施の毛生劑にして特効驚くべき奇藥

にせもの注意

一圓●一圓半●濃厚二圓●三圓▲送料八錢

肺病根治劑

本劑は肺病肺結核の特効藥にして世上諸病殊に雜多の肺病藥と其類を異にし專賣の大奇藥なり輕症卅日以内數年の大患も五十日分にて必ず全治を確信す

●價二週一圓卅日一圓五十日二圓送料八錢

(全快禮狀店内に保存す) 新宮藥館 (東京本郷三丁目 振替一二五八四)

電話下谷二二一九番

女(ちの二)

新春誌壇に嶄然頭角を現せる青春女子の理想雑誌

女學生

◁二月號▷

二月一日第二號發行

◎脂粉の氣の多き女性（外十二項）……與謝野晶子
◎動かぬ道理美しき感情……井上哲次郎
◎三錢の借金が氣にかゝる……棚橋絢子
◎渡米船客の六割强は婦人……島貫兵太夫

■花嫁のマダム振り
■生花教授所看板のうら表て
■新らしき女の衷心の叫び
◎春日局……山路愛山
■記者たらんとする諸嬢よ
■敎育ある女の陥るワナ
■こんな奧様あんな令孃

▼青春期の女子の衛生……鷲山彌生
▽米國女學生氣質……柳原義光
▼小說　戀しき人……田村露英
■小督局……月草
▼○○子さんの打明話……紫野翠子
▽冬季の簡易美顏術……遠藤はつ子
▼侵略者フレタムケレ……黄金冠

◎表紙　クラス、メート……宗方筆
◎口繪
一瞥……原色寫眞
春の野……宮川安信
梅一枝……須藤宗方
ガスの光……渡邊與平
其他風俗寫眞數葉
本文插畫夢二其他

一冊金十五錢
郵稅一錢五厘
六冊九十三錢

懸賞文藝
秘密文、告白文、葉書文、俳句、和歌、笑話、習字、繪畫等の募集詳細なる規定は本誌上に有り

東京神田區旅籠町壹
文光堂
振替口座一九五五番

女（ちの三）

化粧香水

プラチナ



八方美人の香水！

世に香水の數は山々あれど悉く一品一効で人の鼻を衝くだけの効能さい持つて居ないが此のプラチナ香水は

◉ハンカチーフに一二滴たらして持てば終日香氣を保ち

◉微温湯に滴らせば乳白の化粧水と變じ

◉顔を洗へばニキビ、ソバカス、吹出物を全治し

◉頭髪に塗抹すれば毛髪を養ひ香氣馥郁香油の代用をするのみならず髪のくせを直し赤毛白髪を防ぎます

故に人は本品を「八方美人香水」と云ふは尤なる次第である

定價壹瓶三十錢▼郵券代用一割増遞送無料

東京日本橋横山町一丁目

發賣元 近江屋 天野源七

浪花八六三番 振替口座五九三三番

宮内省御用達

天下一品

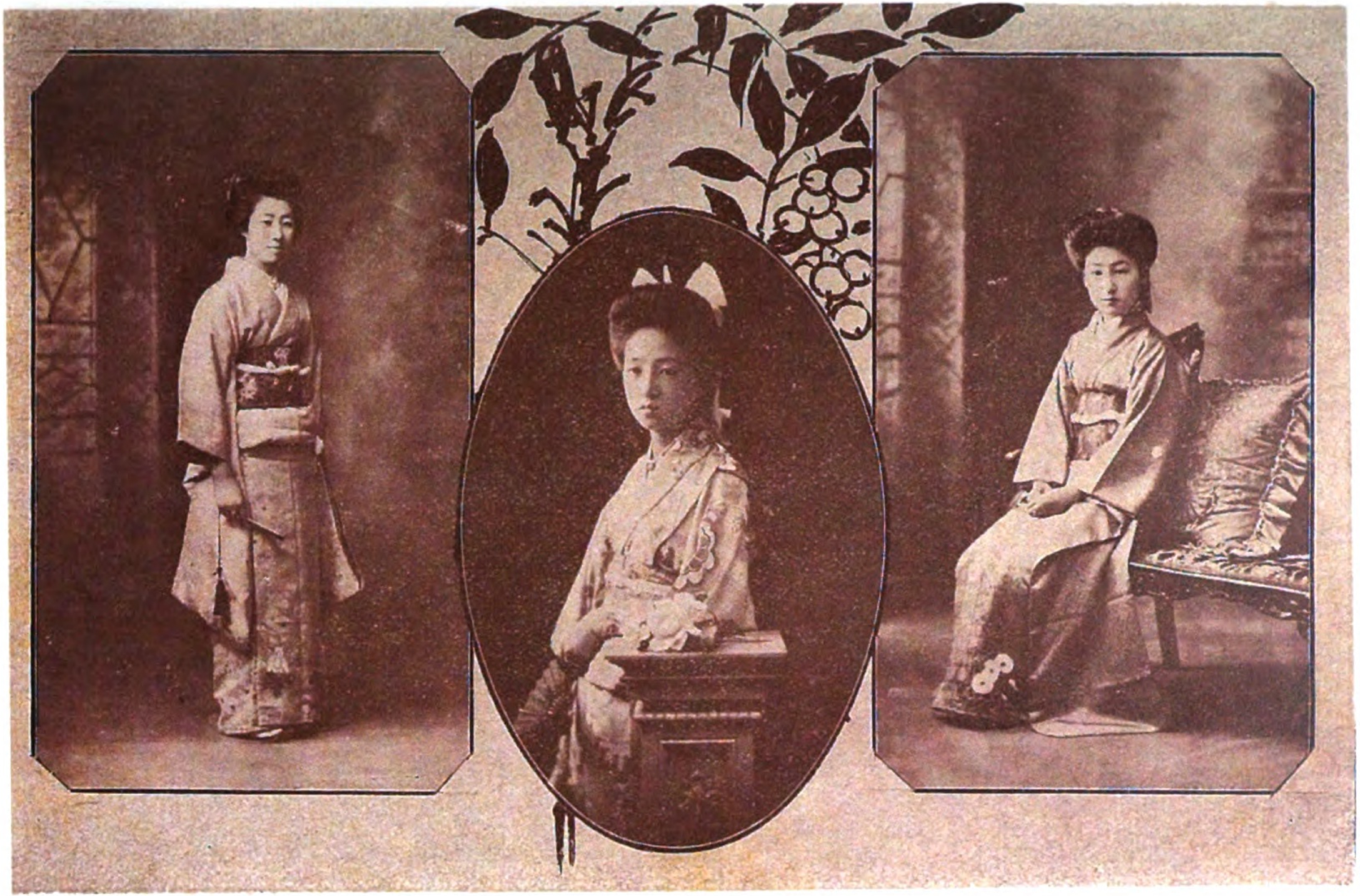
最上醤油

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

女(ちの四)

令孃かゞみ（二）



右、坂田たつ子（豐國銀行專務取締役坂田實氏令孃）
中、後藤藤枝子（後藤毛織會社專務取締役後藤恕作氏令孃）
左、須田すみ子（工學博士須田利信氏令孃）

新婚の春



右圖、大海原重義氏（熊本縣事務官）新夫人登代子（三上文學博士令孃）



左圖、岡田制勝氏（東京鐵道取締役岡田治衞武氏令息）新夫人靜子


最上醤油
元祖
上
開業貳百六拾七年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
醸造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一一番　振替口座五〇二一一番

女(るの一)

太陽 第拾七卷第參號 增刊

現代社會觀察

○廟堂の上より觀たる現代社會
○帝國議會を通して觀たる現代社會
○小說脚本を通して觀たる現代社會
○法醫學者の觀たる現代社會……
○司法官の眼に映ずる現代社會……
○現代女子の眼に映ずる現代社會
○浪人の現代社會觀……
○辯護士の現代社會觀……
○診察室より觀たる現代社會……
○學者の書齋に映ずる現代社會……
○文部當局者の觀たる現代社會……
○畫室に映ずる現代社會……
○海陸軍人の觀たる現代社會……
○舞臺より觀たる現代社會……
○養育院の受付より觀たる現代社會……
○大學經營者の觀たる現代社會……
○女子教育家の眼に映ずる現代社會……
○宗教家の現代社會觀……
○學生の現代社會觀……
○貴族の現代社會觀……
○新聞の二面を通して觀たる現代社會……
○老探偵の眼に映ずる現代社會
○老人の眼に映ずる現代社會
○株式仲買の現代社會觀

二月十五日發行

洋裝四六判 二倍大紙數 二百五十六頁
▼口繪 寫眞版豐富……

正價三十錢 郵稅 本號限り四錢

東京 本町 博文館

振替口座 東京二四〇番

女(ろの二)

農業世界 第六卷第三號 增刊

肥料案内

口繪 三色版石版 寫眞版共八頁　本文二百四十頁　正價 金貳拾錢 送料二錢

((二月二十日發行))

農作物の增收を得んとせば先づ作物の食料たる肥料の如何を撰定せざる可らず、實に肥料の良否は農作物を支配する要件なり、爰を以て本誌は增刊を發して左記の各肥料に就き、最近の學理と實驗とに基き、**各種肥料の性質、效力、製造法、施肥法、各作物に對する適否に就て**最も判り易きやう詳述せりしかも其の內容の豐富にして廉價なるに至ては本誌增刊の特長にして世既に定論あり。

▼堆肥　▽廐肥　▼下肥　▽骨肥　▼米糠　▽骨炭　▼骨灰　▽大豆粕　▼魚肥　▽家禽糞　▼海鳥糞　▽沈澱燐酸

▼獸類屍體　▽過燐酸石灰　▼窒素肥料　▽加里肥料　▼綠肥　▽乾肥　▼石膏　▽石灰　▼カイニット　▽硫酸アンモニア　▼智利硝石　▽硫酸加里

▼石灰窒素　▽有生肥料　▼プールドン　▽加熱分解肥　▼肥料の調合　▽肥料と土壤　▼酸性肥料と鹽基性肥料

其他

◉アニリット　◉プードレット　◉タスケージ

((東京))　博文館　((本町))

女ろの三

女(ろの四)

女(るの五)

世界一のやさしい面白い繪入英語雑誌

英語少年

四六二倍判・紙數四十頁・舶來上等紙石版極彩色・亞鉛凸版六度刷其他寫眞銅版及電氣版畫挿入

毎月一回……一日發行
正價金十錢郵稅五厘

▽▽第一卷第二號……二月一日發行△△

△イソップ物語（凸版彩色畫入）……誰でもわかる新工夫の讀み物
△二月の今と昔（凸版彩色畫入）……紀元節や閉塞隊の英語の解
△太郎のレッター……やさしい英語の手紙の書き方
△畫で稽古する作文（凸版彩色畫入）類の無い英作文の面白い手ほどき
△學校外の英語（凸版彩色畫入）……活きた英語のときあかし
△ワシントンの幼時（凸版彩色畫入）英語交りの新案のハイカラ物語

○英語の諺の畫解（石版極彩色畫入）
○この前の日曜日（凸版彩色畫入）
○新案英語考へ物（凸版彩色畫入）
○太郎のアルバム（石版彩色畫入）
○英語のなぞなぞ（凸版彩色畫入）
○フランクとアン（凸版彩色畫入）
○英語の一口話（石版彩色畫入）

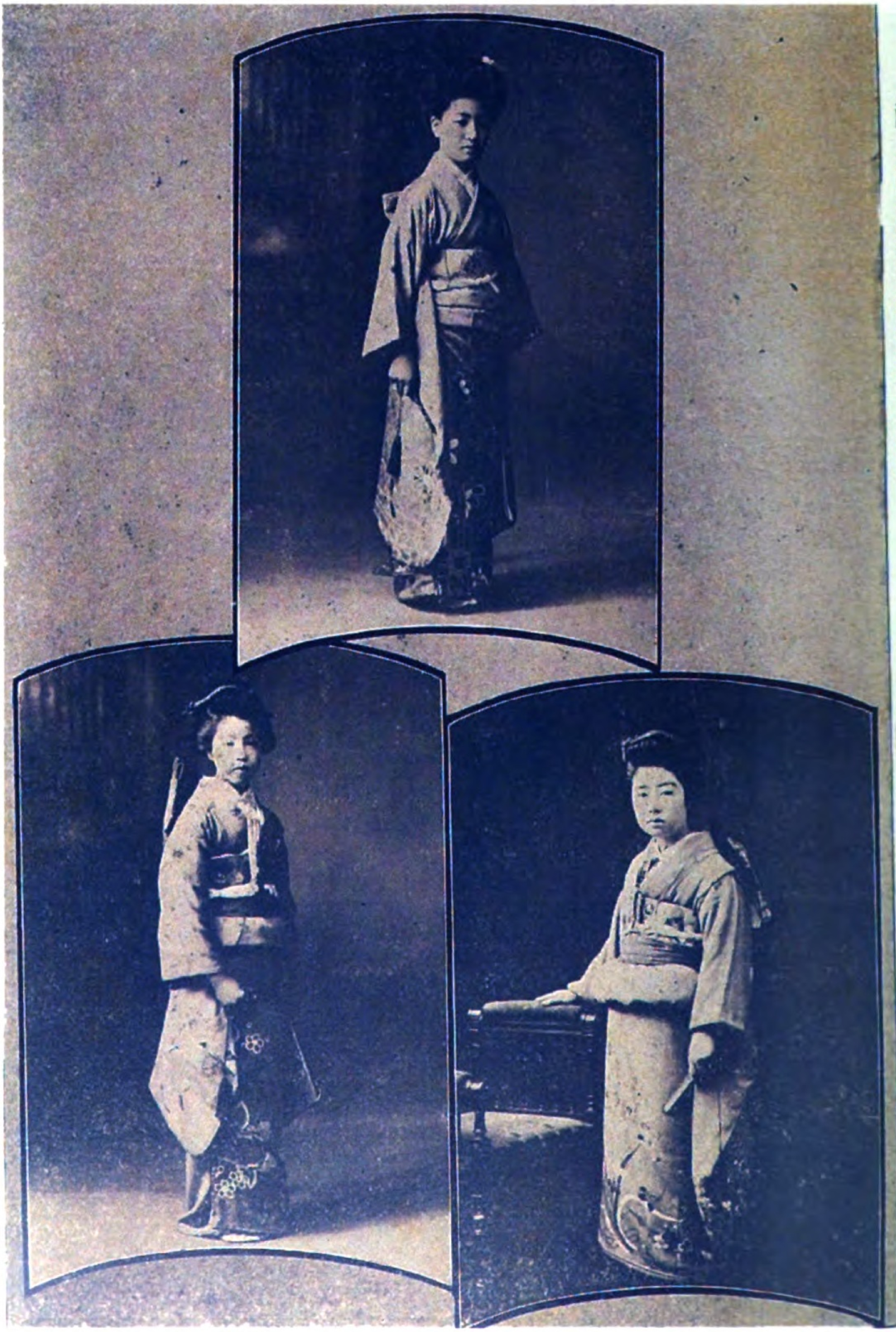
○英文米國大統領（畫入）
○吾が輩はSである
○二月の英語の解（畫入）
○敎育勅語の讀み方
○新案ローマ字讀本（畫入）
○舶來讀と和製讀
○英語八幡知らず（畫入）
○一人で出來る會話練習
○英語のいろは讀方（畫入）
○ローマ字の綴り方
○新案日英語の比較（畫入）
○各種懸賞の發表

東京 博文館 本町

女（るの七）

女（るの入）

令孃かゞみ(三)



左圖、三枝與三郎氏、東洋銀行取締役、令孃まさ子

上圖、黒田善太郎氏 深川の豪家、令孃松子

理想の子供服



女子共立會立案子供洋服

◎日英大博覽會受領名譽大賞寫◎



名譽アル山葉ピアノ 山葉オルガン



東京音樂學校敎授ロイテル氏
山葉オルガン演奏の圖

東京市京橋區竹川町十四番地
日本樂器製造株式會社東京支店

山葉ピアノ山葉オルガン
鈴木ヴァイオリン其他
西洋樂器東部一手販賣所

共益商社

電話新橋長四八八〇番
振替貯金口座東京二一〇七〇番

名譽アル鈴木ヴァイオリン

女(りの一)

女（りの二）

女(りの三)

二月十日より

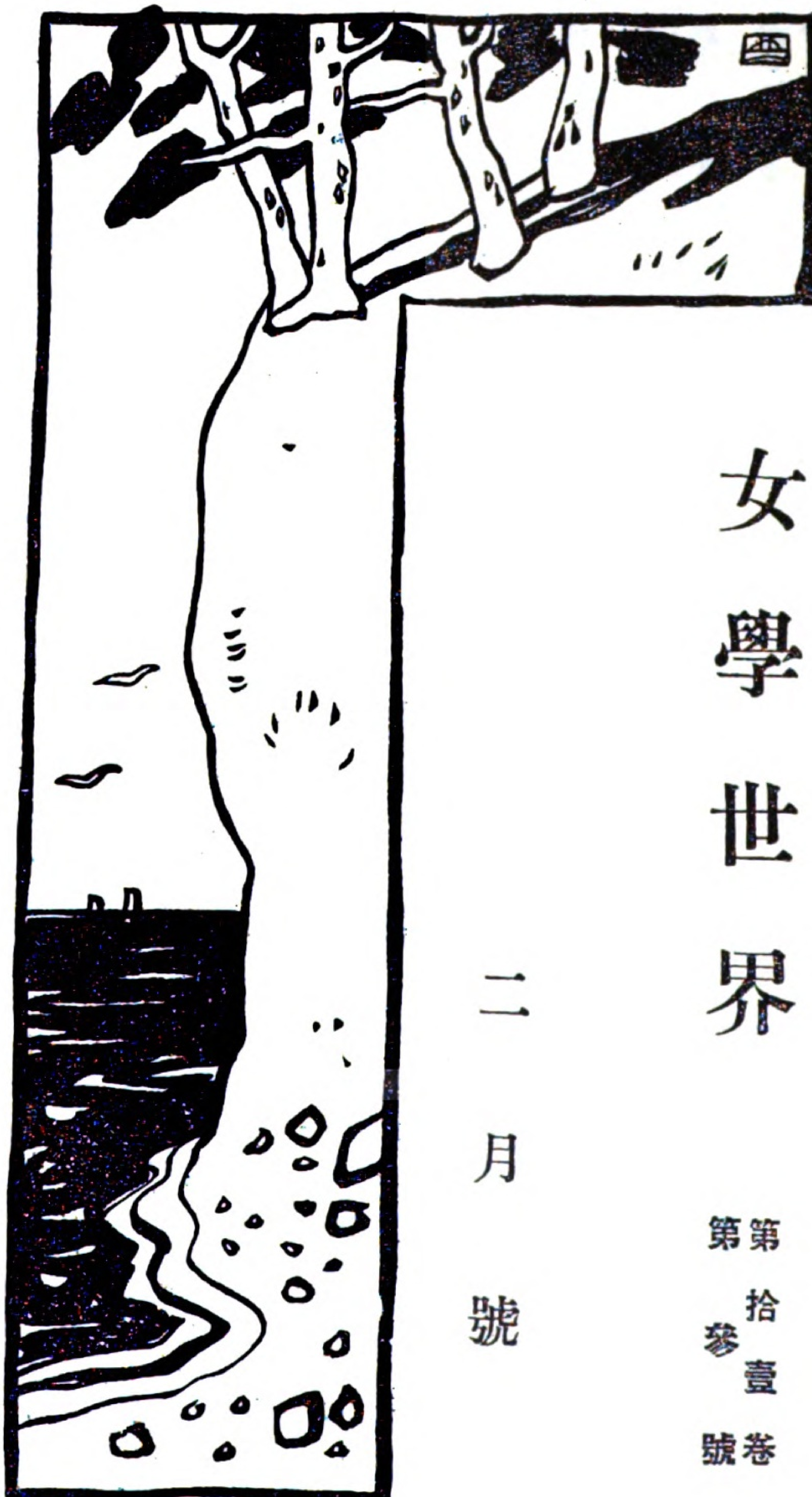
●目下店舖增築工事中に候へ共
●營業は一日たり共休止仕らず

白木屋呉服店

●呉服太物衣類附屬品靴鞄雜貨
●最新流行品一切陳列販賣仕候

雛人形陳列

女(りの四)



女學世界

第拾壹巻
第參號

二月號

艱難は幸福の基

梅花によつて得たる教訓

棚橋絢子

△境遇の順逆

春風駘蕩の候に爛漫と咲き亂るゝ櫻の花は、美しく艶かではありますが、風が吹けば直ぐ散り、雨が降れば頓に色が變り、壽命が至つて短くて、その實も亦果實として價値が少うございます。これは何故かといへば、由來櫻の樹は寒氣といふ逆境とたゝかはず、春陽といふ順境に逢ふて、俄に蕾み出し、晴天が續くと譯もなう咲き亂れ、自ら物に耐ふる鍛錬が積んで居らぬからで、可惜青春の壽命を、一朝の風雨に委ぬるは素より自然の結果です。吾々婦人も亦その通りで、幼き時少き時、又嫁して良人に侍き、舅姑に事ふる場合に、艱苦に耐ふる覺悟がなく、徒に逆境を虞れて氣樂を希ひ、濡手で粟の攫み取りを望むやうでは、到底好き實を結び人生の幸福を享けることは出來ません。幸に資産あり、爵位ある家に生れて、何の苦みもなく成長し、且つ好き良人、好き舅姑を持つて衆くの侍女にちやほやされる身であつても、眞正の快樂、人生の幸福といふことは分りません。

△梅の苦節

春風駘蕩の候を待たず、早や初冬の候よりそろ／＼蕾出し、北風身を劈く嚴寒の節、衆木に先立つて花を開く梅の樹は、これに反して花は淸く美しく、その香その形は、實に人をして高潔の情を起させます。のみならず、花の壽命は櫻の如く短からず、風雨に堪へ、盆栽花瓶に耐へます。而も其の實は寒熱幾星霜を經ても、その味を變へず、或時は、珍羞佳肴の端に加へられ、或時は行軍萬里の必要物に數へられ、單に名を聞くのみにても渴を醫することもあれば、物の濕氣腐敗を防ぐといふ妙用もあり、家庭の爲、國家の爲に、どの位調法か知れません。人も亦梅のやうに貧賤の裡に

成長し、又は系累多く多難なる家の妻女となつても能く忍び、能く耐へ、常に至誠圓滿の精神を維持し、終始違ふことがなかつたならば、必ず花も實も共に家を利し、國を益するものとならうと思ひます。

△八十年前の梅の實

これに就いて想ひ起します。數年前の事ですが、私は鎌倉圓覺寺の佛日庵から、八十年前に漬けておつたといふ梅を貰ひました。珍しいまま、家の大勢に少しづゝ分配して食べましたが、酸味は幾等か去つて居つたけれど、梅の味は矢張致しました。何故そんな古いのが貯藏されて居つたかといへば餘程先代の和尙が倉の隅の所に漬け忘れて居たのを、梅漬とは氣がつかずに、仕舞ひ込んであつたが、今の和尙が見つけ出したといふことで、實に珍しいものでした。世に梅は古くなればなる程、味が宜しいと申しますが、斯樣に梅の實の永持するのは、即ち嚴寒を冒して花を開くといふ剛毅な所にその遠因があらうと思ひます。尤も何な果物でも鹽漬にす



浅緑糸よりかけてしら露を玉にもぬける春のやなぎか

れば、少しは持ちますし、尚アルコールにでも漬けて置けば、永く持ちませうが、未だ梅の如うに鹽漬のまま、百年内外も經つても左程味を變へないといふ果物は他にありません。諺にも　辛抱は金　といふことがあり、又『辛抱は無事長久の基』といふ格言もありますが、人もこの辛抱さへあつたら、多くの事は成就して、而もその壽命は、萬々歳であらうと思ひます。

△長い間の鍛錬

それから梅は蕾の間が長いといふことも思はねばなりません。人間も何彼につけ修養の期が長く、鍛錬の時間が餘計なければなりません。功の成るは成るの日に成るにあらずして、その原因は餘程古くからあるものであります。物は急いでは、旨く行くものではありません。必ず秩序的に徐々に進行せねばなりません。諺に『急かば廻れ』といふことがある通り、せいては事を仕損じます。私方で先程懐爐に火をつけやうとしたことがありました。家の者が、早急に火の附かないもどかしさに、口もてふつと吹きおこさうとせしに、頓て火は花火の如く周圍に飛び散り、生憎茶簞笥の側でありましたから、火は其の抽出の面に掛つて、斑に焦げて餘程醜くなりました。斯ることは大事につけ、小事につけ實例は澤山にあらうと思ひます。つまり人の一生は重きを負つて遠きに行くが如しで、急いではならず、怠つてはなりません。學生などは能く試驗勉强といふことを致しますが、斯る勉强法でどうして實力がつきませう。必ず平素より心掛けて何事もせねばならないのです。若い人は何事も愈々間際になり打當らなければ分らないのでせうが、平素の用意なくし　事は旨く參るものではありません。私共の處女時代には、よく遊びはしましたが、決して仕事の前に遊ぶことはありませんでした。必ず仕事が濟んでから遊ぶことにして居りました。この考は家庭の主婦となりましても、之を能く心得て居て、萬一の時に差支のないやうにせねばなりません。

△大苦境の經驗

世間には、私は仕合だ、氣樂だ、と申される方がありますが、果してその方は仕合な氣樂な方でせうか。足ることを知らぬのも良くないでせうが、仕合だとか氣樂だとかいふ方は、決して仕合でも氣樂でもない人であらうと思ひます。と申すのは、さういふ人は複雜の世態も、人情の機微も、何事も分りません。幸にその人が順境だから、大して苦しまずに行くのですが、人の事は明日も計られません。若ひよつとして逆境に沈むやうなことがあつたら、果して、どうして行きますか。必ず途方に暮れ、極樂は變じて地獄となるでせう。その上苦樂は相表裏して居りますから、苦の味を知らない人は、樂の味が分るものではありません。私共も壯年時代には、病める良人、足腰立たぬ乳呑兒を控へて居ながら、家に一厘の餘財なく、婦人の腕一つに、身體の續く限り、學問の稽古をしたり、人仕事は何でもするし、隨分夜を晝に稼ぎましたが、



今年咲く若木の梅は鶯の妻ともいまだ知らずやあるらん

固より人は苦境に處することもあるものと覺悟して居ましたから、毫も取越苦勞は致しませんでした。活動が鈍くて三度の食物に飢えて死ぬるとも、殘れる良人や子供は、眞逆飢餓にも瀕すまい、必ず親族などが救けて呉れるであらう。たゞ壯健な私が居る間は、一歩も退かずと、働いて〳〵働き拔きました。尤も、この時、親族の救助を仰いではと勸めた方も大分ありましたが、恩を受ければ、これに數倍せる報酬をせねばならぬ。自分などはどうでも宜しいとしても、子供等が大きくなつて、あの伯父樣この叔母樣に世話になつたといはるゝのも、みじめであると思ひましたから、きつぱり斷つて、借財は只の一厘もせず、衣服は、夏のものを秋に、秋のものを冬に、仕立直す位にして、とう〳〵過しました。働けば祿その中にありで、斯うして何時の間にか今日の境遇となりました。



侵しなし彼岸もゆかし行とまり思ひ定めぬ春の野へ哉

　斯る峠を越して參りましたから、如何なることも驚きません。又年は七十を越ても、幸に身體も精神も達者であるのは、全く寒苦の中に鍛はれて身心が堅牢になつた爲であると思ひます。初めより順境にあつたならば、斯うではなかつたらうと思ひます。即ち一度逆境を切拔けた人でなければ、眞の幸福を得られない、無事長命を得られないといふことは、恰も嚴寒を凌いで來た梅の花や實が最も壽命が長い事と同一であらうと思ます。

箪笥の鍵

矢野敏子

第一生命保險相互會社專務取締矢野恒太氏夫人は明治女學校及び華族女學校の御出身で、家庭の人となられて昔氣質の祖母君から新割りの業まで習はれたお方でございます、新思想に富るゝ上に勤儉力行で美しい家庭を作つて居られます。

▲下婢の役割

私共の下婢は唯今四人でございますが、用事は三日間づゝ交代に受持たせて居ります。尤も御飯焚は定つて居りますが、あと三人はリウマチスで身體の自由が利かぬ義姉の附添看護、子供の守、仲働等と交る交る受持せ、各自受持の立働らきが片付次第裁縫に取かからせることに定めてありますが、嫁入前の女子は何れも裁縫研究が熱心なものですのに、子守のやうな終日落付た暇なき役廻りを、一人に固定しましては氣の毒な次第と存じますので、公平に交代させて居ります

而して臺所の用事は私が手傳ひ、成る可く裁縫の時間を與へるやうにいたして居りますから、下婢逹は可なり熟練いたします。

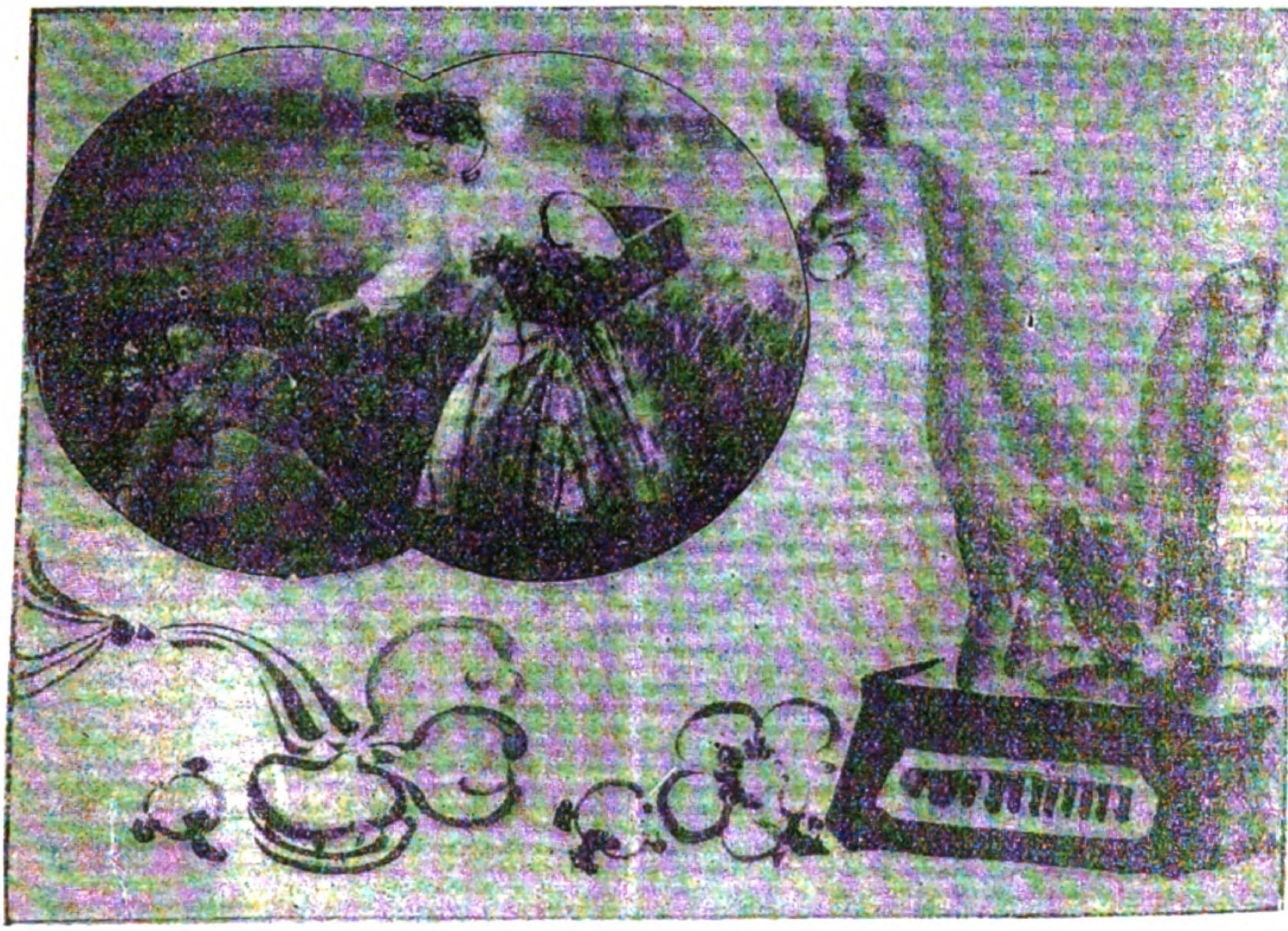
▲成績を帳簿に記す

練習の力は強いもので、小學卒業位の者でも、初めの内少し辛抱して仕立させて居ります内、いつしか手が利て參り、見違へる程の手際になります。私は昔流儀で他へ縫物を出すのが嫌ひでございますから、主人の衣類其他子供の晴着類だけ私がいたし、あとは大抵下婢に任せて置ますが、來年の秋に着る物は本年の秋に悉皆仕立上て了います。何にいたせ子供は十二の男子を頭に男女四人のいたづら盛りで、汚損も烈しく、單衣なぞ幼き者は一人の兒に十五枚位づゝ要り、粗末な物でも夥澤山でございますのに、立働の暇にこれらの始末一切を擔當して、思へばよく手の廻るものと感心して居ります。で私は何日に誰へ何々を渡し何日に仕上ると申すことを帳面に記して置きます。從分は

各自の縫物をいたさせますが、良人は職務の都台で歸りの遲いことが多く、時とすると終列車で歸宅することもございますが、私の助手となつて待つ下婢達は熱心に仕立物をいたし、居眠なぞいたすものはございません。この待役もその日身體を勞さなかつた者を使ふことに定めてございます。

▲簞笥解放主義

簞笥を解放して家族の衣類は盡く女中達に知らせて置いた方が便利だと存じますから、土用干の始末も女中に任せ、私は唯入場所の



我に句なし若草見ゆる堤かな

さしづや樟腦を挿む注意をいたす位なものでございます。併し一應調査の必要はございますから、近年から品數だけは手帳に細かく記して置くことにいたしました。子供が大勢ですと、細細しい物はつい有無を忘れ間に合て居る上に小切類をチョイ〳〵買入るゝことがあつて、呉服屋のお拂が嵩みますから、品數の記入は忽かせに出來ません。古物淘汰も多く土用干の時にいたし、女中又は女中の親戚の子供に役立つやうなものは、それ〴〵分與して了ひますと、誠に清々いたしま

す。私は女中達に『私の箪笥も悉皆見せるからお前達のも見せておくれ』と申して、百姓の娘がハイカラな物を着る悪習がつかぬやうに忠告してやります。最初の内は少し迷惑のやうに見えますけれども、追々氣心が分てつまゐりますと、衣服を求める時に必らず相談いたすやうになります。

▲装飾品の番人は辛らし

箪笥の合鍵を幾つも腰につけて家の中の者に氣を配り、敵國に在るやうな警戒をいたすのは面白くございませんから、一切錠を廢して置ますが、家を持て十年餘を過した今日まで、一品も紛失したことなく、偶々見えぬ品がありましても、暫らく放擲して置きますと程經て抽出の後なぞから出ると云ふ工合でございます



一條公爵夫人悦子

私は昔から指環一つ持たぬ流儀で、枕元へ寶物入の金庫を据置くやうな心配もないのですから、従てまだ一度も賊難にかゝりません。身分や交際上據ろなき場合もございませうが、装飾品の番人となるほど辛いことはありませんでせう。

▲下婢の蔭日向は子供の大毒藥

子供に虚僞を覺えさせますのは、多く召使の蔭日向から起るのであらうと存じますが、此方に誠心があれば蔭日向を防げるものと思ひます。副食物は成る可く家族と平等にいたし、間食も子供並に心づけ、到來品は僅かづゝとも福分してやり、主婦が他出して晝食でもいたした際はおすもじの折でも持歸つて、一つづゝでも分けると云

ふ風にいたせば、主婦の目を忍んでお戸棚へ手をかけるやうなことはないと經驗上信じて居ります。お戸棚へ手をかけることなぞを子供に見せますのは、子供にどの位惡感化を與へるか知れません。

▲大晦日

家を持始は萬事油斷勝でございました爲に、大晦日に自分が魔誤つく影響を下婢に及ぼし、下婢達は、除夜の鐘を聽く頃に襦袢の襟袖をいぢると云ふ工合で、實に見兼ましたので　仕着せ物は十一月に遣し、正月着用の品は成るべく十二月中旬頃までにそろへるやう申付ましてから、餘程都合よくなりました。私方では元旦に良人の會社の方々をお招いたし、粗末な田舍料理で一口差上るのが年例でございますから、大晦日には下婢をつかれさせぬ工夫をいたして居るのでございます。



加藤英國大使夫人壽路子

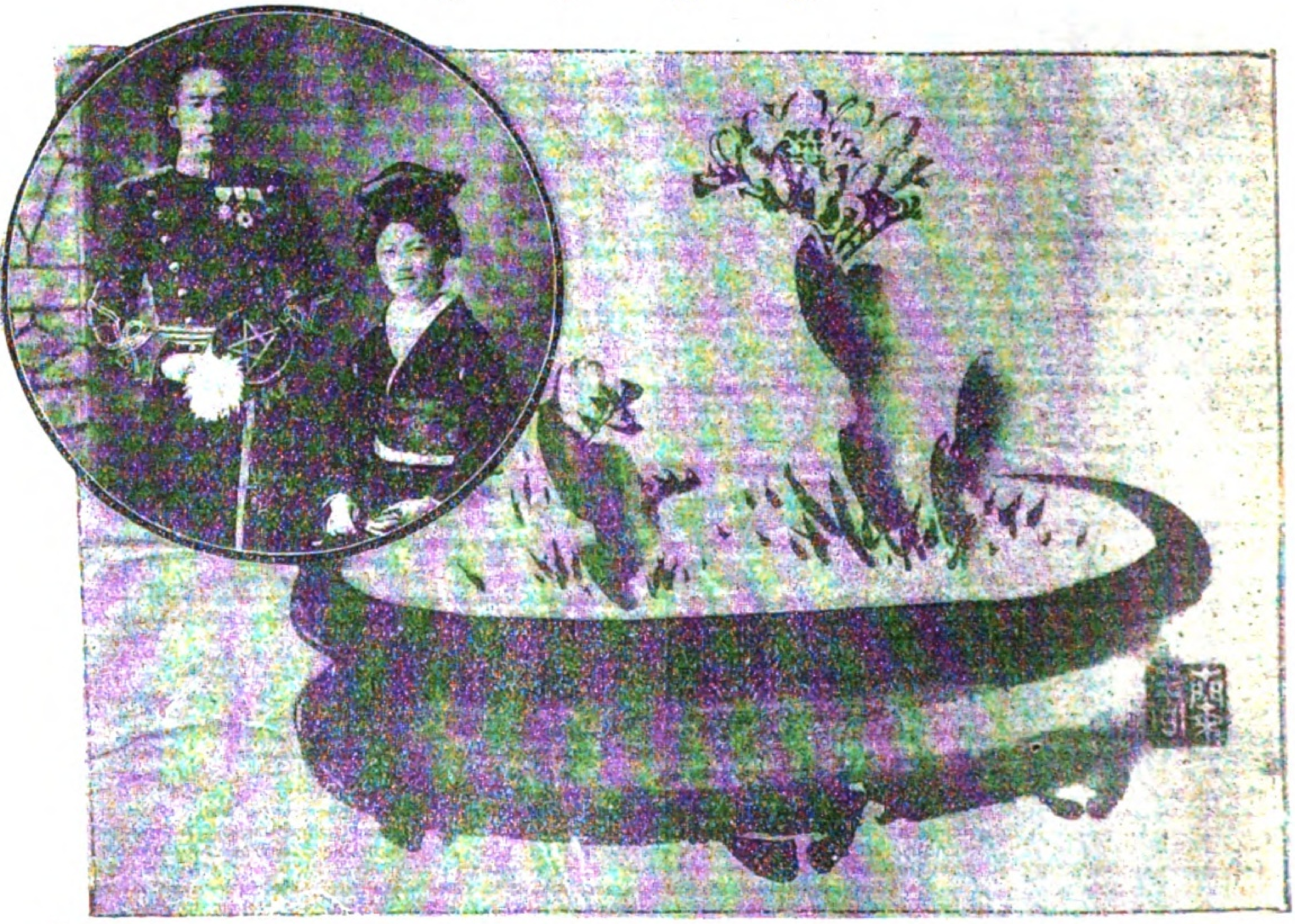
▲竈元について

燃料に瓦斯を用ゆるのは重寶なものですけれども家々に依つて一概にも申されないかと存じます。先づ私共の宅なぞでは、炭薪の方が便利でございます。細かいお話ですが薪竈ですと、庭の枯枝を丹精しても一年中の焚付や薪の補足位になりますが、瓦斯の方では補足のいたしやうもない上に、使い方を一寸誤ると案外費えるやうに思はれます。炭も使ひ方一つで左して要るものでもございません　宅は良人の工夫で暖かな間取になつて居りますので、私が炭

俵の底をはたいて叮嚀に貯へて置く一斗樽一つぱいの粉炭で、冬中私の部屋や女中部屋にて仕事用の「コテ」につかいます、火鉢位には澤山でございます。こんな風に私の宅などでは舊式の燃料の方が儉約のいたしばえがあるやうに存じます。

▲消極主義について

私は他に藝の無い人間ですから、せめて吾身の節約だけは心がけたいと存じ、髪も稽古かたぐ〜女中に結させ、何處へ參るのも、私



新婚の春

と子供は三等汽車に乘り、萬事質素を旨といたして居るつもりですけれども、私共よりズット上流の奧樣の質素な御考を伺ひますと、未だ〱いくらも反省の餘地があると感じて居ります併しこの消極主義も、貯蓄が目的になりますと、つひ他迷惑になり易うございますから、要るだけのものには無理をいたさず、樂天主義で餘り明日のことを思ひ煩らひません。それに良人は極お金冷淡で、家事は私にませて居り、死後は保險金にて暮しはたつと申し、其用意丈で、つまり私の手

では貯蓄は子供だけ位なものでございます。

▲無意味な入費

華族女學校の生徒方は、割合に質素なもので、高貴の姫君方の御通學服などを拜見しまして、吾々は勿體ないやうに存じました。それでも新婚當時には、同窓會の折なぞつひ身分も打忘れた妄念も起りましたが、子供も殖え、少しは世間が分つて參るに從ひ、かやうな感じは全く失せて了いました。一家の費用の内で何が一番嵩張かと申せば、どうも主婦の衣服費のやうに考へられます。私共は子供本位で、惡いことでない限りは好自由に遊ばして置ますので、毎日四人の子供のお友達が多勢參つて居り、ビスケット一握りづゝでも十七の頭數になることもあり、間食費は確に要りませうが、子供達は運動が盛んな爲にお醫者の御厄介になりません。又家族と召使の平常主義は、算盤の桁が上りませうが、凡てに於て倍以上の償を得られます。併し服飾費は無意味に流れる分子が多く、その金高も食費の比ではございません。私共のやうに子供の多い家では、性立もせぬ細々しい切類ばかりでも、毎月米代に匹敵して上位を占めるところを見ますと、中流の主婦が少し流行を眞似ましたら、却々な結果になりませう。私なぞは偶々必要に迫つて調へます時は、いつも良人に賴んで求めてもらひ、三越や白木に足踏いたしたことはございません。

▲蟄居の趣味

私は出不精の上に、この田舍へ參りましてから尚更見聞は狹くなり、頭腦の養ひなぞ少しも出來ません唯好物の雜誌を十二三種取寄せて、皆樣のお話を拜見するのを樂しみにいたして居ります。小說類も昔から好でございましたが、唯今流行の物はどうも私の趣味に合ひません。近頃國民文庫を取寄せて少しづゝ見ますが、誠に面白ふございます。先づ蟄居の身分は子供の天眞な樣子でも修養の足しにいたす位なものでございませう。竈元の番人は無趣味のものでございますけれども、私は祖母が薪を割ることまで仕込んでくれましたから、この方には慣れて居りまして、無趣味の内に興味を感ずるのでございます。

春の天然より得たる女一代の教訓

神品小枝子

私は私共女の一生を春として暮したいと常々思つて居ります。或る方は人類は地球の花だと仰いました私は私共の命のある間は春であつて、殊に女子は其美しい花瓣の一片として、其精華を發揮したいと考へて居ます。

其ために私は女子の生涯を四期に分けて、其期々々毎に花瓣の美を輝したいと思つて居ります。其第一期は娘時代、第二期は妻時代第三期は母時代第四期は姑時代です、此四期それ〴〵を皆人生の春として暮したいのが私の理想なのです。今から各期毎に私の理想を述べて見ませう

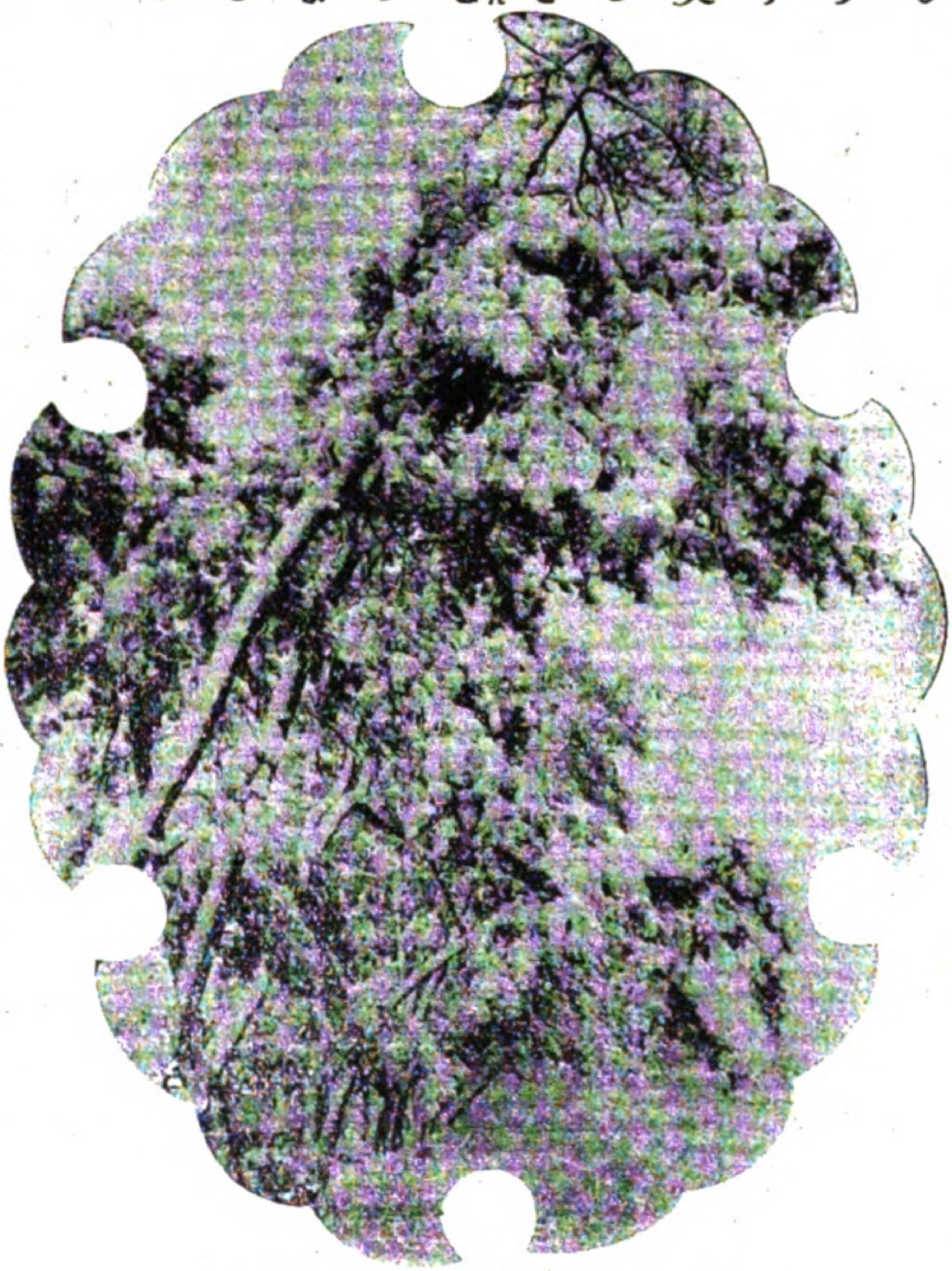
一、娘時代――櫻に雲雀

樂しい時代ですよねえ、母木の懐に世の雨風も知らずに咲き出でゝ、世は春草萠ゆる野邊のやうに眺められて、高きも低きも皆相應の希望の滿ち〳〵た時代です。此時代が人生の春の中で最光の強い時なので多くの人は此時代のみが人生の春と思ふ程に華々しい時代です。ですから妾は此娘時代を春の花の王たる櫻に配合しました。

御覧なさい、遠山霞に包まれてほんのりと咲き出でた櫻の幽婉な姿を。娘時代には此趣が欲しいと思ひます。更に朝日に匂ふ山櫻の美は我も人も誇りとする處でせう。そしてあの櫻の色を御覧なさい、色としては少しも艶やかな所は御座いますまい、それに眺むる人の目には言ふに言はれぬ艶麗な色がありませう。是が櫻の櫻たる所以で妾共娘の眞似たい所なのです櫻の咲いて居る所には笑が漂つて居ます。ほんとに櫻は優美で快活で艶麗で洒清して居ませう。妾共が此

優美、此快活、此艶麗、此洒淸を備へたのは私共の春でせう、妾共の周圍は櫻の花の周圍のやうになりませう又娘時代は是非とも淡白なこと櫻のやうになくてはなりますまい。さうして其美其品、櫻のやうだつたらまづ絶頂でせう。美はもとより心身の美で、品は姿の品よりも氣品が望ましいのです。出來るなら姿も心も絶頂の美が欲しいのです。それで妾は娘時代は櫻になつて暮したいと勉めて居ます。

けれど決してお洒麗をするのではありません。裝はないで美しいのが櫻でせう。尙娘時代の虚飾を戒めるために私は櫻に對して春の鳥雲雀を配合しました。



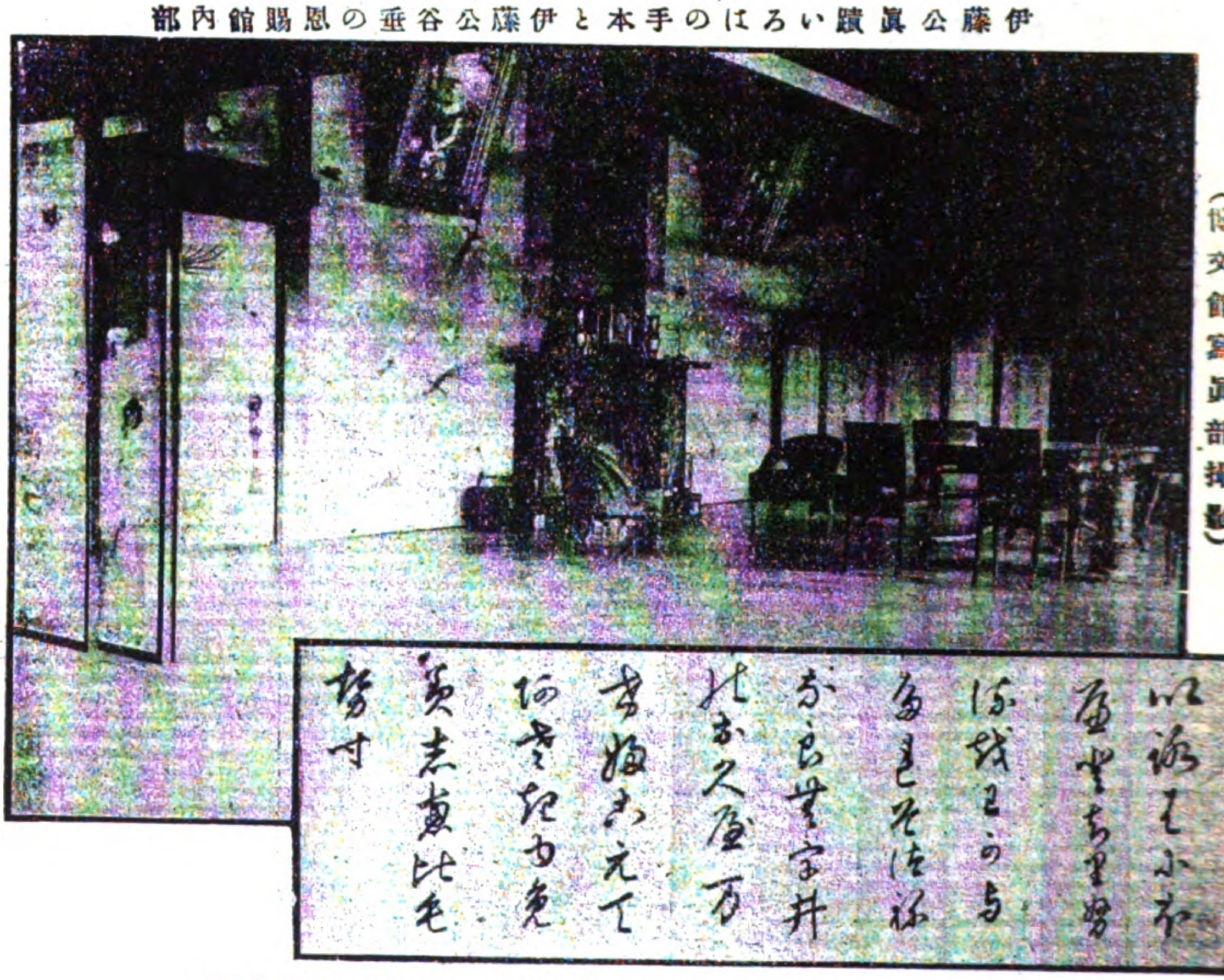
松の雪

あの雲雀の羽色を御覽なさい、澤山の春の鳥の中で最裝のない色でせう、さうして其姿も取り分け愛らしいといふでもありませんが、春の鳥の中では最愛せられませう。此處が妾共の味ふべき所と存じます。あの質素な小さな羽に軟な春の光を載せて雲井遙に春の歌を歌ひながら昇つて行く時には行脚の僧ですら笠を傾けるでせう。

其聲は春の空いつぱいに廣がつて、只一羽の雲雀が春の音頭を取つて居る所は愉快ぢやありませんか、妾

共の修養が出來て、妾共に接するすべての人を雲雀の歌をきく心地にしたらどんなに愉快でせう。さうして其雲雀は春の鳥の中で最質素な羽色の鳥であることは妾共の忘れてはならぬ所です。尚雲雀に學ぶ所は娘時代の特有である所の向上です野邊や田圃から御空にまで舞ひ昇ぼる雲雀の姿は女子の向上の姿として理想のものでせう。高き理想に憧れて向上の道踏み登るのは僅に娘時代の務めです

伊藤公眞蹟いろはの手本と伊藤公谷垂の恩賜館内部



（博文館寫眞部撮影）

伊藤公が愛孃なる末松子爵夫人の幼き折に書き與へられた手本です

此時代に向上しないなら、以後の春は決して來ませぬ。唯追懷の涙を殘すばかりです。けれど高き理想に憧れてなど申しますと、惡い意味のハイカラと誤解されてはなりませぬ、其誤解を解くのも雲雀を眞似ればよいと思ひます。則あの雲雀はいくら高く昇つても、土をば忘れませぬ　空で囀る其聲はいかにもお轉婆のやうで、ハイカラのやうであるけれど雲雀はすべての鳥の中で一番着實でハンカ

ラです。御覽なさい、他の鳥はみんな其巣を木の枝とか軒とかに營むのに、雲雀は多く野邊の叢の中か麥田の中に、土を凹にして眞にお粗末な巣を作つて滿足して居ます。實にバンカラでせう。着實でせう。即向上の氣は天を貫けど踏む足の地をば忘れぬ堅實な相が床しいじやありませぬか。其上雛に餌を運ぶのに敵を慮る用意の至つて居る事を御覽なさい。其餌を直に巣には運ばないで、十間なり十四五間なり、他處に下りて地を匐つて敵に隱れて巣に行きます。女子の物事に心を配るよい模範ぢや御座いますまいか。しかし悲しい事にはやつぱり鳥ですわね、餌を運んで巣から立つ時には、他處に行かないで、其巣から直と立ちますものですから　腕白子供に雛を取られます。それは女子の通有性である所の、物事に締め括りのない事を諷刺したものと思つたら良い參考になりませう。

こんな理由から妾は娘時代は櫻と雲雀を對象にして修養しながら暮したいと思つて居ます。さうしたら娘時代は眞に人生の春でせう。



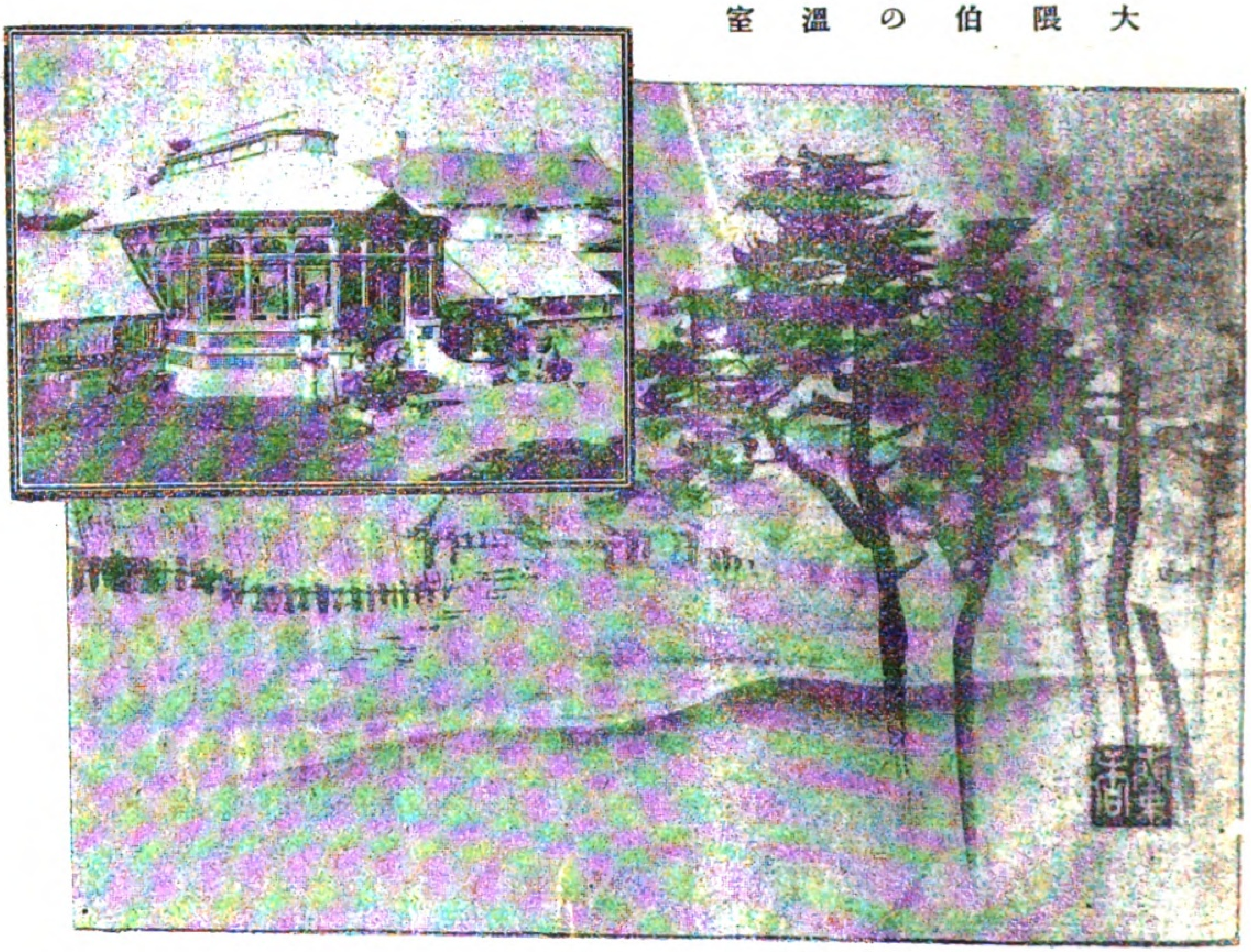
山内海軍中將夫人豐子

二、妻時代＝柳に燕

妻！　放れぬ思ひですね一生の運命の岐れ路ですもの、人樣々に思ひはありませうが、妾は只此時代も春で暮したいと思つて居ますけれども娘の時のやうに櫻に雲雀では妻としての春は參りませぬ。よく春の歌などに柳櫻をこきまぜて、と申しますが妾は妻としては其柳になりたいと思つて居ます。先づ柳の姿から御覽ください。其枝は梢に至る

迄皆枝垂れて居ませう、其枝垂れて居る姿こそは人妻の鑑でせう、即舅姑、夫に對して從順なる事、其枝の垂れてるやうだつたら申し分はありませすまい。又下の者を愛し勞はる心掛が其垂れた枝に現はれて居るぢやありませんか。實に柳の姿は從順慈愛の相でせう。さうして其枝が風に逆はず、なよやかに靡いて居る樣は、氣むづかしい舅姑の氣嫌を和げて居るに似てるでせう。尙お客樣の氣を外らさず社交上の夫の位置を落さぬやうに

大隈伯の溫室



圓轉滑脫お交際をして居る姿と見てもよいでせう。

けれど只軟なやかなばかりが能ではありませぬ。柔らかい中に凛とした氣象がなければなりませぬ。それについては柳の枝に雪折れなしといふ言葉が嬉しいぢやありませぬか。降り積む大雪にはあの頑丈な松の枝すら折れますに、是は又柳のか弱い枝で折れやうともせぬ、ねばり強い所は妻として學ばねばならぬ所でせう。降りかゝる家の禍を凌ぎ凌いで、內

助の功を全うする心掛は夢にも忘れてはなりますまい。尚花の色香をよそにして、身は緑葉の質素な姿で暮すといふ心掛も人妻としては必要でせう。といつて身嗜を忘れてはなりませぬ、柳の葉も紅葉の頃には葉色を添へます。殿御の御氣に召すお化粧は是非怠つてはなりませぬ。それも柳の色添ふ葉に眞似たら良いでせう。

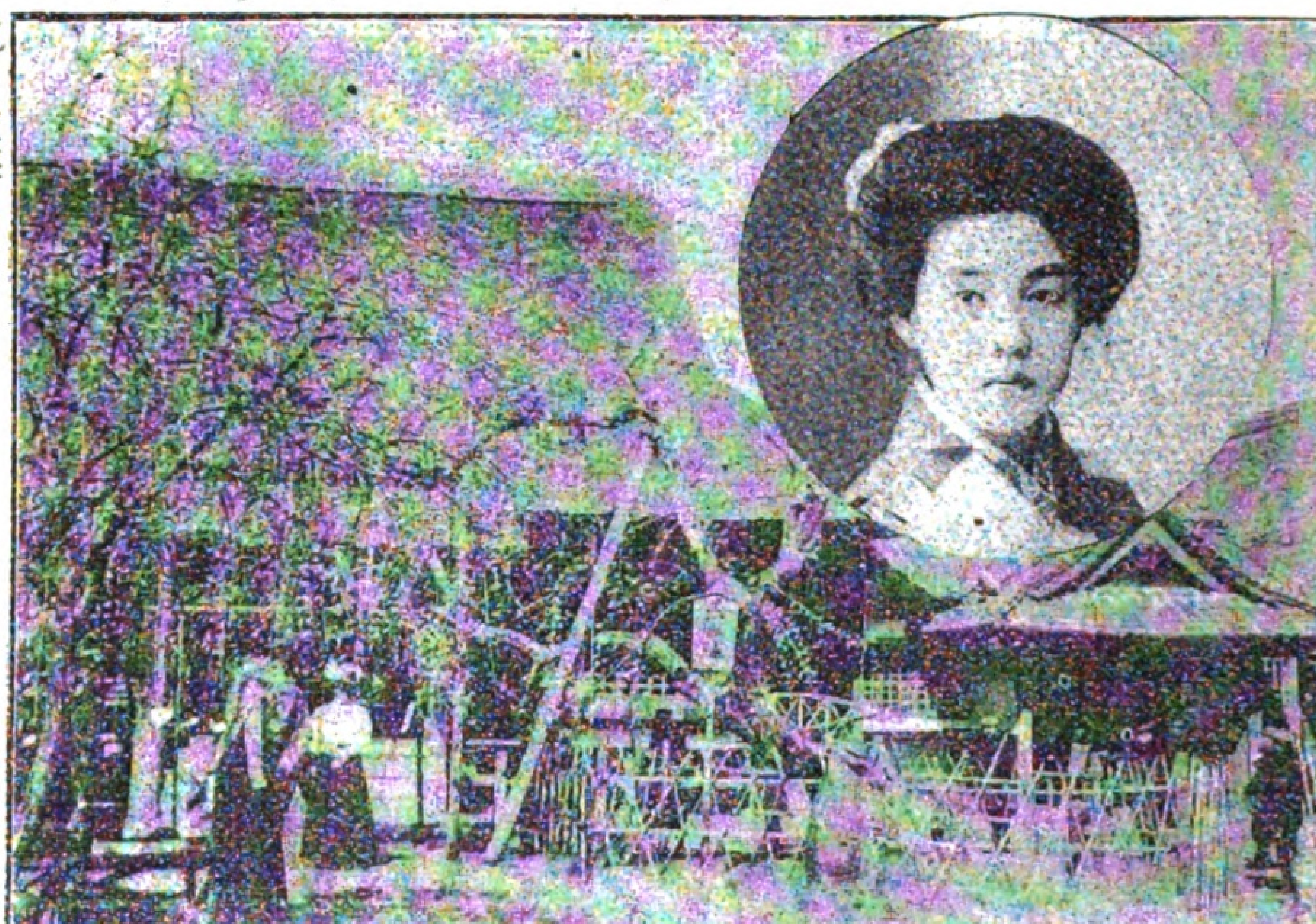
それから娘時代の雲雀のかはりには燕を理想としたいのです。燕は雲雀よりも家庭的でせう、さうして渡鳥である事は發展を意味しませう。雲雀は向上で燕は發展。即向上を横にしたものが發展でせう。妻としては此横の向上が必要でせう。夫を助けて海外にまで發展する氣概は今日の女子に最も必要な氣象でせう。又燕は實に弱い鳥ですけれど、其飛ぶ力は非常に強くて、暴風の時なんか他の鳥は飛べない中を縦横に舞つて居る所は、機敏な妻が社會の波風を拔けつくゞりつして夫の發展のために健闘して居る姿でせう。尚此燕が鷹などから逐はれた時の氣轉は、妻のよい手本です。即ち逐はるゝまゝに全速力で



煙たちもゆともみえぬ草の葉をたれか蕨と名つけ初けん

絶壁に向つて突進し、絶壁三寸でヒラリと身をかはして、横に外れて、鷹をして絶壁に衝突して死せしめ、身を逃るるさうです。其氣轉は何んとかして備へたいぢやありませぬか。

しかし燕も鳥ですわ、悲しいことには惡いところがありますそれは一つの巣の母鳥が猫なんかに捕られると父の鳥は他から雌燕を連れて參ります。さうして其雌燕は繼子の雛をどうするかといふと育てることは愚、恐ろしいぢやありませぬか、松葉を啄んで來て雛の口に押し込んで……雛は母鳥が餌をくれることゝ思つて喜んで口をあけるのを……殺してしまつて、其後に自身の卵を産むのです



思ふさま遊ぶに梅の散らば散れ

此事は妾自身實驗して驚きました。是は女子の嫉妬ぺ戒むる訓と見てよいでせう　ほんとに愼むべきは女の嫉妬です。

こんなにして學び愼みして妻の務をつくしたら夫から愛せられ、舅姑からは大事にされてそれこそ人生の春でせう。娘時代に味はれぬ春の味があるだらうと思つて居ます、しかし其修養は皆娘時代にある事を忘れてはなりませぬ。此樂しい妻時代の春は長くは味はれませぬ、直ぐ續いてといふよりも重なつて

三、母時代―梅に鶯

に入ります。忙がしい時代ですわ。春も秋もあつたものぢやない。それも下女まかせ

で暢氣に暮せる母樣なら、それ程の事もないでせうけれど普通の家庭では臺所の世話からお襁褓の世話までやきあげねばならないのです。妻の務も怠つてはならず、母の務も全うせねばならぬ。ほんとに女子一生の歳の暮の騒ぎです。しかし妾は此多忙な時代もやつぱり春で暮したいと思つて居ます。心掛けて實行したら此時代が眞の春かとも思ひます。世の母樣方はお子供衆をお持ちになるとまう老い込んでお仕舞ひなさるが、妾は是からが酣の春と思ひます、イエ春にせにやならぬと存じます。といつて母樣が雲雀のやうに空に翔つて居ても困りますし、櫻見たやうに後に考もなく散られても困りますし、又燕のやうに發展々々ばかりでも面白くありませず、柳の軟らかさも適當でありませぬ。それで妾は母時代は梅に鶯で暮したいと定めて居ます。

　梅の氣品はたしかに賢婦の資格がございませう、降る雪を凌ぎ、氷る霜を苦とせず、身を切るやうな風にも屈せず天下の春を魁けて匂やかに咲き出る其氣丈夫な德は母たるもの丶是非備へねばならぬ所でせう。

　南枝一輪のふくらみに世の春を包む、慈母一片の笑に家庭の和を湛ふ。母は愉快ぢやございませぬか。おつ母さんの暖い笑ひの許には稚兒のあどけない笑も漂ひ、お姑樣もニコ〳〵していらしつしやるし御主人も滿足のお顔が晴々して家庭は眞に春でせう。さうして其春の神は妾共女子でせう。母時代が春でなくて何と



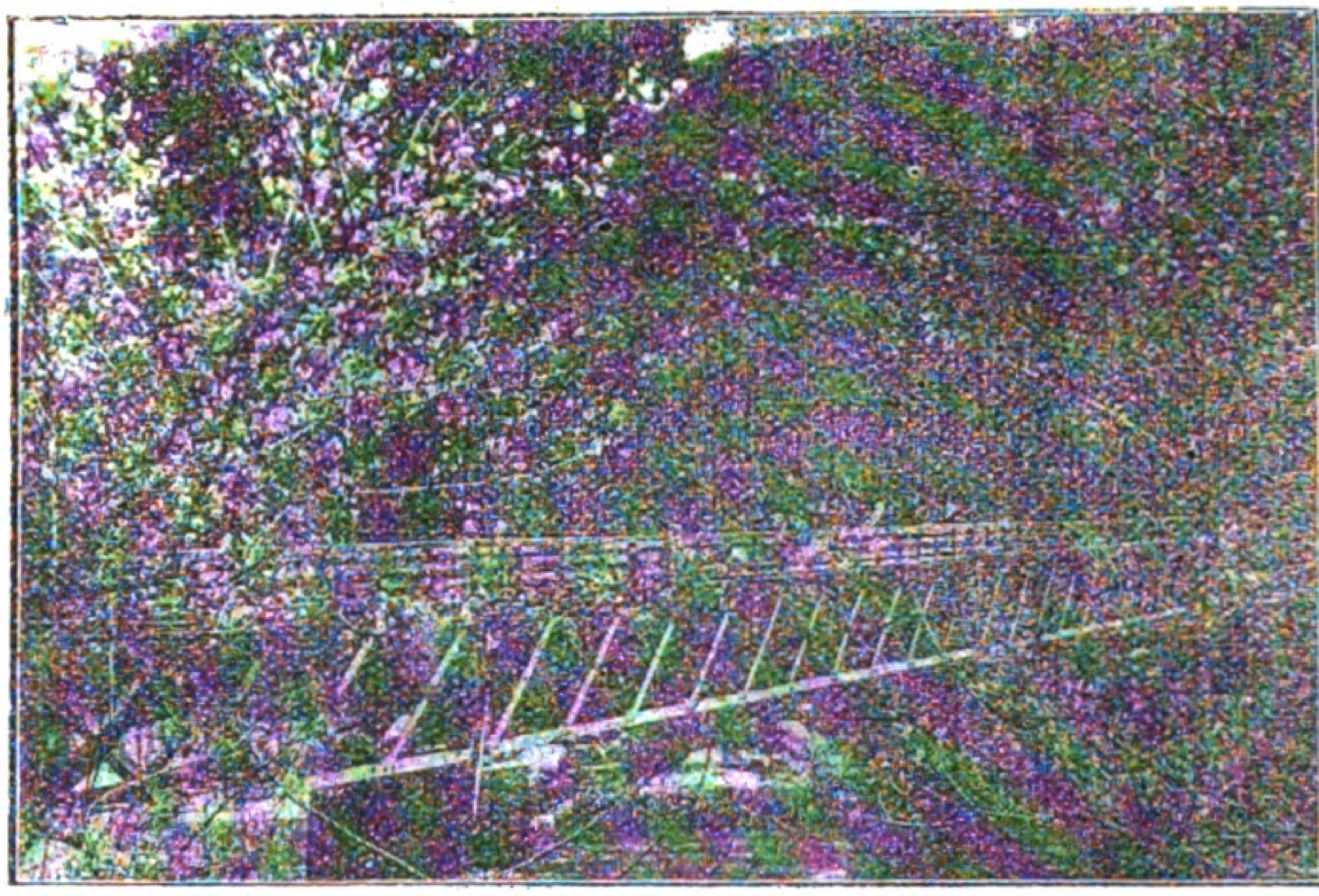
分別の外のさふさや春の雪

します。

櫻に對しては愛慕の情が起りますが、梅に對しては敬慕の情が起りませう。愛と敬、櫻と梅と娘と母、味があるぢやございませぬか。さうして母時代の務めとしては兒育が主でございますから、其育兒についても梅を理想としてよいと思ひます、則ち凛とした其氣象は子女に崇敬の念を起させ、高雅なる其香は高潔の情を養ひませう。

更に其散り際が手本です。梅の花は櫻見たやうにパツ／＼と散つてはしまいませぬ、梢に黑く焦げついて見にくひ姿になります。そこです。子供を育てるには此心得が大事と思ひます、即我が身の如何になるかは顧みないで只々子の生ひ立のみに氣をつかふのです。梅の花は其實が大分大きくなつて迄も梢にこげついて其實の老い先きを守つて居ます。母の愛はかくなければなりますまい。絶對の愛が是でせう。此愛即春です。鶯が古巣から羽ばたきして出て一番に初音を立てゝ春を呼び醒ますのに梅の枝を撰んだのは自然の一致でせう。

草臥てもとの梅折る野口かな



大和月の瀬の梅

雲雀とちがつて鶯は氣品の鳥でせう、其一聲は心に沁みます、母親が子供を呼ぶ聲、戒むる言葉、此鶯のやうだつたら育兒の効果は大したものです、何とかして修養したいぢやありませぬか。

又鶯の質素な姿も學びたいものですが特に學びたいのは繼子に對する鶯の愛情です。俗に鶯のかひこの中の杜鵑と申しませう。杜鵑

は自分で卵をかへさないで鶯の巣の中に卵を産む、すると鶯はそれを自身の卵といつしよにかへして其雛をば自身の雛同様に愛育するさうです。尤鶯は杜鵑の雛といふ事を自覺して育てるのではないでせうけれど人は意識してそれを行ひたいと思ひます。さうしたら繼子いぢめなどいふ恐ろしい事もなくなつて憐れな孤子も春の暖い懷に育つでせう。

こんな意味で妾は母時代を梅と鶯の春として暮したいと念じて居ます。滿足に此時代を勤めあげていよいよ人生の晩年即晩春の期に入ります。

四、姑時代――鶯の山籠り

がそれです、晩春です。鶯は梅の枝を辭してまう深山にかくれ、世をば百鳥の囀るに任せて居ます、しかし時々深山がくれに法ホ華經の聲を洩らすのは姑が隱居所から若い人達に好意で其時々の心得を諭すに似て居ませう、それで妾は姑時代は鶯の山籠を理想として晩春を樂しく送りたいと思つて居ます。



不思議なもの

以上、妾は女子の生涯を一貫して春で暮すといふ主義です。今娘時代は此修養時代です。生涯の春の野が開けるか開けぬかは娘時代の修養次第と存じます。徒に娘時代のみが春であるなど思つて其春の樂を專にし單に櫻のみのやうな生活はやがて暗い影を誘ひます。だらうがお互に長い春を樂みたいと存じます。

木下川の梅林





水戸公園の梅

春の鳥の異なれる趣味

物集梧水



▲鶯

◎新春第一、庭の梅が枝に來て、春來ぬと、玉を轉ばすやうな聲して告げるのは鶯である。故に往時から春告鳥とも、又報春鳥とも稱せられてゐる。

◎その聲の美しいので、支那では隨分上古から持囃されてゐたと見え、詩經などにも、「鳥鳴嚶々、出自幽谷」とあるのは、正に鶯のことであるが、日本では上古、餘り持囃さず、平安朝時代に至つて、大に其聲を贊美するやうになつたらしいのである。

◎昔から鶯は梅に附物である。村上天皇の御時に、淸涼殿の前に梅が枯れたので、紀貫之の宿に植わつてゐた梅の名木を求めさせられたら、貫之の娘が、その梅の枝に、「勅なればいとも畏し鶯の宿はと問はゞ如何答へむ」と一首の和歌を詠じて結びつけたことがある。これを以ても梅と鶯とは離るべからざる緣故のあることが判る。

◎次に鶯の寢床は竹林と定められてゐたことは、藤原伊衡の『竹近く夜床ねはせじ鶯の鳴く聲聞けば朝寢せられず』の歌を以ても判る。今でこそは、竹林は雀の塒となつて了つたけれど、平安朝時代には、確かに鶯の塒であつたである。

◎其時代の小說竹取物語を見ると、竹林の中に小さな美しい姫君が棲んで居たのを、或日、竹取の翁がこれを見出して伴れて歸り、大切に育てあげると、其顏の美しさ、其聲の麗しさ、忽ちの間に上流の公達連の評判となつて、結婚の申込が網の目から手が出るほどであつたを、彼の姫君、種々の難題を持出して、散々公

達連を困らせた揚句、終に天に昇つて了つたとやら。是れは確かに鶯兒から思ひついたのに違ひない。

◎全體野鳥が座敷へ飛込むのは極めて不吉の兆と云はれてゐるけれど、但し鶯ばかりは例外として、却つて吉兆とされてゐた。往時應永年中、一羽の鶯が御所へ飛び入つたが、その翌年、果して親王の中でお目出度いことがあつたさうである。蓋し鶯は幽谷から出て喬い處に遷る鳥だからである。

◎最も良い鶯の産地は大和國奈良市附近であり、其次は信州奈良井であるさうな。昔から東京は仲々鶯の名所が多くあつて、谷中の鶯谷、小石川の鶯谷、根岸の里、神田明神の附近は常に雅客の杖を曳く所であつた。

◎同じく鶯と云つても、關西と關東とは大いに其の鳴く音を異にしてゐる。關西では一體に聲が細くて滑かであるけれど、關東では凡て聲が太く稍々濁つてゐる此等は恰度關西人と關東人との性情にも對比べられて甚だ面白い。

◎關西では三光と云つて『月星日』と鳴くのが最も上乘であり、關東では『法々華經』と鳴くのが最も良いのである。

▲燕

◎鶯を姫君に譬ふれば、燕は粋な娘風である、春暖肌に快き比、街衢を反覆飛翔しつゝ、小さき聲にてさゞめくを聞けば、何となく親み易く可憐な心地がせらるるのである。

◎燕は生來人に馴れ易く、又大層怜悧である。田舍町の少し大きな家には、必ず毎年燕が來て巣を造る。而も其れが甚だ巧みに造られてあるので、恐らくは諸鳥の中で最も建築學に巧者なものとせられてゐる。

◎尚ほ燕の怜悧なことは斯う云ふことでも判る、或家で、數羽の雛兒が小さな聲で鳴きながら、親燕の歸つて來るのを待ちあぐみ、巣の中から身體を乘出してゐるけれど、少しも落ちさうにせぬ。餘り不思議さに能くこれを調べて見たら、雛兒の足に髮を確乎と結びつ

けゐつたさうである。

◎又或時、燕の巣から俄かに一匹の蛇が墜ちて死んだので、不思議に思つて、其蛇を調べて見ると、其腹に一本の針が刺さつてゐたこれは其蛇が餘りに燕の巣を狙ふので、餘儀なく之を拒ぐ爲めに巣の前に針を刺して置いたのである。此の二個の例は燕の怜悧なことを證するに足るのである。

◎尚ほ燕の感ずべきことは夫婦仲の好いことである。

大山家の令孃



桒の花について曲れは渡し哉

一夫は一婦を有ち、一婦は一夫を守つて決して貞節を亂さぬことである。故に昔から夫婦相和する事や、貞節を守ることに屢次引出されてゐる。

◎昔、或處に一人の娘があつた。早く夫に死に別れたので、娘の父母が更に他の夫を迎へることを勸めたら娘の答へに、女として二人の夫を有つことは貞節の無いこと、我家に巣を作つてゐる燕すらも必ず二羽の雄燕は有つまじ、若しや我家の燕が二羽の雄燕を有つたならば、

其時には妾も再び夫を有ち侍べるべしと云ったので、娘の父も然らばと肯ひ、或日、雄燕を殺し、雌燕の頸に赤い糸を纏つけて放すと、果せる哉、其翌年、例の雌燕は赤い糸を纏つけたまゝ來たけれど、決して雄燕は伴れて來ず、況して卵などは決して產まずに歸つて了つたので、彼の娘の父母も非常に愕いたさうである。其時、彼の娘は『かぞいろは憐れと見らむ燕すらふたりは人に契らぬものを』一首の歌を詠じたさうである。



梅に去り柳に去りて餘寒かな

◎燕は紺色である、白い燕は滅多に居らぬが、如何かすると稀れに居ることがある。故に昔から白い燕を見れば必ず吉事がある、女ならば必ず貴女を擧げると云はれてゐる。故に燕を一名天女と稱するのである。

「きさらぎの半ばになると知顏に早くも來けるつばくらめ哉

藤原爲家

「つばくろや巣の中狹きさゝめ言

園女

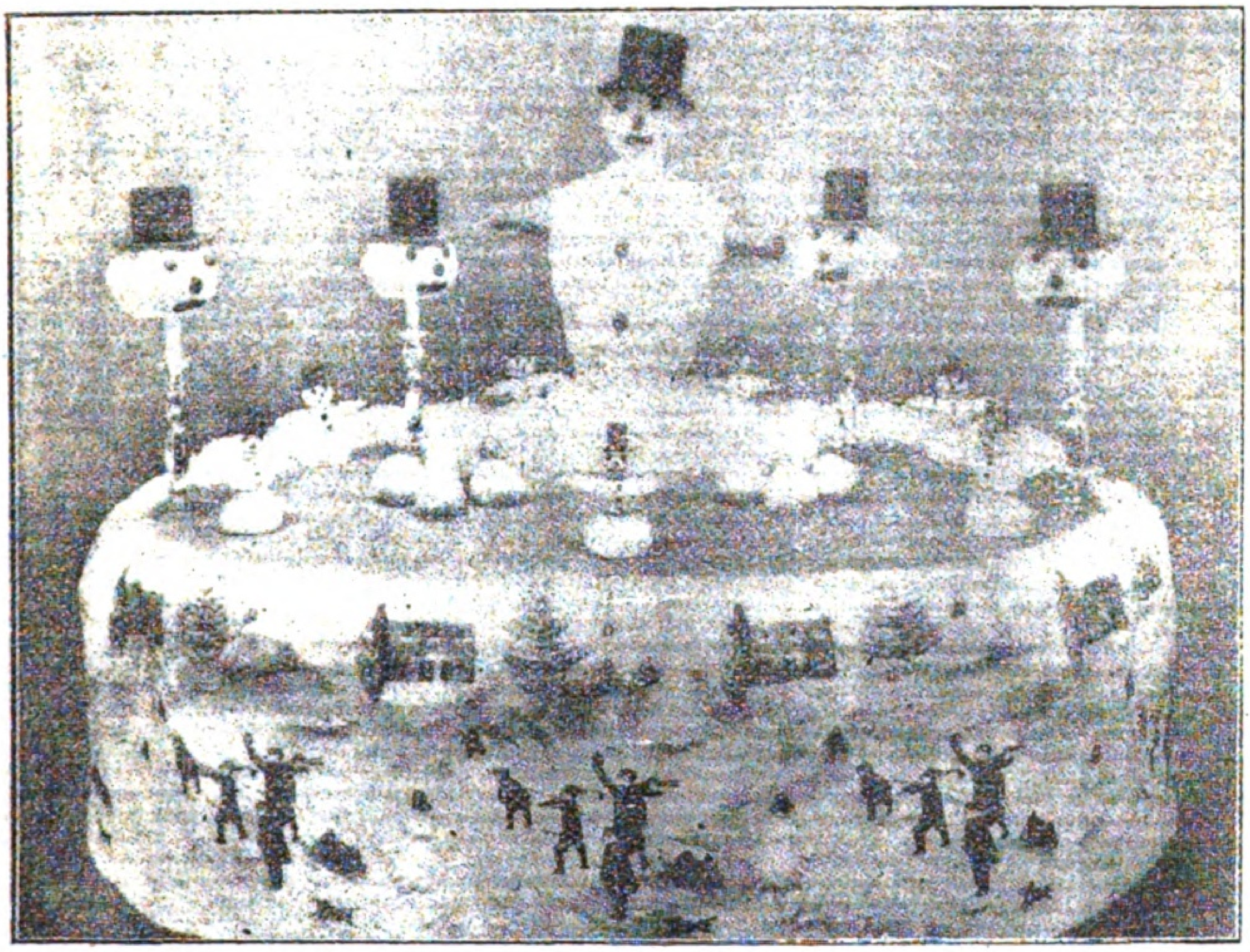
▲雲雀

◎春日暖く、麥伸びること二三寸、忽ち地上より立つて美妙き音樂を奏しながら直に天へ昇らむとする雲雀こそ、誠に氣も心も長閑き者である。

◎鶯を姫君に譬へ、燕を粹な女に譬へれば、雲雀は正にハイカラ令孃にも譬へつべきである。

◎雲雀は日晴の轉訛であるさうな、この鳥は晴天の日でなければ決して鳴くことなく、又その聲斷續して絕えることなく、恰も天へ向つて何事をか訴ふるに似たので、更に告天子とも書かれてゐる。

◎泰西の詩人は、雲雀を鶯、燕にも益て詩に賦し、恰も天



食卓の裝飾（雪たるまに擬せる飾り菓子）

使に似た鳥としてゐるけれど我邦では、鶯や燕ほど持囃さないやうである。

◎併し其れは現今の事で、古へは却々此鳥も重く注目され和歌、俳諧などにも隨分歌はれてゐた。

「うら〳〵に照れる春日に雲雀揚り心かなしも人し思へば
　　大伴家持

「春深き夕日の野邊の下風に吹かれて揚る夕雲雀かな
　　前大僧正慈圓

「野の末や日は三竿に鳴く雲雀
　　蘭更

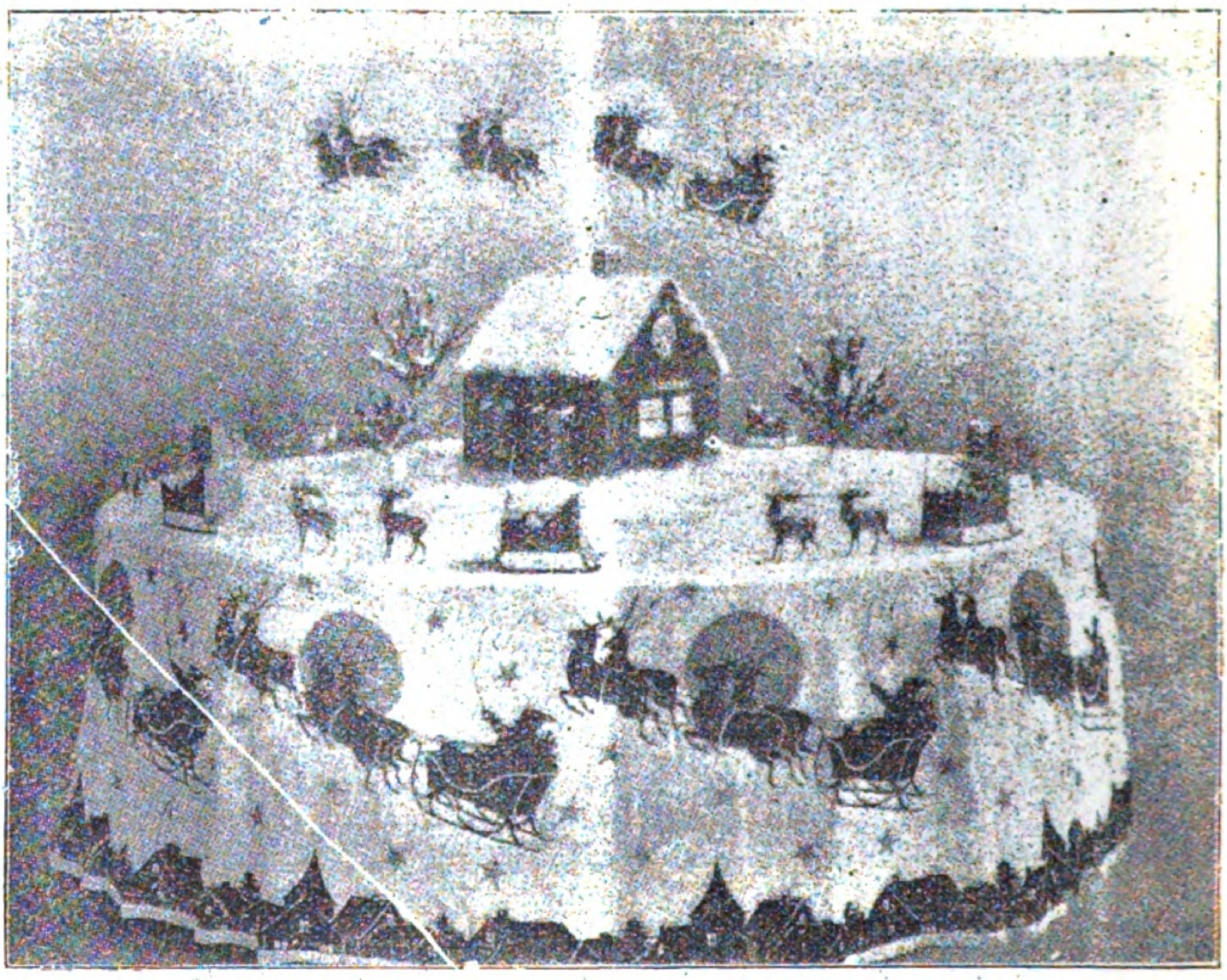
「朝風やたゞ一筋に揚雲雀
　　蓼太

◎以上は中古の和歌、近世の

俳諧であるが、更に其以前に溯つて、仁徳天皇の御時にも、女鳥王が雲雀を引いた歌がある。

◎其れは斯うである。仁徳天皇が其の皇弟なる隼別王と御仲違ひあらせられた時、隼別王の妃の女鳥王が、『雲雀は、天に翔る、高ゆくや、隼別、鷦鷯捕らさね』と詠じ給うたのである。この歌の意味は、我が夫、隼別王よ、雲雀は高い天を翔けつてゐるから、迚も捕ることは能きまいが鷦鷯は低い處に居るから、早く捕へ給へとのことである。蓋し鷦鷯とは、仁徳天皇の御名大鷦鷯命のことを暗に諷したのである。

食卓の裝飾（雪中旅行に擬せる飾り菓子）



◎上代既に雲雀を引いた和歌のあつたことは是れで判るけれど、後世に至つて次第に雲雀に注意しない樣になつたのは、何となく惜く思はれる。

◎一體この鳥は瘦せてゐる。從つて神經質でもあらうか、己のれ巢に下りる時も、猥りにその側に下りずに、必ず數十步距つた處へ下りた後、徐かに己が巢へ步いてゆくのである。序に云ふ、瘦せた人のことを雲雀骨とは、實に巧い比喩である。

▲雉

◎草の萠え出る山路を通ると、俄かに消魂しく翼を搏つて飛起つ者がある、其れは雉である。

◎此鳥は非常に猛く、鬪ひを好み、又その飛ぶ時には、必ず矢のやうに一直線に飛ぶので、矢扁に隹を書くのださうである。

◎此鳥が蛇を喰ふことは誰れでも知つてゐる。最初蛇が來て、二重にも三重にも捲きつけるまでは、少しも騒がず靜として捲かせて置き、イザ蛇が一生懸命になつて締める折しも、俄然はたはたと翼を搏つて蛇を寸斷するのである。併し如何かすると雉の方が負けて斃れることもあるさうだ。



新式化粧品店の店飾り

◎多分この蛇が雉を捲くのを見たのであらう。昔の人が斯んなことを云つてゐる――雉と蛇と結婚して、其の產んだ卵が雷の鳴つた時、地中に這入れば蛇と爲り、若し地中に這入らなければ雉に爲る。而して斯の蛇は普通の蛇とは違ひ、數百年を經ると自から脚が生えて、彼の蛟龍になつて天に昇るのである。元より荒唐無稽の譚ではあるが一寸趣味ある傳說である。

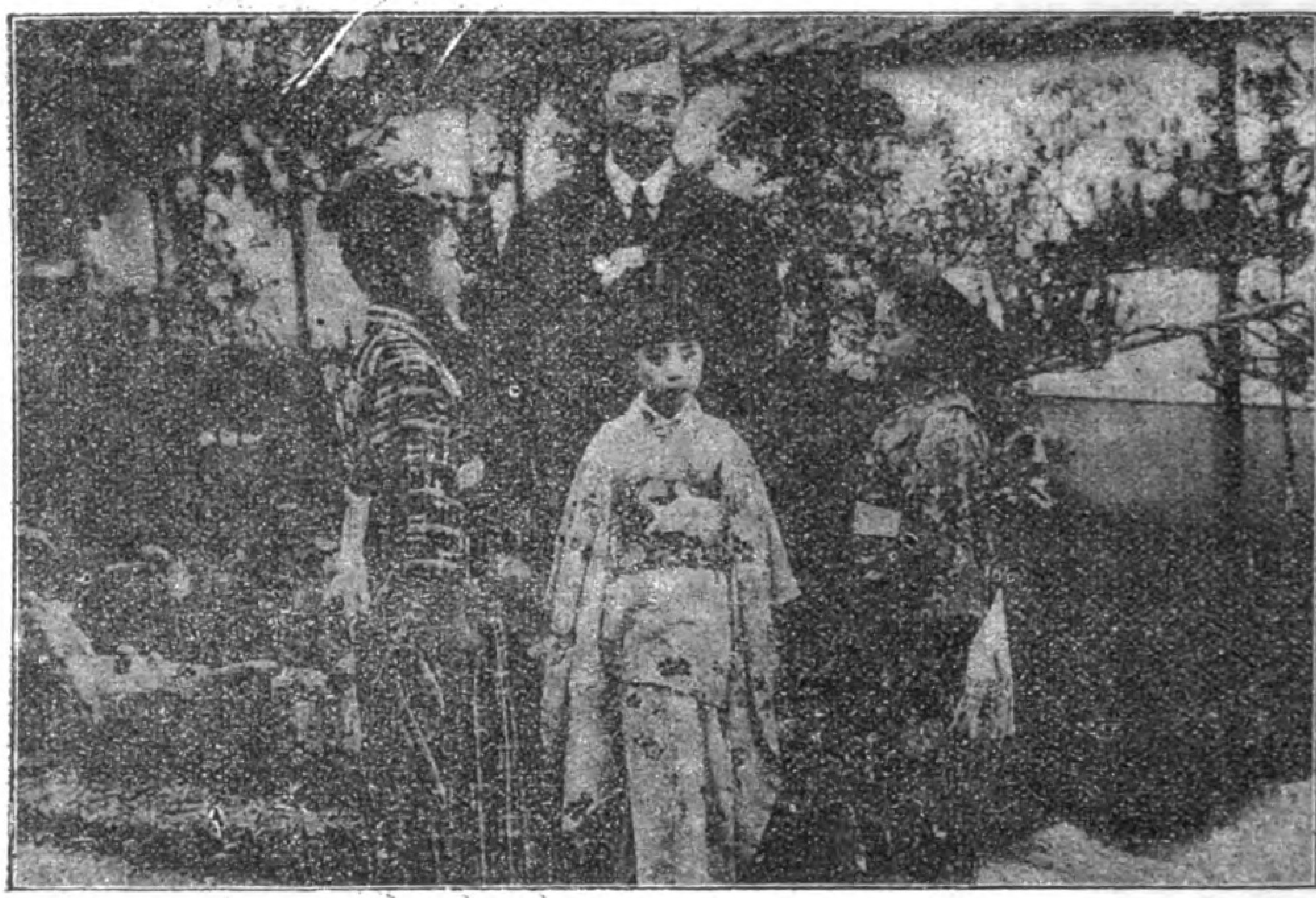
◎雉は諸鳥の中の猛者にも似す其子を可愛がることは『燒野の雉子、夜るの鶴』と、諺にさへ云はれてゐる位である。春未だ淺き頃、恰度雉が卵を產んだ時分である。野火や、山火が起るや、雌雉は驚いて翼を擴げたま

ま仰向に寢ると、雄雉は卵を其翼の上に載せ、而して雌雉の嘴を啣へて曳いて逃るのであるが、時に依ると餘り火が急な爲めに、哀れや卵諸共燒け死ぬことがある。

◎雉は又その猛き割合に、甚だ愕き易く、殊に地震と雷鳴とは大嫌ひである。故に雷鳴の日や、地震の日には必ず雉が鳴くと謂はれてゐる。

◎白い雉は極めて稀れであるが、これを獲れば甚だ目出度いことがあるとのことで、古代では、白い雉を獲れば、必ずこれを宮中へ献上することに極つてゐた。

◎雉の尾は昔時晴雨計の代用物



米國オベリン大學總長と都城の三令孃

に用ひられてゐたのである。先づ雉の尾を取つて車の上へ置くと、雨の降りさうな日には尾が垂れ、雨が霽れさうな日には眞直に立つさうである。

◎又雉は頗る耳目が鋭敏な鳥な故であらうか、神代の世に、天照大神が其敵、天若日子の樣子を窺はしめ給ひし時、其の使者として雉が罷り行いたことが古事記に記載されてゐる。これを以て見ると、神代の世にも雉は能く注目されてゐたことが判るのである。

藤原經宗

雉子鳴く朝の原を過ぎゆけば
早蕨おさりほろゝうつなり

去來

瀧壺もひしげと雉のほろゝ哉

面白い遊戯

此れは、女の子が、鼠の穴を訪問して色々面白い事のあつたことを繪にしたもので之を物語に書いたらどんなものになるか、上手に書いた者には賞品を與へると言つて或る外國雜誌が募つて居ますが、かういふ風のものを自由に案出してお互にやつて見るのも面白い遊戯かと思ひます。



第十一回

會長 陸軍二等軍醫正 正六位勳四等 ドクトル 渡邊鼎

通信教授 會員募集

産婆學講義録

規則要郵券二錢

東京市四谷區内藤町一ほの部

東京産婆看護婦講習會

産婆科六ヶ月卒業
看護科四ヶ月卒業

女(ぬの二)

美術造花材料

▼半製品、鏝、打拔類

三國屋 關口商店

東京淺草區駒形町十四番地
振替貯金……一一六四三番
電話下谷四〇五一番

(御一報次第定價表進呈)

都新聞記者 蘆江先生著

實驗應用 奇法大全

非常の好評 此際送料共 廿五錢郵券代用廿八錢

(勿驚天下の奇書内容一部)

治療門 ◎かつけ◎底豆◎やけど◎小供の夜泣◎齒のいたみ◎とび火◎いぼ◎はら病◎腦病◎ねごと◎ばぎり◎せき◎たむし◎わきが◎霜やけ◎淋病◎ぢ◎しびれ即治◎船よい即治◎寢小便◎鼻血即治◎赤髪◎ちゞれ髪◎目のほこり◎便秘◎痢病其他

理想門 待人の來る法◎思ふ人に夢見せる法◎人に逢へる法◎雄辯となる法◎物覺をよくする法◎人の氣を變へざる法◎必ず返事の來る法◎安産する法◎福運の授かる法◎出世秘法◎泥棒の入らぬ法◎字が上手になる法◎金儲秘法◎金を不自由せぬ法

家庭門 ◎迷子せぬ法◎朝起する法◎色を白くする法◎類燒を免がるゝ法◎鐵瓶の鐵氣を拔く法◎朝顔を咲かす法◎髮の油を拔く法◎子の出來る法◎子の出來ぬ法◎落雷を避くる法◎狐に誑されぬ法◎衣服の增へる法◎惡醉せぬ法◎鬼除法◎女に惚らるゝ法◎飯の腐らぬ法◎難船せぬ法◎鼠を生取る法◎しみを拔く法

前知門 ◎來客の前知◎吉事の前知◎變事の前知◎姙婦の男女前知◎不幸の前知◎災難の前知◎毎日の天氣前知法等

◎其他二百以上皆實驗濟▲他に手品滑稽物の類似書あり必ず御注意◎

發行所 東京神田錦町三の九 立志堂書店 ▲賣捌東京堂其他

西村醉夢君著

和歌ト俳句

正價四拾五錢 郵税六錢

▼洋裝袖珍美本紙數三百五十頁▲

((内容))

【第一篇】詩學梗概‖●詩とは何ぞや●詩の内容●詩の律格●詩の種類●詩の用語●空想と寫生●詩の生命【第二篇】和歌‖●和歌とは何ぞや●和歌の種類●古歌の風格●現下の歌壇●和歌の書式【第三篇】俳句‖●俳句とは何ぞや●句の制約●俳句の特色●俳句の沿革●最近の俳壇【第四篇】修辭法‖●譬喩●對照●雜種の修辭

東京 博文館 本町

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奧なる學理と老練なる技術とを以て専門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し生毛に關する諸説を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き藥が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する賣藥品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する亢菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の瀰きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●●●●取次所ハ毎月ノ廣告ニアリ●●●●

取次所ナキ地方ハ直接本舗ヘ注文アレ

らい病

醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール　一ヶ月分　貳圓

複方ザノサール　一ヶ月分　參圓

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

三河國碧海郡刈谷町

振替口座東京貳參壹壹

電話 刈谷參拾貳番

本舗　醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

またと得難き運勢獨り判斷

四條家藏版

石版五度刷 美麗箱入 ㊥ 定價貳拾五錢 郵送料貳錢

吉凶判斷 懷中おみくじ

運勢を知りて事を成すは成功の基なり此のおみくじは法華經を始め諸經の精神により成りたる神異奇妙の神籤にして心を清め之に向へば鏡に物の映る如く運勢現はれ煩悶を除き前途の解決を乞ふ

東京神田美土代町二の二振替二〇四一六博文書院

洋畫講義錄

繪畫講習錄

當代一流大家數十名執筆、會費各冊六錢、一ヶ年卒業、規則無料進呈

東京市麻布飯倉四丁目　大日本繪畫講習會

水彩畫を始め油畫木炭畫肖像畫ペン畫等を頗る詳細に講述す每號美麗なる挿畫數多あり

日本畫の技術と學科とを平易懇切に教授し初學者と雖忽ち上達せしむ每號着色繪畫多し

洋畫材料品總目錄

無代進呈

百餘箇の精密なる圖を挿入したる詳細目錄は御一報次第郵稅を要せず無料進呈す可し好畫家必携の好册子也

女（めの三）

毛利公爵母堂、岩倉公爵夫人、鍋島侯爵夫人
大隈伯爵夫人各序　牧野伸顯男書簡
◉鳩山春子夫人著　クロース製全一冊

婦人の修養

定價 金壹圓貳拾錢

郵税 金拾錢

本書は婦人界に名聲高き鳩山春子夫人が内外の務め繁きうちに深き素養と、廣き見聞と富める經驗とを以てものし敢て新奇に走らず舊を套はず能く其中庸を得たる好著と謂ふべし之を讀みたらんには母たる人は育兒の教へを聞くべく社交の婦人は交際の術を學ぶべく一般婦人は常識修養の指鍼とすべし各女學校は最好の參考書として如何に偉大なる感化を受くべきか誠に得がたき現代婦道の木鐸といふべし

發賣元　東京本町　博文館

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著

家庭百科全書

全部五十册——毎月一回發行

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、轉もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

- 第一編 新家庭訓　三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理　宮中臣民厨流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南　女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法　東京治庖會講師 龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道　水原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南　琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
- 第七編 育兒の務　醫學士 田村眞策君 朝夷孤舟君 共著
- 第八編 簡易治療法　新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著
- 第十四編 女德の養成　前田長太君著
- 第十五編 家屋と庭園　內山正如君著
- 第十六編 魚鳥家畜の飼養　農業世界記者 鹿野化骨君著
- 第十七編 女子作文法　遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
- 第十八編 子女の教養　私立高等女學校長 棚橋絢子女史著
- 第十九編 家庭の趣味　文學士 大森兜山君著
- 第廿編 家庭遊戲法　高橋忠次郎君 松浦政泰君 共著
- 第廿一編 書道手引　歌道書道專攻大和會々長 井田秀生君著

發行所　東京日本橋　販賣用電話本局二六二〇

女(ぬの八)

賜天覽

正二位東久世伯題辭 東宮侍講本居文學博士題歌 仰天子著

春日局

實歷史譚賢婦烈女之龜鑑 ▲洋裝菊判三百餘頁 全壹册頗美本 價八拾錢

德川幕府の大奥に無比の異彩を放ち、尚且京にのぼりて二位局と仰がれし女丈夫、雄心、妬心、俠氣、浪氣、機智、辣腕を兼ねたる春日局一世を詳錄せり

みかづき生新著 正編第十八版大高評増刷 價四拾五錢送料不要

小說 新ほとゝぎす

口繪寫眞版研山畫 續編新版發賣 價四拾五錢送料不用

先頃の新聞紙で皆さん御案内の不如歸に似たる新ほとゝぎす。その事實咄しをみかづき先生が美化せられたる面白き新小說!

醫士糸左近先生 醫科大學北川正惇先生 共著

洋裝三六判全壹册 總布表裝金文字入 價金六拾錢 送料六錢

多大の歡迎 訂正三版新刷發賣

通俗食餌療法

日常飲食物の總てより病者健者の食用法までも通俗に解說しあれば醫學生・看護婦・普通開業醫も一讀の必要は充分にある。

僅かに一本の大根からも消化劑として著名なヂヤスターゼは出る 此の如く調理して發生するも此の如くに混食すれば消滅す

教育遊戲 國旗あはせ 函入拾貳錢

白井二峰先生訓解 富蘭克林 成功訓 (第二版) 正價金參拾錢

南豐篤之助先生著 校外讀本 新領土朝鮮 (新版) 地圖挿畫入 正價金拾貳錢

信夫恕軒、石崎篁園先生通解 ポケツト 文章軌範 正續二册 各正價金五拾五錢

教科書研究會編纂 國定準據 假名遣寶典 (新版) 附小學讀本漢字牌 價參拾錢

井原豐作先生編纂 學生寶藏 美文良材 (第廿版) 全二册函入 正價金五拾錢

糸左近先生新著 無藥療法 (第三版) 正價金五拾五錢

糸左近先生評釋 衛生評釋 百人一首 (第二版) 正價金拾八錢

註釋つき 衛生唱歌 價六錢

◀ 發賣元 東京神田表神保町 東京堂　發兌元 東京向島新小梅町 萬書堂　關西發賣 大阪北區梅田町 盛文館 ▶

花嫁時代の印象と後日の家政

櫻田節彌子

日本銀行秘書櫻田助作氏夫人節彌女史は、幼少の頃より米國に遊びペンシルヴアニア州のオカンツスクールの出身でございます、歸朝後良媒を得て櫻田氏に嫁がれ、家政上手の聞えある御方でございます。

▲獨りで良人を守る不安心

結婚當時のお話も一昔を過ぎて古めかしくなりましたが、三人の子供を持つた今日から考へますと可笑しい思ひ出が隨分ございます。良人が毎日銀行へ出勤いたしました後は、自分獨り家に在て何も爲ずに居るのが苦痛で、自由になるなら自分も銀行の役員になつて良人と一緒に勤めたいものと思ひました。凡て一から十まで良人と同じ道を歩みたい心地がいたしたのでございます。かやうに大切な良人を足らぬ勝の自分が獨りで守ると云ふことは何だか不安心のやうで、どうか自分の親友も共々に力を合せて良人を守つて呉れゝばよいと思ひました。

▲風呂の中から出られぬ

入浴して居るところへ不意に足音でもいたしますとハッと當惑いたし、狼狽て湯槽の中に隱れ、俯向た顏を擧ることが出來ず、足音のきこえずなるまでは上せるのを我慢して湯槽に潜み、ゆで蛸のやうになつて苦しんだことも度々でございました。近頃昔の浮世繪に花嫁が花婿に恥らふて湯槽の中から首ばかり出して居る圖を見まして我身の昔を思合せ可笑しくなります。

▲良人の着衣の世話が恥しい

良人が、毎朝洋服を着ます時、下着の世話をいたすのが恥しく、唯側に見て居ることさへ出來ませんで、いつもシャツとヅボン下を良人の側へ擲り出して逃て了ひましたのは、唯今以て良人が笑話の一にいたして居ります。それから自分が衣服を着替へます時も屏風を

立廻して髪も良人の前で結ふことが出來ませんでした。或時良人から突然散歩に誘はれました時、髪が少し亂れて居ましたけれども目の前で髪へ手を附けることを恥ぢ、そのまゝ出掛けましたところ、髪のゆるんで居たために、米國から持て參つた寶石入の前簪を落して了つたことがございまして、是も一の笑話になつて居ります。この着衣や結髪は十年後の今日でも未だ良人の前でいたすことを憚つて居ります。私は一體髪を亂したり働き着のまゝで人に遇ふのが嫌ひで、家事を働いて居る午前中に人様がお出での場合には、一寸待つて頂いて手早く着更してから御目にかゝります。主婦が働着の儘で應接しますのは返つて天眞の價値であり、客を待せぬ眞心が現はれて良いことでございませうが、私は習慣上味噌臭い姿で出られぬのでございます。尤も午後は何時でも接客の身だしなみをいたして居ります。

▲凡てに疎かりし私

私は學問の都合で處女の時期が永く、結婚は二十五歳以上でございました。二十五歳以上にもなれば酸も甘いもチャンと心得て居るのが通例でせうに、丁度十六七の花嫁のやうな滑稽を演じましたのは故とらしいと思召ませうが、私は二十年間堅苦しい學校生活に暮し、學科に勵む外更に餘念はなかつたのですし、五年間米國に居りました間も、清い家庭の眞相は見聞いたしましたけれども、夫婦間の愛情を人前に舌吻で現はすとか申すやうな人達と交際いたしたことはなく、歸朝後も宮内省の女官方や知己の令嬢方に御敎授申上るなぞで忙しかつた爲に空想に耽ることもなく、夫婦の間柄と云ふ點は全く初心な花嫁であつたのでございます。併し家事經濟の方は最初から聊か自信がありました。

▲主婦の財政權

私は結婚當時葉山へ旅行いたしました時から、毎日旅宿の賄ひを受けて密月の樂に甘んじて居るのが心苦

しく、一日も早く一家の整理に取掛りたいとその工夫ばかり考へて居りました。で先づ一般中流の主婦が良人から金を預つて一家の財政を取扱ふ種類をざつと大別して見ましたが一ヶ月の豫定額を良人から受取るのと、良人の月收全部を受取つてその中から良人に小遣を出すのとの二種のやうに思はれました。中には全部を主人任せにし、呉服類から飲食品の拂ひにいたるまで主人の手を煩はす主婦も



あるやうですが、これらは例外で、餘り無責任の次第でせう。通例は一ヶ月の掛りを受取つて處理する主婦が多いやうですが、その中から厘毛を儉約して餘裕を作らうと考へるのが女の常でございますから、稍もすれば主婦自身だけ都合がよくつて他迷惑になりはせぬかと考へました。又良人の月收全部を受取ますのは、主婦の技倆と信用の現れで、眞に女王の價値があるのでせうが、腕一本で働らく

良人に、切詰た小遣を渡すと云ふことが何んですか痛痛しい厭な感じがいたすやうに思はれました。で私共はこれらの中庸を取ますために、家の財政權を內外の二つに分て、外部の費用は良人が支拂ひ、內部の費用は內部の豫算額として良人から半年分づゝ受取私が支拂ふことに定めました。而して良人の方は外の支拂が餘つた時に貯蓄いたさうと遣ふと私は少しも關係いたしませんし、內部の方は私の自由で主人が干涉せぬことにきめました。

▲貯蓄の考と使用の考

私は良人から預つた金をどうして殘さうと云ふ考は少しもございません。唯如何に使はふかと工夫する方でございます。旨く使ふのは無益の費を省くことですから、つまり貯蓄と同じ目的になるのでございますがその手段が一寸違ふのでございます。貯蓄一方の頭腦が度を過しますと、往々主人の體面や家人の待遇に影響いたすやうになり、召使も屢々代ると云ふ實例は隨分有勝に思はれます。召使の善惡は一家の財政に却々影響あるものですから、食物なぞを儉約して怨を買ふのは一文吝しみの百損と存じます。私は副食物は勿論間食等まで家族と平等にいたし、到來物を分つ時も召使には量を多くするとも少なくはいたしません。平等主義は經費が要るやうでも十分之を補ふ道を得られるのでございます。家人の飲食費を節して貯蓄した金で自分の衣服を拵へると云ふことは、主婦の餘程反省を要することゝ存じます。

▲安物澤山は嫌ひ

私は幼少から良物好でありましたけれども、決して多きを望みませんでした。私の實家は長幼の序が嚴重で、腰卷のやうなものでも長女は縮緬、次女はメリンス、末の私は金巾と定つて居りました。私はこの金巾に不平はありませんでしたが、唯地質の最上等を請求したのです。而して襦袢の袖なぞも姉達が三枚も買て貰ふ間待て居て、三枚分の直打のある良品を買て貰ふ

のが好でした。教育を受けるにも矢張よい加減が嫌いで、廿年間教育してもらひました。特に五年間の米國留學には少なからぬ費用が要りましたので、私の結婚費は姉達よりずつと少ふございました。家を持ましてからもこの主義で通して居りますから、當今一般の中流婦人方より晴衣の數がずつと少なふございますが、その代り見飽着飽のせぬやうなものを撰んで拵へて置きます。私は何物を求めるにも七分と云ふことが好でございますが、一圓の物を求めるのに七十錢の物で間に合せて置くのではございません。つまり品數を少くしてその品を十分に撰むのでございます。假令ば百圓と當て置いた



被服費を、盡く被服に使ふて了ふのは、心の餘裕を失ひ着心地も惡るうございますから、二百圓の用意が出來るまで新調を見合せ、百五十圓の物を拵へると云ふ風にいたしますと、品質も良く心安く身に着けられるのでございます。

▲衣服の壽命八ヶ年

日本服の數は多過ぎますが、唯今の處交際その他の必要上極端の所置を取りにくいのは實際巳を得ぬ勢ですから、私共はその間に處して便宜な方法を工夫するより他致方がありません。二三年着たお召縮緬一重を賣拂つて常着の銘仙一重を求められる方もあり、少し流行後れになつたものは皆賣拂

つて新式の物を求められる方もあるさうでございます。これらは新陳代謝の便法でありませうが、一度自分が愛用した物を暗から暗へ渡すのは無殘のやうな心地がいたしますから、私は先づお召の着物一枚新調しますと、これを三年間晴着に用ゐ、次の三年間チヨイチヨイ着にいたし、又二年間常着に下して用ゐ、丁度八年間身に着けまして、その上りは親戚の不自由な者に贈つて了います。

▲物を買へば金を取られる

品物を買つて金を取られるのに不思議はない次第ですが、掛買に油斷して不知不識金高が嵩み、月末の勘定書を見て狼狽する主婦も往々あるやうでございます。毎月豫算外の支出があつて困ると云はれる方なぞも、多くはこの心付ぬ掛買に苦しめられるやうに思はれます。米薪炭その他帳通に一々記す類の他、一寸した店屋物、醫藥なぞ習慣上即金拂ひでないものはつひうつかりと忘れ勝なものです。特に馴染の吳服屋なぞで買物する際は、掛買ですとふわ〱と金高が上りますから、凡て斯ふ云ふ場合にはその日に直ぐ支出帳にチヤンと記入して置くことが必要でございます。この記入を嚴密にいたせば油斷の掛買に苦しめられることはなからうと存じ、私は結婚當時からこれを勵行して居ります。

▲物品のやりくり

他から到來した物品を復他に送ることは出來る丈さけて居り升。時として家庭に入用なき物が到來することがありましても、種々工夫して役立てゝ居ります。盆暮にはビール瓶があちこちへ引廻されて不運を歎つと云ふ滑稽談もありますが、知人の厚意を沒却するのは心地よくございません。私は結婚の當年より贈答品の帳簿を拵へまして、贈品の方は豫定書を作つてその通り實行して置き、到來品の記入と照合せて、もし先方が超過して居れば、他の場合にこれを補ふ返禮をいたすと云ふ風に定めました。今日この帳簿を開いて見

ますと生活程度の變化がよく分り、大層興味を感じます。

▲火難と盗難

家を持ちました初から、火難には隨分用意いたし、結婚の誓約書や感想日誌その他の記念品は良人の勤める日本銀行へ保護預けにいたしました。それから宅の箪笥は抽出毎に非常用の袋を入れてその袋に一々住所姓名を記して置きました。幸ひに今日までこれが役立つ災難にも遇ませんでしたが、餘り火難を考へ過ぎたために今回盗難にかゝりました。寶石類の貴重品を深く倉庫に收めますと、近火の際取殘し倉が燒落ることまでを氣づかい、手近の箪笥へ納つて置きましたところ、案内を知つた賊が入り錠を捻ぢ切て金子と共に盡く盗み去りました。この損害高は丁度千圓ほどでございますが、これがために今までの不注意に心付き、盗難に備へる綿密の工夫を悟り、金子は一切家に置かぬことにいたし、五圓以上の拂は悉く小切手



にして渡すことを商人と約束いたしました。賊の手がかりは唯今以てございせんが、私は千圓の月謝を盗人に拂つて新智識を得たと悦んで居ります。

▲立ち乍らでも讀書

私が一日の中の生命は讀書でございますが、追々子供も殖え用事が煩雜になりますと、机に向つて書見する暇も一寸得にくいものですから、立つた儘でも讀むことにいたし、これだけは缺さず續けて居ります。讀物は何と一定はいたしませんが、好きなのはカーライル、ラスキン等の著書で、源氏徒然草も大好でございます。聖書は大抵缺さず手にいたしますが、禪書にも趣味を持つて居ります。禪の方は良人が好でございますので、いつしか讀むやうになつたのですが、段々味いますと聖書に似通ふた意味を見出し、餘程面白く感じてまゐりました。新聞は社說を第一に讀みます。時時は面白くて二三扁位繰返して讀んで居ります。

▲處女の間は學問專心がよい

結婚後十年間のお話しはざつとこんなものですが、私は經驗上處女の間は學問を專一に心掛たいものと感じて居ります。但し裁縫、料理その他家庭に必要な手藝を學ぶことは勿論肝要でありますが、夫婦の愛情を說明した讀物や戀愛的の小說を繙いてこの種の常識を養ふことは餘り必要なきことゝ存じます。如何に沒常識の女子でも、結婚して心服すべき良人を得ましたならば、敎育の程度に應じた愛情は自然に發揮するものでございますから、處女の間は再び得られぬ好期を仇に過さず、學科攻の中に生活する方がよいと存じます。未だろくに學問も出來ぬ内からホームの空想を描き、密月の想像に醉ふやうですと、確乎とした主婦になれぬのみならず、夫婦間の淸い愛情も永遠に保ち難いと存じます。

▲夫婦愛情の基礎

結婚當時以來良人は常にかう云ふことを申して居ります、新妻に餘り高度の愛を注ぐのは、秋風の早く立初める原因であるから、私は初より平靜な待遇を取り眞實で親切と云ふことを新婚から共白髪まで渝らぬ樣にしたいと申して、今日までこの言葉の通り實行して居ります。私は當初良人に比べますと確かに熱度が强かつたに違ひありませんが、可なり思想を練つた上の晩婚で、多少沈着もあり、禮を亂すことが嫌ひな性質であつたために、十年後の今日まで清い愛情を保ち得られたかと存じます。眞實で親切、親しき間の禮儀と申すことは誠に夫婦愛情の基礎でございませう。



紫の芽もはる〳〵と出る日に
かすみ色こき武藏野の原
眞淵

蝶々の意匠


三羽むかひ蝶
建部蝶
光琳蝶
備前蝶
胡蝶
つるむかひ蝶
向ひ備前蝶
ふくら蝶
向蝶
因州蝶
真向蝶
揚羽蝶
刑部蝶
蝶ともへ
月星蝶
吉田蝶
源氏向ひ蝶
源氏蝶

現代婦人評論──其一

新舊女優の解剖

鐵拳禪

一

◎朝來天色濁りて重く、灰色の寒さ犇々と身に逼り來る。忽ち見る、六花霏々として到り、紛々として舞ひ、濛々として降り頻ること急也。滿目の萬象悉く白化す。

◎雪趣は雪後にあり。碧天と白地と相映發し、平凡の樹木を非凡化し、沒趣味の死屋を玲瓏の玉樓と化して、以て滿都を美裝し去る。雪後の極美は、一晴の刹那に在り。

◎斯の美を背景にして、吾人を驚かせるは南米の歸客也。自然の珍客と人間の珍客とを同時に迎へ、冷聲熱語を齊しく聽いて、徐ろに觀劇の感を覺えずんば非ず。

◎彼れ云ふ。邦人にして世界に著聞するもの、五指を屈すべし。曰く大隈、曰く東郷、曰く黑木、曰く貞奴……と。

◎貞奴は女優也。俳優川上音二郎の妻也。而して、伯大隈と名を齊しうする世界的人物也と、聞くに至りては何人か驚かざらんや。

◎公伊藤は既に史上の名也。名優市川團十郎は辭書中の人也。何れも世界に知らるゝには相違なきも、貞奴はより以上の名聲を博す。公山縣の如も元老も、侯桂の如き宰相も、彼女の知らるゝ如くならずと云ふに至つては、世界に於ける貞奴の人氣も亦大したもの也。

◎然れども故國に於ては、しかく大なる名に非ず。梨園の一名花たるを失はざるも、英のエレン、テリー、佛のサラ、ベルナルを以て推す可からず。王侯將相と同日に論じ、官首黨首と同一線上に置きて評價するが如きは、寧ろ滑稽の沙汰たる也。さればとて、彼女の世界的名聲は、之が爲に毫も傷げらるゝものに非ず。

◎貞奴は、もと藝妓也。鐘が鳴る淺草に生れて、姿態

妖艶、明眸皓齒、流眄の瞬間能く風流才子を恍殺す。此の時既に彼女は尋常花柳界の妓に非ず、華やかなる背景の前に立つ女優たりし也。然り、未だ女優たらずして、夙く女優の技を得たりし也。

◎川上は『オッペケペイ』の川上也。『日清戰爭劇』に因りて、劇界の一角に名乘を揚げたる壯俳也。彼女、始めて斯男の知る所となりて劇界に出で、夫婦共稼とはなれる也。

◎川上は山氣滿々の男也。貞奴は勝氣の女也。窮迫流轉の裡に藝道を錬り、兎も角も今日の名聲を贏ち得るに至りぬ。彼等倘し順境に在らば優遊無爲、自ら葬るの人たりしやも知るべからず。

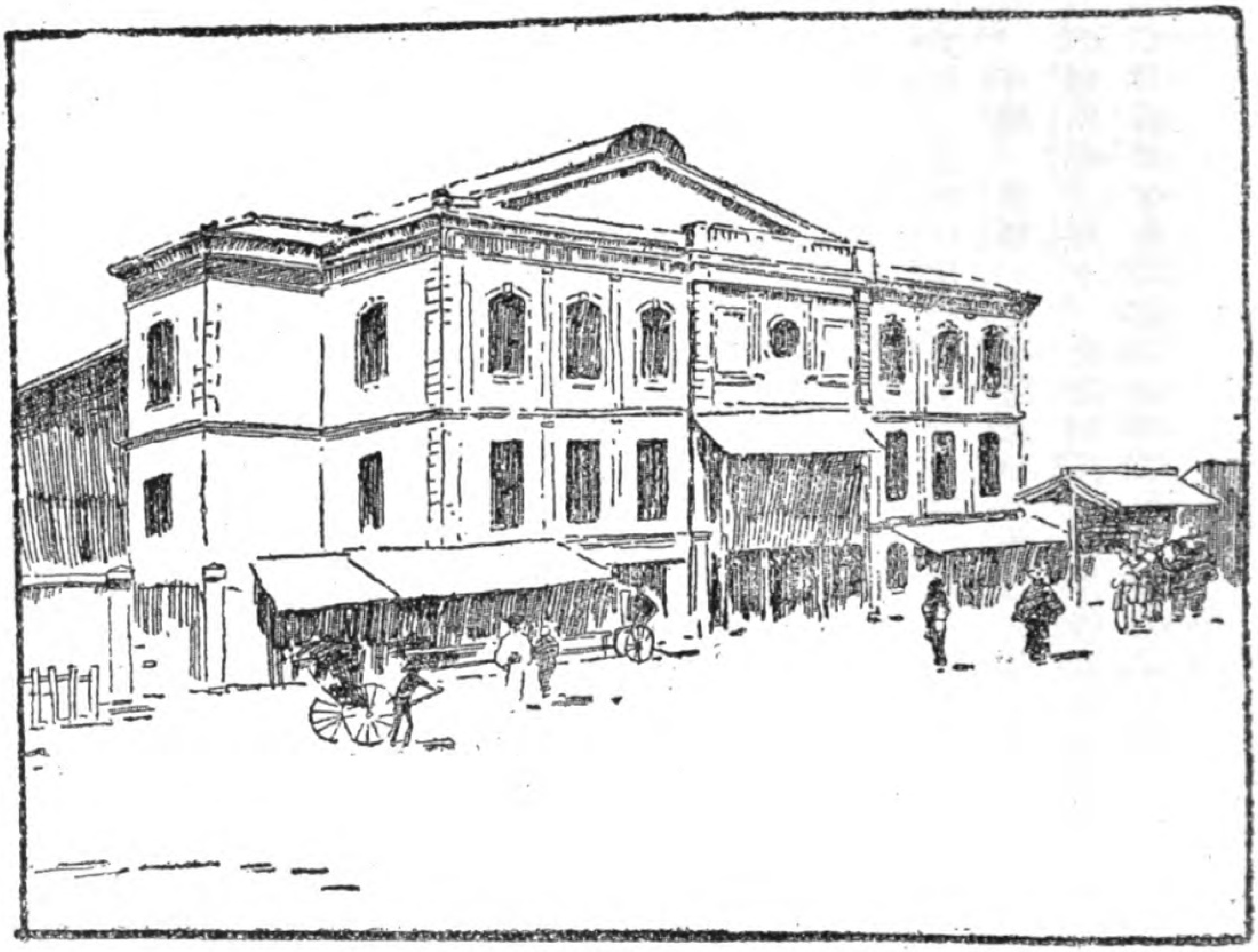
◎其の比を文壇に覓むるに、與謝野鐵幹及び晶子あり晶子、本姓は鳳、泉州堺の商賈の女也。和歌によりて鬼才を鐵幹に知られ、『明星』によりて奇縁を結ぶに至る。行徑素より小說中の題材、脚色すれば一場の詩劇也。

◎今日の晶子は、既に鐵幹の才名を壓す、貞奴の艶名妙技は、遠く音二郎の上にあり。良人に知られて良人の上に出で、良人と共稼をなすに至つては、二者共に一也。嗚呼斯の妻無かるべからず、斯の良人なかる可からず、鎹は子に非ずして、其の藝道也。

◎泰西の文士及び俳優の背後には、有力なる保護者あり。縱橫の鬼才を發揮し、十分に驥足を伸すを得れども、本邦に於ける天才者は、先づ生活難と戰はざるべからず。殊に女優の如きは、世の迫害と鬪はざるべからざる也。

◎佛の女優サラ、ベルナルは、曾て遠く米國に遊び、各都市を興行して遍歷せる事あり。月を閲する事十、純益を得る事六十萬、而も米國の興行師よりは百二十萬金を獲得せりと稱せられき。

◎川上夫妻の漸く梨園に頭角を顯はし、新劇勃興の氣運に乘じて『ハムレット』を提げて起ち、次で地方興行をなすや、到る處成功せざるは無く、彼の熊本の如きは木戸も破れんばかりの大入なりき。而も得る所の純益は、一個年二萬圓を出でざりきと。然れども、貞



奴の名は之が爲に兒童走卒に迄も知らるゝ者となりぬ。

◎彼女の初舞臺は、今より十三年前にして、實に彼女が二十九歳の時也。身長低きに失すと雖も、表情よく觀客を魅し、梨園の未知數を以て目せられき。果然、洋行後に於て彼女の技は著しく進み、もはや壯俳劇の貞奴には非ざる也。

二

◎今春、『天風組』及び『成功疑ひなし』を本郷座に觀る。登場する女優は三、曰く川上貞奴、曰く川上澄子曰く川上禎子、是れ也。

◎澄子は芳紀正に十有九、貞奴の姪也。禎子は本名をつると云ひ、本年二十六歳、貞奴の實兄小山某の女也。川上一座に加はりて佛蘭西に押し渡り、嬌名を歌はれたる事あり。一は『成功疑ひなし』に於て狂女に扮し一は同劇の直子に扮す。成功の程は吾人必ずしも之を保證せず。

◎貞奴は、「天風組」の遼東總督跡部大將（川上音二郎）令嬢壽代に扮す。今其の筋を云はんか、天風組と稱する海賊旅順に出沒し、其の巨魁前田茂（伊井蓉峰）は總督令嬢壽代と相愛の仲となり、結婚せんとすれば海賊仲間の規約に背き、規約に從へば遂に戀を捨てざるべからず。然れども天は二者を與へず、前田は副會長國井作夫（村田正雄）の刄に斃れ、國井も亦刄に伏して死す。稱氣滿幅の場面、多少の爽快なきに非ず。

◎伊井は村田を得て始めて引立ち、貞奴は蓉峰に配して生彩あり。川上は巧者なるも、相變らず薄ッぺら也。貞奴の壽代は、發狂後の科に於て獨得の技倆を發揮し、女形の到底表現し難き一種の情緒と不言の奮趣を見せたる所、甚深なる感銘を與ふ、流石は女優なりけり。

◎貞奴の長所は玆に在り。令嬢は好んで彼女の扮する所、年增、奧樣、老婆等は扮し能はざる所也。是れ貞奴の短所也。然り、此の短所は獨り彼女の短所に非ずして、新派女優共通の短所ならずんば非ず。

◎國井の妻お隅に扮したるは、女優貞子に非ずして、女形木村操也。女優の輩出するにも拘はらず、此の種の女は依然として女形に待たざるを得ず。明治も既に四十四、女形の妙技を奮ふ程の女優が欲しきもの也。

◎女形として名ある者、現下新派に河合武雄あり、喜多村綠郎あり、木下吉之助あり、河合の表情ある眼、銳き聲は婦人の性格を現はすべく、喜多村の顏と科とは以て女性の動作を髣髴し得べし。共に新派女形の双璧也。

◎舊劇の女形にして第一に指を屈すべきは、美貌の中村芝翫也。次は艶容婀娜たる尾上梅幸也。其他娘形の澤村宗十郎、尾上芙雀、市川莚若あり。母形の岩井粂三郎あり。新しき女性形の阪東秀調あり。傳法肌の澤村源之助あり。『三代記』の時姫に天下一品の稱ある市川門之助（女寅）あり。中村成太郎あり。殆んど女優を眼中に措かずして、劇界に濶步す。而して彼等の矜る所は、其の表情に非ずして技巧也。所謂埶道の神髓也。性格の描寫に非ずして、所作の模倣也。

◎時代の流は須臾も止まらず、軈ては女形の飽かるゝ

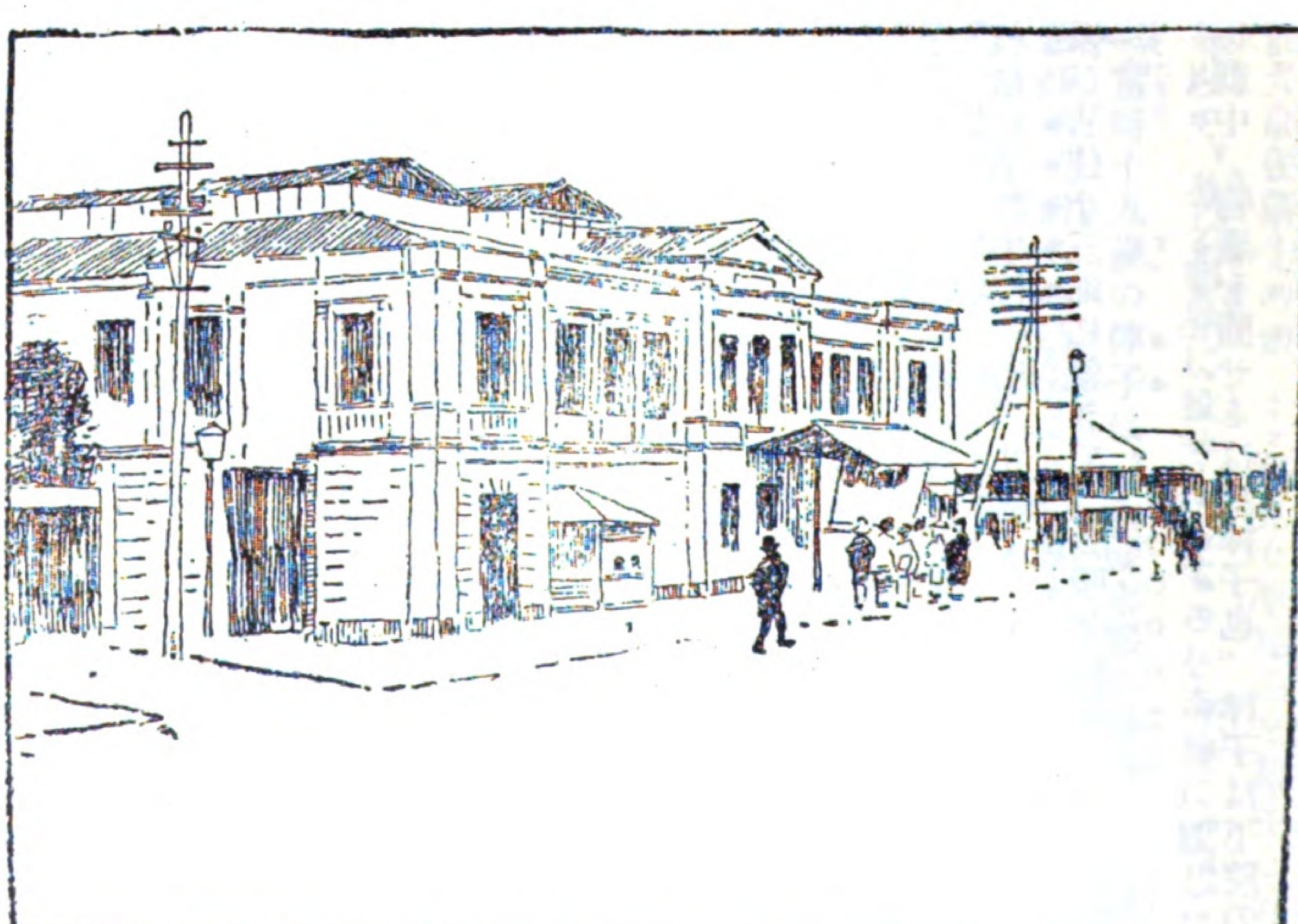
時代も來るべし。現に今日と雖も、事實に於て漸く不振の傾向あり。女形にして立役を兼ねんとする宗十郎の如き、芙雀の如き、漸く自家の藝道に飽きたるの觀なきに非ず。斯くして女形愈々凋落せば、女優の舞臺は始めて開かれん乎。

三

◎由來日本人は芝居好の國民也。芝居と云へば『忠臣藏』『二十四孝』と心得るの國民也。殊に婦人の如きは前の晩から髮を結ひて『シバヤ』見物を思寢にしたる程也。『シバヤ』は德川時代より此の方、國民の唯一の娛樂所にして、武士道の講談所たりし也。

◎新文藝の興隆と共に、戲作者と云ひたるが小說家となり、『シバヤ』は演劇と呼び做され、舊劇新劇の色彩さへ鮮明になりて、藝苑の天漸く明け渡り、ハイカラ風の吹き廻しに女優は突如として現出せり。

◎明治四十一年の交、川上夫妻は歐米の興行を終へて歸り來れり。貞奴の顏は新氣運の曙光に輝けり。新劇



界に野心滿々たる川上は、九月に至りて革新軍を組織し、帝國女優養成所を創立して、天下の耳目を聳動しぬ。

◎女優學校！　比較的新思想を抱く文藝家と雖も、其の突飛なるに驚きの眼を見張りし程なるを以て、教育家は囂々として非難の聲を放ちたり。然れども、女優の輩出は氣運也。各女學校記念祭等に頻々行はれたる活人畫は、此の新氣運の先驅にてありける也。

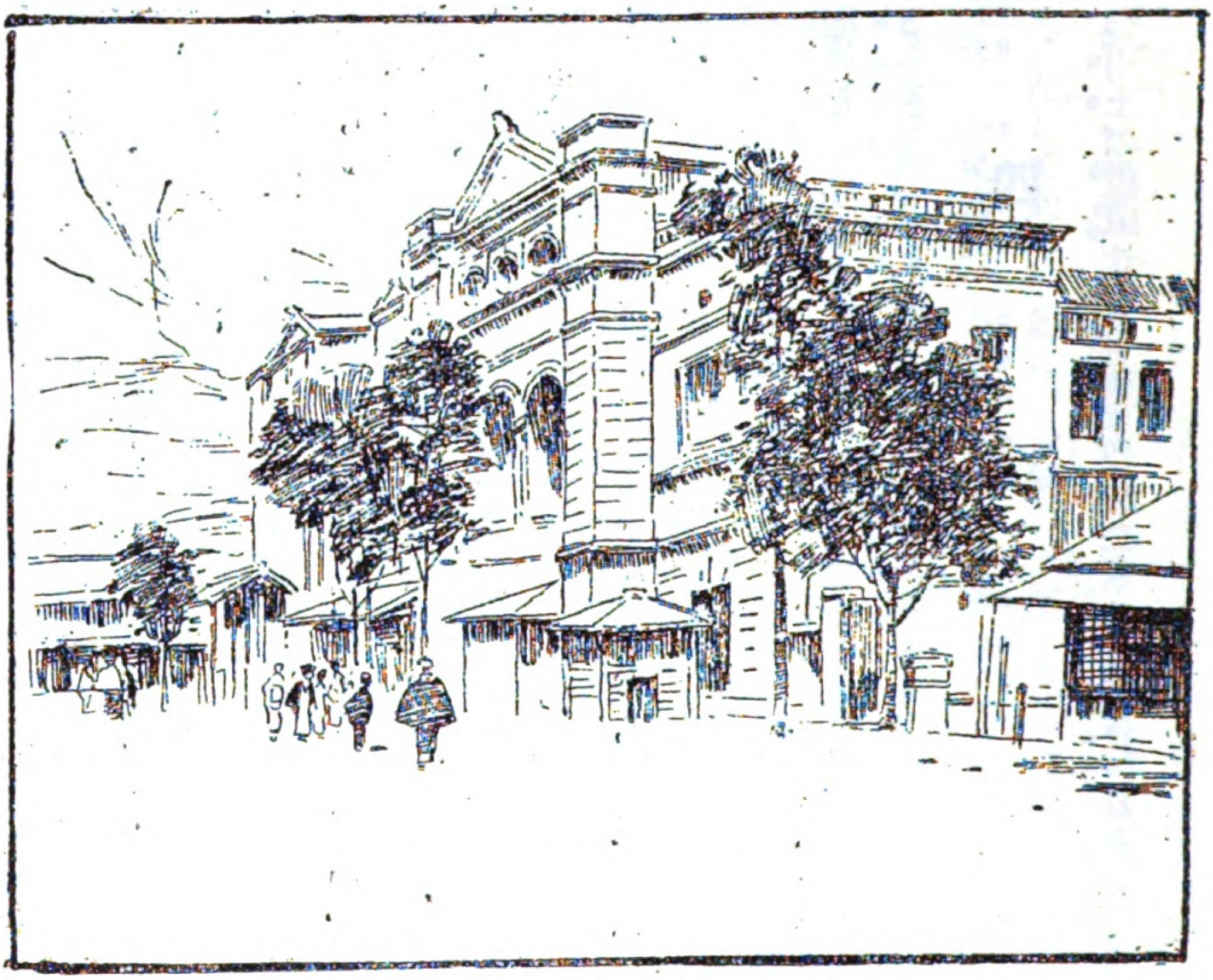
◎新時代の女優は、舊時代の女役者也。女役者はありたれども、多くは子飼よりの役者也。無教育の女性也。然るに帝國女優養成所の志願者は、多くは新時代の教育を受けたる、女學校若しくは小學校の出身者也。良家の子女也。敎育界の喫驚せる、故なきに非ず。

◎當時養成所の募集定員は十五名にして、志願者は實に百餘名の多きに達せり。其の中より定員だけを選拔して、入學を許可せしは、黑瀬こま（熊本）、佐藤露英、山下花子、川畑らく、堀きみ、佐藤千枝子、佐藤はま子、中村滋子、野村菊枝、森律子、初瀬浪子（以上東京）、村田かく子（品川）、白井壽美代（横濱）、丸山わか（松本）及び川上澄子等にして、露英の二十五歳は最年長、澄子の十六歳は最年少なりき。

◎千枝子は築地女子小學校卒業、私立女子語學校三年修業。壽美代は赤坂小學校卒業、共立女學校三年修業、浪子は築地稻荷寺住職岩尾淳料の娘、四歳の時初瀬家の養女となり、築地小學校を卒業せり。

◎多少音曲を習得せるは、はま子、滋子、かく子、菊枝の數名也。はま子は神田共立女學校に學び、女子計算養成所を卒業して、新聞社の事務員となる。常磐津及び長唄の素養あり。滋子は大阪ウキルミナ女學校三年修業、江戸歌、踊、長唄、義太夫の素養あり。かく子は品川小學校卒業、琴、三味線、踊の素養あり。菊枝は女子語學校の出、九歳より十五歳まで芳村孝千代及び吉住小三郎に就きて、長唄を修業せるの經歷を有す。

◎就中、物議を釀せるは森律子也。律子は下院の名物男、長髮議員森肇の次女にして、跡見女學校の出身也



世人は代議士の娘…跡見女學校の卒業生と云ふ二事を以て、身を劇界に投ぜんとするを奇異に感じたる也。

◎當時十九歳の律子は、女優志願の動機を新聞記者に語れり。曰く『幼少より觀劇を好み、居宅の歌舞伎座に近き所より毎回缺かさず之を見物し、學校にて國文の研究より演劇に趣味を持ち、友人の家又は園遊會等にて芝居の眞似をなし、遂に女優たらんとするの念を切にせり』と、斯くて、彼女は帝國女優養成所裡の人となりぬ。

◎養成所は後に至りて川上の手を離れて、帝國劇場附屬技藝學校となり、一昨年十月更に第二回の女優を募集し、昨年十月第一回の卒業生を出せり。其の卒業生の在校中に學習せるは、踊、舞、義太夫、長唄、琴曲鳴物、西洋音樂、作法、化粧、新舊演劇、長劍術、歴史院本講義等にして、卒業生の顔觸は第一回入學許可發表當時と多少の相違あり。

◎佐藤千枝子、佐藤はま子、河村菊枝、初瀨浪子、白井壽美代、森律子、中村滋子、村田かく子の外、田中

勝代、藤間房子、鈴木德子の新顏を加へたり。されど黑瀨こま（木村秀雄の妻）、佐藤露英（田村松魚の妻）外五名は、新聞に發表せらしのみにして、ヒードロドロの鳴物を聞かざるに早く養成所より消失せり。

◎律子は新女優中の人氣者、卒業の際伯林董より揮毫を寄せらる。「歌繞夜梁珠宛轉、舞嬌春席雪朦朧」の一軸、今掲げて彼女が居室の床の間に在り。立て掛けられたる一面の箏、閼迦桶の花活に冷香を吐く一枝の寒菊と共に、新彩を加ふ。

◎試演會に於て、科白の巧を以て稱せられたるは德子、浪子、滋子、律子、千枝子及び一年生の小原はる子、宇治彌壽生子等にして、かく子及び一年生の村瀨つた子は有望の目あり。是等新女優の貞奴壘を摩するや否や、之を將來に徵せざるべからず。

四

◎川上の組織せる革新軍の第二軍は、貞奴之を率ゐて本鄕座に旗幟を樹つ。當時の意氣込の盛んなる、劇界を蹂躪せんとするの槪ありしも、實は今春の「天風組」にだも若かざりき。唯觀客席に、每日外國人數名を見たるを異數とせしのみ。

◎出演の女優には、花浦咲子、鈴木歌子及び妹宮下のぶ子、茅野きく子、西中直子あり。咲子と直子とは共に福知山高等女學校の出身にして、一は十八歲より女優となり、一は更に京都手藝學校を卒業し、八雲箏を習得せし事ありて、初舞臺也。

◎歌子姉妹は共に、日本橋旅籠町高等小學校の出。姉は踊を花柳勝二郎に、常磐津を岸澤式松に修め、妹と同じく初舞臺也。きく子は南品川高等小學校の卒業生、長唄を杵屋に學び、踊を藤間家元に習ひ、初舞臺たるは勿論也。爾後咲子の墮落を耳にせる外、他は杳として聞く所あらず。

◎子役には、當年十四歲の川上福奴（岩崎ふく）あり。東京芝の生にして氣質活潑、十二歲にして初舞臺を踏み、幼少にして舞臺度胸の据れるを多とす。

◎帝國女優養成所の起るや、藤澤淺二郎の俳優養成所

の設立あり。小山内薰の自由劇場の開始を見るや、井上正夫の新時代劇は有樂座に試演(昨年十一月)せらる。而して此の一座に、女優の出演を見る。曰く藤島芳枝、小泉紫影、小坂けい子、新藤わか子、三神とら子、未だ名をだに知られざる新女優也。

◎新女優の出づる、雨後の筍の如くなるも、見あぐる程の竹となりたるは尠し。多くは中途にして業を廢し或は放縱の女性となりて了る。彼等は女優の華かなる半面に憧れて、努力と苦心との覺悟を缺く。廂髮の女優たるもの、己れの鼻先にちらつく學問を矜らずして先づ其の技を練るが肝腎也。

◎舊劇の女役者に、翠扇及び旭梅あり。共に市川團十郎の遺子にして、歌舞伎座に出勤す。舞臺の人たる既に久しきも、女形の妙技に蔽はれて著はれず。漸く其の健在を疑ふものあるに至れり。

◎三崎座には、所謂女役者の一座あり。木戸錢を安値にして、低級の觀劇者を吸收す。女優常に女性に扮するに非ずして、時に男性に扮す、又女性に扮す。即ち男優を混せざるの『シバヤ』也。阪東錦糸、千升、鶴枝、鯉喜之助等あるも、女優にして男性に扮する、吾人其の可なるを見ず。

◎聞説、帝國劇場の開場は本年三月にして、普通の演劇の外に、特に女優日を設くべしと、其の仕組の如何なるものなるやを詳にせずと雖も、恐らくは三崎座の如きものに非ざらん。

◎女優日とは、思ふだに華やか也。彼女が音樂の如き言語を聽き、彼女が力ある表情の波に捲かれなば、觀客は恍として藝術の美に醉ふべし。吾人は我が邦にも斯の如き光榮ある劇の日の來らん事を希望す。



巴里婦人の美裝

今回の旅行中第一に感じましたのは、倫敦のバーナーハウスと、巴里婦人の華美な事と、此の二つで御座いました。バーナーハウスは孤兒院を擴大したもので、ドクトルバーナー氏の創設にかゝる慈善園です。中には學校、靴、馬車、鍛冶、ブラシ、パン、大工、織物等の工場など整然と秩序が立つて、廿四五歳までの孤兒に一人前の職業を授ける處でしたが、殊に勞働者の幼兒を預る部屋には、四十人ほどの子供を一人〳〵椅子に掛けさせて、柔らかな紐で縛つて、二人の保姆が親切に世話して居ました。私共が參りますと、其の小さな子供達が、グードモーニングと口々に申しますのが思はず感涙に咽ばせました。

巴里に參りますと、何分流行の根元地だけあつて、婦人達の美しい事と云つたら、目も醒めるやうです。色は青が流行であつたさうですが漸次是から葡萄鼠に移りつゝあるといふ話でした。帽子も大きくて馬車などに乘るにはほんとに困難な程でしたが、又追々にソレが廢れて、今度は桶を逆さまにした樣な、コンモリと高くて、上部の狹つて居るのが流行の兆があるさうで、一體に非常な贅澤なのには唯々驚くの外無く、或夫人の指に輝いて居たダイヤが、百萬圓だと聞いて吃驚しました。私も指環を一つと存じまして、寶石問屋に行きましたが、小指の先ほどの眞珠を五六十粒も繋いだ頸飾りを三十連ばかり一と束にして摑んで出しましたが、驚くぢやありませんか、其の一と連が五萬圓でした。すべて巴里婦人の化粧の上手な事も非常なもので、私共は色の透き通つた體格の立派な巴里の婦人と竝んだ時には眞個に氣恥しく思ひました

婦人などの風で變て居ましたのは、西班牙婦人が多く帽子の代りにレースを頭から被るのと、スカンヂナヴイアの婦人が看護婦の帽子の樣な物や日本の烏帽子の樣な物を被り、常に色織などの前掛を掛け、刺繡のある帶を著けて居る事で、風俗は昔の風と見えて維也納などでも時々見えます。西班牙はレースが有名で御座いますから、一つ買はふと思ひまして聞きますと、一寸したので五百圓からしました。之を見て衰へたと云つても猶何所かに富力があると感じました。(村井吉兵衛氏夫人)

家庭に備へて置く衛生具

左の衛生具は多人數の家、別して子供の多い家庭には是非絶やさず用意して置くべきものであります、併し塵埃の積るやうな處に出し放しにして置きましては、是れは消毒をしたものであると云つて安心をすることは出來ず、藏つて置くのにも其心を忘れてはなにもなりませぬ、脱脂綿を一打買ひますと、堅牢な紙に包んでありますから、包みの一方をうまく切り、そこから要るだけを出して遣ふのが一番宜しう御座います。

▲ガーゼ　ガーゼは粗く織つた軟い布で消毒がしてありますから、創傷を洗つたり、膏藥を延ばしたり又は罨法などをいたすにも之を用ひますと、大變に便利であります。ガーゼには普通の物と一旦消毒藥液に浸したものとの二種ありますから、腫物創傷などに當てますものは、消毒したものを擇ばなければなりません。

▲繃帶　繃帶は晒木綿で造るのでありまして、種類は澤山御座いますが、普通の家庭に備へて置きたいのは、三角繃帶と卷軸繃帶の二種で御座います。卷軸繃帶とは、普通晒木綿の兩耳の堅い處を斷ち去りそれを三つか四つか或は五つ位に引裂いて卷いたもので、其用所に從つて、巾の廣いのでも狹いのでも勝手に擇んで用ひます。三角繃帶といふのは、三四尺の金巾の角と角とを合はせ、二ツにした位の大きさのもので、大變重寶なものであります。

▲檢溫器　醫師が病人を診察します場合に、最も大切なのは體溫の如何であります、此處に記すまでもなく、皆さんは御承知の通り、健康な人の體溫は、普通三十六度から三十七度の間であります。(尤も人に因て多少高溫の人もありますが)是れより昇溫しましたときは、それほど氣分は惡くなくつても、身體の何處かに故障のある證據であり、又風邪などを引きまして頭痛がしたり氣分が鬱陶しくても、熱の無いときは先づ安全でありますから、一軒の家には必ず檢溫器を備へて置かなければなりませぬ、此檢溫器と云ふのは、直きに狂ひ易いものでありますから、其の取扱ひは叮嚀にし、使用した後は、靜かに大きく振つて、水銀を下げ腋下に挿入する部分は綺麗に拭いて置かなければなりませぬ。

▲ピンセット　創傷腫物などには成るべくピンセットを用ひて患部へ直接に手を觸れないやうにすることは、病人の爲めにも看護者の爲にも、利益であります。

▲安全針　別に用途を述べるまでもなくこれを用意して置きますと、病人のありました節は勿論、其他の場合にも大變重寶なことがあります。

女生徒の氣力

山脇女學校教授　星　常子

▲勇氣あるものは少し

私が唯今一般の女學生を觀察して歎息いたしますのは生徒が揃ひも揃ふて勇氣のないことでございます。數學なぞも成るべく容易い問題を出て貰つて頭腦を使ひたくない、難問題が出たら自分で考へるのは面倒臭いから早く敎師に說明して貰ひたいと望んで居りまして理窟が呑込めやうが呑込まいが時間さへ經つて了へばお役が濟むと云ふ誤魔化し主義で學んで居るやうに見えます。熱心に答式を考込んで號鐘の鳴るまでやつて居るので敎師が說明しやうといたしますと「先生敎へて下すつてはいけません。私がどうかして考へ出しますから此次までの宿題にして下さい」と申すやうな生徒は四十八人一組の中に僅か一人か二人、本當に曉の星でございます。今の生徒が昔の生徒のやうに勇氣のないのはリボンの色、衣裳の柄に捕はれて學生氣質は裳拔の殼となつて居るからであります。一刻千金の修學時期を浮華〳〵と過して何時又學ぶことが出來ませう。何の爲に學校に來りつゝあるかと云ふことを每日一度づゝは考へてもらひたいものと殘念に存ずるのでございます。

▲數學と裁縫

高等女學校は近頃裁縫の時間が殖ました爲に數學なぞは一週二三時間位に減じましたから尚更生徒の頭腦に入り難いのでございます。裁縫は女子の第一に修むべき科目で父兄の要求もこゝに在るのに違ひありませんが、裁縫なぞは元來練習的のものですから學校で學ぶ時間が少しばかり殖ましたところで著しく上達する次第にも參り兼ますし、卒業後に練習の機會が一番多いのですから、矢張頭腦に關することをみつしり學んで置く方が宜いかと存じます。先づ普通家庭用位は一

通の筋道を覺えて置けば先輩のを參考にしても出來るのでございますが、數學とか理科とか云ふものは頭腦の單純な内に學びませんと機會を逸して了ふやうに思はれます。

▲女學生の好む學科

女學生が一般に好む學科は歷史と國文でございます。教師から興ある談話を聽して貰ふ歷史や、美文や小說趣味に適合する國文學を好み、頭腦ばかり疲れて乾燥して居るやうな數學理科なぞを嫌ふのは女學生の通性でございませう。勿論何の學科も大切でございますが確乎とした婦人となるにはこの嫌な學科を十分に修める必要がありますから生徒は克己して研究しなければなりません。研究して居る間に自然興味



も湧いて來るものでございます。

▲家政學の教授について

家政科は實驗の方ですと生徒が面白がりますが、講義は歷史なぞのやうに珍らしい話を聞くのではなし、ありふれて居る事を聞くだけですから値打のないやうに感じて餘り興味を持ぬもので教師の方でも卑近な事物を事新し氣に說明するのが却つて困難なものでございます。一體女學校で教ゆる諸學科は詰るところ皆家政に活用すべきものですから別に家政學と云ふ科目の必要もないやうに思はれます。併し理窟の容易しい家政學ら頭腦の養ひが少ないものには實行が出來ぬのでございます。

▲衣服を買ふ時の決心

買物の上手下手は一家の經濟に大關係を及ぼし家政學を修めた者の手腕を振ふべきところでございますが、特に衣服の買方については手腕に伴ふて覺悟が必要でございます。先づ今日の境遇をよく考へ身分に過た物は決して買ふまいと決心して呉服店へ參るべきです。彼店に賣出がある、何か見切の格安物でもあるだらうと寶探しでも爲る野心でふら〳〵と入り込みますと眼も眩むばかりの綾錦、かよわき心はときめくばかりの處へ、高價な品を惜氣なく買取る華美な奥樣方にかぶれて物數ならぬ位に思ふて求めた物もついそれが身分不相當の金を費やしたことになると云ふ實例は少くございません。見切物格安物の賣出しは婦人の弱點に投ずる商略でございますから、覺悟なき婦人は常に捕虜となつて了ふのです。何でも豫定したゞけの必要品を相當の代價を以て求めさへすれば間違ひないわけで、成るべく豫算した金だけを懷ろにして參る方が宜いと存じます。

▲主婦が外に働くについて

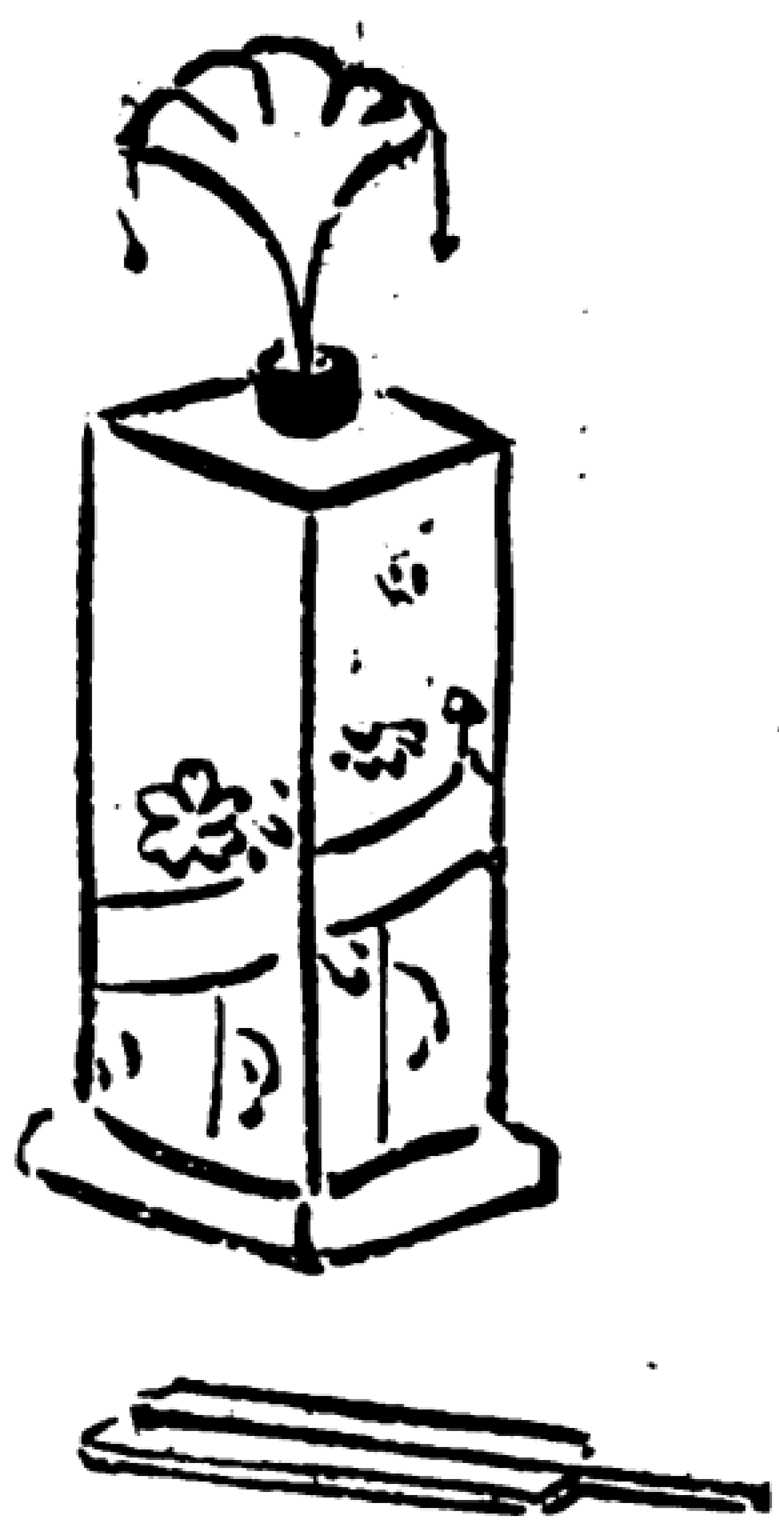
教員その他の職業を持てる主婦が外に働らきますのは家のためにも子供のためにも宜しくないことは當然でございませうが、その婦人の注意と努力次第で不都合もなからうと存じます。假令ば出勤前と歸宅後に於ける甲斐々々しき働らき順序を旨く立て時間を消費せぬ工夫、及び休暇時の活動なぞで大抵操廻しのつくものですし、却つて何時でも出來ると云ふ油斷がないのでよく行屆くところがあらうと思ひます。子供の側に朝から晩まで附纒ふて居ても衞生や教育に不注意であつたら、外出の前後に綿密な注意を拂ふ母親に劣りませう。尤も主婦が外に働らく可否はその家の狀態と良人の主義に依り一概に評されませんが、唯私の實驗で感じたところを申上るのでございます。

▲二十年間働いた經驗

私は教師の古顔で明治二十三年より今日まで學校勤めをいたして居ります。(尤もその間に良人の死去當時一年半ほど休みましたが)ざつと二十年間ですから家事の繰廻しについては隨分研究をいたしました。五人の子供が幼少の頃、特に主人の來客多き時代は出勤前後の氣配りが却々容易でありませんでした。それに私は縫物を他に出すことを好みませんでしたから用務が尚更多かつたのでございます。それで縫物は成るべく手の掛らぬ工夫をいたし寸陰を惜んで働らいたのでございます。永年の外勤に良人にも子供にも餘り迷惑を掛けませんでしたのはこの働らくのが好であつたお蔭でありませう。

▲辛いことが一つある

婦人が家に閉籠つて居ますと感情ばかり高るものでございます。私が一年半程學校を退いて居つた間にもこの傾がございました。勤めに出て人に接し新らしい事を見聞して歸宅した心地は格別で、家事を執るにも活氣あるやうに存じます。私は實に學校勤を樂しく感じて居りましたけれども唯一つ辛いことがありましたのは、前申上る通り生徒に氣力がなく教ゆるのに張合なきことでございます。私はいつも生徒に、「私にばかり喋舌せて質問一つ爲てくれぬのは誠に張合なきことです。壓せば直ぐ凹む餅のやうでは仕方がない。ピンと刎ね返すゴムのやうでなければなりません。」と申して居りますが、とかく女生徒は引込でさへ居れば耻をかく氣づかひなしと云ふ虛飾主義を守つて居るのでせう。質問をあびせかけて教師に迫つた昔の女學生の氣力が半分でもあつたらばこんなことはありますまい教育の方法は確かに進歩して居りませうが、女學生は退歩したと云ふことは私の偏見のみでなく古顔の先生方に伺ひましても大抵御同感のやうでございます



今風の家庭と婦人の機轉

辯護士　平出　修

△婦人の地位の變化

種々と世は移り變つて行く。それにつれて家庭の樣もいくらかづゝ新らしい空氣がはいつて來る。先づ古風な家庭と、今樣の家庭とを比べて見て、著しく目立つのは、主婦の地位の相違である。古風な家庭の主婦の地位は、家婢長である。お臺所の取締である。今樣の家庭に於ては、主婦は必ずしも一家婢長ではない。臺所取締ではない。更に主婦は、一家の財政の取扱者である。來賓饗應の斡旋者である。嘗ては舅姑良人の前には殆んど無人格者であつたものも、今は、却却に相當の待遇と職務とを與へられ、立派な家庭の女王となつたのである。

△留守中の來客

極めて下流と、上流との家庭は我等の問題外に置いて、我國に大多數を占むる、中流の家庭では、主人の活動上主婦を無人格者にして置く事は出來ぬ、例へば、主人の留守中來訪者があるとする、その時その人と主人との關係、――換言すれば家とその來訪者との關係――を主婦が知らずに居れば、其應對を如何にしてよいか、主婦には譯らぬことになる、留守なればとて歸してよい人もあらう、行先を知らして電話で話をして貰ふべき人もあらう、留守ながらとに角座敷へ通さねばならぬ人もあらう。其時其人に對する挨拶の仕方が程よく出來て居なんだ爲、或は來客の氣を痛める人もあらう、主人が歸つて來て、『なぜその樣な取扱をした』と叱りつけることなどあるけれど、罪は、何も知らぬ主婦にあるのでなく、主婦にそのもてなし振りを知らせて置かなんだ主人にあるのである。しかしそれも一一主人の指圖を待たず、臨機の處置をせねばならぬ場

合もあるが、それは機敏なる主婦の綿密なる注意を要するのである。

△主客の意を諒する呼吸

私共の様に、謂はゞ客商賣の家では、殊に主婦の地位を認め、又主婦の機轉を頼りとする場合が多い。手近な例で云へば、自分が來客と談話中食事時になつたとする、此來客には、どれ程の食膳を供してよいかと判斷するのは、來賓接待掛としての主婦の重大なる役目である、かゝる際主人がそつと座敷をぬけて之々の仕度をしろと命ずることがある。若し來客にそれとさとられた時は、主人はおもはゆく、來客も亦何となくおちついて居られぬ様になる。是等は甚だ拙い待遇法と云はねばならぬ。之に反して、主婦がよくこの趣旨を呑み込み、主人の思ふ處と同じ程の仕度をして、靜に客膳を具へる、その時の其場の體裁よさ。主人も客も、まづいものもおいしくたべられるものである。

△技倆を現はすが第一

兎に角我々の家庭では、どうしても主婦の内助が必要である。それには主婦に人格と地位とを與へ、家政の運用には、唯一の幇助者として主婦を迎へねばならぬ。之を古風の家庭から見ると嬶天下とも見られ、雌鶏晨に鳴くと云はれるかもしれぬ。しかし主婦の地位を高めて、その弊に斃れる様の主人ならば、それは其人の才格の足らぬのであつて、かう云ふ人には、如何に善美なる家憲と雖も何等の役に立たぬものである。更に婦人の側より云へば、女子解放論中の一部として、婦人優遇論を唱へる前に先づ主婦としての伎倆を現實に主人にあらはして見せるやうにせねばならぬ。而して細心精緻なる注意を家政に盡くしたならば、自ら、優遇と云ふ事實もあらはれて來る理である。私は婦人問題解決の初歩として家庭に於ける婦人の活動を先づ以つて要求したいと思つて居る。



日本婦人の聲價

自分は日英博覽會内の婦人部の受持であつて、日本婦人の嗜好、藝術、才能等を歐洲人に紹介する役目を帶びたので、先づ婦人の裝飾品を始めとし、樂器やら、茶の湯活花や、婚禮の道具等を美々しく並べ立てゝ、大に日本婦人の爲に氣を吐いたが、婚禮と聽くと飛び立つ程の感興を持つ歐洲婦人は、眞ッ先に婚禮道具の前へ詰めかけて來て、白木の三寶や島臺の類で作つた鶴などを何時までも見飽きる色もなく眺め入るのであつた。

之に次で大評判なのは雛道具一式、之は其日に悉く賣切れとなつた。婚禮の道具一式は唯一揃りしかなかつたので、之ばかりは如何に所望されても賣る事が出來ず、遂に閉會の最終日まで飾て置く約束で某貴婦人に賣り渡した。茶の湯活花の如きも餘程倫敦婦人の興味を刺戟したものと見え、其方式を會得したいと云ふ希望者が續々出て來たので、遂に掛員が之に教授することゝなつたが、大に日本婦人の高尚優雅なる趣味を了解せしめた。

併し文藝、學術方面の日本婦人を説明するには、所詮、筆と口で説明するより外に法がないので、紫式部の源氏物語を始め、伊勢物語から、其の他女流の手になつた著作物を陳列して、新聞に雜誌に或は來訪の新聞記者に説明してやつた。源氏物語りの如き、沙翁より二三世紀も前に出來た女流の大著作の事とて、過去の日本婦人の侮り難きを會得させた。

續いて現代の女流教育家、其經營に成る女學校の内容、貴婦人連の慈善事業、女流美術家の繪畫、各時代の婦人の風俗等を筆と口と畫とを以て殘る隈なく、日本婦人の全體を婦人部に於て紹介したのであつた。唯一つ並に不評判であつたのは、鼈甲の櫛簪笄であつた。之は日本婦人の黒い髮には似合ふも、西洋婦人の所謂金髮には相應せず、之丈は彼等の眼に止らなかつた。(秋元春朝氏)

無病長命の新説

リツチャードソン博士が稀老境に臨んだ者の爲めに擧げた養生法と云ふのは左の通りてある。

第一、牛乳を本食として輕い滋養に富める食料をば氣候に應じて加減して攝取する事、

第二、分量を適度にして一日に四回食事をなし、其中の一回は就眠前極く少量を取る事、

第三、暖く輕い衣服を着けて身體に四季同一の温度を保たしむる事、

第四、適當の運動を行つて常に精神を活潑に愉快に保つ事、

第五、常に世間の出來事に對し興味を持ちて老の至るを知らざるが如くこれが相當の盡瘁と愉快とを分つ事、

第六、十分熟睡して冬季と雖も其寢室の温度を華氏六十度以下ならしめざる樣注意する

事、

第七、熱情と激昂と贅澤とを避くる事、

それから養生法に就ては從來或者は菜食を主張し、他の者は肉食の効を說き、又或は禁酒禁煙の必要を唱道して居るけれど、博士の養生訓の中にも見える樣に、凡ての事を程々にする勞作にも遊戯にも又た飮食睡眠にも節制と云ふ事が最も大切である。要するに長命の秘訣は各人の節制如何にある事で、何々主義とか云ふ樣な一律では効能が無いのである。

夫れから職業即ち各人の境遇に因つて其人の生命に長短を來すと云ふ事は、從來屢々種々の統計等に示された事であるが、伯林のカスペルから發行した左の表は人間の平均生命が職業に因つて如何に相違するかと云ふ事を示して居る點に於て一寸興味がある。

百人中七十歲以上に達せし者

神學者	四十二人
農業者及び林業者	四十人
監督者	三十五人
商人及び工業者	三十五人
軍人	三十二人
下副官	三十二人
辯護士	二十九人
藝術家	二十八人
訓導及び教授	二十七人
醫師	二十四人

六十五年の久しい間同し場所で說教したと云ふ極めて尊敬す可き或老宣教師が長命の秘訣に就て尋ねられた時の答に曰く、「早く起きよ、節制の生活をせよ、業務に精勵せよ、而して、常に快活なれ」と。又た百十一歲の長壽を保つた人が同一の質問に答へた言葉はかうである。「私は常に他人に親切丁寧であつた、私は未だ曾て何人とも喧嘩をした事はない、私は唯だ飢渇を醫するだけに飮食した、而して私は些とも怠けたことがない」。

日本では四十一歲を初老などゝ云ふ樣であるが、西洋では槪して女は五十三歲頃から男は六十歲頃から老衰の期に入ると云はれて居る。夫れから日本では古來人生五十などゝ云つて居るが、西洋では七十歲を人間の定命と信じて居る樣である。所が故のフアラデー教授は百歲が定命であると云ふ說を主張した。而して生物の一代は生長の時を標準として割出す事が出來ると信じて居た。其の理由は駱駝は八歲で生長し終り、馬は五歲、獅子は四歲、犬は二歲、兎は一歲にて夫れ〳〵生長し終るのである。此等に五倍したものが各動物の定命であると云ふのである。所が人間は二十歲になつて生長し終るから、乃で百歲が定命であると云ふのである。兎に角人間は病氣にさへ罹らなければ大概八十歲乃至百歲の壽命を保つ事が出來るのであるから、是に於てか攝生して疾病を豫防する事が一番大切といふ事に歸着する。

寫眞に堪能なる華冑才媛

伯爵小笠原長幹氏の令妹百子孃は、芳紀十六歲、容姿端麗、樺、櫻の垣を透かして匂やぐ風情なか〳〵に床しき極みなり。際高き育ちなれば、性も上品に才あり。目下華族女學校中等科に通ひ、成績いみじき才媛と聞ゆ。兄伯爵

の君の薫陶なれば、藝能一切に通りて趣味汎く、且つ英邁なる體育主義に養はれたる事とて、遠足旅行などを好き、深窓に成長られし姫とは思へぬ程の闊達なり。

兄伯爵の夫人は、寫眞術堪能にて去月上野の寫眞展覧會に二等賞を得たるより、左らでも之に多大の嗜好を有し居たる百子孃も、愈々斯の趣味を深うし、伯爵夫妻と共に旅行の砌り或は學校の旅行等の際には、必らずカメラを携ふるを忘れず、各所の名所風景を撮影し、自から纎手を動かして、美しきアルバムの數増し行くを此上無き樂しみとして、獨り微笑を禁じ敢へざるも薦たし。寫眞の技能も侮りがたく、往往商賈人をして舌を捲かしむと云ふ。

一昨年の暑中休暇には、第二の兄實氏と共に、家庭教師同伴にて朝鮮宮内府に奉仕せる姉君、津輕伯爵夫人照子を訪はんと志し、門司より汽船にて玄海灘の怒濤を乘切り、朝鮮京城まで赴きたる途上、好風景に會する毎にレンズに納め居たるが、京城に到着の後一日百子孃は京城招魂社を觀覽し、靜かに散歩み南大門の方へ移さんとしたる折も折、其の當時京城附近に暴徒蜂起して擾亂を極め居りし最中にて、此時恰も京城燒打を企圖せる暴徒の一群南大門を通過せんとして端無く日本護衛兵と衝突し、其の傍杖を受けたる百子孃は、身已に危からんとして辛くも逃がれ得たりと云ふ。

又今年の夏從者一人を伴れたるのみにて、草鞋姿も甲斐々々しく、金剛杖を突立てゝ、甲州吉田口より風雨を犯して富士の八合目まで攀ち登りしに、暴風は雨を拋つて雷鳴頻りに轟き渡り、登山の同行者何れも色を失し、祈祷の聲を僅かに細く續け居る折柄、電光一閃天地も崩るゝばかりの震動と共に、岩屋眞近く落雷したるが、孃は眉も顰めず、自若として立ち居たりしとは、雄々しさの程偲ばれて餘りあり。

歐洲王侯の豪奢

歐洲の王侯にしてその大部分の時日を巴里に費さゞるは殆んど稀なり。實に巴里は位を逐はれたる國王と身を扮せる國王とを以て充滿せり而して苟くも巴里に名を唄はるゝ程の女優にして、其嘆賞者の中に國王、太公若しくは親王を有せざるはなく、若し之を有せざるものありとせば、其は殆んど尊敬を値せざるものと云ふとも決して過言に非ざるなり。彼の葡萄牙王マヌエルの沒落と女優ガビー・デスリーが密接の關係あることは歐洲元首の巴里に於ける豪奢の如何を偲ぶべき好材料の一つなり。

女優の多くは其嘆賞者より贈られたる眞珠とダイアモンドを以て燦たる光輝を放ちつゝあるが、但し彼等は皆極めて貧寒なる御者農夫若しくは勞働者の娘なる事を忘るべからず。葡萄牙廢王の寵を運うしたる、デスリーの如きも亦た常に泥醉せし御者の娘なり。

アルレットドルジエール孃は殊に露國のボーリス太公の嘆賞を被れる女優なり。聞く所に據れば、日露戰爭の大原因を爲せしは實に太公の贅澤と貪婪心とに基くとか。即ち太公と其父ウラヂミール太公と弟キリール太公とは、殆んど無代價を以て滿洲に起業權を獲得したる結果として、更に滿洲の併呑を斷行せしめたるなりと言ふものあり。斯くて戰爭の勃發するや公

は露國傭兵の爲めに醵出したる金を懐にし、其大部分は巴里の女優の爲めに費されたりと聞ゆ。ドルウエールは下等なる巴里の割烹店に給仕を勤めたる者の娘にして、十二歳の時初めて舞臺に上り、今や大公の偶像物となれり。其最も名を擧げしは如何はしき出し物に現はれたる時なりとか。

次にドンヨリとせる眼眸のいと愛らしく美妙なる腕を現せるリユヴーランテルム孃は、殊に暹羅王の嘆賞を擅にすといふ。聞く所に據れば、王の如く巴里に多くの時日を潰すものは各國元首中其比を見ざる所にして、國民は此程之に對し非難の聲を擧げたるも、王は平然一笑に付して、廿萬弗をポケツトにし、直ちに巴里に現はれ、其一部分を以てランテルムの爲めに眞珠製の頸環を購へりとか。ランテルムは常に憂鬱の色を帶べるを以て名あり。或は自己の罪を悔いつゝあるか、將た二十萬弗の一部分の尚ほ王のポケツトに殘れるを悲みつゝあるものか。彼女は未だ嘗て微笑を漏したることなしと云ふ。

白耳義先王の嘆賞したるは、マルトエツリーなり。其室内の什器は、悉く是れ金に非ざれば銀なり。然かも數日にして忽ち之に飽き、飽けば容赦もなく打捨てゝ又新なるものを購はしむ。彼女は素と卑賤なる市場女の娘にして、幼時キヤベツの上に眠れることも少なからずと。

マヌエルをデスリーに紹介したるは西班牙王なりとの說あり。并は王がモナデルザなる巴里の一美人に太く興味を感ずるの餘り、マヌエル友王の爲めに美人を紹介するを躊躇せざりしなりとか。デルザは今を去る五年前までは小かなる帽子屋に奉公して、一週間僅に三弗の給金を受け、僅々三錢の馬車代を儉けんが爲めに、雨の日も雪の日もテク〳〵と家路を辿る憐れの一少女なりき。然るに此程巴里なる一新聞紙が彼の御機嫌を取らんとて、「昨日記者は美しきモナデルザ孃がブールヴアールを漫歩せるを見るの愉快を得たり」と記すや、彼女は怫然として「無禮者！　彼は我が未だ嘗て數石に足を觸れしことなきを知らざるか」と言ひたりとか。健忘も亦甚だしからずや。但し目下は極めて贅澤なる自動車六臺を有せり。（米國新聞）

精神の愉快

昔より病は氣から起ると云ひますが、何故に怒つたり怖れたり又憂ひたり悲しんだりする事が健康に害があるかと申すと、斯る感情が大腦に起る時は、其反射作用で血行、消化、分泌排泄等の機能が障害せらるゝ爲めである。夫であるから毎日精神を愉快に持つ事が必要なので、精神が愉快であれば能く肉體との調和が行はれます。例へば久しく會はなかつた友人と一緒に晩餐でもすると非常に愉快で餘計にも喰べられるし、又喰べても別に身體に障らない。之に引換へ腹の立つ時には飯を口にするのも厭で、サウいふ時には喰べても消化しない。其樣な譯であるから常に精神を愉快に持つて居る事は衛生上最も希望する所で、彼の「笑ふ門には福來る」「泣面に蜂」と云ふ諺は、實に能く生理學上の狀態を言現はして居ます。

併し此愉快にも一時的と永久的とがある。例

へば贅澤をして遊んで居るのは軈て夫れ以上の苦痛が來るのであるから、一時的の愉快で、夫れでは精神にも身體にも宜しくないのですから、何時迄も減りの立たない永久的の愉快でなければなりません。彼の金錢を濫費して遊蕩に耽けるが如きは、決して眞の愉快とは言はれないのです。

夫ですから愉快を得やうとするには滿足する事が一大要件で、平田篤胤先生も「差濫したる望、强ひたることは心して避けよ」と云はれた如く分に安んじて其場々々に滿足するのが最も肝要です。御製にも

世の中は貴き賤しき種々に身を盡すこそ務めなりけれ

とあつて夫に違ひありません。百姓が終日鍬を持つて働くは政事家が政事を執ると同じ價を持つて居り、大工が日々鉋を掛けて居るのは、那翁が歐洲を征服したと同じ價を持て居るので吾々は常に斯う云ふ事を觀念しなければならぬと思ひます。(醫學博士三木榮二氏)

珍重される七面鳥

學術的に謂ふと、七面鳥は鶉鷄類で、種類には野生、カムプライチ、青銅色、白色などいろいろある。産地は南亞米利加が本家で、改めて云ふ迄も無く、時に應じて面色を白、淡青藍青、紫、紅などに變へる處から七面鳥といふ名が出たのである。青物を好むことゝ、氣性の荒いことゝは、遙かに他鳥以上で、又た其肉の風味は柔らかで、甘味があつて、而も脂肪に富んで居て、高等な西洋料理などに能く使はれる。各國のホテルでは珍客入來の際常に此肉を食膳に供することになつて居るが、相場は當時百目に付三十五錢位のものである。

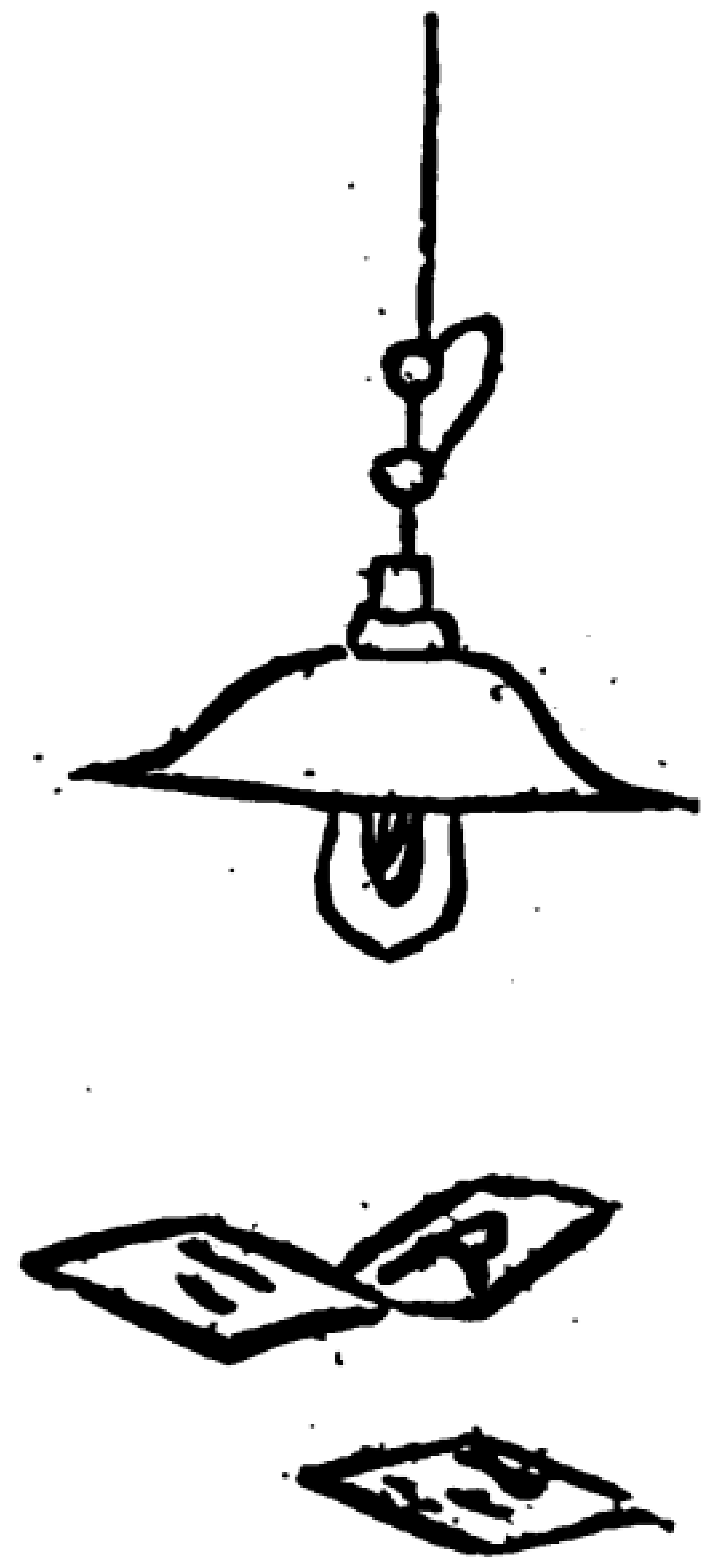
或人の實驗に依ると、此の鳥の雄が例の腰部の毛を逆立たり、尾を團扇のやうに廣げたり、乃至面で七變化の藝當を演じるのは、多く交尾期の時代で、偖て愈よ卵を產むでから孵化するまでの日數が、二十七日間である。そして孵化した雛は頗ぶる體が薄弱で、殊に雨を厭ふこと一方ならず、微雨位に遭ても斃れることが珍らしくない。羽毛は裝飾用となり、肉は食道樂を喜ばす許りで無く、西洋諸國では基督降誕祭の時、此鳥を形の儘で犧牲として、神前に供する處から、非常に珍重されて居る。

慈善事業の困難

今日は實力さへあれば、男女を問はず、それぞれ爲すべき仕事は多いのでございます。併し慈善とか、傳道とか云ふ事業になりますと、兎角有望の人はそれに應じないと云ふ傾きがあります。眞面目な基督信者の母などまでが、娘を戒めて、將來何になつても決して親は干渉しないが、傳道師にだけはなるなと云つて育てゝ居ります。又父が其子を訓へるのにも、其方の腕次第で何なりとも好きな事業をせよ、併し慈善事業に身を委ねる事だけは許さない、と云つて居る例が澤山にあります。傳道にせよ、慈善にせよ、之に從事して一般の世を利し、人を益することが出來れば、左樣させるのが基督信者たる親の取るべき務めでありますが、始終斯ういふ惡い傾きが見えます。親がさう云ふ風ですから、富人も折角其方面の興味が解りかけましても、モウ少し生活の安樂な、世間の氣受の好い職業に赴かうとします。さう云ふ風ですから、慈善及び傳道事業の働きの上に困難を感ずることは一通りではありませぬ。(山室軍平氏)

新徒然草（その二）

磯千鳥

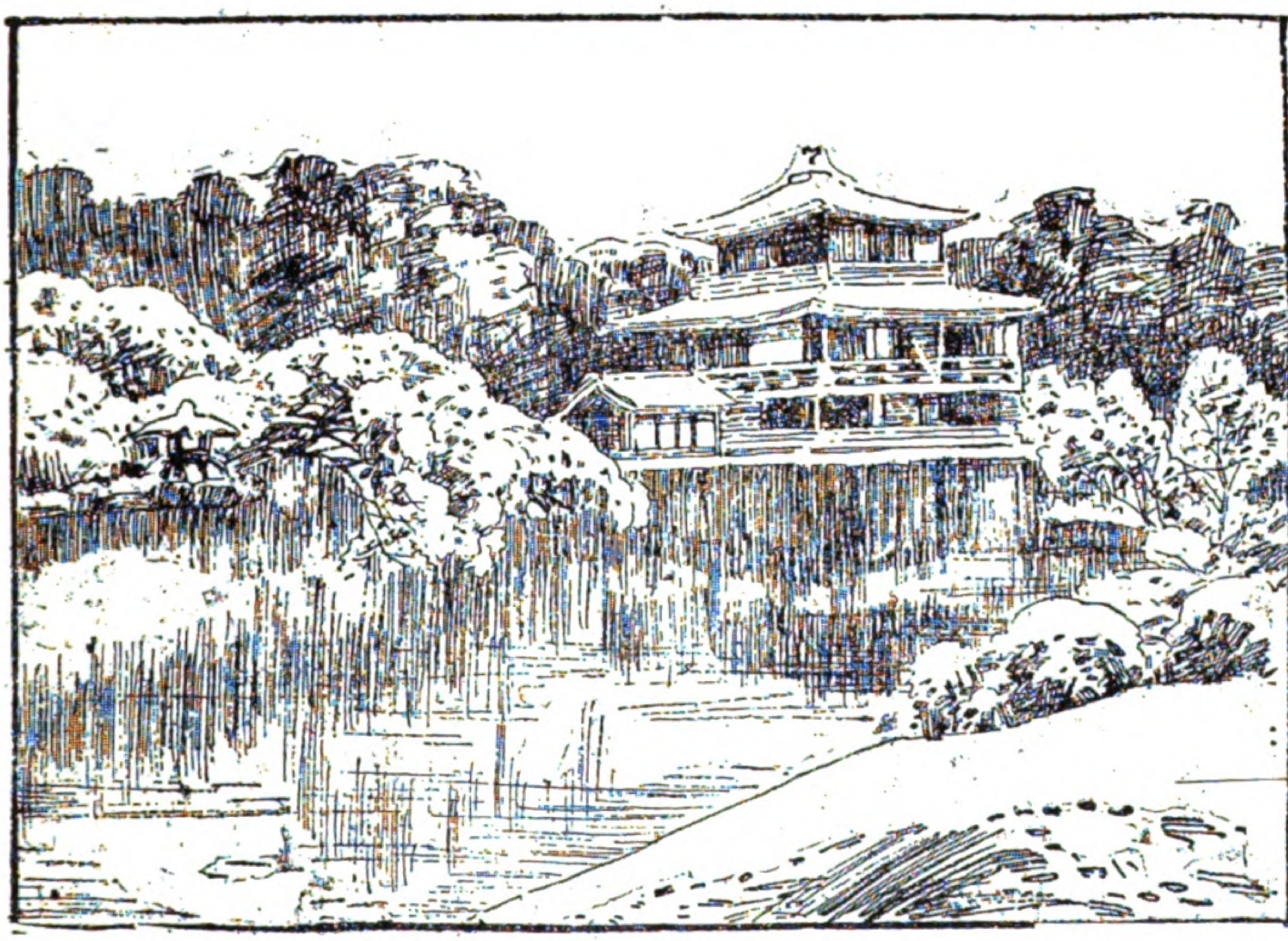


いまだ十六七の頃にて侍りき。幼きより寢行儀あしく枕いたくはづす癖ありて宵に結ひし髪をも、たゞ唐獅子の樣にし侍るに、常に心嚴しき母より叱られ、我身にても恥しき事に思ひなせど、いかゞせん、寢てある間の事にしあればせん術もなし。さるに、ふとある人の、「寢る際に枕のほとりに糠多く撒き置かば、夢寐の中にも我頭汚さじと心張り、枕はづさじと申してければ、こはよき事聞きたりと打悦び、其夜は枕の下に紙敷き、糠夥しう撒き心に念じて寢たり。さるに朝となりて我襟元に、怪しう紙の觸るゝに心附きて眼覚きぬれば、我頭は枕の上にあらず。頰も顏も糠にまみれ、剩へ油にてときし髪の毛の間々に粉の入りてければ、せん方なく母に告げしに、餘りの事に叱りもならず、「如何なる事ぞ」とて雪降る朝の庭に、盥に湯汲み髪洗ふに、兄も姉も側に立ち腹かゝへて打笑ふ。たまたま母の櫛すく手の强ければ「痛し」と言ふに、「かゝる事して痛しとは、よくも言ひたる事よ」とて尚も强くしたるには、げに涙いづる心地しけめ。さても狂暴の枕はづしをぞしてける。

なべて女は心榮しほらしう、言ひ傳へし習慣などをも、心には淺ましと思ひつゝも、尙破り難げにしたるこそよけれ。幼き折、母等の、夜爪切らば親の死目に逢はじと言ひきかせたる事の、廿過ぎたる今も、夜爪切るは何となく罪の心地したる。あるは澤庵三切つくるは愼むべき事に思ひなしたる等、迷信と言はゞ言へ、皆優しき女の心也。さるを今迄の仕來としあらば何にても善らぬ事に思ひなし、老人等の神佛祀るをば「由

なき迷信也。世の中に神等はなき物なり」といひ、其の人の亡き後は朝毎の供物もせず、佛壇たゞ塵まみれにし、聽て其事誇らしげに人にも語り　己は天晴の新婦人と思ひ居たるはかたはらいたし。

屏風、襖の、よし價は貴くとも、きら〳〵しう賤しうあるは軸物等の怪しげなるを床にかけたるは先宿の主のつたなさを覺ゆる也。大方持てる調度見て心劣せらるゝ事多かり、鐵瓶の蓋に塵溜めたる。新聞の繪附錄を由々しき枠に入れてかゝげたる。花瓶の花の枯々になりしを其儘にしたる。吐月峰の口元迄充りゐたる。



雲り金閣寺

あるは、さのみよき物を持つにもあらぬに、損せざらむ爲とて、醜き様に物被せて使ひたる。（此癖は女のみと思ひ侍りしに男もすめり、自轉車を物々しう布にて包みたるがあり）いづれも心劣りす。趣味ある女はさる賤しき事やはする。萬事身分にかなひし物、淸げにとり揃へ、障子の穴繕ふにも花の形にし、箱一つ張るにも石版繪などは用ひたらず。

今は亡き父の教へ侍り。さる物よく知りたる學者の無學の男に教へて曰ひけるは「人は堪忍が實也。堪忍の二字よく覺えて何事をもせよ」と申しけるが、無學の男「そはいと心得ぬ事也、堪忍はかんにんの四字にて侍る物を」と云ふ。否とよ、堪忍は堪忍の二字也。四字とはあるべからずと申せど、男いつかな聞きいれず、いたく、あらがひけるが、終には學者も腹立て、其無學の由、口汚く罵りけるが、男は「いか程嘲り給ふとも露怒り申さじ。我身は堪忍の四字を守り侍れば」と云ひしとなむ。さても誠にありし話にや。怪し。

人の顏は見馴るゝ儘に、其心つきなさの消えゆくものなれ。初目には、さても珍しき面したる人哉と思ひし人も再三度遇ひて親しく言葉かはしぬれば、不思議や、その面はも前程は醜からず覺ゆる。かくて久しうなる程に、忘れ難う愛嬌ある顏と只管に思ひ入りたるこそ可笑しけれ。世には美しき女房の、そゞろ〳〵しき男持たりとて、いと仲好くしたるを、あるは駿馬乘ニ痴漢ニ駛といひ譏り、もどかしがる折もあるが、いと怪しき事也。誰にもあばたも笑靨と申し侍り。

なべて教育受けし女は、顏容いづことなく引きしまり、取立てゝ美しくはあらずとも心地よし。物の道理も知らず、すく〳〵と生立ちしは、よし美はしくとも眼鼻の邊に空地ある樣覺ゆ。

世の人の心榮は各其姿の異なる樣に異るこそをかしけれ。初て見し折は顏角々しう、恐ろしげなる眼ざし、したるに、愛嬌おくれたる人よと思ひたるが、心いと打とけたるがあり。またさにはあらで、みめ優に慕はしげなる人なれど心榮賤しげなるもあり。

また見ず知らずの人に直に打とけ、半日にして早十年の友の如く、我身の事、我家の事、人に言ふまじき事總て打語り、後にて後悔する人。其外人の持つ物としあらば羨み、我身のは劣れりと思ふ人。

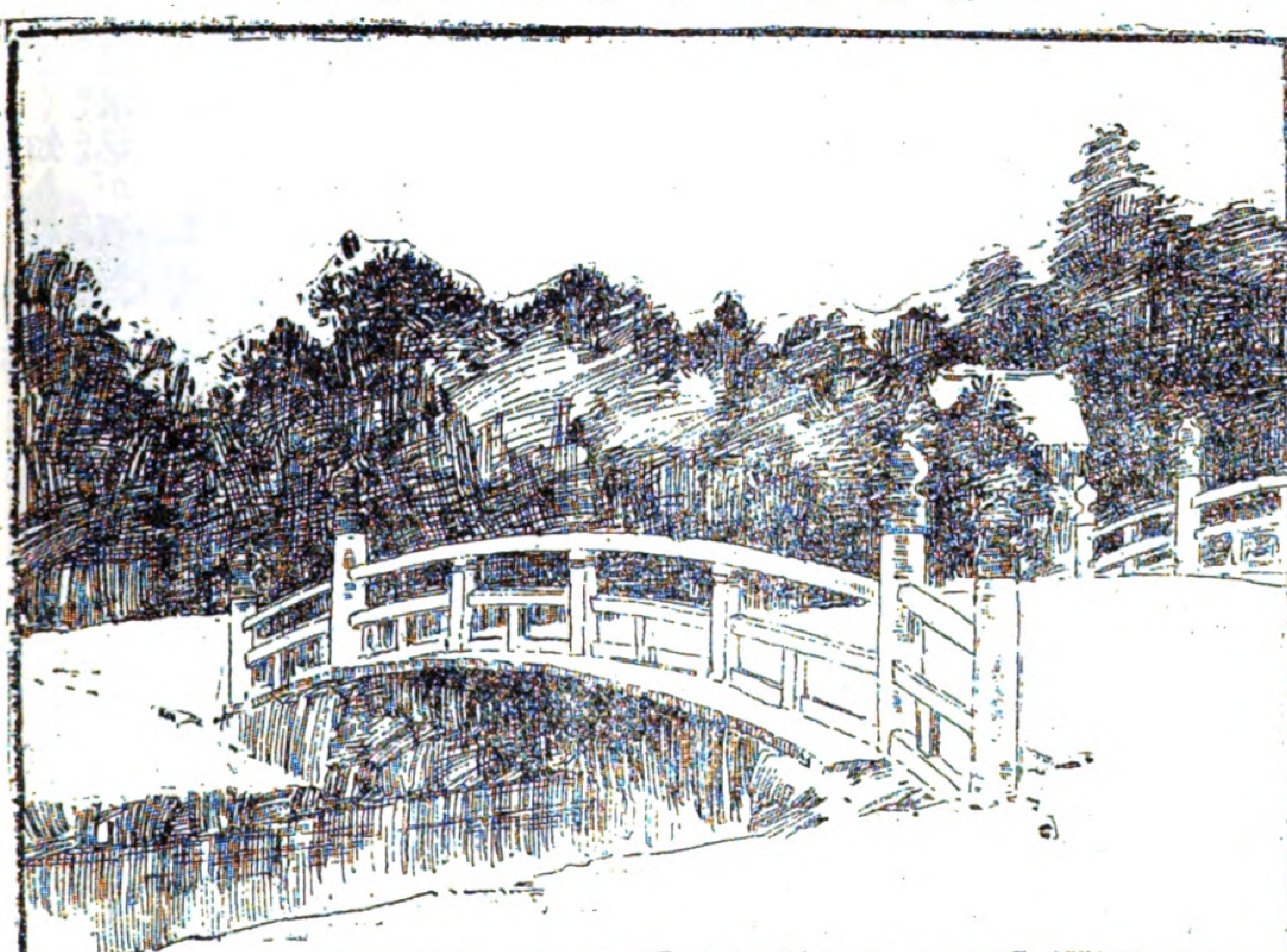
何を見ても其價は幾何ぞと尋ぬる賤しげなる人。他人の物は我物と思ひ、我物は我物と思たる慾深き人。

筆とる業はいと難きものなれ。ふと此事書かむと思ひいでゝ筆とる折もあれど、多くは筆澁り我思の片端

をも書き得ぬも拙し。稀には興にのりて一氣に書き續け我身ながら巧に出來たりと獨り微笑む事もあれど、二日三日經ちて其續書かゝむと、前の反古取り出し讀み返す程に、可笑しき節のいと多く、よくも〳〵かゝる事を書きし物よと、我と我心に愛想つかせ、腹立しさの餘り其紙寸斷々々に引裂き、火にくぶるも物狂はし。かくて一日二日は何となく味氣なう我身は終に筆持つ事は得せぬ者也等思沈むが常なり。

　京大阪の町歩くに「油蟲一升三厘」と張り札したるがあり。さても怪しき生業の道もあるもの哉。かの足早き小蟲を、かくも夥しく、いかにして捕へけむ。何に使ふにや。さしも値の安き事よと思ひ居たるに、程經て人に聞きぬれば油蟲除けの咒なりとかや。

伊勢神宮五十鈴川の神橋



　さても處の習慣知らぬ我身は、雞に喰はすべければとて、危く人遣さむとしたりしを、淺ましき恥かゝで濟みたり。げに處の習慣は知り置くべき事にこそ。

　世に貴く難有げなる物は、黃金の阿彌陀佛。祖

父の頭。「孝道」と申す書。孝は子の親に對する自然の愛情也。孝道ある處には敎へずして有之るべく、敎へて到るは誠の道に非ず。なべて一家の者同志には堅くるしき道などの念なきがよろしく、姑は姑の利を棄て嫁に倚り、嫁は己の利を棄て姑に賴りてこそ一家安らかに治るべけれ。

人には折に觸れて智慧のあらまほしけれ。兩親同志のいみじう仲惡しきを持ちたる子ありしが、日頃幼心にも其事のみ憂ひ煩らひけり。或日例の如く父と母との爭初め、物等投げ合ひ



淺草觀音仲見世

けるが、子供はつと二人の側に行き、苦しげに胸押へ眼白黑にし、頰へ唸く樣したるに、父も母も打驚きて爭止め、如何にしつるしつると問ふ。子は起き直りて、その虛言なる由告げ、たゞ兩親の怒なだめむ爲にし侍りと申しければ、兩親も我所行に恥ぢ、再び口論せざりけり。

また、さる男の酒飲めば誰彼にとなく爭を吹かけ、こあるは妻子に無理難題言ふがあり。ある夜したゝか醉ひて歸り來て、其處へ打倒れ樣、今一本燗せよと息まくに、「最早酒あらず」と妻

の答ふれば「酒あるに、無しと言ふにぞあらむ。疾く出せ。疾く出せ。それとも醉ひたりと見て此己を欺す氣か。我身は醉ひたらず。此通り。此通り」と胸たゝくに「誠に無きにて侍り」と言へどいつかな聽き入れず。」されぱよし、されば無き酒は飮まし、其代りに：：とよろ〳〵蹣跚きつゝ茶の間にゆき、瓶子の空なるを取り來て…是に酒一升買ひ來よ、買ひ來ずは承知せじ」と打ちもすまじき有樣なるに、傍にありし娘の「妾が參らむ」と、素直に瓶子とりて出行きけり。如何にせしと云ふに、先酒屋に行きて、「此瓶子に酒給はれと申す、軈て酒屋の錢をと言ふに、元より持つ筈なければ、暫し貸し給はれと言ひ論しが、暫しありて「さらばせん方なし、此酒返し侍らむとて返しけり。かくて此瓶子父に渡して、一升の酒は此處にと言へば、娘の頓智に父の怒も解け、よし〳〵と言ひて寢たりとなむ。

此等いづれも智慧の賜也、されど我々は、事に當りて咄嗟に智慧浮ばず、後にて「かの折はかくすべかりし物を」と思ひ悔むのみ。諺に愚者の後智慧と申せば、我々は愚者にや、さしたる愚者とも思はねど。

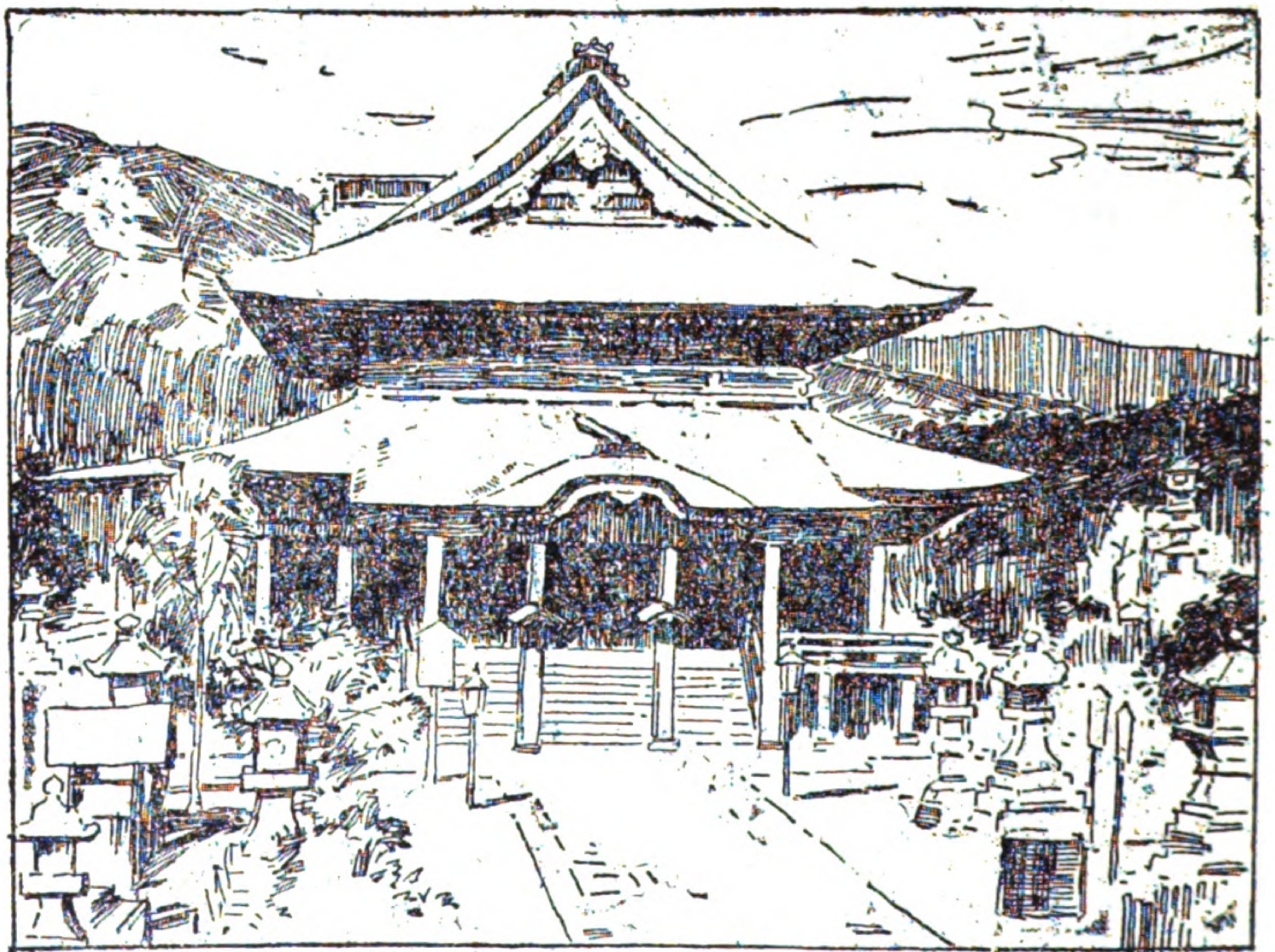
幼より昔噺よみ習ひたる故にや、今の世には奇しうあるまじき事も、古にはありし樣思ふもをかし。さればさる寺等に詣りて、是は昔强力なる誰々の力試さむとて押せし指の痕也とて堅き木に拳も入りなむ程の穴あきたるを見ても、さして怪しとも思はず。

三井寺の境内に辨慶の釣鐘と云ふがあり、昔俵藤太秀郷が、三上山を七卷半まきし蜈蚣退治して、龍神よりもらひ受けし物也とぞ。さゝやかなる金遣せば、洟垂らせたる爺の薄暗き鐘堂に案内し、物々しき聲ふり立て、由來誠しやかに語りたるもをかし。

さても、そは誠の話にや、あれなる三上山を七卷半する蜈蚣とは大なる蜈蚣よと戯れ言へば、爺「否とよ、七卷半と申しても眞はいとさゝやかなる物にて侍りつらむ。今の世にても、二尺に足らぬ布もて、はち卷すと申せば七卷半の、それより短かりしは必定にこそ、と言ひしこそいみしき洒落なりしか。されど程過ぎて

人に此秀句の事語りしに、「怪し、我行きし折も同じ樣に洒落たり」と云ふに、さてはかの爺、來る人毎に同じ洒落言ひたるよと切角の興の冷めたるも凄まじかりき。

今時の敎育受けし女はいと忌々し。老人のする事としあれば、時勢後れと惡し樣に言ひなすよ。食事の折など女の兒の足出して坐るに祖母などの行儀あしと云ひ嗜なむれば、『あな子供には體育が肝要也。坐らせであれ』と子供服と言ふもの着せ足出せて坐らせたり。されば我身の坐り樣もいと



名刹善光寺

奇しう、物々しき兩足只龜の樣に出したる。さてはミシンの廣告見ては直に取寄せ、稽古するとてありとあらゆる端布皆縫ひつけて物の用に立たぬ樣したる。あるは夫婦して菓子等物する折には子供には齒にあしければとて與へであるに、偶祖母などの遣れば、切角よき習慣つけし子を惡樣にし給ふとて責む。されば子供は、菓子は大人のみ食べる物と思るも哀也、なべて今時の若き男の我妻呼ぶに、樣づけにしたるは心得ず。されば女

はいとゞ思ひあがり姑の前にても我夫に友達の樣なる物言し、とつ國の言葉混へて話したる。とさる媼の申しゝか。

冬の朝のいみじう寒きに衾の中に深くうづもれたるは魂も溶けなむ心地す。角枕の高くて肩の邊のともすれば隙あくを搔き合せつゝ、幾時ならむと眼見開きても、雨戸洩る明方の色も無ければ、打安じ、今日すべき事彼是と思運らす。かゝる折ふし門邊過ぎ行く車の音聞きつけ、「何處へ行く人なるらむ、嘸寒かりなむ等思ひつゝ一入衾の襟深う被るに轍の響は遠く／＼消えゆきて、また我思に耽りたるもをかし。軈て此處彼處に鷄の聲聞え、いつか雨戸より微白き光のさすに、もはや起きずばと心には思へど床出る事のつらく、斯くて掛時計の六時打ちても、かの時計は廿分進ませたればと思ひ、ぢと臥したるもいみじ。

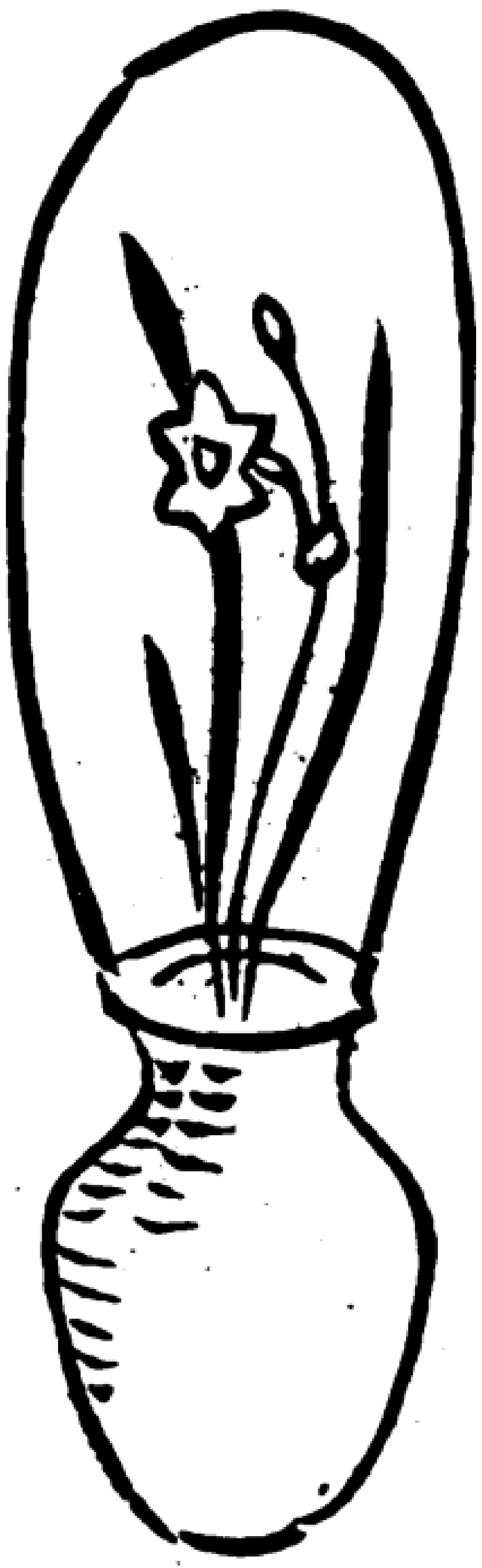
冬の朝のみ女はつらき物としみ／＼思ふ。男は火も出來、掃除も濟みたる上にて漸く起き出るよ。中にも兄等と申す者は、如何程寒る物にや、八時過ぎても大鼾かきて打ふしたり。學校へ行く頃も近きぬれば、肩ゆすぶりて起せど、返事ばかりはすれど、眼もあけず。せん方なく雨戸繰り、寢顏の上に日のさす樣すれば流石まぶしきにや、くす／＼と衾の中へと、もぐり込み海老の樣になりて寢たり。かゝれば今日は休む積にやと思ふに、程經て起き出で「遲れたり。遲れたり。などて起さゞりつる」と妹叱り、我身は汁も啜らず、靴引きかけて走り行くよ。

△蒔いて取る

世には濡手で粟の攫取を望むもの多し、二宮尊徳翁、かゝる輩を戒めて曰ふ、

遠きを謀る者は富み、近きを圖る者は貧す、それ遠きを謀る者は、百年の爲めに松杉の苗を植う、まして春植ゑて、秋實る物に於てをや、故に富裕なり。然るに近きを圖る者は、春植ゑて秋實るものをも、猶遠しとして植ゑず、只だ眼前の利に迷ふて蒔ずして取り植ゑずして刈り取る事のみを思ふ、故に貧窮す、それ蒔かずして刈るものは眼前利あるが如しと雖も、一度取る時は二度刈ることを得ず、蒔いて取り植ゑて刈る者は、年々歲々盡くる事なし。故に無盡藏なり。と

翁の敎誡、まことに然り、人は蒔いて取り、植ゑて刈るの心掛こそ肝要なれ。



形身の日記

かもめ

芳子さん――

未だ裏若い、青春の血の湧き返る胸を抱いて、永い永い眠に就かれたと聞いた時には、私は夢かと思ひました。

芳子さんが辿られた人生の旅！ 夫れは誠に短いものでした。「私の人生は灰色です」これは、度々芳子さんのお手紙で見たお言語です。私はこの言語を聞く度に、哀愁の雲の胸に漲ぎるを覺えました。そして泣きました。

その灰色の人生も半ばにして終つたのです。私は芳子さんの短かつた生――こんな事をしみ〴〵と考へました。で、私の手に遺つた日記の一節を發表することにしました。

……………………

○月○日

野には弱々しいコスモスの花が咲いた。淡紅や紫の色が、澄み切つた秋の空氣の中に匂ふ。暗い林の中では、つく〴〵ほうしが悲しい急しい聲で鳴く――

斯うして私の村の秋は次第に老いて行つた。胸の痛みは二三日來、稍衰へた。しかし死の前に靜の狀態のあることを思ふと、軈て來る冷たい運命の手の悲しさに胸を衝かれる。

二里の路を小學校へ通ふのは隨分つらい。けれども出勤してる間は暗い宅のことを幾分か忘れる。で、身體は惡くても家に居るよりは增しだ。

商用で町へ出た兄は今日も歸つて來ない。嫂さんは

「何うしたのだらう。…氣樂なのにも程がある。」

と言つては、四つに爲る君ちやんを叱られる

町の欄のある二階、そこに醉つた兄の姿が横つてる

やうに、私の頭に映る。——

○月○日

藥の瓶を片手にして、學校の門をくゞる。二十分程遲刻して居た。

教室の校長さんが窓越しに、私の姿を見て

「あゝ……お惡いですか。」

「いゝえ。別に變つたこともございませんが——つい遲刻して濟みません。」

「夫れなら結構です。」

校長さんは夫れつきりで、教壇の方へ行かれる。修身の時間だ。古びた尊德翁の繪が掛つてる。

近頃の校長さんの態度、不快な印象を私の頭に刻む語勢——弱い私の胸にピリ〳〵と反響することがある。

授業が終ると、村山さん、木村さん、友田さんの三人は萩寺まで散歩にと言つて、連立つて出られた。路々快活に色々な話をしては、賑かに笑はれる。私にもあの健康、若々しい心が貰しい——駐在所の前でこの一行と別れた。私は午後の陽の輝く灰色の路を家に急いだ。

○月○日

歸途に山田へ寄つた。伯母さんがたつたお一人。

「少しは好いか。」と私の顏をまじ〳〵と見られる。

「變つたことはありませんの。胸の痛は少しはとれましたか。」

私がしみ〴〵と心の悶えを訴へるのはこの伯母一人だ。

「痛みが一寸でも退れたら好いよ。しかし注意しないと寒く爲るからね。」

「どうせ、全快る見込は……。」とつい此樣弱い言語が出た。

「お前も不幸だ。兄があつても彼樣だから。」

伯母さんは大きな柿を出された。私は甘い汁に渇いた喉をうるほした。

○月○日

肋膜炎だと言つて居た醫者は「要心しないと肺へ來

ろかも知れませんよ。」とおつしやる。

私は覺悟は規めて居たもの〻、「死」の宣告を受けた心地がした。

○月○日

左の肺の痛疼が烈しい。喉が無暗に渇く。

醫者は飲み難い可厭な藥を下さる。

斯うした間にも村の秋は一日々々と變つて行つた。

黄葉した柿の葉は漸々に紅く爲づて、殆んど毎日のやうに濃い濃い霧が降りる。家々では收穫に忙しく、朝早くから野には鄙びた歌が聞えた。老年から子供までが田の間に圓く爲つて、午餐を喰べる。人々の顔には淡い悦びの色が動いた——四周が明く賑はしく爲ると、私の家の空氣は、益々暗く重く爲つた。

近在の行商に出る兄は「斯樣不景氣ぢや年も送れない」と呟いた。

夜、何とも言へぬ哀れづぽい聲で蟲が泣いた。私は早くから床に横つた。不圖、嫂さんの聲が、うと〳〵としてる私



の耳を刺した。『――あの人の病氣も駄目ですよ。此頃は酷く咳き込むんですもの。ぱつたりと床に就いたら夫れつきり……。』

私の神經は俄かに興奮した。總身が耳だつ。『……』兄は默つて居た。

嫂さんは未だ色々なことを言つてる樣子だつた。一家が寢靜まつても、私の胸は何時までも波立つた。不安と沈愁。――

私は遂々寢むらずに夜を明した。何度となく冷たい涙が頬を傳ふた。

○月○日

青木さん――若い男の先生――が近々に結婚しなさると言ふことを聞いた。

不圖、四五日前に野菊を貰つた事を思ひ出した。私が青木さんの敎室の前を通ると、青木さんは白い野菊を花瓶に生けて居らした。

『好い花！　野菊？。』私は生徒に尋ねた。

『えゝ……野菊です。美しいでせう。』

すると青木さんは振返つて、

『少しお別けしませう。』と五六本を私に下さる。私は夫れを敎室に挿して置いた。三日たつても四日たつても花は萎まなかつた。

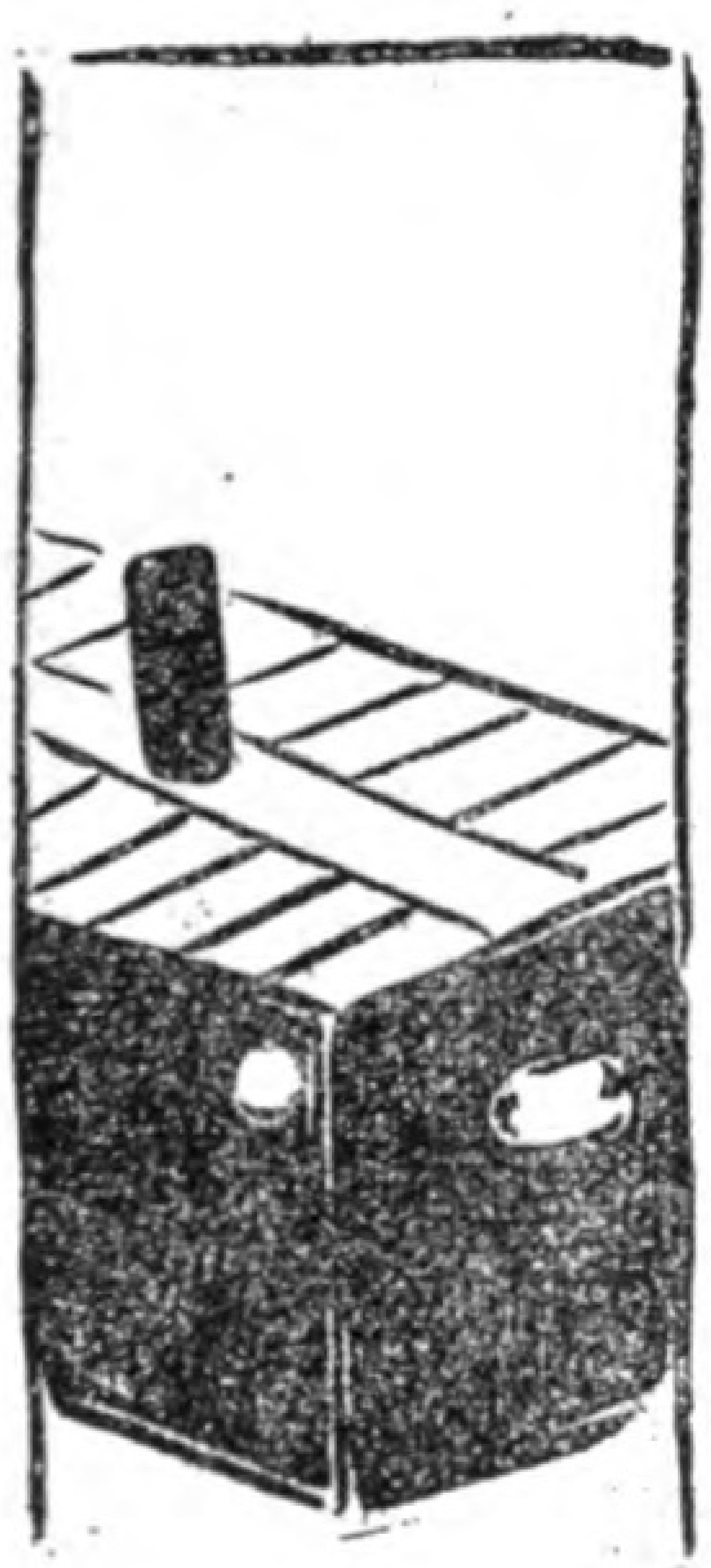
その青木さんが結婚しなさる。

若くして病んだ私は、蜜の樣な甘い戀も知らずに、こつ〳〵と墓を掘りつゝある、自分の暗い影を呪つた。

○月○日

吐血一合ばかり。

學校の方は二十日以上も缺勤。畑の隅のコスモスの花は最う散つて終つて、弱々しい夕陽に枯れた莖を晒らしてゐる。



雜記帳

與謝野晶子

×

あなたは動物園の檻の中に獅子の子が二匹ゐるのを御存じですか。

獅子は砂漠に栖む物だと決つてゐたのです。所が獅子の雌雄は都會に這入つて來たした。人が鐵の檻に入れて見世物の積で伴れて來たのです。見世物と云つて惡ければ教育とか學問とかの參考品にしようと思つて伴れて來たのです。

あなたは獅子を注意して御覽になりましたか。

あの颯爽たる金毛の美くしさは何うです。あの重々しく凛々しい姿勢は何うです。あの頑じやうな項には巖をも跳ね退ける意欲の力が滿ちてゐます。あの瀟洒とした脊中には駱駝よりも素直に千斤の重荷を負ふ感情が溢れてゐます。あの細やかに筋力の充實した脚は天馬よりも輕快に空を飛び相に想はれます。あの澄み渡つた鳶色の目は獅子自らの爲に何事をも爲して躊躇せぬ理性が示されてゐます。

獅子は砂漠から都會へ來たことを不自然だとは思つてゐません。砂漠の樣な淋しい處に栖んで居るより、賑かな都會に栖む樣になつたのを自然の成行だと思つてゐます。

獅子は又少しも自分が見世物にならうとか、教育の參考品にならうとか考へては居りません。人からは何とでも勝手に決めるがよい。自分は何處へ行つても生物の王たる者だと思つてゐるのです。

獅子は鐵の檻の中に居る。それを少しも獅子は不自由だとは思つて居りません。鐵の檻にゐて檻の中からじつと都會の音と色と影と姿とを眺める。是程獅子に取つて安全な事は無いと考へて居るのです。さうして哮へたい時に哮へ、跳りたい時に跳り、食べたい時に食べ、寢たい時に寢る。是程自由な事は無いと獅子は考へて居るのです。

砂漠に居た時は敵の虎や犀や象に對する戰鬪の備が

要りました。併し都會の獅子は、自分で死なない限り決して人間が自分を殺すもので無いと云ふ事を知つて居ます。自分を殺せば人間の損になるのだと云ふ事を知つて居ます。

　獅子が最も愉快に感じるのは、檻にさし入る日光の下に自分の影が黒く濃く板敷に映る時です。

　その雌雄の獅子が近頃二匹の若い雌雄を生みました若い獅子の雌雄は只今御覽になる樣に新しい檻に移されて栖んで居ります。親の獅子は舶來の獅子ですけれど、子の獅子は誰が何と云つても日本で生れた獅子、日本の獅子です。親獅子の血を享け親獅子と同じ事を考へながらも、全く砂漠の夢なんかは見ないで、純然たる都會の獅子として健な發育を遂げて行くでせう。

×

　赤い自動車が一臺、二人の若い男女を載せて狹い公園の中に這入つて來た。大きな樟の木の下の霜柱が銀の樣に立つた上へ二人は下りた。二人の頰は寒さを感せぬ如くに美くしく櫻色を帶びて熱つてゐる。

女、「古い木だこと。十抱もありさうね。」

男、「注連なんか張り亘して、植物崇拜の迷信が形だけ遺つてるんだ。都會の眞ン中に斯んな物が場所を塞いでるのは怪しからん。四方の西洋建築とも不調和だ」

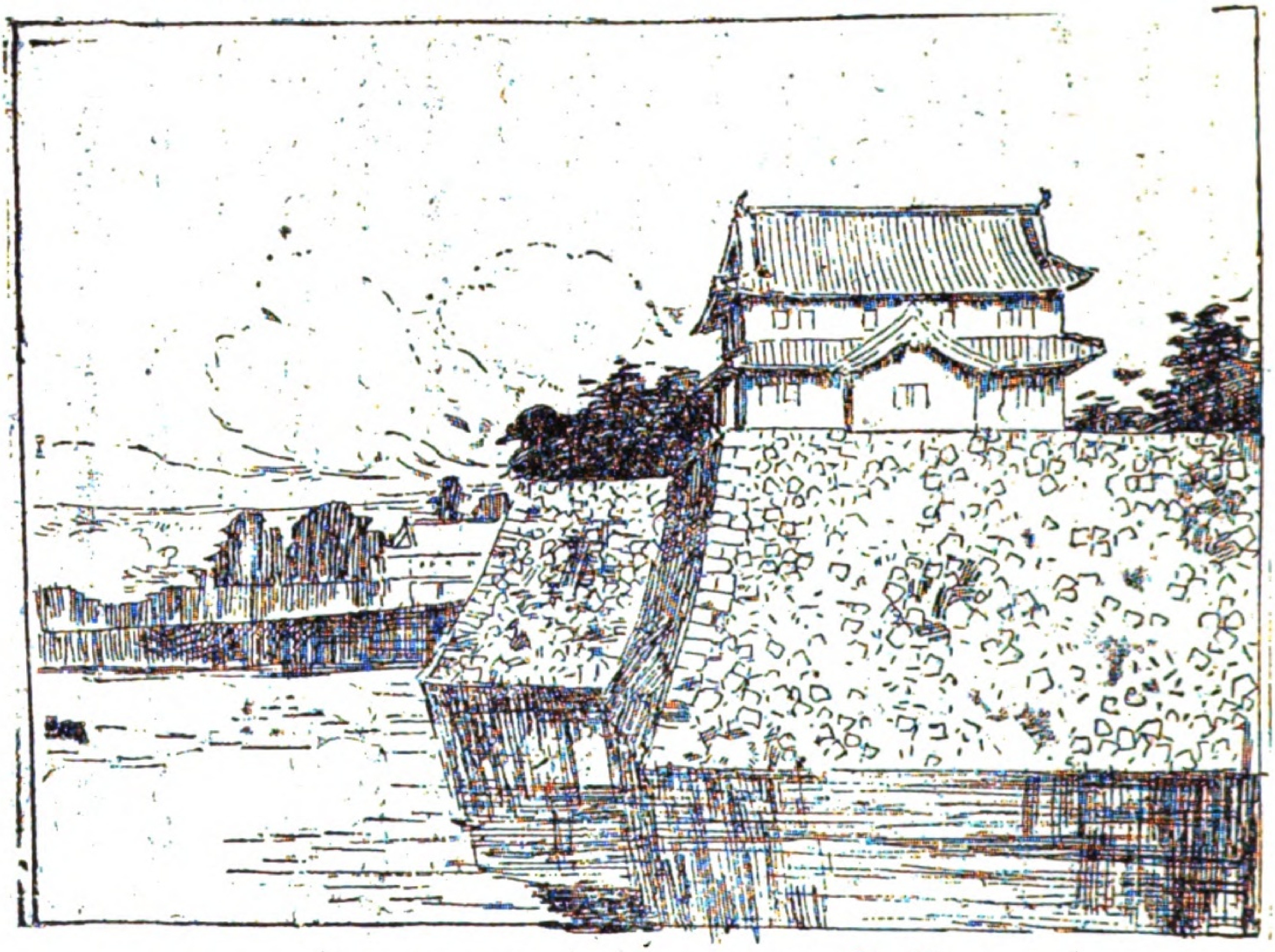
女、「注連を張つて、赤い紙の幟を立て、いろんな紙切を結へ附けた樟の木も厭らしいけれど、あの西洋擬ひの變な建築も隨分不格好だわ。いつもの灰色の空の下でなら兎も角、今朝の樣に晴れた明るい御納戸色の空氣の中では一層目に附いて見苦しいのね。」

男、「それも斯んな古ぼけた木が頑張つてるんで、已むを得ずあんなごまかしの和洋折衷の建築が行はれるんだよ。」

　樟の木の後の社務所から、白衣の上に淺黃の袴を穿いた、顎髯の白い老人が出て來た。

老人、（諂ふ如く一禮して）「早天からの御參詣は殊勝ぢやな。何うもまだ當年もお寒い事で、ちつと社務所の方へ寄つて火鉢にでもあたつて行かつしやい。」

男、（兩手を衣嚢に入れつゝ輕く會釋し、微笑を含んで）「はあ。



封建の面影（一）大阪城

難有う。」

女、（あちらを向き、手筒を胸に寄せながら空を仰いで無言。）

老人、「あなた方は此樟魂二股彦大神の御神德を御存じかな。以前は專ら婦人の下の病氣を癒して下されたが、日清日露の兩戰爭からは武運を守つて大層な靈驗をお示しになり、近頃は又財寶の守護神ともなり福運を授けて下さる。それで御婦人方、軍人諸君、株式業や銀行家の衆の信心が莫大なことぢや。自然神樣も御裕福にならせられ、あの通に境內を開いて四方へ立派な西洋建の貸家を拵へましたぢや。あの貸家は家賃を廉くして貸すので、大學の教授や知名な紳士方が喜んで住んで御座る。さう云ふ豪い人達が皆此の二股樣の御蔭だと云つて熱心な氏子になられましたぢや。あなた方の樣な若い人達は猶更ぢや、益〻二股樣を御信心なさるが宜しい。」

男、「難有う。併し僕もこのお孃さんも其御神德には預れないでせう。僕達の今朝此處へ自動車を驅つて來た主意が違ふのです。僕達はホテルの夜會で夜どほし

踊つたのです。人いきれと、酒と、花の香と、煖爐と踊とで上氣して汗ばんだ額や首筋を、外の新しい空氣で冷さうと思つて、的もなく自動車を駛らして偶然この公園まで遣つて來たのです。」

老人、（苦笑して）「それはお樂みな事ぢや併し、あなた方は偶然だと思はつしやるけど、然うぢやない。神樣の深い思召で今朝此處へお呼寄になつたのぢや。之を初めの御縁として拜んで行かつしやい。」

男、「御老人、さう仰しやる貴方は本當に樟の木の神靈と云ふ樣な物を信じて入らつしやるのですか。いや貴方は信じて入らつしやるでせう。又廣い世間には然う云ふ迷信家もあるでせう。乞食は石を枕にする。宿無人は破れた莚に寢る。無能な人間は迷信に縋る。それは未だ可いとして、狡猾な者は其迷信を利用して私慾の材料にする。あの西洋建の貸家に住んでゐる教授等が其れです。今日までは二股樣の氏子顔をしてゐるでせうが、家賃を上げるか、立退を命ずるかして御覧なさい、直ぐに彼等は二股樣の攻撃を初めるでせう。僕達は自分を信じる外に信仰は要らない。勿論他人の迷信を利用しようとする不正な考なぞは想像もした事がありません。」

老人、「さう云ふ自分勝手の議論は外國の思想ぢや。神樣を粗末にするあなた方には忠孝の道徳も無いぢやらう、夫婦の道も亂れてゐるぢやらう。純粹の日本人の心を持ちなさい。國民性と云ふ大切な物を忘れては國家は滅亡ぢや。」

男、（啣へてゐた葉卷を右の手の指の間に挿みながら）「僕達は思想にも何にも外國だの內國だのゝ區別はありません自分の生存國家の進歩の爲に益があるか無いかで取捨を決めるのです。御老人は外國思想を一概にお嫌ひになる樣だけれど、外國思想の加味してゐない國民性と云ふ物が何處にありますか。國家でも個人でも日々外の物を仰ぐので發育して行くのです。飲食をするのでも、買物をするのでも、教育を受けるのでも、皆物の供給を他に需めるのぢやありませんか。」

老人、「日本人の精神は然うぢやない。」

男「いゝえ、日本人の精神の主要な物は皆外來思想を巧く同化した物です。古い歴史に溯つて申せば皇室の御先祖は高天が原から此日本に君臨して、奇魂、和魂、荒魂と云ふ立派な外國思想を移されたのです。降つて推古以後の文明は總て印度、支那、朝鮮の文明を移し、忠孝仁義と云ふ思想も支那から輸入されました鏡でも劍でも其最初は外國から傳はつたのです。

老人、（不機嫌なる顔附にて）「お前さんの言ふ様にすれば日本人は全く形無しぢや。大和魂も國粹も無くなつて仕舞ふ怪しからん事ぢや。馬鹿々々しい。」



封建の面影（二）土佐高知城

男「御老人の頭脳でお考になれば怪しからん事かも知れません。併し健全な人が種々の珍味や美味を外から取ッて體質の營養を計る様に、有らゆる世界の文明思想を吸收して國民の精神物質の兩生活を豐富にしようとするのは、日本の古今に一貫した國是です。十七憲法にせよ。大寶令にせよ、五個條の御誓文にせよ現行の憲法にせよ、敎育勅語にせよ、

總て外國思想の長所が參酌してあるのです。若し御老人の樣に純粹の國民性と云ふ物ばかりを尊重するなら野蠻蒙昧の太古に溯つて一夫多妻を復興したり、掠奪結婚を再興したり、飲酒と獵と戰爭とで日を送る世に復古したりせねばならないでせう。」

老人、(怫然として)「それは暴論ぢや。非常識ぢや。」

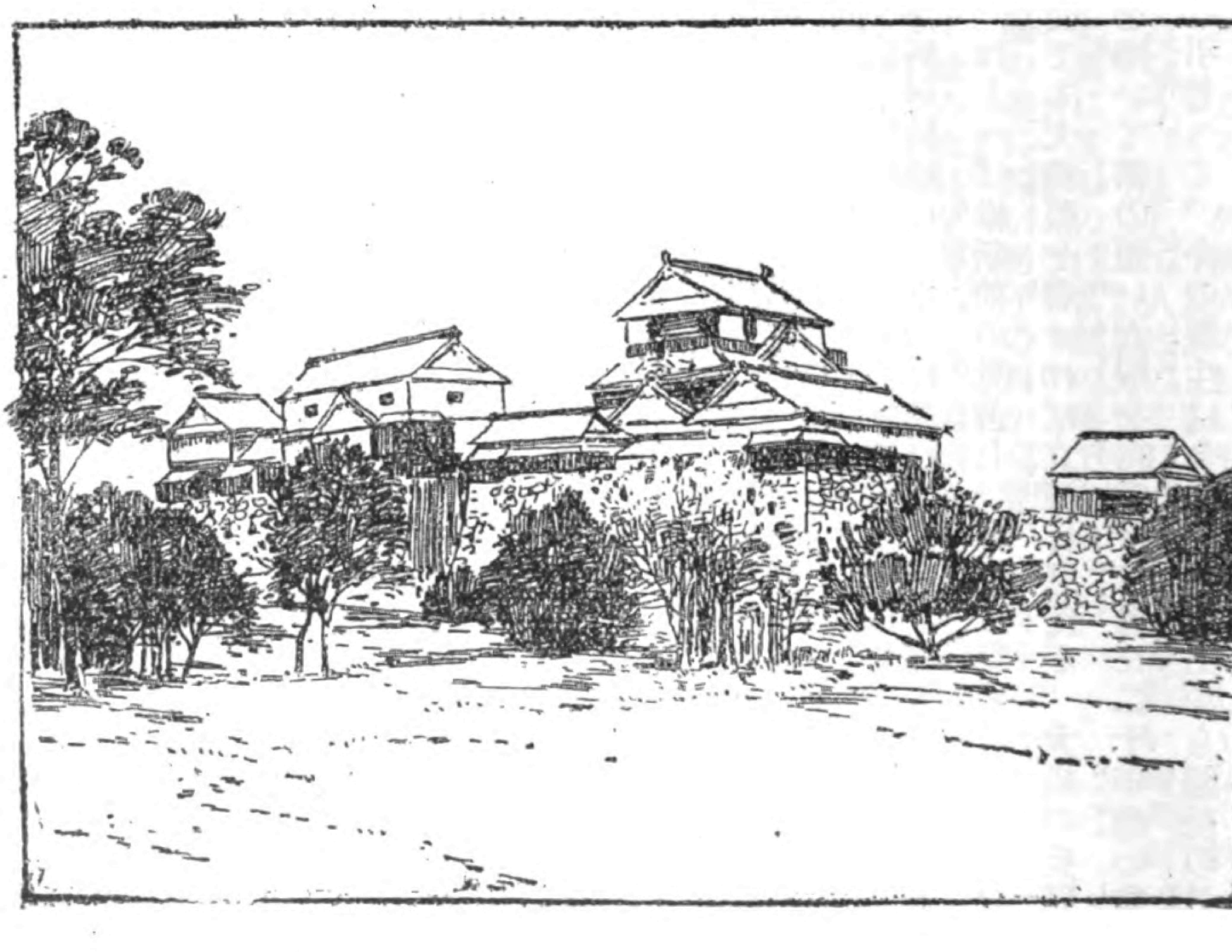
男、(冷靜に)「どちらが非常識だか。保守的な人と云ふ者は議論に窮すると、よく常識が無いとか暴論だとか云ッて相手を困らすものですよ。」

あちらを向いて居た若き女は、先程から折々老人の顏を偸み見して居たが、突然振返ッて嫣笑しつゝ、

女、「井上の伯父さん誠にお久振ですね。わたし一寸見ちがへて仕舞ひましたわ。あなたが伯母さんを國に置去りにして亞米利加へお行きになつたのは、もう七年にもなります。二年程で歸朝なさつて大學の教授になつて哲學を講じて入らつしやる傍「成功の日本」と云ふ雜誌に關係して入らつしやると聞いた事もありましたが、何時からかう云ふお宮の宮司さんにお成り遊ばしたの。世間で近頃この二股樣が穴守樣より繁昌すると云ふ噂を聞きましたけれど、伯父さんが宮司で入らつしやるとは少しも知りませなんだわ。さぞお錢になる事でせうね。あんな西洋館まがひの貸家までお建てに成つてさ。こんなに裕福にして入らつしやるのなら、伯母さんを呼んでお上げなさい。伯母さんは國でわたしのお父さんが養つてゐますけれど、伯父さんに置去りにされてから病氣が出て半身不隨に成つてらつしやいますよ。國では伯父さんの事を輕薄だと罵らないものはありません。而して伯母さんの事を貞女だと褒めてゐます。でも良人の愛情の無い貞女は可哀相ぢやありませんか。今聞いてゐますと伯父さんは大層お考が豹變遊ばしたねえ。札幌の農學校に教師をして入らした頃は、内のお父さんを保守的だ保守的だと云つて忠告ばかりなすつたぢやありませんか。其れで内のお父さんは縣で一番の進歩主義の人となり、學校を建てたり電氣事業を起したりして入らッしやるんですわ。わたしが女子大學の英文科を出て此の今戸伯の御

長男と結婚のお約束をする樣な身分になッたのも、以前あなたがわたしの敎育をお父さんにお勸めなすッたお蔭ですわ。わたしが近頃新聞雜誌に寄書して婦人問題を論じてゐます中で、新しい婦人は婦人自らを第一の味方にせねばならん。男子側の學者から味方する人があッても大して當にしては後悔する。少數の眞面目な學者は沈默してゐる。多數の學者と云ふ者は自分の名や位置の爲に流行の問題に口を出すばかりで、決して正理の味方でも婦人の味方でも無い。自分に不利と見れば何時でも變身の術を知ッてゐて說を二三にする生半可な學者を味方とせずに婦人自ら賢くならねば駄目だ。とわたしは述べてゐるのは、伯父さんの樣な學者があるからですよ。併し伯父さんの樣に似非ハイカラで似非保守主義者は、もう十年もすると全く無くなりますよ。丁度此の樟の木の樣なものです。何處を見ても朽ちてゐるぢやありませんか。高い枝は煤烟と鴉に枯らされてゐます。根本は此樣に人の靴や自動車に踏み蹂られる。中程の幹も枝も大抵雨水の爲に腐ッて

封建の面影（三）伊豫松山城



ゐます。こんな木に何の神靈などが宿ッてゐませう。十年と經たない內に倒れるのは知れてゐます、此注繩を張ッた木が倒れて仕舞へば御參詣に來る馬鹿者も無くなるでせう。而したらあんな厭な西洋まがひの建築も取拂はれて、廣々とした公園の中に立派な音樂堂でも建つでせう。（金時計を出して見て、男に向ひ）おや、貴方もう七時ですわ。何處かであッさりした日本食で朝飯を濟ませて、其れでお別れしませう。貴方は會社の方へお出になるでせう。わたしは今日も上野の圖書館へ參らうと思ひます。」

男は輕く頷き、女を先に自動車に載せて、悠然とハンドルを握ッた。

女「伯父さん左樣なら。」

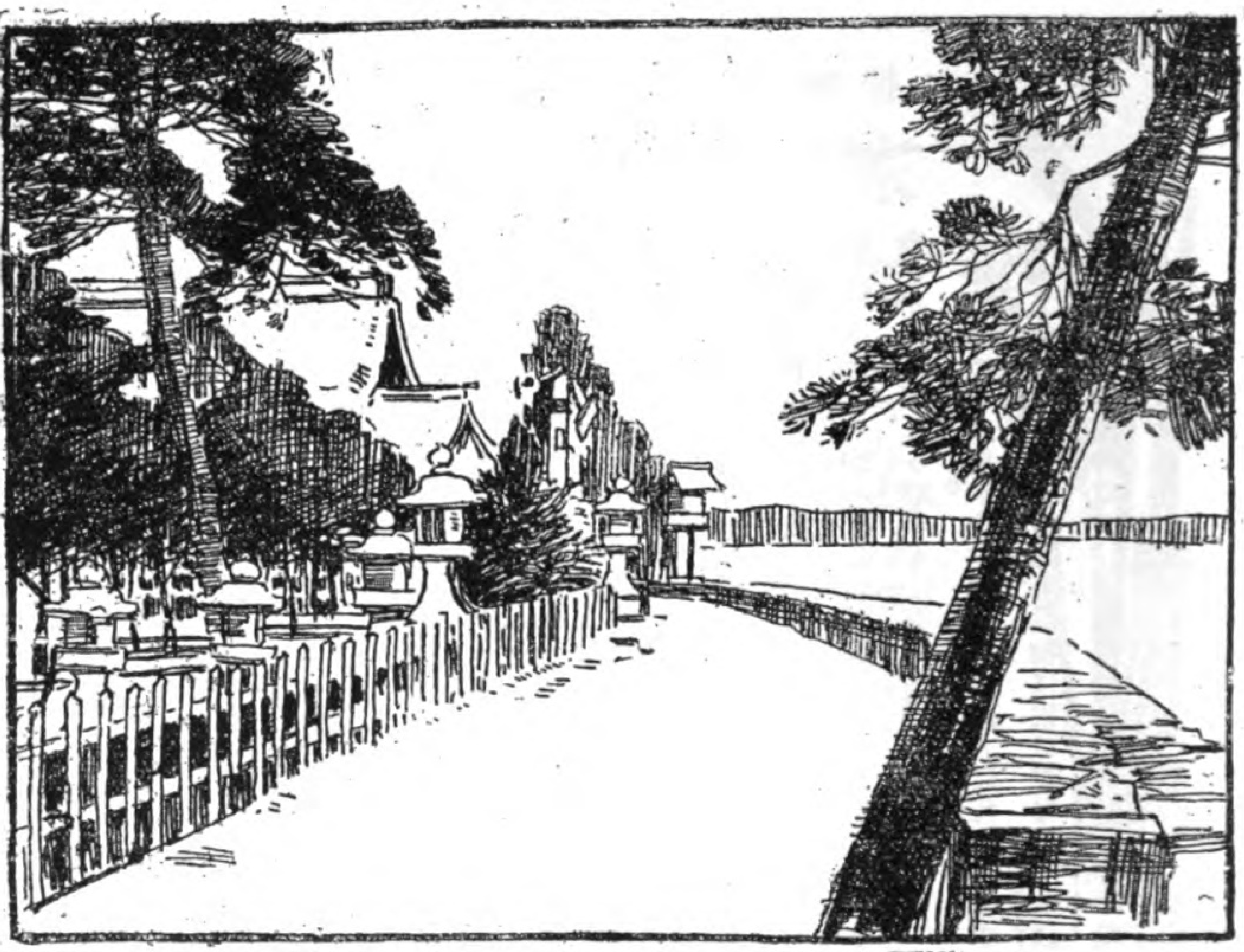
男「御老人左樣なら。」

×

わたしは好奇心、虛榮心、模倣性の諸德を讃美する是等の諸德が動力となり助緣となッて小兒は大人に、愚者は智者に、小人は君子に進むのである。人の子を教育しようとする父母敎師などにあッては此諸德を善用することを怠ッてはならぬ。大抵物事の端緒は好奇人眞似、見え坊から開け、決して實用のみからは起らない。若し是等の諸德が惡いもの危險なものであるなら、なぜ學者が飛行機や千里眼を研究するか。なぜ日本人は西洋人を眞似るか。なぜ政府は三越や白木屋の流行品を禁止しないか。而して婦人の虛榮を口頭ではかり八釜しく云ふのは可笑しな事である。不經濟だからと云ふなら、國家の方が、又父兄の方が何れ位不經濟な事をしてゐるか知れない。

婦人が自由にし得る經濟には限がある。殊に打算に長け出した若い女學生が、體の裝飾のために破滅を招く樣な愚かな事をする筈が無い。

身粧を綺麗にするのは其れだけでも婦人の進步である。たとへば維新前の見苦しい殺伐な野武士のやうな人間でも大禮服を着せれば立派に見える。大幅の兵兒帶を捲いて裾の短い衣服を得意げに着た二十年前の書生に引替へて、今の書生は金釦の服の上から駱駝の外



近江名蹟　白濱神社

套を着てゐる。外國人の目にも然まで見苦しくなく映るであらう。まして人生の花だと云はれる若い婦人が裝飾を美にするのは當然の事である。

衣服の事に疎い男子の目から見、又自分の若い時と比べて世の推移を考へない老婦人などから見たならば今の女學生の裝飾が非常に不經濟な物の樣に見えるかも知れない。併しわたしから見ると、特に派手なと云はれる東京の女學生でも、皆が皆お召の着物を一枚宛持ッてゐると云ふ譯では無い。男の目には一見美しく映るかも知れないが、上から下まで揃ッた盛裝をしてゐる女學生は極めて尠い、大抵ちぐはぐな不揃の物を着て我慢をしてゐるのである。實際を見ずに婦人の虚榮を罵るのは可哀相である。女學生の凡てが婚禮に着る樣な晴衣を一揃づつ拵へて、其れを平生に着て歩く世でも來たなら少しは窘める必要があるかも知れぬ。寧ろ今の所では、多くの醜業婦や遊里に失ふ金錢を頒ッて、其娘や妹や妻の身粧を美くしくする事を一般の男子側に奬めたい。

仕立屋が不當に高い仕立料を取ッた上に、綿を半分以上も盜む。切地を盜む。どれ丈世間では損をしてゐるか知れません。かう云ふ弊害は其筋で嚴しく取締ッて戴いて、最初依賴する時も受取る時も目方を掛けて授受する習慣を開いて欲しいと思ひます。それから蠅と砂埃とに塗れてゐる駄菓子屋の菓子なども取締ッて欲しいのです。散髮床、女髮結の衛生も頓と行屆かない樣ですね。

日本人の挨拶ぶり

日本人の挨拶應答は極めて叮嚀にして悠長なり。先づ時候の挨拶より無沙汰の謝辭に入り、互に家族の安否を問ふが普通とし、尙相見ざりし間に受けたる恩顧に就きて謝意を述べ、次いで四方八方の世話に移り、容易に用談に入らず。華族の奥女中の如きに至りては、双方各主人の家族及び邸内の重なるもの一人每に其の安否を問ひ、健康を祝し合ふ。而して一問一答每に頭を下ぐるを以て、纖弱なる老女などは之が爲めに頭痛目眩ひを起すことあり。余嘗て或華族の奥女中が互に挨拶する傍に在りて、頭を下ぐる度數を數へしに、双方各十七回に及べり。一回頭を下げて次に再び下ぐる間には、二分間を要すとするも、三十四分を要する譯なり。かくて愈々用談に移るまでには、半時間餘を空費す。歐米人の挨拶應答は極て簡單なり。數年相別れたる友人の再會せるにも、互に手を握て「御機嫌よう」の一語を交るのみ。之と同時に多少頭を前方に下れども、それも一回若くは二回に過ぎず。日本人は又笑顔を作り聲を和げて、對手の意を迎へんとす。婦人の如きは、少しも可笑しくなき事も一語々々に笑を湛へて、諂らふばかりの愛敬を作るが普通なり。歐米人の中にても伊太利人佛蘭西人等には愛敬顏をなすもの尠からざれども英國人は極めて眞率朴訥にして容易に笑顔を示さず。商店に至りて物を買ふに、店員の應對極めて無愛相にして、恰も品物は我が物なり、金錢は汝の物なり、買ひたくば買ふべし、頭を下げて御願申するに非ずと言はぬばかりの面持なり。英國人の如きも餘りに極端にして必ずしも、學ぶべきに非ずと雖も、日本人の如きも亦極端にして何となく輕薄に見え且つ威嚴を傷くるの感あり。他山の石以て玉を攻くべきなり。(三省)



家兄の金蘭簿

上原綾子

近頃はクラスメート評判記だの先生がたの御噂だのつて大層お賑かで御座いますこと。

この分では彼方でも此方でもハックション〱――あらお寒いので風邪ひいちやつた……なんて感ちがひ遊ばす方が少なからぬにきまつて居ります、隨分罪な御話ですのね……。とは申すもの〻御互樣にどうせ春は閑暇なもの、私も御仲間入りに手近のあたりから始めますから御氣の向くかたは居眠りの御伽にでも遊ばして……。

但し此處に槍玉に揚げる人々は兄の友人とか同鄉の關係とかで、日常親しくいたすといふまで、紫苑さまの御書き遊ばした何とかの候補者などゝそんな種類の人ぢやァ決して無いので御座いますのよ。

Kさん

遂去年の夏まではお定まりの色褪せた二本條の制帽に、御天氣の日でも足駄がけで、彌生ケ丘をカラ〱ふみ鳴らした英雄の一人、兩親ともに亡いもので宅の母を母さん〱と慕つていつも日曜にはやつて來ますの。

專攻學科は電氣工學、割合に腦は良いと見えて中學を卒業したすぐ其の年に、しかも首席で一高に入學つた位なのですけれど、何分腕白さんで困りますわ。

明けて二十二になつたんでせう、寅の年だつて言ひましたから……。金ボタンかゞやく新調の制服着けるのが恥じいからつて御年始にまで裾の方から房の下つた小倉の袴で御出かけなんで御座いますよ、私は御存知どほりの遠慮なしですから、

「あらまだそれを大切さうに召してらしつたの？」つて申しますとね、

「えゝこりやアね向陵生活の記念だから」

つてすましたもの、嫂が氣を利かして、

「オヤ〳〵それでは御大切なのも御尤もさまね。では洗張して縫ひ直してあげますから、たまには制服も着てごらんなさいな」

と申しましたら歸りがけには正直と、もうチャンと袴の紐をといて代りに誰かのを貸してくれろつて御催促御生憎と丁度宅には大きい兄の一張羅の仙臺平があるばかりなので駄目とは知りながらそれを持ち出して見せましたらね

「これは木綿ぢやない樣ですね、何だかいやに光つてる」

とは振るつて居ませうホヽヽヽ宅で袴と名のつくものは此品の他には私の琥珀かカシミヤのがあるばかり、だからがまんして縫ひ直すまで、制服着てゐらつしやいよと言ふのもきかずに矢張りまたおかざり附のを御着用に及んでセッセと歸つてしまふのですもの………。

三度の御飯よりボートが好き、昨年の御正月なんか御年始に來るなり豆だらけの掌を見せて、舊臘から連中で遠漕に出て、初日出は利根川で拜したつて言ひますから、なんぼ好きな道でも矢つ張り寒けりや辛いでせうときゝましたら

「なまじ寮に殘つて胃病の藥の樣な、苦い黑こげの雜煮餅の御馳走にならうより餘つ程ましだ。賄といふ奴は恐ろしい動物だ、居候でもないものを、三杯目にはグッとにらめやがる」

つて大した權幕、ホヽヽヽ萬事この調子なんで御座いますからね、ほんとに罪のない可愛い人、一高氣質が拔けないでそれでも角帽がよく似合ひますのよ。

Mさん

宅へよく來る靑年の中で一番世事に長けて居るのはこの人で御座いませうね、去夏角帽ぬぎ捨てゝ目下は

宮城の事務官補、總領の兄樣といふのが〇〇縣知事で次兄は京都大學の助教授ですの。

このMさん成績はいつも、クラスの中程ながら、人づきあひが上手で調子が良くて、何處でも大分受けがよろしいのよ、けれどお氣の毒なことにはまだ三十歳に手も屆かないのに、今から髮に銀色の筋がまぢつて居ましてね、御當人樣も大層御氣にかけさせられて、いろいろ御手當もなさる樣子なのに一向効もあらはれぬとは、さて〱造物主も隨分意地の惡いかたぢやア御座いませんかね。



濃い髭を――これには白いのは一本もなし――脣の上でブツリとはさんで、後藤式の鼻眼鏡なんかかけてそんな風で居ながら此の人もさわぎや!!!

此の間も上京のついでに遊びに來ましてね、いきなり洋服の上着を脱ぐから何がはじまるのかと存じてま

したら、

「これから僕がおなぐさみに手品ゝまして御覧に入れます」なんかつてね、それからナイフを呑んだり、トランプを指の中へ入れてしまつたりさんざ皆を笑はせました。

一體Mさんが手品や曲藝に秀でゝるのは、矢張り一種の天才と見えて以前は四高名物の一つに數へられたものなんで御座いますつて、ハーモニカも吹けばヴァヰオリンも彈ける「ローマンス位なら手に入つたもの此節は謠曲も大分上達したつて評判で御座いますわ。

油畫」なんかもちよいと巧くかきますしね、何しろ在學時代には御茶の水あたりで大層噂が高かつた人なんで御座いますから本名を明かせば、皆様の中にも、乾度御承知の方があるかも知れませんわ。

テニスのチャンピオンにも選ばれて居ました、兎に角器用な才子肌なんで御座いますのね、フロックコートが大きらひで、その代り脊廣はいつも氣取つたのばかり、小形の金時計などからませて、まあ〳〵獨身だからこそ身に付く御祿だけでどうやらこうやら追つ付いて行くのでせうつて母が申して居りました。こんな人でもね品行や人格の點に就ゐては、これつばかりも惡い評判を聞いたことのないのは感心で御座いませう……。

とり立てゝ道樂といへばネクタイに氣を採むのと玉突ぐらゐなもの、趣味の方面が廣いから誰とでも話の合ふかはり將來にこんな人の夫人になる人は、よほどのやりてゞなくつちや迚も勤まりますまいねえ。

Sさん

袖ヶ濱邊の夕汐や千代の松原みどり濃き福岡醫科大學の三年生、あの伯林に居る杉田の俊ちやんの弟なんで御座いますわ。

同し自治寮の萬年床に三とせの春、秋送り迎へた人ながら兄さんの俊ちやんや最初に申上げたKさんなどとは違つて、この人は大學に移つてからすつかりおとなしくなつてしまひました。

色白の細長い身體に度の強い眼鏡までかけて、どうしてもＬの字（文科）の方が適して居さう……その上大きな聲ではものも言へない樣に內氣なこの人によくまあ解剖なんかが出來るものと不思議な位で御座いますわ

兄さんの俊ちやんの方は至つて快活な外交官、兄弟で居ながらよくも斯うちがつた性質に產みわけられたものと御母樣の御手際に感心してしまひますのよ、實際……。



東京に居る頃は矢張り日曜毎に遊びに來ては、西洋室の白い壁に凭つてヽ、グレーの墓畔吟を涼しい聲で誦してくれたり、兄にきいてもうるさがつて敎へてくれない各國のナショナルフラワーや花言葉をいつも丁寧に話してくれました。

あのマクベスの講義もオセロもハムレツトも皆このＳさんに私は話して貰つたんで御座いますのよ。

短歌も上手なので御座いませう近頃はあまりみせて

くれませんけれど古い頃のでもさがして御覽に入れませう。

さう〳〵丁度福岡に出立ちます時

はる〳〵と君ゆく先に幸あれな
　陸路海路の四百里の旅

私がこんな出たらめを書いて送りましたらねえ、その年の秋よこした葉書に次の樣なのが御座いました、字も綺麗にかきますからね、私大切に藏つて御座いますの。

淋しさに、馴れては興も淡きものや
　配所の、秋に小鳩かひける
春秋の、ざれ歌そへし昔ならで
　書かぬ日おほき我が日記かな
酒のミず。煙草吸はずと誇りかに
　母にふみかく人の寂しさ

それから去年の春頃のたよりには短歌ではなくてこんなのが……。

南にもゆるうら若き
色濃きゆめをもたらして
夜毎さゝやく夕波よ、
あはれと想へ旅の子を
袂もかをるたち花の
花の香、おくるやは風や
ミルチのかげはあらずとも
伊太利に似ずや此地の春、

どうしてもお醫者樣は似合ひません樣ね、こんな人には……。

○さん

このかたは一高出身ぢやア御座いませんの、學習院の高等科から大學へ入つて○○伯爵家の御世嗣の君、しかも大名華族の若殿樣と申さば、それこそほんとに世が世なら……なので御座いますけれどね、それでも華奢だちな貴公子姿など想像じやうものなら大ちがひ お顏色は黑し小柄ちやあるし、全く引立たないお生れで、自分から船大工〳〵つて平氣で治まり返つてら

つしやるので御座いますもの、あの、工科の造船學校専攻中なんでらつしやいますの……。

でもね流石に御身柄はあらそはれぬもの、何處やらに犯しがたい御品がほのみえる様だなんてよく嫂など申しますとね伯林に居ります兄なんかいつでも

「ありやァ華族面つて言ふ。んですよ、鼻の下が延びすぎてまさァ」

なんてひどい事を申して居ましたが、どうしてなかなか隅には置けませんのよ、口も人も惡くつて……



昨日もね「白樺」が發行たからつて持つて來て下すつた時

「あなたは伯林の兄さんに佛蘭西語の手紙をかくんだつてね、輝さんも可哀想だなァ」

つておつしやるんでせう、ですから私、

「えゝ、輝兄さんはフレンチの方はあんまり達者つて程ぢやないんですから」

と申しましたらね、こんどは

「蟲のいゝことを言つちやいけない、綾さんのフレンチなんか本場の巴里ッ子にだつて判りつこは有りませ

んよ、辭書にも無い字を書くんだから、それで輝さんが氣の毒なのさ」

なんて憎らしいことおつしやるんでせうね、從五位樣ともあらう君が……

服裝なんかちつともかまはない御連中でね、知らない人が見たら腰辨の息子ぐらゐとしか思ひませんわ、御親類つて言へば皆いかめしい華族樣ばかり、その大玄關へ膏藥張りの御靴で正々堂々御乘込みがあるもんで△△侯爵家へ御緣付きになつてる御妹さんが、いつでも、

「御兄樣にも困つてしまひます、女中や家扶やに、ほんとうに恥しくつて……」

とおこぼしになるんで御座いますつて。

さうかと思へばつまらない事を氣にかけて、今年に入つてからは、ちよい／＼川崎の大師樣へお詣りなさる樣子なのよ、え？はア二十五の厄年だから災難をのがれる樣につていふのでせうね。それも誰に敎へて貰つてか、はじめは目白の鬼子母神樣におみ足が向いてたのですけれど、宅のばあやが、それには大師樣の方がよろしいでせうつて申しましたら、素直に早速御宗旨替へなんで御座いますの、鬼子母神の方では賜はりかけた御利益のやりばに困つてしまひますわね、ホヽヽヽ

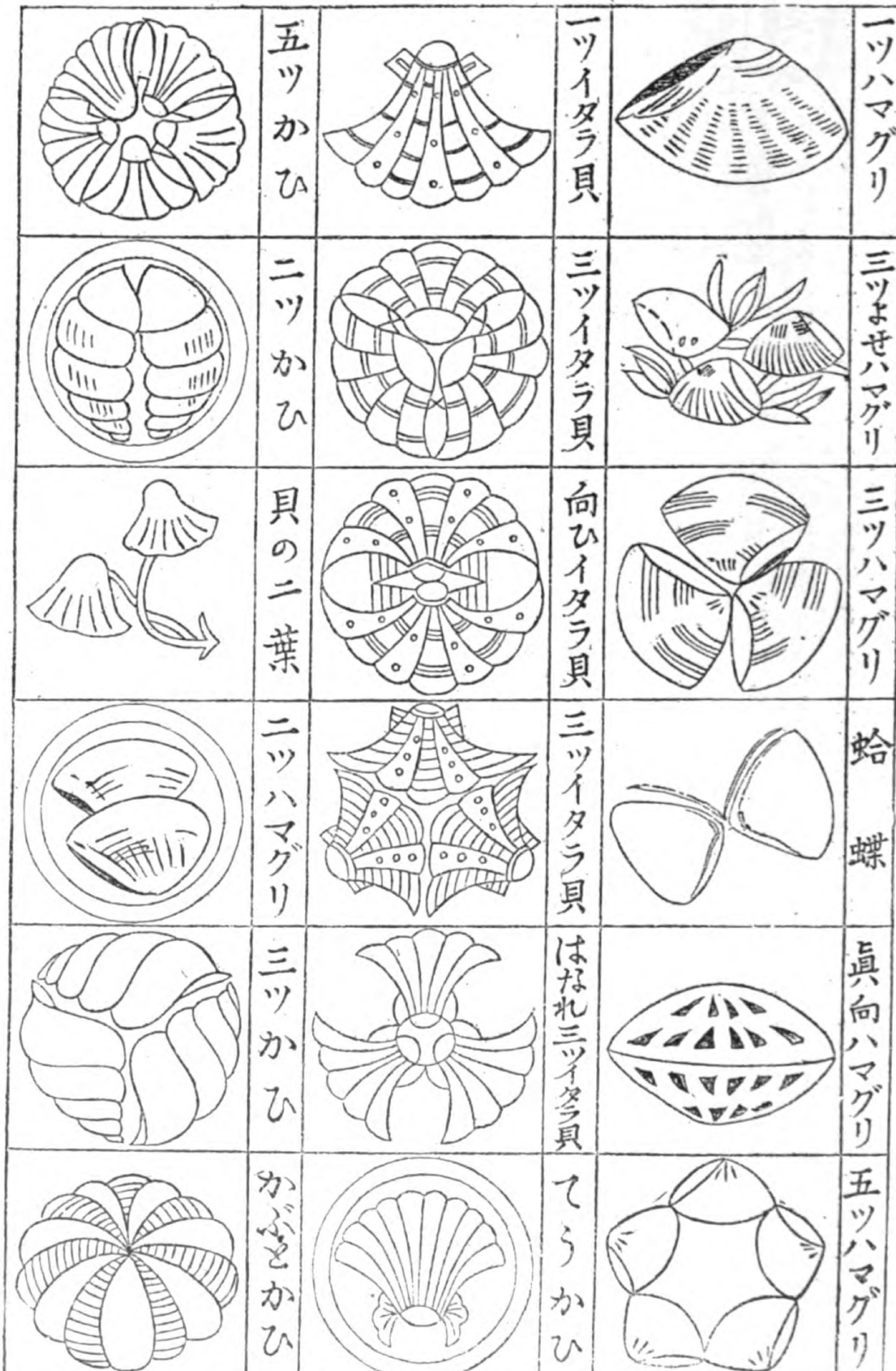
好物といへばポートに御汁粉が何より、御自分が甘黨だもんで御察しか好くて、ポートレースの歸途にはいつも乾度言問團子を澤山おみやげに持つて來て下さいますのよ。

學習院時代にはよく輔仁會の折なんかに獨語演說を遊ばしたり、ピアノ獨彈なんかで女學部の連中にはあんなかたでも大層もてたもので御座いますわ、舞踏會にもゐらつしやつたことが御座いますの、尤もこれはずつと古いことですけれど……。

最初に申上げたKさんとはよく氣が合ふとみえて大仲好、御兩人打つれておいでのあつた時なんか大きな人達が目かくししませう／＼つてね、宅では皆さわぐのが大好きですから、嫂も兄も女中だの母だのまで一緒になつてドタンバタンが始まりますのホヽヽヽヽずゐぶん私共も呑氣ねえ。

噂をすれば影とやら、何だか茶の室の方で大きな聲が聞えてますわ、おゝ丁度今日は日曜日でした……。

貝の意匠


一ツハマグリ
一ツイタラ貝
五ツかひ
三ツよせハマグリ
三ツイタラ貝
二ツかひ
三ツハマグリ
向ひイタラ貝
貝の二葉
蛤蝶
三ツイタラ貝
二ツハマグリ
眞向ハマグリ
はなれ三ツイタラ貝
三ツかひ
五ツハマグリ
てうかひ
かぶとかひ

美容の保存

年々に花の色香のうつろひ行くを悲しむは、凡そ世の常の婦人の情である、されば今茲に永久に若く美しき容色を保たんと冀ふ人人の爲めに美容術に關する二三の注意を說いて見やう。

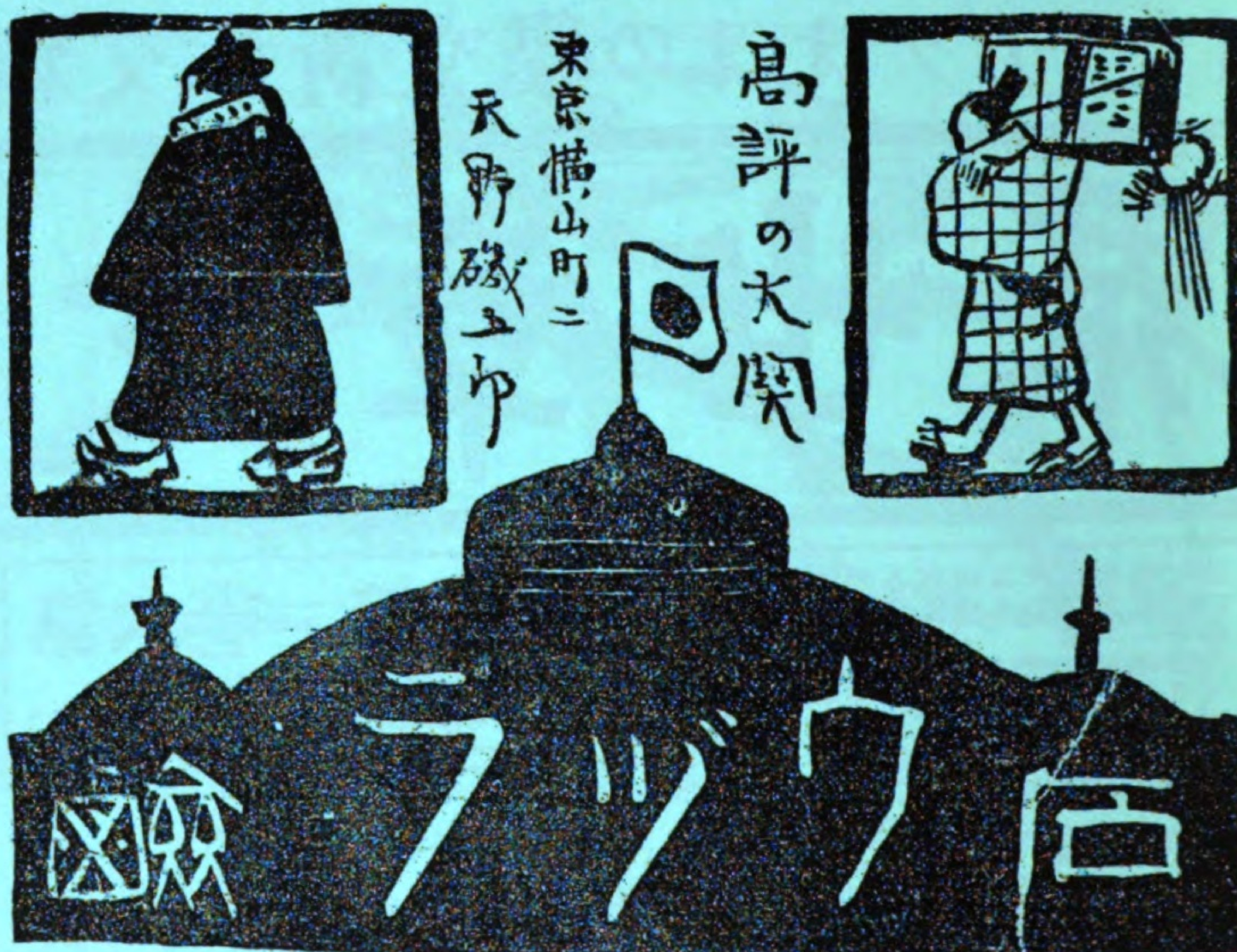
▲若く見せる法　先づ何時までも容色が若く、美しく見せやうと思ふたならば、第一に十分の休養を取る事が必要である、即ち「好く働き好く眠る」と云ふ事は、婦人の忘る可からざる金言である、十分の睡眠と休養とを得れば、又能く働く事も出來、何時までも若く、元氣で其の一生を有益に事業する事が出來る。殊に神經病的の婦人には、沈靜と休養の習慣を養成する事が最も必要である、婦人にとつては「お年齡程には見えません」とか「お年齡の割には大層お若い」とか云はれるのが、恐らくは何より嬉しい賞讚の辭であらう。然し之を實際適當な化粧法によつて、或る程度迄年齡を匿して、若く見せるといふ事は、格別難かしい事ではないのである。

▲クリームの使用　顏面の皮膚の粗れた皺の多い婦人はクリームを常用するのが最も特効が多いやうであるから、粗れ性の人などは、一日に數回づゝ此の化粧法を實行するのが宜しい。殊に外出する際などには、手帕を額に當てゝ、其上から手で皮膚を強く摩擦して、皮膚の光澤を滑かにし、其の上へ白粉を薄く施して外出するがよい。

▲白粉の効力　白粉を施す事は、皮膚を大切にする上からは是非必要である。白粉は皮膚の氣孔の粗れたのを匿くして、顏を若く美しく見せるものであるから、之を常用しない婦人は誤つて居るのである。

▲眼角皺　次に容色を若く見せる上から最も大切なのは眼である。故に眼に對しては出來るだけの注意をしなければならない。強烈な光線に對して永く坐つて居るのは、最も宜しくない。之は單に視力を害するばかりではなく、往々之が爲めに眼角皺を作る原因ともなる。故に讀書若しくは裁縫の際などは、十分に光線に注意して、直接眼に光線を受けぬやうにする事が大切である。

▲心配を捨てよ　以上は單に必要な注意事項の二三に過ぎないが、婦人が永久に老けないやうにする爲めに、最も必要なのは、常に心を滿足の狀態に保つて居ると云ふことである。即ち何時までも若くして居やうと思ふならば、常に自安を得て居らなければならない、絕えず胸の中に心配を懷いて居つては、譬へ顏に紅粉を粧つて居ても、何にもならない。心中自安の境に在るとき人は始めて其の顏面に眞美の色が現はれるのである。


高評の大関
東京横山町二
天野磯五郎
白ウヅラ

女（その二）



菊判紙數三二〇頁
木版錦繪原色版寫眞版十數頁入

正價廿五錢
郵稅二錢五厘

文藝俱樂部

第十七巻 第三號
二月一日發行

本年度より發賣部數の激增せる本誌は、此の機に乘じて益々其の内容と外觀との改善に留意し、讀者が多年の眷顧に酬はんものと、先づ卷頭の小說に**德田秋聲氏**作の『**暗い町**』を揭ぐ、是れ作家が獨得の觀察を以て、社會の裏面を描寫せるもの、讀者が作家の靈腕に一驚を喫すなるべく、次に**山田旭南氏**の傑作小說『**嫁許**』を收む。艶麗な筆致は必ずや讀者の愛誦を擅にすべし、脚本としては露國の大文豪が**杜翁**傑作として、歐米の劇界に甚大の好評を博せる『**文明の結果**』なる長編を、**眞山青果氏**の飜案せしもの、其の面白きことは贅々するまでもなし

新講談には**典山師**得意の讀み物『**鬼薊梅吉**』を揭ぐ、讀者は殆ど送迎に遑なからむ、活社會以下の各欄、いよいよ文字の絢爛と、材料の豐富を以て、雜誌界に冠たらん、愛讀を祈る、

東京本町 博文館

女(その三)

第十七巻 第三號

少年世界

二月一日發行

菊判紙數百二十八頁
口繪石版寫眞版澤山
正價金拾錢
郵税一錢五厘

口繪

△今日の獲物（三色版）
△ナズナとパンシー（彩色[illegible]版）（西野猪久馬畫）

寫眞版

▽華頂宮博忠王殿下
▽久邇若宮兩殿下
▽蒲田の梅屋敷
△壯快なる飛行機
▽白蟻の巣

記事概要

東京日本橋本町
博文館
振替東京二四〇

女（その五）

第十四卷 第二號……二月一日發行

中學世界

菊判紙數二百〇八頁
外國語欄十餘頁
●口繪水彩畫ペン畫
鉛筆畫寫眞版十餘頁
正價二十錢
郵稅二錢

□青年と英雄崇拜　文學博士 桑木嚴翼

□冒險小說 空中の快男兒　江見水蔭

●歷史小說 なり瓢……塚原澁柿

●偉人曆……竹越與三郎

●野火（文藝）……吉江孤雁

●漁村より（文藝）……正宗白鳥

●海水の性質　理學博士 横山又次郎

●私の取りし勉强法……法學士 鶴見祐輔

●立派な人物となる法……糸左近

●西洋千里眼婦人　文學博士 福來友吉

●當年の野球界を觀測す……運動子

●吾が英獨に學ぶべき長所　文部省參事官 田所美治

□大小豪傑競べ　文學博士 建部遯吾

□雪と風景……伊藤銀月

○英國の青年斥候團……男爵 牧野伸顯

○青年に勸めた化學工業　東京高工校長 手島精一

○立憲政體の話……法學博士 美濃部達吉

○孔子敎と現代の道德　文學博士 井上哲次郎

○植物の人爲適應……理學博士 三好學

○數學の學び方……理學士 根津千治

○幽靈論（時評）……笹川臨風

○英語時文評釋……上條高師敎授

○獨逸語……谷口陸軍敎授

○京都の學校町……

○笑科大學……

日本橋本町三
博文館
振替東京二百四十番

女（その七）



たてそめの記

照代

自分ではすつかりお化粧すましたつもりで、高島田の何となく重くて前にぐらつとのめりさうなのを氣にしい〱茶の間に這入つて來ると、潤つた何かを匂はせた空氣は氣持よく私の體を取卷いた樣に思はれた。火鉢には鐵瓶の湯がたぎつて白い水蒸氣が沸々と吹上がるのが輪を卷いて幾つも〱續いてゐる。向ふに坐つて、何かの初刷を下に置いて煙草を喫ひながら母樣は見てゐらつしやる。とお顏を上げて、私の顏をちらとごらんなすつて。

「おやまあ此娘は。どうしたの、眼をはれぼつたくして。」と眉を一寸およせになつた。いはれて成程、頭の重い〱と思つたのも道理、てつきり昨夜のたゝり、さん〱志村樣での活動振り。娘子軍の將たるや、何ぞ其敗軍の汚名を被るべき、と必死となつて戰つて、美事敵を二度ならず三度までも打破つて、かちどきを擧げて、ほつと一息した時に柱時計がボーンと一時。母樣に御心配かけては、とお暇乞して、床についたのは二十五分でしたもの‥‥‥何となく恥かしい樣なお申しわけのない樣な氣がして、默つて居ると、

「何を茫然してるの、さあお出で、遲くなるといけないでせう。」と何處までもやさしくおつしやるので、すごすごと母樣の後について納戸へ這入つた。

何て難有い事でせう。、、、うちかけにはちやんと今日着て行く着物が裾を揃て掛けてあるではありませんか。昨夜母樣に、「明日のお茶にはどれにしませうか。」つて伺つた時、「左樣ね、あの藤鼠はどう？あれは落付いていゝから、何せ明日は落付いて事をするんだから」と、仰しやつたので「はい」と申し上げておいたので、私

がお湯殿に行つてる間に……今更ならねど難有さが身にしみて。さつと後からかけて下さるのを、袖を通して、下締をして、と色々着付をする調子々々に紅入の友禪の長襦袢の袖が、ちら〳〵と姿見に。

「あのう、ようく氣を付けて、しとやかにするんですよ。」と後で猩紅色の地形に龜甲を織出したのへ、白地で鶴を染拔いた厚板の帶をしよい帶に結んで下さる。母樣は何處までも、赤ん坊の樣に、お雜煮を祝つて、お屠蘇を祝つて、さうして十七になつた私を、案じて下さる。帶止をまはして下すつて、前でパチンと止めて襟を直した時、前へまはつて、前髪を一寸、御自分の櫛をぬいてなでゝ下すつた時、乳の香がぷーんと鼻を掠めた。懷しさの餘り猶も強くかぎました。母樣は煙草を召上るので、其御息は常にお乳の香が致しますの、だつて私にはさう匂ひますもの。

もうすつかりお支度が出來たので、母樣に御挨拶して、ボアーを卷いて、番町のお師匠樣まで、一散に走らせた。玄關を出る時、小さな聲で、「お美しいことやね、ほんまに」としみ〴〵さゝやいたのは、伯母樣がよこして下すつたといふ大阪ものゝ光。お世辭だかも知れないけど、まんざら惡い氣持もしない。一寸、澄子樣の邸宅へ寄つて見たら、「只今直前にお出ましになりました。」と、おや、もうそんなに遲いのかしらと、私のは金時計ぢやないけど、パチッと開けば、十時に二十五分間がある。大丈夫と安心して、音もなう、すらすらと走らせてゆく。どこかで凧のうなりが長閑に聞える。やがてお師匠樣の御門まで。玄關には、もう少なからず、華かなのや、燻んだのや、落付いたの、粹なの、小さいの、大きいの、凡て婦人方の御下足の面々、今日のお供をほこり顏に、ちやんと揃へてゐいであるのが、何だかこうちんと濟した樣にも見える。お座敷へ通つた時は、大分皆さんがおそろひでした。

「皆樣お早うございます。」とそれからまだ御目にかゝらずに居た方に、「明けまして」を、恭々しく、申し上ぐるなど、暫時の賑ひ。私の後にもまだ二三人。總勢で十八名ばかり。こゝのお師匠樣は、さう澤山

お弟子はおとりにならない。餘程の名人ださうで方々からお頼みがあるのですがよく〳〵の事でなけりや、お斷はりになる。私も伯母が此のお家と懇意な所から……表の方で、何も敎へるのを以て、どうのこうのとおつしやるのぢやなく、唯ほんの御慰みと申していいのです。あの餘ほどお財産家ださうで………。



まあ皆様のお美しい―至で、大空に輝くお星様を見るやう、目うつりがして……と其中でも輪廓の正しい色の浮出る程白いのに、夢二式のお目、おなんど白襲に孔雀の尾を織り出した絲錦の帯は、すつくりお似合、すらりとしたなで肩の澄子様。つとよつて、「澄子様、一寸上りがけにお寄り申したら………。」

「あら左樣？……まあ失禮致しました。」

「どう致しまして……。」

「昨夜はお華がでしたこと。すつかり照代さまの御手並には感服しましてよ。」

「あら厭な。澄子樣こそ、どうしたらあんなにはしつこくお手がまはるでせう。先んずる者は人を制すですつて。」「おやとんでもない所へ。おほゝゝゝ。」と袖をお口元へ。なる程をかしな所へ附けたものと、自分で可笑しくなつて、共におほゝと笑つてゐると、お師匠樣のお出でがあつて、奥の間へとみんなで續いて立つた。

多人數ゆゑ廣間。正面の床には、梅が枝に月の軸、緣變らぬ雄々しき松と竹とがゆかしげに活けてある。まばゆきばかりの金屛風を後に、づらりと並んだ花の數々。お師匠樣はと見れば、ねずみらしい、お重ねに黑縮緬の御羽織、白襟が殊に目立つて、お品よくお若くいらせらるゝ。今だにお獨りの身とは、さてもとりどりの噂があれど……チーン〳〵と音してたぎつてゐる茶釜のわきに御座をお取りになる。一應の御挨拶があつて、さて、

「お順にと」仰せがある。

先づ、先頭第一にお初めになつたのは、淸水の奥さん、お濃茶の方……すらりとした姿はその丸髷にうつゝて、角もなく、しなやかに、淀みなく、さうしてずん〳〵お手が運んで、茶筅をまはしてなつめのわきへお置きになつた時は、ふうわりと細やかに盛り上つた薄綠の泡、流石は御手並、感嘆の外ありませぬ。皆樣の視線は奥樣に集つて、一つのまじろぎだにせず、靜まりかへつた。お客樣は益田の奥樣。やがてしまひ終つて、お次ぎと出る。君子樣はお立ちになつた。つと胸を張つて、そり身になつたスタイル。幅廣のホワイトリボンでとめたマーガレット、ハイカラ美人の名は高けれど、あつたらお鼻が谷間の梅とは……おすそさばきも爽やかに……、次は法學士令妹、幸子樣、桃割姿笑を含むかぎ目と、頰の笑靨は此の君が誰方にも愛せらるゝ資。別して兄樣のお友達には！……し

つとりと落付いて、おやりになる樣は實に秀麗とも何とも……。

嗚呼その次は私、母樣のお言葉を思ひ出して、秘かに胸の躍るを覺えた。そして、幸子樣が何卒おゆるりと念ずる間も、胸のどめきの靜まらぬに……つと立つて、紫鹽瀬の袱紗はさんで皆樣に一禮し、水こぼしを左にしづ〳〵と足を運んで居直つた。

取る手、引く手も一一胸にこたへて、袱紗さばく音も小氣味よく



それでもどうやらかうやらお茶が這入つて、進めて、向き直つて茶巾を絞る時、茶釜の前の所爲か上氣したやうに、頰のほてりを覺えた。

「召上つてをしまひ下さい」といはれたのを幽かに耳にして、やうやうしまつて、ほつと一と息して坐につけば隣りなる澄子樣、

「お美事なものごし……」と浴せらる。言葉も出ずに私は唯、白い眼してほゝ笑んだ。

はあ御盆立てを致しま

したの、薄茶の。次なるは澄子の君、思ふ樣仇をとつて上げやうと、一生懸命で拜見する。總飾りをおやりになつた。待ち構へて、さん〳〵仇をうつておあげ申しましたわ。恰度、澄子樣の所で正午でしたので、ちよつと休んで、御膳が出る。食後に四方山のお話やら何やら、お師匠樣よりの御批評のやうなお賞め詞がありました。ひき續いて、お次ぎ〳〵と、お棚の無いのまで、小さな讓ちやんの、袱紗さばきまで、御覽になつて、いよ〳〵もつて、お茶をしまひになりました。

時はもう黃昏に間近い頃、お師匠樣の改まつてのお詞のかず〳〵伺つて、お暇乞ひ致しました。

家に歸れば母樣が色々とお慰め下すつた。着更へして、机によつた時は、氣づかれがした樣に、うんざりした。

空には星が輝いて、梢を渡る風は身にしむやうに、何處からか尺八の音が、ほらう〳〵と、あゝいゝ音と思つてると、遂うと〳〵となつた。

西洋は妻の化粧

西洋では日本と反對で子供の中は決して白粉をつけない頭髮も極く無造作にリボンも黑色で殆んど極まつてゐる、着物もそれに準じて質素な色合であるが、婚禮をして人の妻となるとそろ〳〵粧飾を始むるのである。それは何故といふのに若い中は飾ら無でも天然の美が十分に發揮して居る、けれども年を老るに隨つて如何なる美人も美を殺がれる事は免かれない、殊に若い時と反對に年を老ると交際といふ事が頻繁になつて多くの人に接しなければならぬ、その時に汚なく垢れてゐたならば交際も圓滿に往かないから少しでも綺麗になるやう美しく見えるやう化粧に浮身をやつす事となるのである。それ故粧品の發明、美顏術の新案新式と每日のやうに廣告が競はれ近頃は又汽車旅行其他人の宅へ招かれた折の化粧用として顏を洗ふ代りに拭く水が出來て居るこれは化粧を直す時、一時拭き取つて新たにすることが出來るので誠に調法である其外香水で身體を拭くとか、シャンペンで嗽をするとか葡萄酒に入浴するとか牛乳浴をするとが實に贅澤なこと想像の外にあり。

京城の社會觀察

朝鮮人の日常生活

高木鶴子

去年八月の末、我帝國は韓國を併合して之を領土の一部とし、其の名稱を朝鮮と改めましたので、此の半島に住める、千三百萬の民衆は、新に、我深仁厚德なる天皇陛下の御惠澤に浴することゝなりました。特に、私は此事の行はれた當時、親しく其顚末を見聞することを得ましたのを、無上の光榮と存じます。其後内地の新聞や雜誌に當時の事や、朝鮮の今昔談は、大分掲載されましたので、今茲に改めて御話申上るにも及びませんが、私は只私の實驗した日常生活を少々申上げやうとおもひます。

△溫突の構造

朝鮮の氣候は大陸的で内地よりは、寒暑共に甚だしく、且、晝と夜、朝と夕とは著しく溫度に差があります。一日の内に寒暖計が二十度も昇降することは珍しくありません。又同じ季節でも、氣候の激變があります、俗に三寒四溫と申しますのはそれで、寒天が三日續けば、其後四日は大變暖かであるのをいひます。そして其變化は冬季に殊に正しく循環しまして四溫に當る日は寒中でも春のやうに暖かですから、三寒の日に膚を劈くばかりの嚴寒であつても、四溫の日を期待して耐忍して過されます。嘗つて、學校で先生から朝鮮には三寒四溫といふ氣候の激變があるので凌ぎ易いと承つたのでしたが、私はそれが事實であることを確めました、又其節朝鮮には溫突がある溫突は下から火を焚くものであるとばかり思つて居て、果して如何なものであるかしらんと、いろ〳〵想像して居ましたが、百聞一見に如かずで、當地へ參つて見ればよくわかりました。日本家屋ならば床下に當る處は、全體粘土と石で疊み上げ、三四條の溝を設け、其上、即ち床板に當るところに一面に平き石を架し、而して、其上

面一體に粘土をぬり、溝は兩端で一緒に合ひ、其一方で火を燃せば、焰煙は各々溝を通つて他方に出づるやうにし、土床の上には油團を一面に張りつめてあります、大抵焚き口は其の室の外側に設けてあります。西洋竈を地下にきり下げて設け、其烟突を床下に通したこと丶想像遊ばしたら　焚き口の工合はそんなものです、それで焚き口では、御飯をたいたり、お菜を煮たりすることも出來ます。さうすれば大さう經濟です。烟が通ると火氣で床全體が暖かくなりますから厚い蒲團はいりません、薄い蒲團を敷いて置けば暖かで〱冬を忘れるほどです。しかし慣れない間は暖か過ぎて頭が痛みます、慣るれば外へは出られないほど結構ですから、朝鮮人が怠惰である原因の一は溫突であるであらうといふことです。その點からいふと日本の炬燵も同じ事、私も確にさうだらうと存じます。

要するに朝鮮の冬は溫突があるから、私ども內地人も苦しまずに凌ぐことが出來ます、夏も三寒四溫がありますから、今日は暑いと感じても、三寒に當る日になれば暑さが減じますし、一日中にも暑いのは、晝間二三時間で、朝と夕と夜とは涼しいのですから、大變暮し易うございます。熊本や馬關等の夏よりは、はるかに暮し好う御座います。

△物　賣　り

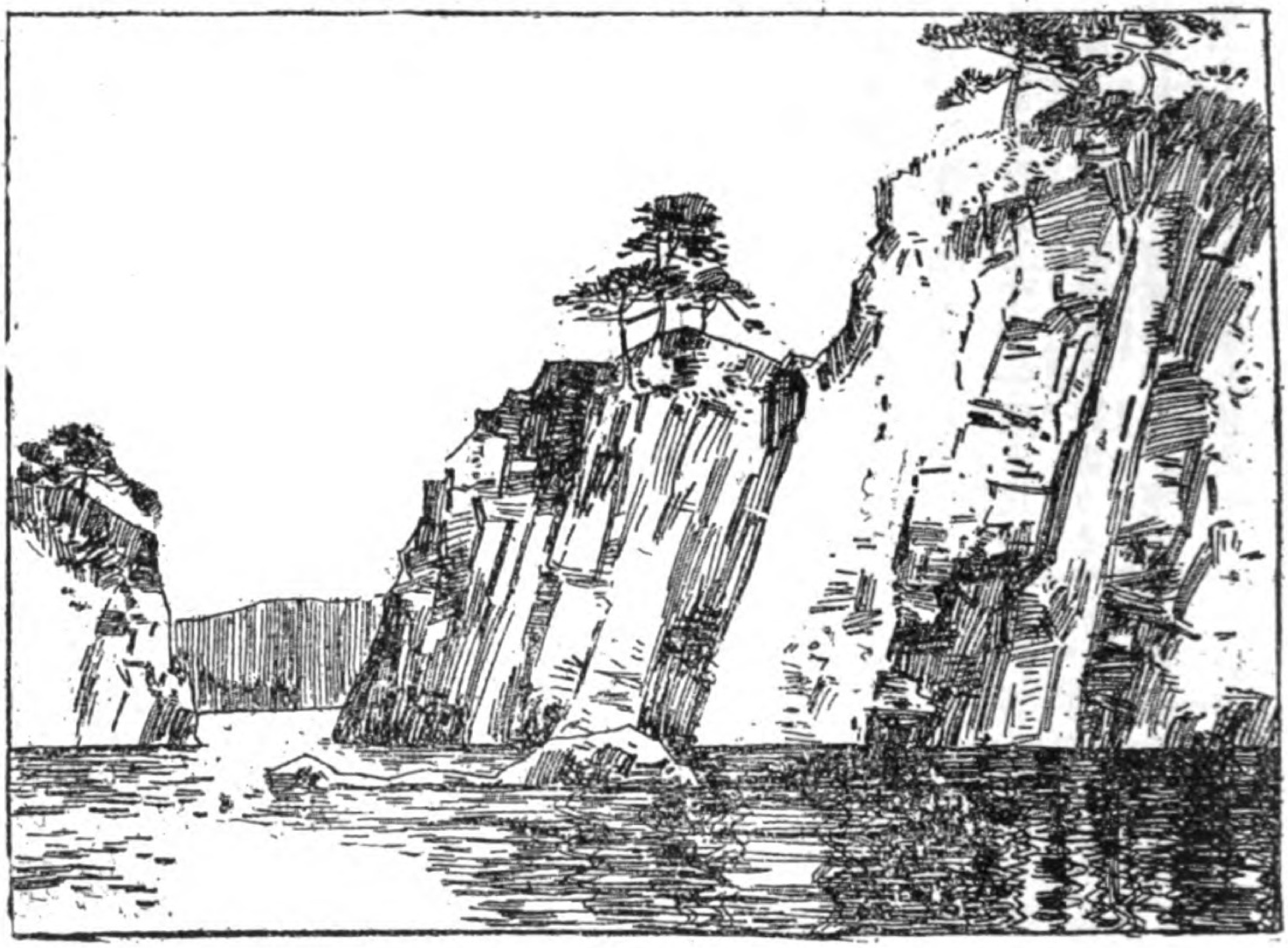
朝鮮人は朝鮮語を話しますが、京城の朝鮮人間に日本語の普及して居ることは驚くほどです。特に物賣りなどは必要上、なか〱うまく日本語をあやつります非常に記憶がよろしいので一度ならへば、よく覺えて使ひます。彼等は野菜や果物等商品の名は日本語で習つたものを使ひますが、「おかひになりませんか」と、いふやうな語は朝鮮語でいひます。內地人もそれ位の朝鮮語は、直に覺えますので不便はありません、例へば朝鮮人が、

「小芋サリヨー小芋」とか、

「栗サリヨー栗」とかいつて來ます、

買ひたくないならば「アンサ」といへばよろしいの

土佐宿毛海岸の奇勝



です、これは「買はぬ」といふ朝鮮語です。買ひたければ、「オルマヨ」といひます。「いくら」かといふ事です、朝鮮人は升とか錢とか單位の稱呼は日本語を覺えて居て「こいも一升二十錢」と答へます、「高いからアンサ」といへば「いくらなら買ふ」といひます、「六錢なら買ふ」といへば、朝鮮人は大におこりつゝ門の方へ出てゆきます、行つて了つたかと思つて居ると、又入つて來て「まけた」といひます。私ははじめ買はない積りでやすくつけましたのに、こんなにまけて賣つて行くのです、朝鮮人はこんなに三倍も四倍も高値をいつて來るのですから、十分其眞價を知つてまけさせて買はないと、大損をします。不都合なお話ですけれども、何事も草創の際ですから致方がありません、日鮮人の會話もをかしいでせう。

△家　屋

京城では内地人の住んで居る町は家屋も大くて立派ですが、朝鮮人が住んで居る町は道が狹隘で家は矮小

で、誠に見すぼらしいものです。しかし朝鮮式の建物でも、宮殿や、官衙や、官吏、並に元の貴族の家は、隨分宏大で屋根も瓦葺であつて、一般平民の家屋の中に異彩を放つて居ます。元の貴族即ち兩班の家はひろく、周圍に高さ丈餘の墻壁を繞らし、大、中、小の門三つ四つを設け、門から家屋までの間には石疊の敷道があります、構內の周圍には長屋がありまして、其處には零落した親族や、家隷（めしつかひ）が住んで居ます。門に正面して母屋があります、主屋の中央部は最も廣い室で、こゝは專ら應接や執務のために供してあります、其兩傍にある室は居間に用ひます。婦人部屋は、主屋とは別であつて、主屋の後部にあります。いづれも溫突です。私の隣人は兩班ですが私共が遊びに行けば、主婦はよろこんでいろ〳〵出來ない片言まじりでもてなします。一般人民の住家は皆矮陋で、屋根は京城では瓦葺のが大分ありますが、地方では大な都會に於ても、皆藁葺です、室の大さは小さいのは二疊敷、大いのも八疊敷を越えません．いづれも溫突で屋根が低くて、窓が小いから室內は陰欝です。

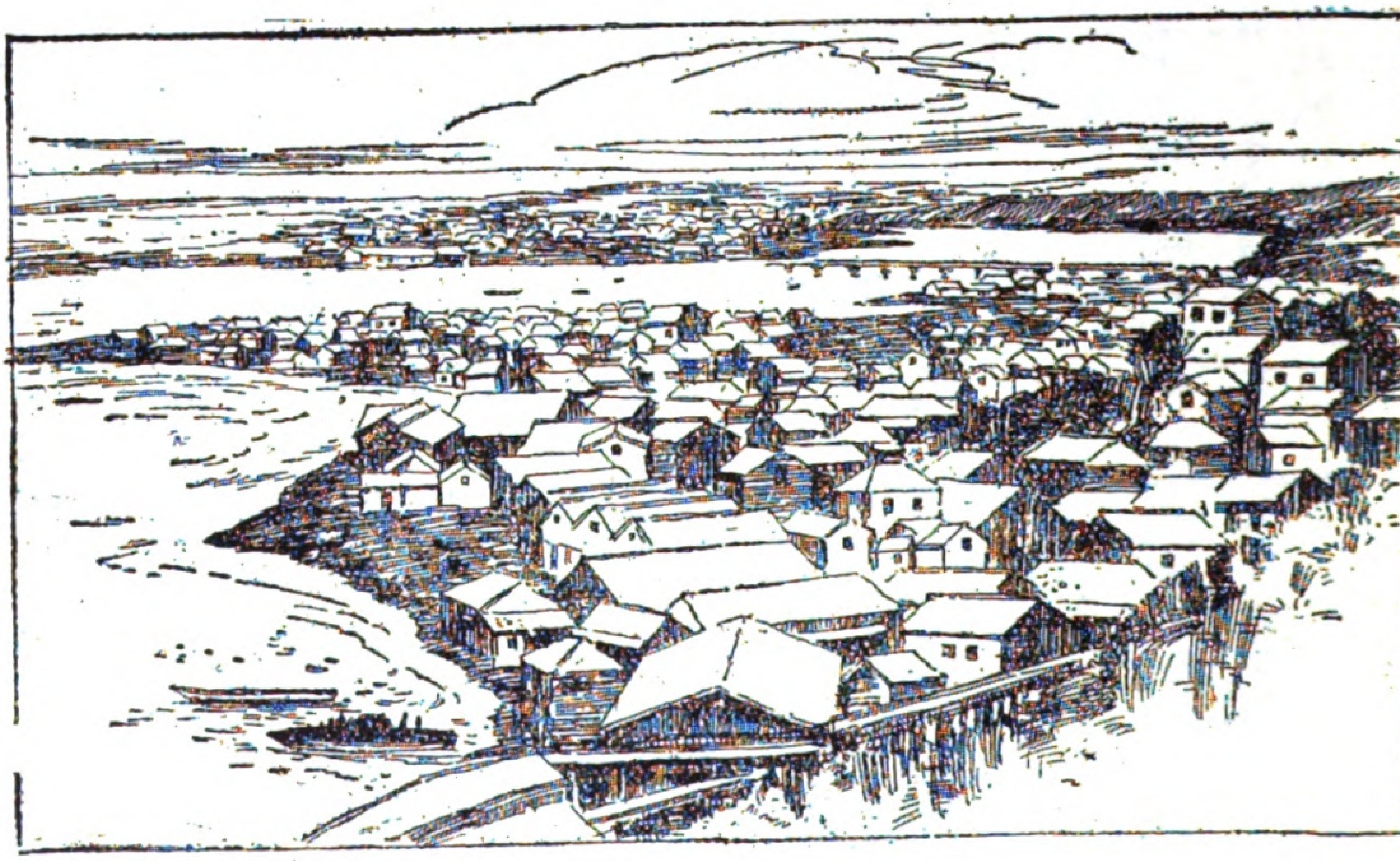
△食　物

食物は米、麥、肉類（牛、豚、鷄）野菜（白菜、萊菔、蕪、蒜、葱、胡椒）などが主です。下流の者は皆飯屋にいつて、一食、貳錢五厘といふ廉くておいしいものを食べます、茶碗は非常に大きくて、どんぶりの樣なのに、こんにやく、素麵、蒜、胡椒などを入れてその上から例の萬年スープをかけておいしさうにいたゞきます。その外フライもあれば、燒肉もあります。兩班の家では料理人があつて、種々の献立によつて珍らしいおいしいものが出來ます、其賓客を饗する献立の一例を擧げますれば、煮卵、胡麻及蜜を混じた團子や諸種の魚類に蜜を加へ、棗や松の實を入れた蒸飯、山牛蒡を混じた雞汁、煮た豚肉、雞の蒸肉、菜種油及び蜜を混じた粉米飯等であります、而して又、藥酒といふお酒を供します。それから漬物は、朝鮮人のたからといひましていろ〳〵供します、其種類の多少漬け方

の巧拙で、貧富がわかると申します。漬けかたは內地のとは違ひまして、朝鮮菜、又は大根、茄子等を二三寸位にきつて。その外、肉とか魚、とうがらしを入れてお汁を澤山に拵へて甕につけ込み、ふたは大きいのをしますから、押へつけられないで、おいしく汁とともにいたゞくのです。朝鮮人も一番御馳走だと申して居ます。

△衣服

男子の通常服は、チヨコリとパチとツルマキから成つて居ます、チヨコリは日本服の筒袖を腰の處で切斷した形の



釧路の市街

ものて、右胸に附紐があるのを結んで置くのです。パチはヅボンに似て、其腰から股に當る部分は大層裕りして居ます。而して其下腹の部分はヅボンのやうに裂けて居ませんで、縫ひ合せてあります。腰の處で帶を以て留めて置くのです、パチの最下部は紐で縮めて置きます。足には股のない足袋を穿くのです。又、パチの膝の下の處には脚絆のやうな、行纒を卷き着けます。室内ではまづこんな服裝で居りますが、外出するとか、人に會ふとかいふ場合には、其上にツルマキを着ます筒袖の着物の膝まであるのを帶をせ

ずして右胸に附紐をつけて結んだ形と想像なされば正に其れです。涼しくなればチョコリの下にチョクサムを着ます。これはシャツに當るものです。冬になればチョコリにもパチにもツルマキにも綿を入れて着ます、服色は多くの場合白色ですが褐色や淡黄色や紫色のもあります。而して絣や模様は全くなくて單一な色のものばかりです、即ち白なら白ばかり、褐色なら全體褐色です、服地は綿布、苧布が多くありますが、身分のよい人は紬を用ひます、喪服は晒さない麻布で製します。

婦人は、やはりチョコリとパチを着けますがチョコリは胸部を掩ふだけに止まります。パチの下に尙、猿股のやうなタンソツコといふものをつけます。それからパチの上に廣い單袴を着て、又其上にチマ（婦袴）を着ます。チマ等は上腹部まで上げて着てチョコリと相接して體裁よくして居ます。婦人のパチは男子のよりは稍狹くして膝の上部で脚に緊着します、兩班の女子のチマは長くて地に曳き其幅が大層廣う御座います

西洋婦人服に似て體裁が大層宜しうございます。服地は着用する人々の身分によつて色々あります。又チョコリの色は年齢によつて差異があります、新婚婦人は薔薇色、又は、暗黄色三十歳以下の女子は、紫三十歳以上の女子は、淡青色、寡婦は年齢に關せず白色、若くは灰色の麻布を着用すべき習ひです。

男子の服にも女子の服にも衣嚢がありませんから必要品を携ふるために、體の右側の帶に巾着を掛け之に種々のものを入れます。兩班の女子が外出するときは前記の衣服の上に尙、被衣を着け其被衣は頭から之を被り、顔は全く隱れて纔に兩眼を出して居るばかりです。なか／＼悠長に見えます。

朝鮮人の衣服は白色が最も多うございますから屢次洗濯しなければなりません。これがなか／＼の仕事です

洗濯は女子の仕事でありまして洗濯ソーダ水にひたした衣服を滔々たる流水の川岸の石に置いて、木の棒で、ポン／＼打つて洗ひ上げて乾した後、硬く糊を施

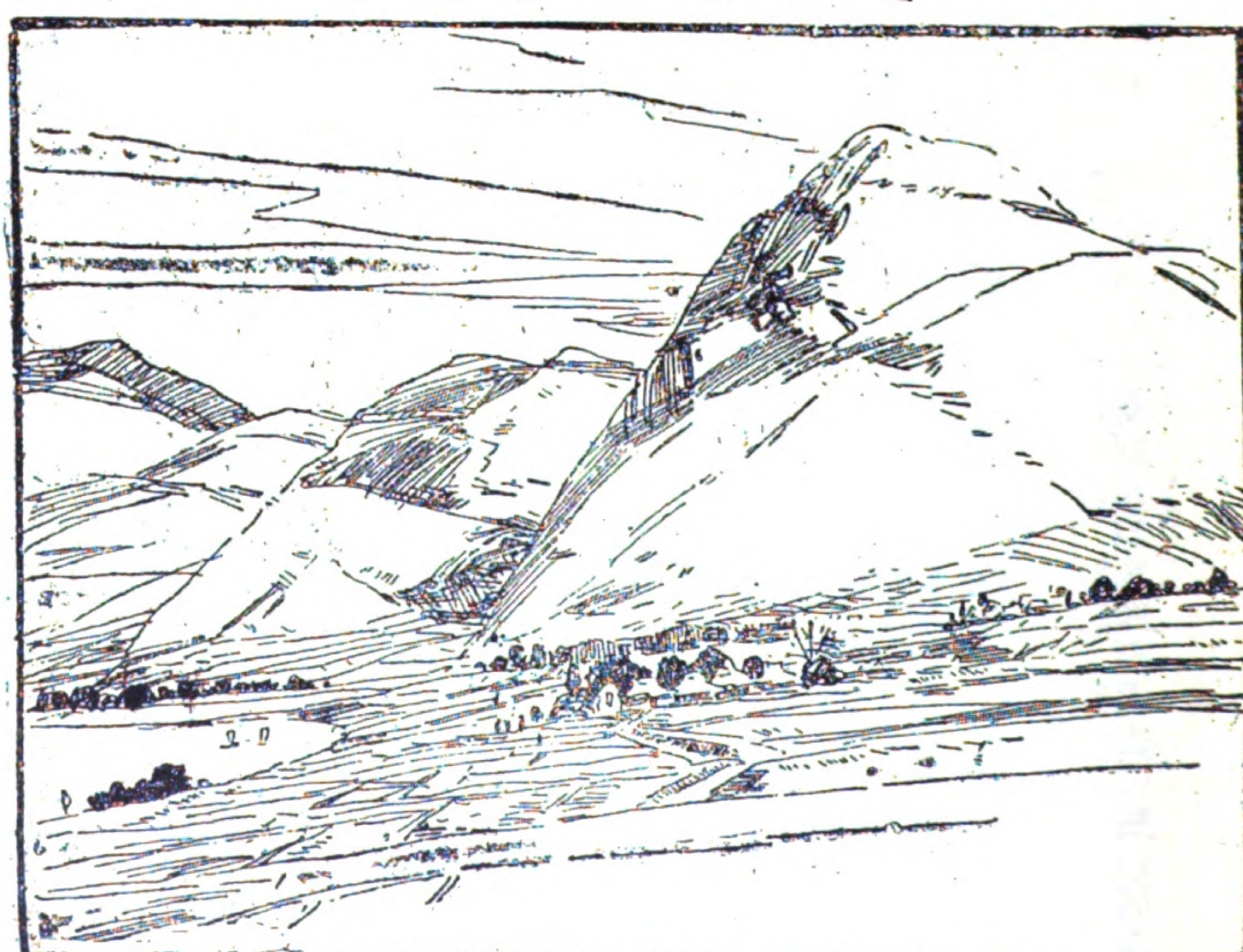
し、而して砧で打つて光澤を發せしめるのです。秋の夜ふけて月冴ゆる時遠近砧の響くのを聞いては何ともいへぬ一種の感に打たれます。

裁縫は婦人の仕事でありまして京城の様な都會の外の土地には營業的裁縫師はありません。

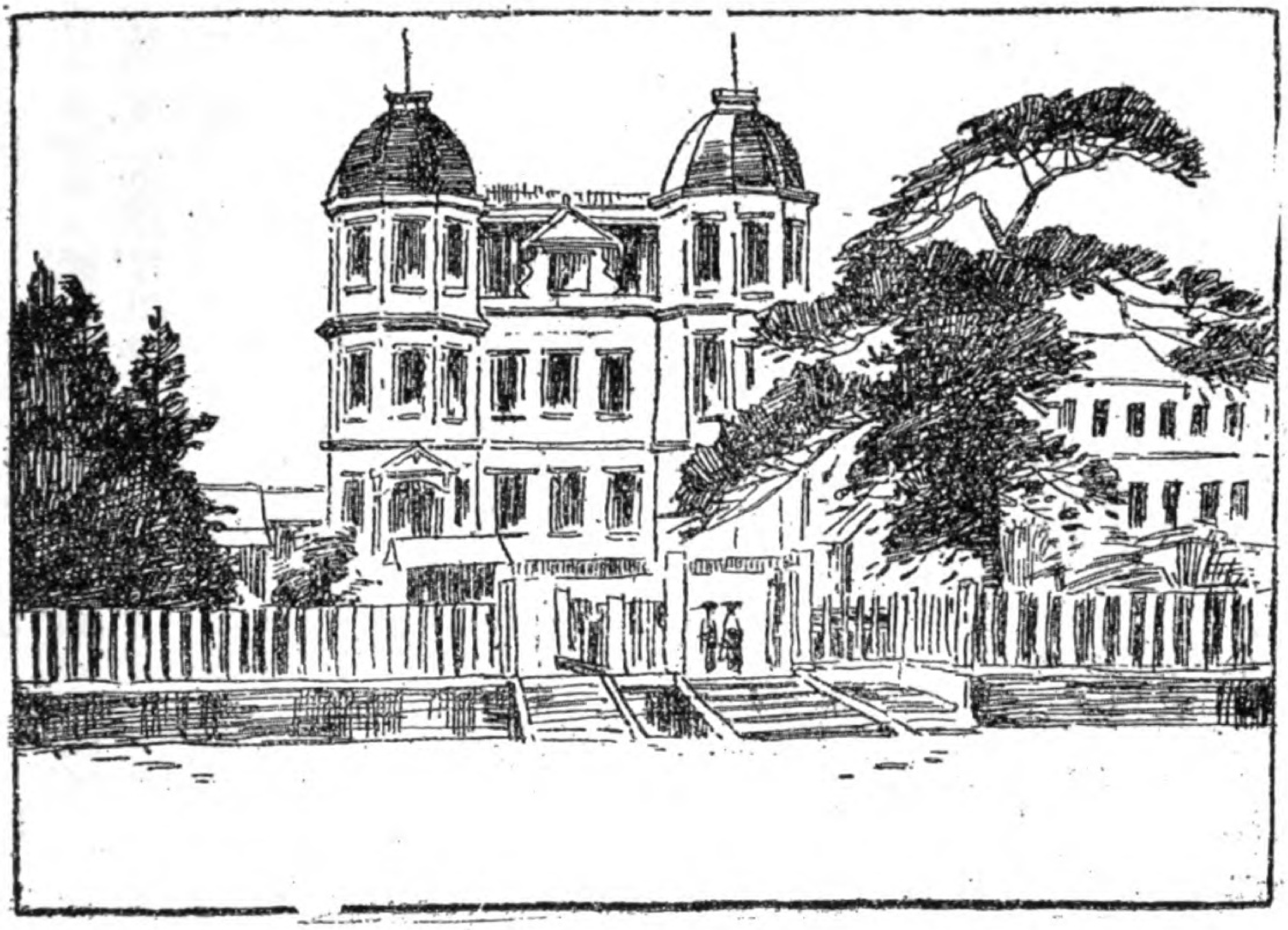
△傘及び頭髮

朝鮮には雨が降るのは、夏の雨季に多くて、他の季節には稀ですから、朝鮮人は雨天には外出せんで蟄居してゐますから傘はそんなに必要がありませんので、其製品もあはれなものです、外出の必要があれば申譯的の油紙製の雨傘を笠（カツといひ頭上に冠する冠です）の上に篏めるやうにしてあるから篏めて戴いて行きます。笠だけを保護するには十分ですけれども、首以下身體は全く濡れて了ふのも、平氣で居るのです。又別に直徑一尺ばかりの油紙製の傘で頭上に戴く様になつて居るのがありますが、これは餘り見受けません近來は大阪出來の蝙蝠傘が次第に多く用ひられて來ま

近江名勝伊吹山



弘前圖書館



した、學校、官廳、會社等に毎日通ふ人々が重に之を用ひるやうです。

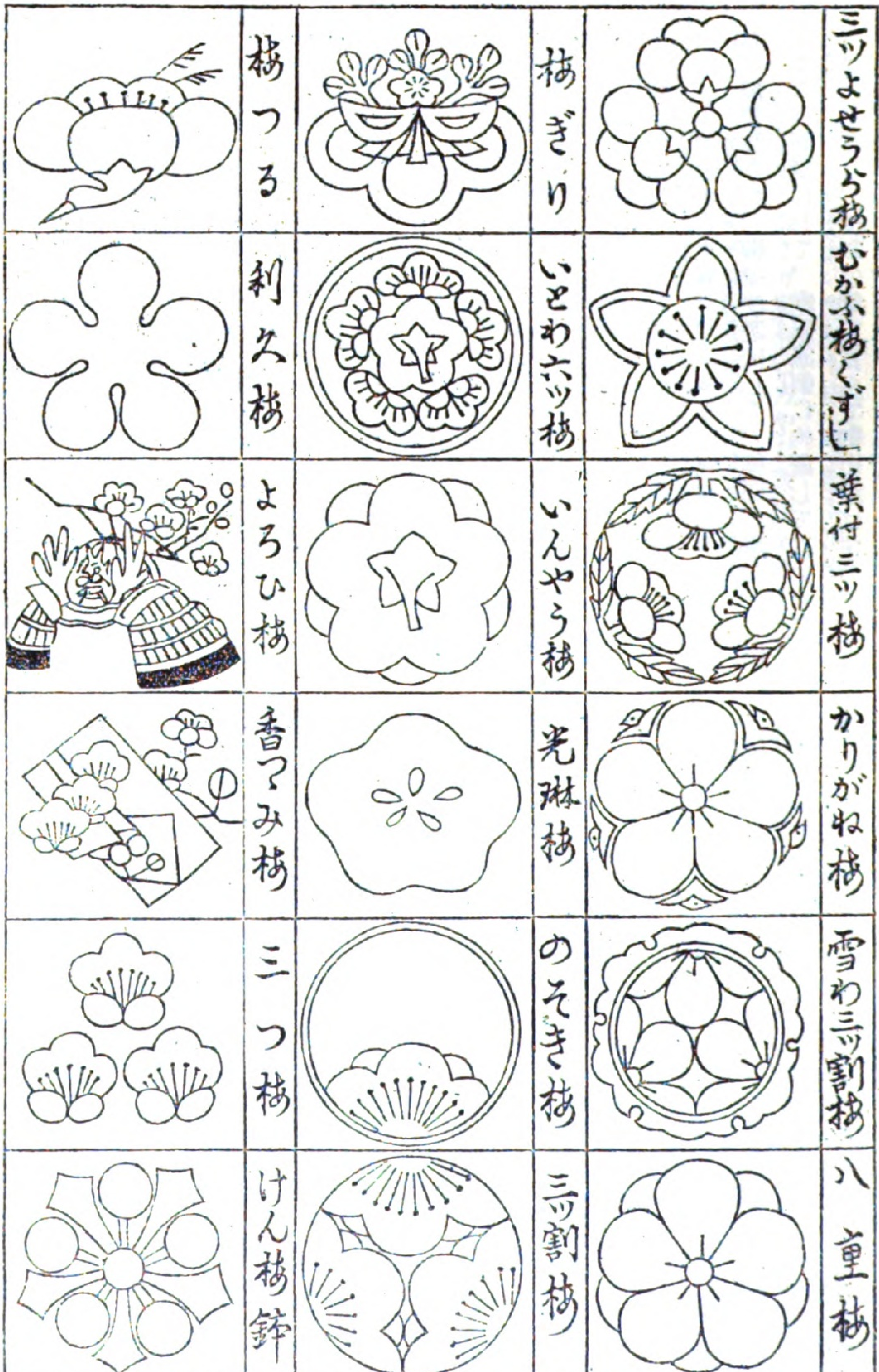
朝鮮人は統監府の治下に在る間に既に日本化して、特に學生は男は散髮で帽子を冠り、女は庇髮でかつぎを廢し、靴ふみならして毫も異としない樣になつて來ました。

それで我同胞となり、　天皇陛下の惠澤に浴する朝鮮人が、今後益々我が感化薫育を受けて、忠順誠實の民となる遠い將來ではありませぬ。

我國の祝祭日たる九月廿四日にも、十月十七日にも朝鮮人は戸毎に日の丸の國旗を掲げて、祝意を表しました。特に十一月三日の天長節には各學校、官廳等に於ては式をあげて、聖壽の萬歲を祝し奉り、市人村民に於ても同樣晝は旗行列、夜は提灯行列を行ひ大に祝しましたのを見て、私は涙の溢れるほど嬉しうございました。

私は朝鮮に居て、朝鮮人が我國の恩威に服し居ることを目擊して此上なき光榮と存じます。

梅の意匠



三ツよせうら梅

梅ぎり

梅つる

むかふ梅くずし

いとわ六ツ梅

利久梅

葉付三ツ梅

いんやら梅

よろひ梅

かりがね梅

光琳梅

香つみ梅

雪わ三ツ割梅

のぞき梅

三つ梅

八重梅

三ツ割梅

けん梅鉢

家庭教師の見たる伯爵家の奥

櫻子

私は昨春女大を卒業して間もなく、家庭教師として當邸へ上りました、クラスメートの彼これは、地方へ教師として行くもあれば、伯父や從兄に當世式知名の士を持つた果報には、直ちに新生涯に入つて、新婚旅行の夢うるはしく環文の頁を飾つた人もあつた、なかに物好きな自分は、先生の御紹介で、今の身分と成つたのでした、何が扨、學校出立てのほや〱で、三年間の寮舍生活に、見まぬ聞まねの東京辯は操つれ共、もと〱田舍者の士氣たつぷりな、無骨者の私ながら、御前奥方が、御揃ひ遊ばして、御邸行事なども出來るだけ簡單にして、家風家例に拘泥してはいけないと誠に結構な、進取の氣に富んで御出遊ばすので、どうにか御茶を濁して居られるのでありませう、と存じて居るのです。

歐米と日本の相違

歐米各國で家庭教師と申せば、名實相伴つて教師自身も學問深く、精神の修養も十分足つて居りますから預けられた子女に對しては、萬事教師といふ格で接して行くので、兩親といへ共勝手な干渉をする樣な事は無く、飽く迄も信賴し、敬意を拂つて相當の待遇をするのでございますが、日本では、家庭教師は近頃の產物ですから、採用する方でも、無學な女中を附けて置くよりか安心である、世間の聞えも惡くはない、位な考へで、一種の雇人同樣の考へを以つて居られる家も少なくない樣に考へます、殊に大名邸などは、昔からお守役とか、お側役とか云ふ者があつて、若樣姬君の教養の一部分を掌つたもので理も非もない御無理御尤で御意の儘に從つて居らねばならぬ、なかには肝癪の強い方は引搔いたり、頭の三つ位叩かれる事も聞間あるさうですが、此樣な有樣では家庭教師の職責を

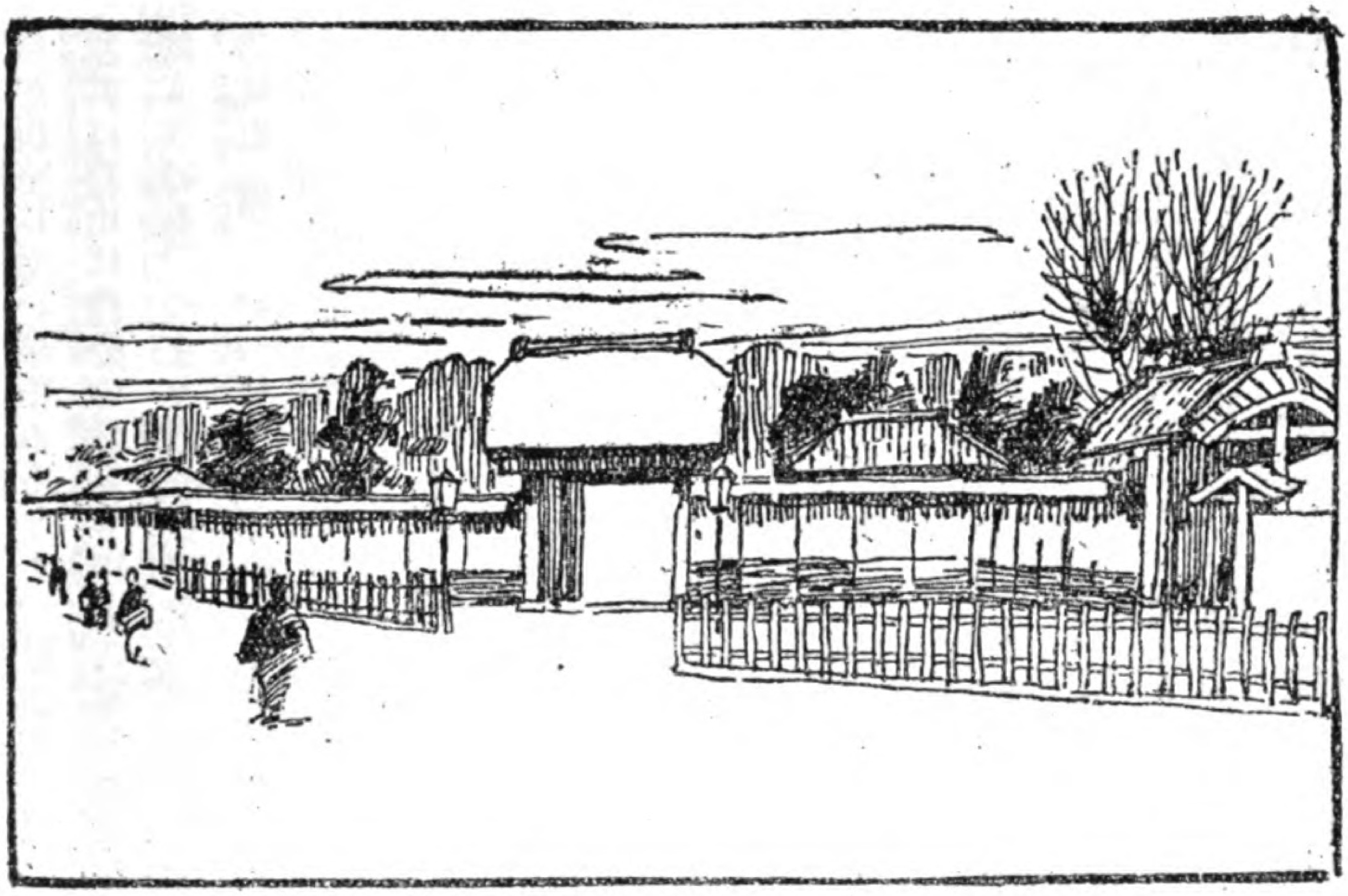
盡す事が出來にくい事であらうと、思ひますが、御臨機で私共は自由に自分の意見も申上る事も出來れば、御相談もうける、つまり家令の方や、家扶を經ずして御二方樣直轄といつた樣な定めになつて居ますのでほんとに仕合せだとよろこんで居るのです。

他の奉公人との比較

元來大名の大奥なんて申ものは、昔は一の別天地をなして居たもので、芝居で見ても局岩藤とか中老尾上、お腰元、お側役、お末なんて役名があつて、大家になればなるだけ、召使ひの數も多く、お末おはしたなんぞは奥方の御顔を拜む事も出來ぬ、位のものであつたさうですが。

　當邸なんぞは、取締の老女、御小間使ひ、お針、御膳所に働く女中、合して十二人程で、比較的小人數なのであります上に、お小間でもお針でも、慶庵や御出入の商人なんぞの口入でなく、相當の身分のある舊藩士の娘とか、其知人で、身元の確實な者を御使ひになるのですから、地方の女學校を卒業した人が七人ばかりも居りますし、お針受持のお品さんは、職業學校の出身といつた樣な風ですから、無暗と理非の立たない爭論をするなんて事もなく、風儀は奥樣が殊に御注意になるので、身だしなみもよし、外々のお邸と違つてほんとに氣持ちのよい、樂しい御家庭でありますが、でも四五年前迄は奥方御里附の老女が居て、ずゐ分と昔風のやかまし家であつたのが、下つてから今の方は最初の神戸女學院卒業の方で、未亡人、なか〳〵精神の確かな基督敎信者の方でありますから、よく噂にある樣に、いびるとか意地惡とか、いふ風な點は少しもない、皆心から心服して、母さんの樣に思つて居るのです。

　或同族の殿樣が、雨後の筍見た樣に出る、私立の不規律な女學校の寄宿に、娘を入れるよりか、よつ程効果があると、評されたのは尤至極だと思ひます、で私なんぞも決して子女のみの家庭敎師でなく、つまり家庭のよき導き人でなければならぬと思へば　自



酒井伯爵邸　(小石川原町)

然と自分を愼で行かねばならぬので、よつぽど心を練る事が出來るので、よく他の家庭敎師の人からの小言に、どうも外の召使ひが傲慢でいけない、とかまるで自分共を奉公人同樣の取扱ひをする、とか言事をききますが、當邸では假りにも、そんな暗黒面は少しもないので、日々樂しく御用を勤めて行くのも、皆奥樣のお德に感化されたのでありませう。

家庭敎師の日課

と申ますと、姫樣御二方の御寢間の隣りの六疊を自分の部室と致して、一間の押入に、夜具や行李を入れて、一隅には拭き込んだ御衣裳簞笥が二棹、これは姫樣方の御平常着が入れてあるので、其上に置いてある一かん張りの手箱は、半巾や紐の樣な小さい物を入れる爲め一個宛、奥樣がお下げになつたので、並んで机本箱、これはお邸からお拝借して、我物顔に使用して居るのです。

姫樣はお十二と、お九歳つで、何れも學習院に御通

學になりますが、春迄は一人づゝお附の女中が居ましたのを、私が上つて後は、出來る丈自分の身の廻りは人手を借りないで、處理する習慣をおつけ申す爲めに女中一人・これはお附でなく私の助手のつもりで居て貰ふので、つまり、此人と二人して御食事から、お召物の事迄すつかりして行く事になつて居ります。

此部屋は表座敷の應接に遠く離れて靜かですけれ共南面は硝子越しに、お邸の花壇はもとより、早稻田の森がパノラマの樣に眼下に見えます。

此頃ですと、六時に起きて、自分の部屋で身仕度を手早くすませて、時間があれば書見でもして居ります其内六時半になると助手の女中が雨戸をくりに參りますと同時に御二方をお起し申して、御湯殿で洗面やら、お髮上やらの お手傳ひをして、御居間で御召換がすむと御代々樣の御佛間を始め、親御樣の許へ、朝の御挨拶に參つて御庭を散歩しながら、いろんな御話し致します。

先生此花は何科の植物といふ樣な御質問、先生又晩にも面白いお話しして頂戴な、と可愛らしい事をおきき遊ばす。

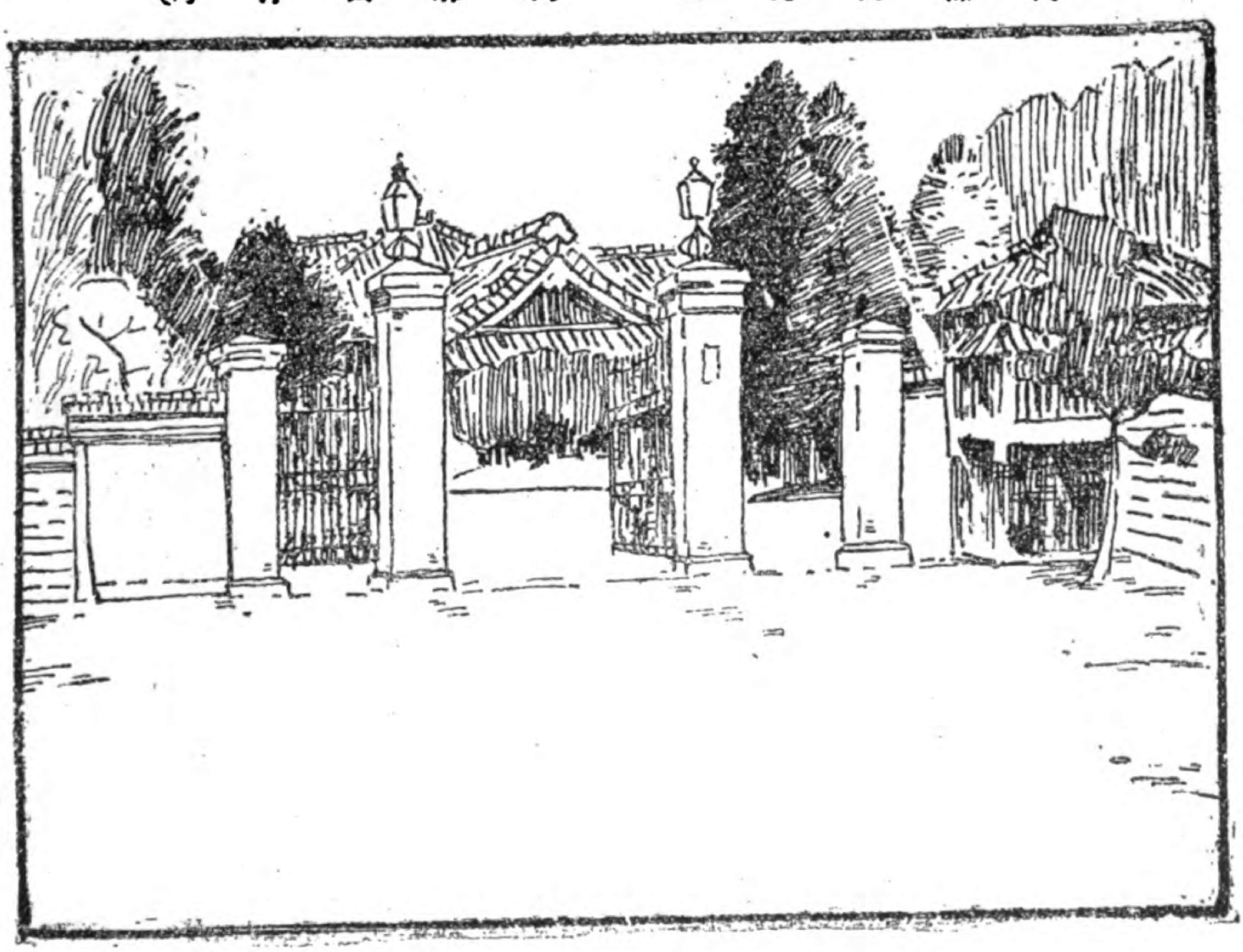
朝のお食事は、御居間で燒パンに牛乳、果物ぐらゐで、簡單におすまし、それから御車で、女中のお供で御通學になります、親御樣と御一緒に、公開の席へでも御出ましの外には、決して馬車にはお乘せ申さないお定めです。

御召物など質素なもので、却つて中流紳士の方が立派な位です、

間食は嚴禁と迄は行きませぬが、三時にはカステーラ、とかウエフワースの樣なものを、ちやんとお菓子皿に盛り分けて御上する、夕食後にも、時折淡白な物を召上る事もありますが、御二方共よく私の云ふ事を御聞入れになつて、お守りになるところは、感心ですお妹御樣の方は少々御氣むづかしい、と思ふ點もありますが、姉樣の方は誠にお立派な上流婦人としての人格を、今から供へて御出になる樣に思ひます。そして無邪氣な、さらりとした御氣分な方で、私などは却

つて、良感化を受けました位です。
午後三時過ぎにお歸りになつてから、複習をしたりする内に、お風呂、御夕飯となります、お夕飯は御家族一同、食堂へ御揃ひになつて、樂しく召上るので、私も時々御相伴致す事があります。
夜は明日の學課の準備位で、豫習は餘りにおすゝめ致さないのですけれ共、お二人とも至つて、好成績で勝氣なだけに御妹子様は、三番より下つた事は無いと受持の先生の御話しもうれしう、まして親身の御兩親樣の御胸中さこそと思はれまする。
お子様方の御不在中は、これと定まつた用はございませぬが、御召物の洗濯や、お縫物を、お貞さんと二人でする時もあれば、奥方の御書狀の代筆を致す事もあります、一週に一度は必ず、學校を參觀して家庭と學校との連絡といふ事に氣を付けねばなりませぬので、相當に用向が多く、手をつかねて居る時は無いので自分の肌着の洗濯なんか、夜分暇を見てして置くといつた様な場合も少なくないのでございます。

阿部伯爵邸（本郷西片町）

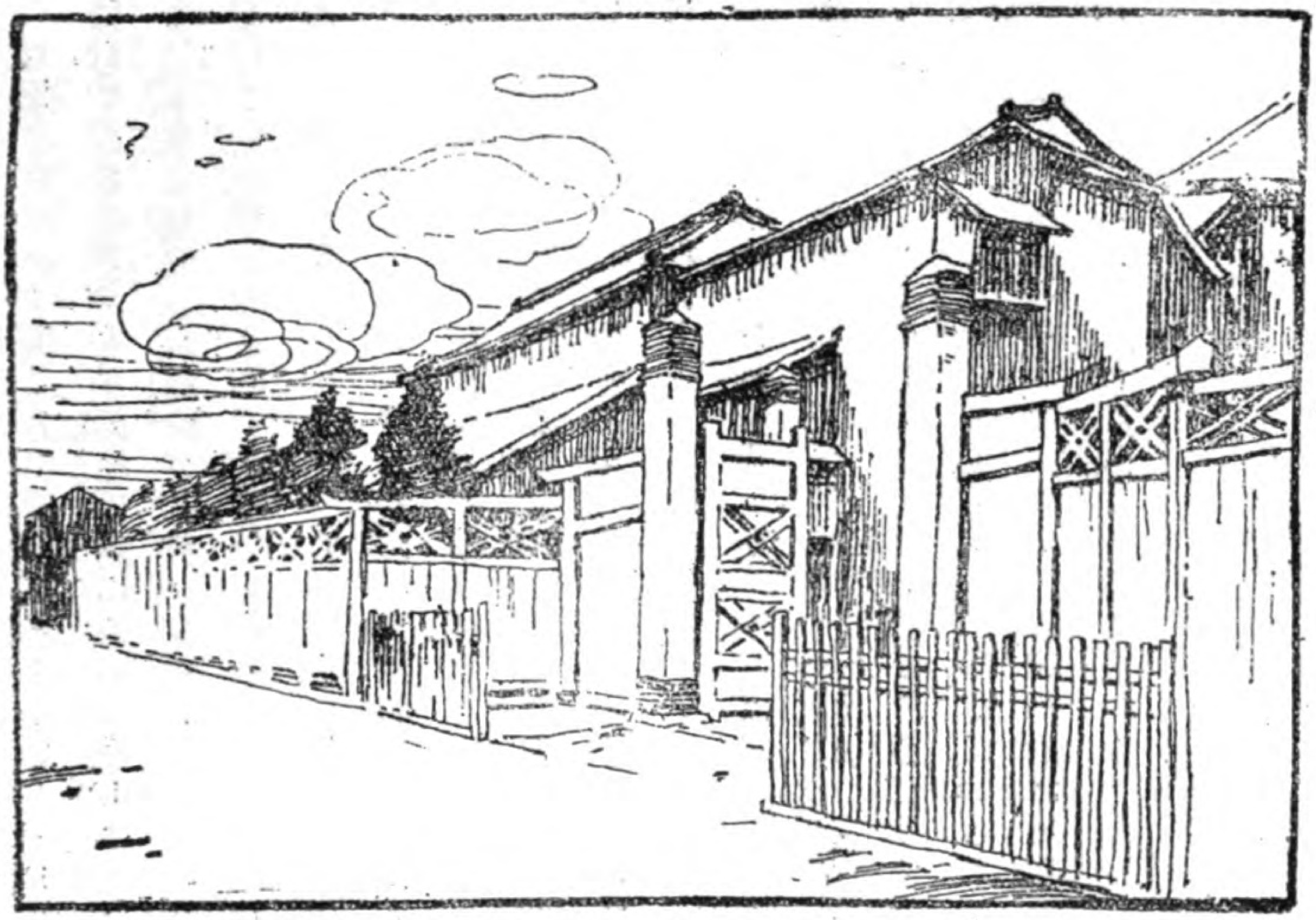


日曜日には必ず御二方に書齋の掃除をおさせ申す事にしてあるので、もう此節は別にお小言を申さなくとも、丁寧に整然とお掃除が出來上る樣になりました、そして先生のお机もして上るなんて一輪挿に白菊を差入れて下さる事もあります、時には終日御母上樣のおそばで、美しい小切れでお人形のお衣服が出來たり、又お客間のピヤノがなる事もあります。

又時には御揃ひで御親族を御訪問になる事もありますけれども、我々の樣に手輕には參りませぬと申すのはあちらの皆樣にもそれ〴〵御土産がいります、お次一同へも菓子とか御壽司とか、時には封金で目錄をお下げになる事もありますけれ共、一體が大仰でございますから、いまはいそらと度々往來も遊ばさないのでやつと一年に二度か三度位のものでございます、下下の樣にあなたの御好物だから、紅谷の最中を持つて來たのよ、なんて風には參りかねますから。

規律の正しい内にも和氣が充ちて居る

規律が嚴重だと申せばもう兵營か何ぞの樣な無趣味な感じがいたしますけれ共、決してさうではございませぬ、御役所といふのは、表の御用向を掌る、家令家扶の詰所の事、大奥とはまるで別天地で、みだりに双方が立入るといふ樣な事は出來ませぬ、廣い屋敷の一間々々の拭掃除もちやんと受持が定めてございます箒や、バケツ、雑巾、に至る迄皆それ〴〵のがきまつて居て箒のさきに毛一筋、塵一つ付いて居ても叱られるといふ風、出番と非番は一日交代ですからだらしのないお邸の樣に朝から晩迄走り廻る樣な事はございません。殿樣の御側の御用は、中學へ行つてる書生さんが御用を伺がつて、奥樣が直接に御召換へや、何かの御手傳ひを遊ばす事になつて居ますので、此大きな家族が、皆それ〴〵に受持々々を形付けてゆくのでありますから、いつもきちんと手置よく、順序正しくなつ



小村伯爵邸（小石川原町）

て居ります、私共參つた當座は何だかこう餘裕のない箱詰になつた樣な氣持が致しましたが、これが却つて勤めよくて、月に一度、終りの土曜日の晩は、殘らず御廣間へ寄つて皆樣と御同座で、いろ／＼な御話しをうかゞう事になつて居ります。

先日も御出入の淺田醫學士が冬向の衛生に就てといふ題で、有益な講話がございました、無學な者にもよく呑み込める樣な、時には御前御自身にも、適切な問題で御説話を遊ばす事もあります、それが終ると御菓子を下さるので、殆んど無禮講といつては、語弊があるけれ共、打とけてお互の缺點を注意し合ふことなど誠に結構な御催しがあるので、お琴や長唄の出來る者は、奥樣の仰せでまつかな顔で、餘興をすれば、男子側でも自慢の琵琶歌、吉田の一本槍といはれて居る、城山をうなり出す、詩吟も出る、といつた樣なにきやかさ。

家庭教師の待遇

此事に就ては、お友達などからよく尋ねられるのですが、それも舊藩士の娘とか、或は懇意に出入して居る人とかといふ、緣故のある方もありますから、一概には申されませぬ、又其お邸に依つていろ〱でせうあの毛利家や鍋島家、前田家などは、ずゐ分よい待遇を遊ばす、と傳へ聞て居りますが、私は決して物質的の待遇がどれ程立派であつても、自分を信じて用ひて下さらないで、ほんの雇人同樣に、お子樣方を放任されるやうな御邸は、失禮ですけれども家庭教師をお置になる効力はなからうと存じます。

只今では十圓以上、二十五圓迄が普通であらうと思はれます、中元だとか年末とかには、相當の賞與もあるのが例になつて居ますから、そんなに苦しくはないので、自分さへしまつすれば、貯金の少々位ゐする事も出來るのでありますから、婦人の職業としては、安全な高尙な仕事だと思ひます。

然し當家の樣な結構な御邸ばかりもありませんから十家あれば十種で、一失一得何れとも斷言する事は出來ませんが、只人を敎へ導くといふ事ばつかしでなく無限に進步して行かねばならぬ自分の德性と申せば生意氣ですけれ共、身の爲めになり、良感化を與へ與へらるゝ樣な、御家庭を探し求めるのが大切であると存じます、私は先生の御紹介で、はからずも結構なお邸へ上つて、趣味深く樂しく朝夕を過して行く事の出來るのはほんとに幸福だと感謝して居ります、

御邸では迎年後早々、伊豆熱海の御別莊へ御出になりましたので、私も御供を致し、皆樣と樂しんで此の新春を暮しました。



耳なし針

うきぐさ

◎或友人に不幸ありてそのお通夜に赴きし夜半なりき。

集りし人々の初めは故人の逸話など語り合ひしが、話題は何時しか江戸時代の武士にうつり、中なる通人が家畜類の飼養法より昔の花柳街の噂話まで持出しぬ。

そは未だしもなり、若き學校出た許りの友の未だ定まる職業のなき者の、室の一隅に一團となりて如何にせば金にありつかんかとの詮議。

あゝ死せし友は何とかおもはん。

◎短慮なる者之れを江戸ッ子と云ふ。

忍耐せぬ者之れを江戸ッ子と云ふ。

早まつた事をして後では心密かに悔いる奴之れを江戸ッ子と云ふ、尤も悔いて自らは痩我慢して居るなり。

氣まへのよきもの之れを江戸ッ子と云ふ。

◎曾て入浴の際に後より入り來りし三十盛りの江戸ッ子の流しをとりしが、猶二三人先口のありて一人の番頭手が廻らず、三人目に此江戸ッ子の番となりしが、

「もう、不要えよ!!」

と一言、ざんぶと許り浴槽に入りて走るが如くに上りぬ。番臺には年若き湯屋の娘の見張りしつゝありしが見兼ねけん、其若者の歸る時、

「どうも濟みません、之れをお持ちになつてと先に受取りし流しの賃錢を渡さんとせり。若者は下駄をつッかけ。

「えゝ、ようがす」と入口の戸をピシヤリと手荒く閉めたまゝ。

◎寒き一夜の事なりき。新橋停車場に人を迎ひに行きて入口にぶら〳〵する時、其主人公を待ち合する馭者と馬丁とは語りあひぬ。

「未だ來ないせ、遲いぢやないか、此寒いのに」

◎病の床に臥したる時、幼稚園時代の先生で、今は去る人の妻となれる婦人の見舞はれけるが。

『眞實に大事にして下さいよ。』と云はれし時には身にしみて有難く思ひたりき。

◎友人の結婚して披露の爲め招かりし時二十の新夫人は頗るはにかみ居たりき。

初對面の挨拶もなし得で代りて挨拶の言葉する母なる人の後に隱れもぢ〳〵しながら辛うじて無言にて幾度か頭のみ下げたりしが、五ケ月の後訪ねては見違へる程の挨拶振り、主人入浴の折にて新聞を丁寧に疊みて前に差出し呉れたりしが、猶未だ話のお相手はなし得ざりき。

◎「流れ河にて尻を拭ひたる心地」と云ふ事あり。祖先の墓前に香花を手向けて拜する時、予は胸裡に一點汚塵の存するを思はず、去るに望んで云ふべからざる一種の快感を覺ゆるを常とす。

◎衆座の中にて自身が尤も美貌なりと認られ或は尤も美裝し居ると自覺したる時、云ひ知らぬ誇りを感ず。そは果敢なき婦人の虛榮心に外ならず。

◎毎日の如く吾が家に遊びに來る男の子あり。兄は十二、弟は九ツ。一日家に祝ひ事ありて少しく晩酌を傾けしが、其翌日より二人は遊びに來らず、何故と怪みて問ひたりしに、『酒をのむ人は基督の敎に叛くから嫌』との返事なり。彼等は共に日曜學校の生徒なりき。

◎讓步は一種の處世術なり。

◎知人の子の今年六つになれるが未だ恐いと云ふ事を知らず。暗闇にてお化と云ひても平氣なり。その母は子に恐いと云ふ事を敎へたる事なかりき。

◎幼年時代には共に飯事もして遊びたりき、お孃樣のあられもなき木上りもしたりし女の一人は女子敎育家として、他は軍醫夫人として共に令名あり。



時計式炊飯法

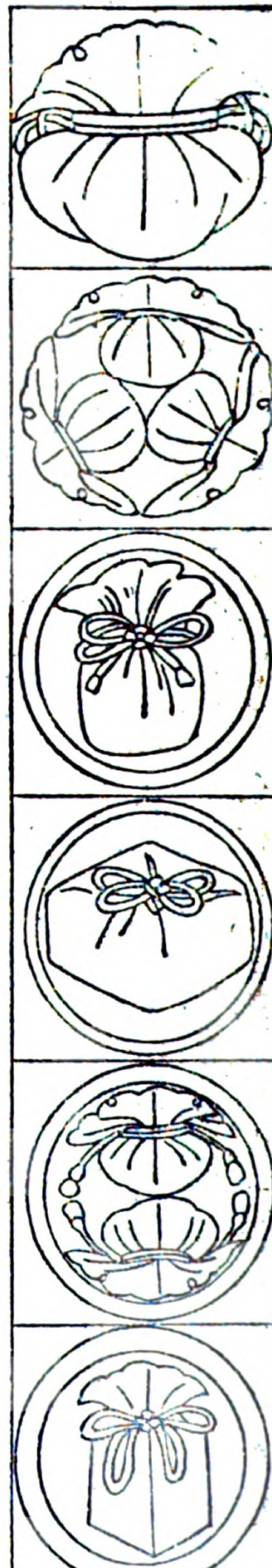
今日此の日常い大切な食物を作る事を我國では下女や下男に委せる方が多いが、割烹は人間の幸福の素因を爲す者で、衞生と快樂と經濟と云ふ事が之に伴つて來るのですから、元來ならば決して人委せに出來べきものではないと思ひます。此心掛けを以て主婦自から手を下してこそ一家の幸福和樂は増すのでせう。

地方の人は動もすると、田舍では材料が乏しく、強ひて得やうとすれば不經濟になるから、從つて割烹法に據る食物は不必要であるといつて居るやうですが、是は一を知つて二を知らない言葉でせう。割烹は材料を擇びません。同じ材料を調理して普通ならば不味いものを旨くし食べさせるといふのですから、都鄙の如何を問はず調理法は主婦の必らず心得ておくべきのもと思ひます。

飯の炊き方は百軒が百軒決して同一ではありません。例へば水の加減の取り方なども、或は指の中程まで水が浸る迄で入れる方があれば、手を押し付けて手頸までの水加減を適度とする家もあり、又は柄杓で加減し杓子で寸法を量つて加減をするなど、殆んど不得不要領の行り方ばかりですから、從つて同じ家でも昨日と今日とは炊いた飯の加減が違ひ、前日は胃の消化を害する强飯同樣のものが出來たかと思ふと、次の日には粥のお爺さん見た樣なものが出來上ります。水加減は、冷水の場合には、指でも手でも出來る樣なものですが、火急の場合には水の代りに熱湯を用ゆる事がある。サア此時は何うしますか、杓子や柄杓が假りに無いとしたら愈々飯が炊けない譯でありませんか。ですから何うしても一通りは水加減をする方法を心得ておく必要があります。之れに就ては私も隨分苦心したものですが、有らゆる實驗上、少し注意さへ拂へば極めて無造作な簡便な方法で立派に飯が炊けるのです。それは外でもない、先づ米を、炊く前に磨ぐのは好く無い、晝食なら朝洗ひ、晩のなら晝洗ふと云ふ樣に一食前から準備し、二時間位水に浸して笊に移し、能く水を切つて置き、愈々炊く時になつたら、米一升に水一升二合の割合で釜に湯を沸し、その沸騰すると同時に、笊で水を切つてお米を入れて克く攪拌した後、釜の中央の處の米を凹形に爲し、更らに蓋を密閉し米を釜に容れた時から五分間經つた頃に火熱を取り去り、更に十五分間蒸しますと、結構な飯が出來ます。之れを時計式炊飯法と申します。舊式の炊き方に比べて非常な利益でもあり、又毫もお焦の出來る心配が無い許りか、百遍が百遍少しも變はらずに飯が出來ます。尤も前に米一升と申しましたのは、米櫃から量り出す時の一升で、若し洗ひ米のときは水加減も少くつて宜しいので、又此の時は米と水とを等分にすることが必要です。此の炊飯法の利益を擧げますと次の如くです、一　消化が容易である、二　飯がフンワリと出來て大層味が宜しい、三　普通の飯と比べて一割半もふえる、四　薪は殆んど二割方も德になる、五　飯の腐敗が遲い、六　炊く時間が短くてよい。

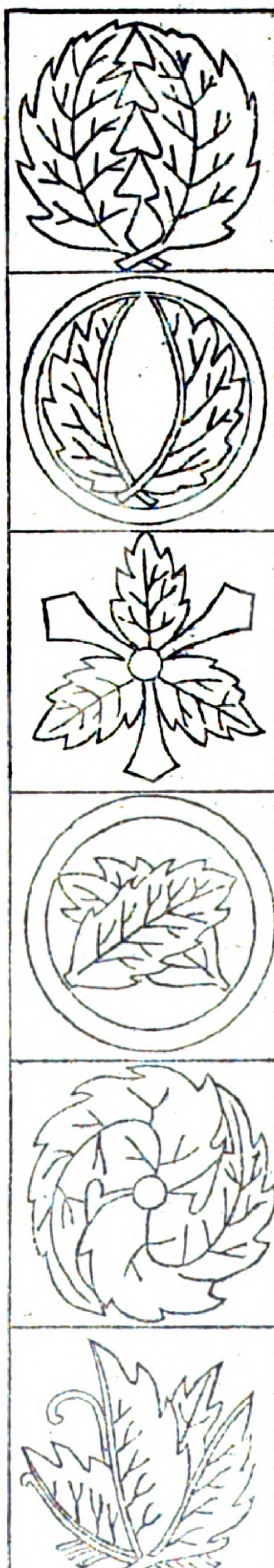
(一) 袋の意匠　(二) 柊の意匠　(三) すゞめの意匠

(一)



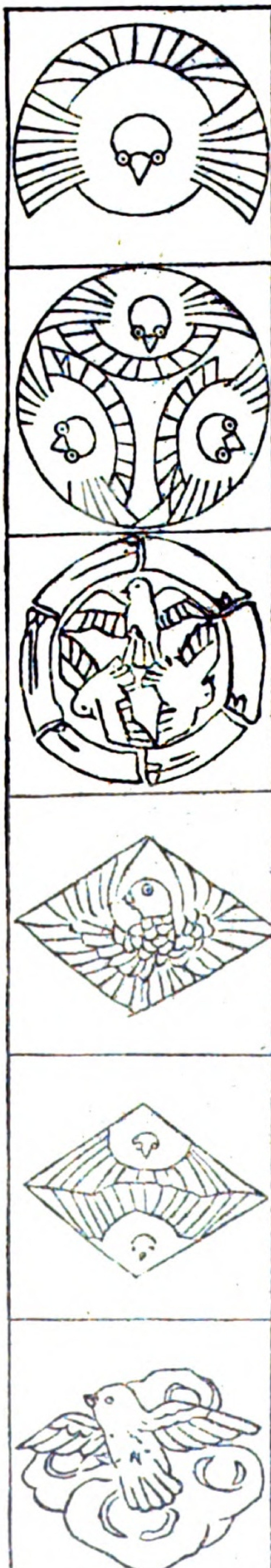
茶巾袋　三つ袋　立袋　角袋　二つ袋　丸に立ふくろ

(二)



二ツ柊　割柊　けん柊　かさね柊　ともへ柊　柊蝶々

(三)



ふくらすゞめ　三ツふくらすゞめ　竹に雀　菱すゞめ　ふくらすゞめ菱　くもにすゞめ



人生の春評判記

あまなみ

記者樣今度の靑春號（記者曰く人生の春）は近頃にないよい增刊でしたよ、あの文は私もう皆な氣にいつてしまひました、就中一番おもしろく拜見したのは、玉露さんのと「初島田の印象」でした。

△玉露さんのは――私大好、あのころ〳〵と筆の走る工合、讀でゐて誠に氣持がよくなりますよ、あの見習看護婦の石川さんが、周章てゝお膳道具を間違たあたり、何といふうまい筆つきでせう、玉露さんの眼でごらんになつた社會はどんなところでも皆美化してしまひますよ、あれがほんとの藝術家といふのでせうね。

△初島田の君は――私、これまではヒネクレ者だとおもつてゐましたのよ、今度の印象記はすつかり氣にいつてしまひました、どうも甘いものですね、稍結つた髮が夕方そろ〳〵亂れ初めて輕い哀愁を感じたといふのは、これは靑春時代の人に一度は必らずある美の印象で、恐らく萬人の心を道破したものでせう、そしてあの文は終の方が大變に揮つてゐます、もう私は一字千金の思ひで讀み耽りました。

△記者樣――紅梅さんの「春の曲」が一等でしたわね、私、ありや藝妓ぢやあるまいかとおもひますわ、文の上では無論大家のお孃樣の品格には相違ありませんけどね、私實際の場合を考へますと、あんな時にあの樣に活動して萬人の注意點を絕えず自分の方へ惹きつけてゐるほどの事が只のお孃樣に出來るわけがない矢張り第一流の藝妓の人格でせうよ。そしてあの細い觀察と、綺麗な文の綾をとつて人の感情を支配して行く主人公（お孃樣）の眉目の働らき加減は無論紅梅樣の作意が手傳ふてゐるといひ乍ら、唯のお孃樣では金輪際出來ない藝だとおもひますわ、申すまでもなく、紅梅樣と主人公のお孃樣とは全く別物で、あの評判の千代子樣が百合子樣と同一人格であるやうに考へてはいけませんよ。

△兎に角あの文は近來にない名品だとおもひます、始めから終まで二十頁、些とのたるみもなく、形容といひ、叙事といひ、取交〳〵に局面を變へて事實を寫し出した手際は却々のものだと思ひます。どうか紅梅樣此後も絕えず、變つた世界を御出し下さいませ。

女學世界の今年の增刊は貴孃の芝居ぢやあるまいかとおもひますよ。

△若草樣――の「處女時代の誇り」も一寸おもしろうございました。

△それから濱路樣の「海濱の正月」何となく氣が晴れ〳〵として、快い心持がしました、別莊などに被居て、理想の生活を遊ばす方かしら御羨ま

しう存じます。

△私は「晴れた日の帰り」を左程よいとは思ひませぬ、何だかやかましい藝術論の說法でも承るやうで、女性のなつかしみが少いかとおもひます、唯始の一頁の處ろに「男子の方が眞黒になつて働いて幸福の顏を白くして居るのだと思つて居ます」云々の理窟が一寸奇拔に感ぜられました、其他はあまり――ですが新思想とか、月並を打壞した見地とかいふ近頃の見方はこんなものでせうかれ。どうも女性のなつかしい味が乏しいと思ひます。

△内藤さんのが選に入りませんのは、もう天下萬人の批評眼が定つて、今更選者の折紙を要しないからといふのでせうか、それとも又何か外に記者様の深意があつての事か、矢張り選に入つた方が善いぢやありませんか、何だか物足りない感じが致します。

△「暫くおもて」終局がどんなになるだらうと力瘤を入れて讀みましたら、めでたし〳〵で大層善い都合に行きましてれ、まあ世の中の事が皆なあの樣に行けばほんとにこの世は黄金世界ですわれ、でも取つて二十七の老孃の私(こんな事をいふと又與謝野さんに叱られるけど)でさい面白く讀みましたもの、若い娘さん達はどんなに愉快したかしれませんよ。

△濱千鳥様、――しつかり見せつけられてしまつてよ、御羨しう存じます、どうか旦那様に一度御目に懸かりたいものですれ。

△「花のあつまり」――文は善いとは申しませぬが、私は好きです。

△村雨様、――奇拔でしたわれ、私もやつぱり貴孃と同じなの、よくまお思ひ切つて、でも却々あゝは言へませんれ、そりや七分通り自覺はして居ましてもれ、否、自覺してるから言へないのですよ。

△安曇啓女様、――私は貴孃を萩香第二世といひ度いです、失敬な稱號だと仰るかも知れないけれど、矢張り千代子型ですわ、あら文ぢやなくつてよ、想?、イヽヱ、あの調子なの、脉のうち方でも心臟の動き工合でも内藤式れ、どうかれ、御自愛なすつてよ、引合に出されたあのお時さんといふ無神經の女、私もう吹出してしまつてよ、二十世紀だ何のといつても世間にはあんな女がザラですもの、多勢に無勢ほんとに笑ひ事ぢやない、だから悲觀したくもなりますわ。

△内藤さん――夢から醒めた女ですつて、世の中の事――わけても女の心といふものは、さう燈を吹き消したやうに思ひ切のよいものぢやないでせう、矢張り當座はまだ、天の甘酒に醉ふて居たいとおもひます、現實の國へ入るのは厭です靑春は惜しむべし、何物にも囚はるゝなと叫びたいですよ。

△野菊様――老錬家れ、

△靑春號を讀んで私かういふ事を感じました、若い女で、而かも格別名譽もなく、地位もなく、又大した物質の助けもない無名な女で、中にはお宥の方もありませうが――これ丈の仕事イヤ、こんな立派な仕事が出來るなれば、世の中は非常な進歩ですれ、これを思ふと何だか、心が大變愉快で、血が躍る樣です、これが私の光榮ある人生の春の感じでございます。



新ホーム物語

秋雨女

△引越の日

とろ〳〵としたかと思ふともう枕元の雨戸を母様が繰明けて居らしつた。旭がパッと射し込む。

「アラッお天氣ですね」といつになく元氣な聲で叫ぶと、

「すつかり晴れたよ」まあそんならもつと早く眼を覺ますんだつたのに、きのふ雨が降つたので疊が上げてなかつたから、車夫の佐吉に頼んで干して置いて貰はなけりやならなかつたのだ、

寢衣の上に銘仙の羽織を引懸けて洗面にゆくと庭でお父様が車夫と植木運搬の御相談らしい。無暗に氣が急き出した。

「アッ一寸佐吉、お前ねこれから新家に行てね荷物を運ぶ迄に疊を上げて置いて頂だいな。」と佐吉は曇硝子の窓越しにお早う御座いますと挨拶して、

「今ッから疊をおあげになるんですか、奥様それやお止めなさいまし昨日の今日でせう？　反對に濕りが這入りますあ」

「だつて良人がお上げつて仰つたんだもの」

「ハヽヽ、それならあげた積りにして置きやせう」

所に妹が「姉さま、早く御飯を召上れつて車が來るとめんどうだからつて」

「ハイ〳〵今行きますよ、あゝ急がしい」手早く薄化粧をして部屋に來ると縞モスリンの薄袷にお召織の帶が揃へてあつた。美いさんの現金な事、我家の朝も今日限りなので世話を燒くのも今朝ぎりと思つたのだらう、しかし嬉しかつた。

落付いて箸も取らねば、毎時も好きなお浸物も思ふやうに咽喉に通らず奈良漬をお茶漬にサラ〳〵と流し

込んだ處へ「今日はよいお天氣さま」そら來た。人足の聲も晴れて居る。

見渡せば何から運搬出してよいのか分らない。あの通り隆さま年幼うして郷關を出で、多年放浪生活の幾年目、一躍一家の主人となられるので馬鹿に氣が大きくなつたものと見えて入らぬもの迄持込で入らしつた一昨日番町から隆様の荷物が届いた時は如何しようかと思つた。家に活人畫が流行つた時分方々のお部屋から蒲團を擔ぎだして「希望の山」とか何とかいふものを積みあげた事なんか思ひ出して思はず失笑さずには居られなかつた。

「まあ簞笥が一番始めだらうね」

と母様が襷がけになつた腕を把手におかけになつた。ボンヤリして居た私も恐縮して、兼て用意のお定まりのホワイトエプロンに赤襷……湘南の一旅館に此姿して密かにレンズに入れられた萩香さんではなけれども……それをかけるときいつもの束髪の心安さで輕卒に腕をあげたら解き立ての髷に打付て「アッ失敗つた母様とう〳〵輪が外れました。」其の實髪どころの騒ぢやない。

「淑！　何を其處で愚圖〳〵して居る、お前が新家に行てなきや治りがつかんぢやないか」霹靂一聲お父様が庭から怒鳴つて入らつしやる。

「ハーイ只今」とは云ふもの〻泣き出し度くなる。隆さま餘りな、御自分は幹事に當つたのを口實にして金曜會に御出張「跡は一切貴様に任せる」なんて飛だ御信任を蒙つた現實は此通り身一つを二つに裂いて轉手古舞、もう〳〵新ホームなんて二度と持つものぢやないと決心した。烏がカーと外で鳴いて居る。

それでも正午頃迄には大概片付いて、あとは用のない人足共は其々歸て行つた。さあ此れからが私の役目天は何故かよわい女にかうも責任を負はせるのだらうと戯談に呟いたら妹が、

「姉さまは慾張りだから重い葛籠をお頂きなすつたのですわ」

だつて何て口が減らないんでせう、

「いゝから、美いさんおぼえてお出でッ」

て睨んでやつたら後からお父様が「尻尾が出るぞ〳〵」と笑つて入らつしやる、あゝ口惜しい何故迄皆に揶揄れるのだらう。

馴れぬ女將軍の采配振り也麾下に勇卒のあらんようなく夜の膳部を出したのは彼是れ八時頃であつた。又一しきり混雜して居る處に「お歸り――」

玄關に手をついて頭を下げた時は流石に家らしい氣がして嬉しかつた。

「もう,お濟みになりましたの?」

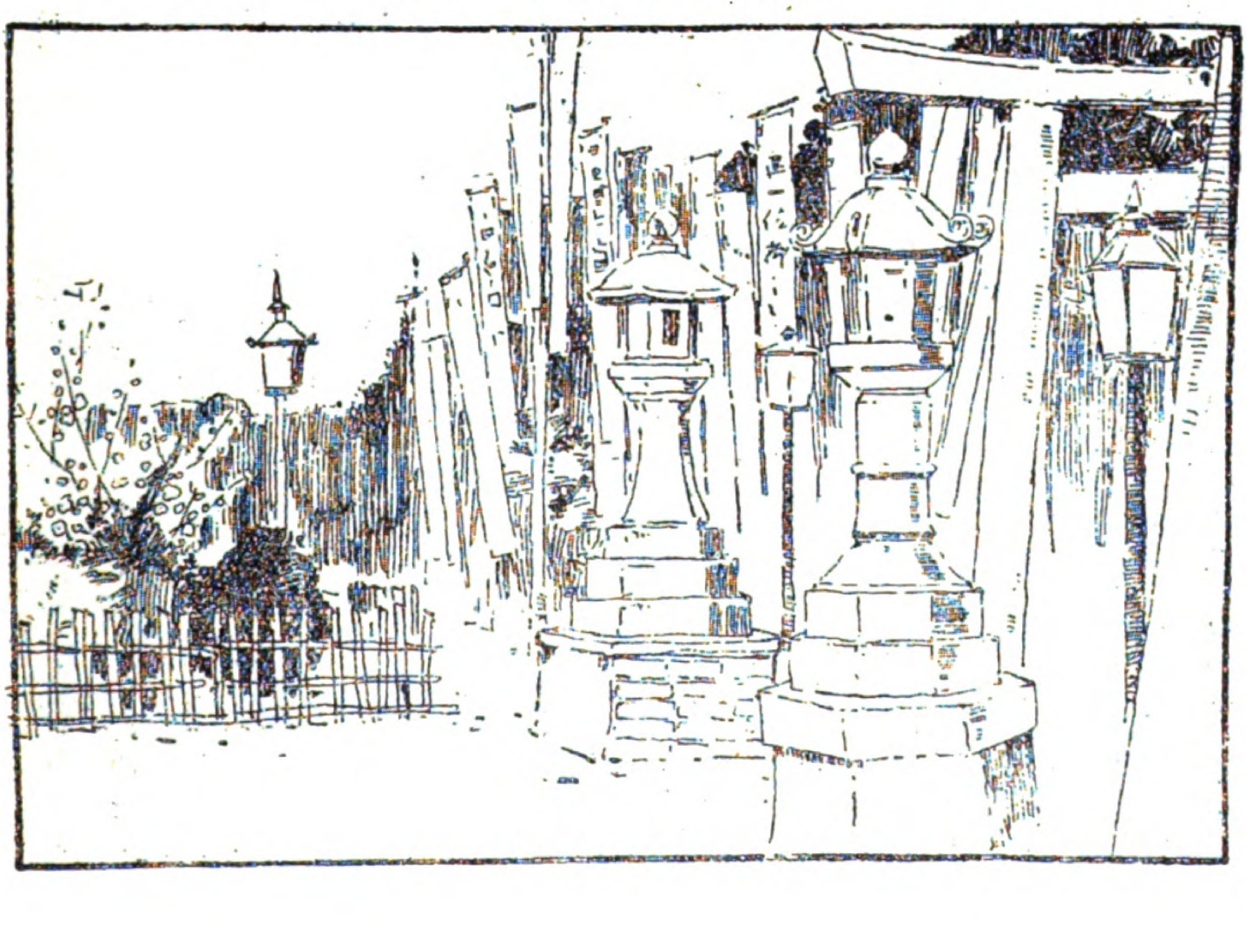
「いやまだ濟まんのだけれど、御簾中一人でブツ〳〵こぼして居るだらうと思つて早く歸つて來てやつた」

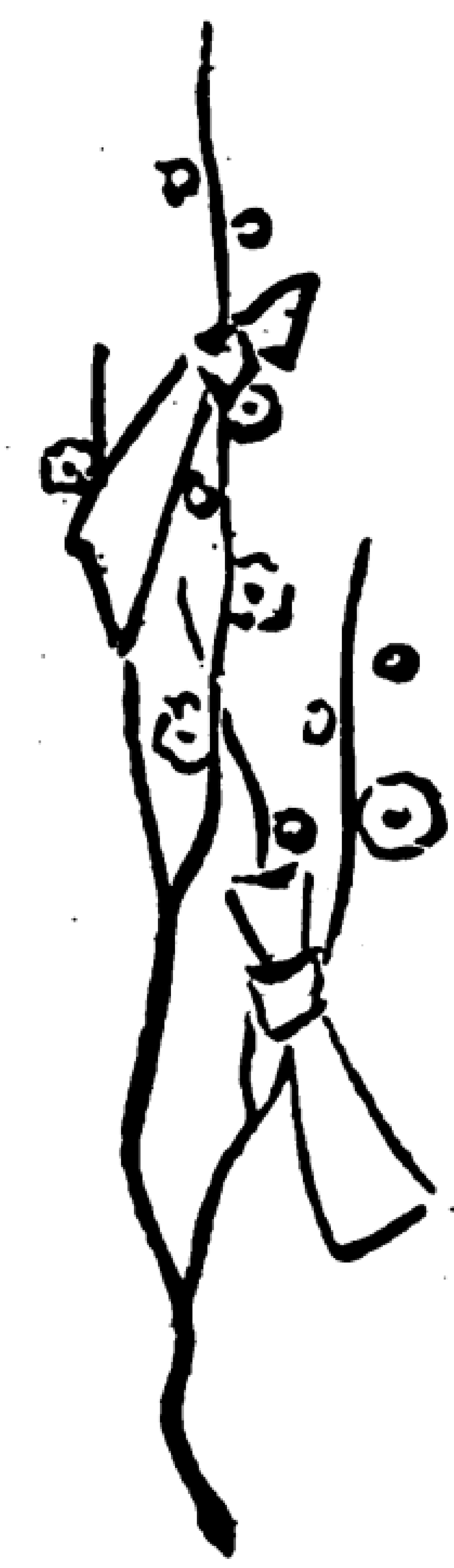
「まあ――」あいた口ふさがらず。

＊　＊　＊　＊　＊

夜更けて白き臥床の上に身を横たへた時は、明るいやうな暗いやうな、嬉しい如な心細いやうな一種の感にうたれて、双の眸は容易閉ぢるようにもなかつた。

羽田穴守稲荷の梅





劇の若き女主人公

中村春雨

結婚前の、若い、美しい處女時代は實に人生の春である、その春を最も光榮多からしむるものは戀愛の花である、この花は自然に咲き出づる天來の恩物であつて、世間多數の道學先生が、古い繩や、冷い鎻を持つて來て、いろんな干渉や束縛の下に、虐め散らしたり引き毟つたりしやうとするのは、畢竟、自然をして不自然たらしめ、やがては峻嚴なる自然律の復仇を招く原因となつて來る。家族本位の名の下に、親々の命令が第一條件になつて、花嫁花婿が出來上る日本の結婚制度は、双方の男女間の愛情が第一條件になつて新しい家庭を作る結婚制度の國々の、歐米人が見聞して「奇蹟」のやうに思つてゐる、尤も東西文明の相違は事々物々に附き纒うてゐるのだから、强ちにこの一事に對し可否善惡を速斷する事は出來難いが、併し女子敎育の進歩は、やがて婦人の自覺といふ事を伴つて來る、自覺とはいろ〳〵の意味もあるが先づ自分の判斷で萬事を定め、自分の足で獨立ちして行くといふ事である一方、斯ういふ敎育を受させて置きながら、他の一方では在來のまゝの制度で壓服して行かうとする事になると、馬を鐵の鎻で繫いで、しかも尻をピシヤ〳〵鞭で叩き付けるやうな、隨分慘酷な遣り方だと思はれる要するに、双方の愛情を結婚の動機としてゐる西洋の青年男女には、この光榮ある人生の春の樂や、幸福やを十分に味ふ事が出來るが、親の命令で結婚する制度の下に在る日本の若い人等は、この最も美しい甘な時代を「七歲にして席を同うせず」といふ孔孟以來の敎訓で縛り附けられて、惡くすると双方から傳染病患者扱ひにされ、嚴しい離隔法を施行されてゐる有

樣である、無論一方には多少の弊害も出て來やうが、その代り靑春を靑春らしく暮らし、處女時代を處女時代らしく生活し得るといふ自由と歡樂とが伴つてゐる他の一方には、お庇で無事無難に過したといふ安心もある代りに、何んだか囚人の乘る箱馬車で、花盛の名所を通つたやうで、不滿足と、殘り惜しさの情に堪へられぬといふ理由もある、この邊の事は、議論する段にはいろんな說も出て來やうが、兎に角、人生の春の盛りに、戀愛の花をかざして遊び暮らす事の出來る西洋の若い處女等は、窮屈づくめの日本の妙齡の娘等よりも、或意味に於て深く人間の生活を味ひ得る點で幸福な境遇に在るといへるだらう。

斯ういふ意味合から、西洋の劇や文學や詩に於てはこの「戀愛」といふ事が最も大切な題目になつてゐる、イヤ、サスガに戀愛禁制の日本に於てすら、文藝といふ自由な天地丈には、この戀愛の事が本筋になるとか少くも、附屬物位に使はれなくては、世間の興味を惹かないといふ有樣なのも、一見不思議であるが、矢張人間の自然は、道學先生の手先の屆かぬ處には、自由に發露れて來るものと見える、日本の國ぶりの和歌の題目としても、神祇釋敎と共に、戀、無常を列べてあるのを考へると、蓋し思ひ半ばに過ぎる事であらう。

それはさて措き、この戀愛といふ人間の情にも、處が異り、時が變ると、その間に亦自然の差違が出來て來る、人智の發達につれ、

女子敎育なども盛んに行はれて、婦人の自覺といふ事も一層銳くなつた、今日の時代の戀愛と、天地を唯美しい夢のやうに思つて暮らして居た昔の時代の戀愛とは、その內容が一つでない、この間の消息を味つて置く事は、やがて戀愛に對する敎訓ともなり、又一つは趣味の敎養ともなるであらう。

それで、玆には先づ、世界の戀愛悲劇の中の、傑作の一つで、最も人口に膾炙されてゐる英の大沙翁の「ロメオとジユリエット」の事から話して行き、その悲劇中の若き女主人公ジユリエットと、後で出る現代の英國の大劇曲家——一部の人々から沙翁より偉いなどと

稱讃されてゐるバーナード、ショウの「人間及び超人間」といふ劇の女主人公、アンとの比較を試みる事にする。

「ロメオとジユリエツト」は千五百九十七年、即ち今を去る三百餘年の昔の出版で、大戲曲家沙翁が三十七歲の頃の作である、劇の筋は、伊太利のヹローナ市の出來事、キヤピレツト家とモンタギユー家と双方仲が惡く、互に睨合つてゐて、領主のエスラカス公爵は徒らに心配してゐる、處がモンタギユー家の若公子、ロメオは、或る美はしい姫に戀して悶えてゐる、而もその姫は賢く、操堅くて容易に靡かうともせぬ、ロメオが失望して、氣抜のやうになつてゐるのを見て親友の一人が忠告して、世界に美人は唯一人ではない、その戀愛を他の婦人に移して、自ら慰めるが善い、幸ひ、キヤピレツト家に大夜會が開かれて、餘多の若い、美しい處女等が招かれて來るといふのだからそれに一緒に出かけて行かうと勸める、ロメオは



その言に從ひ、日頃敵味方のキャピレット家へ、假面を着けて、假裝して、夜會の中に紛れ込んだ。

ロメオは此處で不計も、日頃、自分の戀してゐた美人以上の、世にも稀なる美しい、妙齢の婦人ジユリエツト姫の姿が眼に燒付いた。

以下、坪内博士の巧妙なる譯を藉りて、臺辭を入れて見ると、

ロメオ（傍の給仕に向ひて）「あの武家と手を取り合うてござる彼姫は何誰ぢや？」

給仕「私は存じませぬ」

ロメオ「オヽ、あの姫の美麗さで、耀く燭火が又一段と輝くわい！夜の頬に照り映る彼の姫が風情は、宛然黒人種が耳元に希代の寶玉が懸つたやう、使はうには餘り勿體なく、下界の物として餘り靈妙い！アヽあの姫が、餘の女共に立交らうてゐやるは、雪はづかしい白鳩が、鴉の群に降りたやう、この一舞踏が濟んだなら、姫の居處に目を着け、此賤しい手を彼の君の玉手に觸れ、せめてもの男冥利にせう、アヽ、予は今までに戀をしたか？やい、眼よ、せなんだと誓言せい！今夜といふ今夜までは、眞の美人を見なんだわい」

この獨語をキャピレット家の甥、チッバルトが聞き敵方の侵入を怒つて決鬪を試みんとすると家長が宥める、かくとも知らず、ロメオはジユリエット姫の傍に近寄り、接吻する、姫の乳母が來たので、ロメオが問ふと、この家の息女と知れたので、敵味方と分るゝ身の悲運を歎く、ジユリエットの方でも一目見て、戀しく思ひ、乳母に跡を追はせて、名を聞くと、ロメオと知れて、あさましい因果に泣く。

かくてロメオは、心も空になりて、そのまゝ歸る氣になれず、石垣を攀ぢて、キャピレット家の邸内に忍び入る、庭の木立はシットリとして、青白い月が夢のやうな光を投げてゐる、石の欄干の附いた二階の露臺に、ジユリエット姫は立出で、戀人の事を思ひつゞけて、獨語する。

ジユリエット「敵は卿の名前許りぢや、モンタギユー

でなうても卿は立派ぢや、モンタギユーが何んぢや？手でも足でも、腕でも、面でも、何んでもない、人の身に附いたものでは無い……名が何んぢや？薔薇といふ花は他の名でも善い香がする、ロメオとても左樣ぢや、ロメオと呼ばないでも名は棄てゝも、持前の德は殘らう……ロメオどの我有でもない名を棄てゝ、その代に、此妾を、身も心も取つて下され」

ロメオは前へ進んで出て、返答をする、ジユリエットは驚きながら、聲音にそれと悟つて、階上と、階下との甘な會話になる。

ジユリエット「夜といふ假面を附けたりやこそ、然もなくば恥かしうて此頰が紅のやうに赫うならう、今宵、妾の言ふたことをつい お前が聽かしやつたゆゑに、妾とても體裁つくり、そないなことは云やせぬと言ひたいは山々ぢやがえゝも、式作法はさらばぢや！……モンタギユーどの、このやうに言うたなら、噫や蓮葉なとも思はしやろが、誓文、妾は彼の巧妙に餘所々々しう作りすます人等より、今一段、眞實な女子ぢやぞや……」



ロメオ「姫よ、あれ、あの實を結ぶ樹々の梢の尖々を白銀色に彩りをる、あの月を誓にかけ……」

ジユリエット「おゝ、月を誓言になお懸けやつそ、廻る夜毎に位置が變つて、貞節の無いが月の姿ぢや、

心が月のやうであつてはならぬ」

かく二人は魂の誠實を誓にかけて、明日、フライヤー僧、ローレンス法師の教會に赴き、秘密に結婚の式を擧げん事を約束して別れる。ロメオは翌日、ローレンス法師を訪ひ、仔細を打明けて頼む、法師一旦は拒んだが、これが反目せる兩家を仲直させる原因にもならうと、考へ直して承諾を與へる。

乳母が仲に立つて、ジユリエツトは教會に赴き結婚式を擧げるロメオはその歸途、自家の黨派と、キヤピレツト家のチツバルトとの決鬪の仲裁に入つたが、それにも拘らず、自黨の者が殺されたので、怒氣一時に發し、遂に敵のチツバルトを刺殺す、ロメオはその爲めに領主より追放の刑に逢ふ、チツバルトは戀人ジユリエツト姫の甥である、姫はその凶報を聞くや甥に對する親愛の情と、ロメオに對する戀愛の情とで、狂氣の如く煩悶する、親等は、姫が甥の非業の死を嘆く餘りの事だと許り思ひ込んで、かねて薄々約束して置いた身分の高い家の貴公子パリスと、姫との結婚を早々に擧行して、その心を慰めやうといふ相談をする、一方乳母は姫の使者に立つて、ローレンス法師の家に隱れ居るロメオを秘に告別に來るやうに取計らふ。

キヤピレツト邸の庭園、ロメオとジユリエツトは樓上の窓口に姿を現はして會話する。

ジユリエツト「行うとや？夜はまだ明きやせぬのに怖つてござるお前の耳に聞えたは、雲雀ではなうてナイチンゲールであつたもの、夜毎に彼處の柘榴へ來て、あのやうに囀りをる、なア、今のは一定、ナイチンゲールであらうぞ」

ロメオ「いや〱、朝を知らする雲雀ぢや、ナイチンゲールの聲ではない、戀人よ、あれ、お見やれ、意地の惡い横縞めが東の空の、雲の裂目にあのやうな縁付けをる、夜の燭火は燃え盡きて嬉しげな朝めが霧立つ山の頂に足を爪立てゝ立つてゐる、速う行けば命助かり、止まれば死なねばならぬ」

二人はかくの如く繪のやうな、否音樂のやうな純粹な戀愛をしてゐる、ロメオは心殘しつゝも逃れて行く

後で父母は姫に結婚を勸める、姫はいろ／＼辭る、父は大に怒つて「不孝千萬な奴ぢや、次の木曜日に敎會堂へ往きをらう、往かずば又と此顏を見るな、言ふな答へるな、返答するな」と親の權利で強迫する、こゝらは今日の日本とあまり違つてゐない、姫はローレンス法師の敎會へ相談に行く、ローレンス法師、思案の末、ハタと思ひ當り、四十八時間、假死狀態に陷る痲睡藥を與へる、これで一旦死んで、結婚を免れ、この敎會に葬られて後蘇生して、ロメオの居る處へ逃げて行けといふのである、姫は貞女、二夫に見えずの信仰を飽くまで保つて行くために、この計に從ひ、歸つて父母を安心させ、寢室に入るや、件の藥を服する、朝になつて結婚の準備に家中、忙しい處へ、姫の死が報せられて、皆々大に驚き、悲む、ローレンス法師來り、一同を宥めて姫の葬儀を行ひ、一方には使者をロメオへ出す。



　ロメオは、追放されてマンチュアの街上をうろついてゐる、處へ父から使者が來て、ジュリエットの死を知らせる、ロメオ絕望し毒藥を買ひ入れ、ヴエ

ローナへ引返す、一方のローレンス法師よりの使者は故障があつて、空しく歸つて行つた。

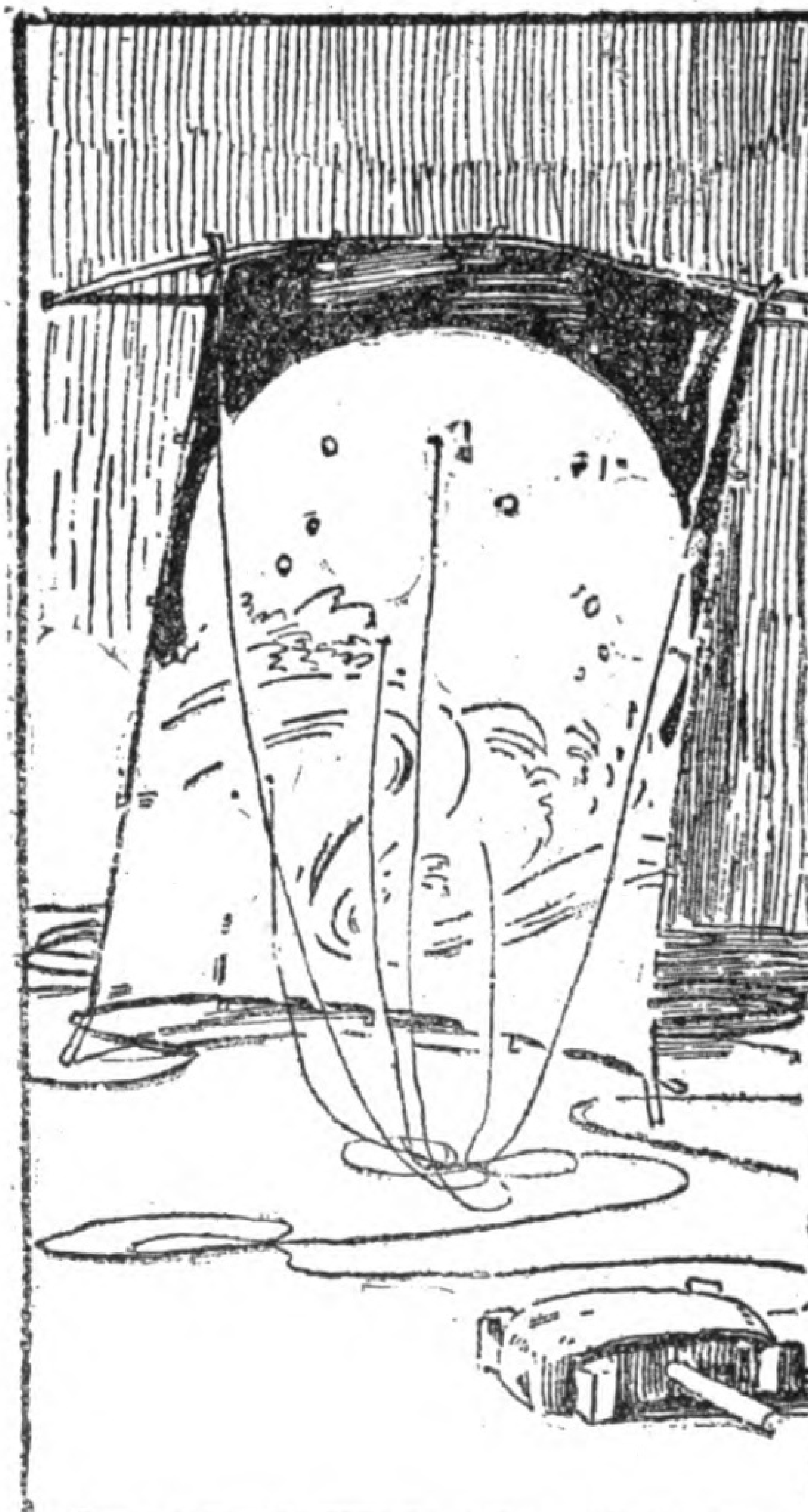
　ジユリエツトの許婚のパリスは姫の死を聞いて、深夜花と炬火とを携へ教會の墓場を訪ふ、處へロメオが入つて行く、パリスは姫の敵と、名乘りかけて決闘しロメオの劍に刺される、後でロメオは、ジユリエツトの死顔を見て、愁嘆やる瀬なく、所持の毒藥を呑んで息絶える、處へローレンス法師が入つて來ると、假死したジユリエツトは恰も息を吹返して來る、ふと見れば戀人は、毒の盃を手にして死んでゐる、ジユリエツトはその死體に接吻し、ロメオの帶びたる短劍を取り胸を貫いて瞑目する、二人は美しく死んだ、かくてこの死は、多年反目せる兩家を和解せしむるといふのがこの悲劇の梗概である。

　若い、花やかな、純粹の戀愛が敵同士の家の男女に生れたといふ惡因縁から、この悲劇に了る、我が國の淨瑠璃物にも、こんな筋のものは隨分ある、「妹脊山」の如き、「十種香」の如き、「鎌倉三代記」の如き、皆その例に漏れぬ、併しながら、日本の淨瑠璃物のは、義理と戀との搦み合ひに、女主人公自身が煩悶する事になつてゐるが、この劇では、ジユリエツトは殆んど戀愛に夢中になつてゐて、兩家の反目などは眼中に置いてゐない程、熱烈である、鐵を熔かす焔の如く燃え切つてゐる、誠に美しい詩である、併乍、これは三四百年前の戀愛の花の匂ひと滴とを傳へたもので、今日の廿世紀の、女子教育を受けて、所謂自覺の進んだ妙齢の令孃等は、このジユリエツト姫の如き戀愛の焔に身を燒き盡す事は出來まい、現代のシヨウ氏の戀愛劇の女主人公アンは、何んな動機で、男主人公ターナーを追及してゐるのであるか？

　妙齢の女子、アンは、彼を熱心に戀してゐる青年詩人オクタヴヰアスの眼には、恍惚させる程の美しい婦人で、この婦人の顔を見れば、世界が今までとガラリと變つて來て、何んだかフワ〳〵とした神秘の雲の中に包まれて了ふやうな氣がする、いや、普通の人の眼から見ても、アンは姿がよく、人を引着けるやうな眼

と髪とを持つた、いかにも貴婦人らしい様子の女で、黒と菫の絹の衣服を着てシャンとしてる處は、誠に上品である、併し、アンの氣象は隨分露骨な方で、普通の女性の細かな優味が無く、一言で言へば「新らしい女」といふ側である。

青年詩人オクタビアスは、アンと同じ家根の下に住つて來た幼友達で、もう妙齡になつた此の婦人を心から慕つて、結婚を求めてゐる、併し、アンの方では、今一人、自分の亡父から自分の監督を頼まれてゐるターナーといふ男――この男はしきりに新思想を口にして、平民主義を罵り、宗教を笑ひ結婚を馬鹿にしてる自稱革命家である――そのターナーの方を慕ふて結婚をせんとしてゐる、ターナーは怖れて、英國から自働車で逃げ出し、ドヴアー海峽を過ぎ、歐洲大陸を横斷してスペインに入り、シーラネ、ヴタの野原迄來る。



アンは女の一念で、矢張自働車に乘り、後から追駈けて、到頭追ひ着いた、彼の詩人、オクタビアスも、こゝへ來てゐる、ターナーはアンをしきりに、この詩人の方へ結婚させんとして、此の二人にしんみりと話をさせるやうに仕向けて場を外づす。

アン「貴方も一緒に、皆さんと彼方へ行らつしやらないの？」

オクタビアスは失望して、涙含み「私にも彼方へ行けつて仰るの？　貴方は私の胸を刺しました」

アン「可憐さうな坊ちやん！…可愛いゝ胸ね！」

オクタビアス「その胸は貴方の所有です…、私は打明けて話さなくてはなりません…私は貴方を愛してゐるんです、貴方を愛してるといふ事を御存じでせうね？」

アン「それが何うしたの？　貴方は私の母が、私はあのターナーさんと結婚せなけりやならんやうにしたのを御存じないの？」

詩人は驚いたり、失望したりして、「併し、貴方、自分で好いてゐないのなら、そんな無理な結婚はするに及ばぬと云ひ、いろ／＼感情的な言葉を使ふ。

アンは、竊に冷笑して「…ちやア貴方は私が失戀させたら、一生、獨身者で暮す氣なの？」とからかふ。

オクタビアス「自殺して了ひます」

アン「それには及びません——失戀した人はオペラでも見に行くと、餘つ程氣保養になりますよ」

こんな事を云つてゐるかと思ふと、一方ターナーに向つては

アン「あんな詩人的の人間は一生失戀許して、獨身生活で過すんです、そして近所の主婦連にチヤホヤ云はれてるんでせう、貴方のやうな事を口で云つてる人が却つて結婚するに定まつてゐますよ」

ターナーが一本參つて面喰つてゐると、アンは愈々短兵急に迫つて行く。

アン「貴方の今、仰つた通りもう始めから…私等の子供の時代から…宇宙の生命力がちやんと二人の事を定めてるんです」

ターナー「私は貴方と結婚はしません、私はしません

アン「オー、貴方はなさるんです、なさるんです」

ターナー「改めて云ひます、否、否、否」

アン「改めて云ひます、なさる、なさる、なさる」

ターナー「否え…」

アン「しますと仰い、今更悔んでも駄目です、しますと仰い」

若き婦人アンの卷き附けた蜘蛛の糸は、遂にこの男性を餌食にした、ターナーの所謂「男子の役目は婦人

にパンを供給つてやる事だ、婦人の役目は人間を作つて、それを子々孫々に傳へて行く、母といふ天然の本分を盡す事だ、要するに、女性の方が、男性を追駆けて行くものだといふので、この劇が了る。

ジユリエットは三百年前の若き女性の代表者、アンは廿世紀の今日の「新らしい女」の代表者、それを競べて考へると自らいろんな敎訓や、興味が生ずるであらう。

女から見た女

▲今と昔　といづれかと云ふに元來私共の家庭が古風なせいか何うも昔の方が好きな氣が致します、尤も昔と申したとて存じません事ですが父や母に子供の時分から種々聞かされて居りますから自然とそれに染み込んだのだらうと思はれます五六年前の十七八時代は總てが夢中で何を見ても美しく、何れを見ても好きだつたのですが只今では成るべく女らしく、それには今樣よりは昔風の方がよいやうに思はれますので、髮なども束髮はあまり好まず島田ばかり結ふて居ると云ふ風で御座いますから、これでも全體のお嫁しを願へると存じます、知らない昔を好きだと云ふも變ですが……と壁に立懸けた舊稿の美人畫をうつとりと見入る

▲お化粧　だつて此頃は頰紅をさすのが大分流行してゐるやうですが總じてが厚く塗り過ぎる嫌ひがあつて生々した點が弱いやうに思はれますお召物にした處が私の子供時代よりは色合や模樣が漸次昔風に戻つたやうな傾きが見え、これが又私の嬉しい處で、お召物の取り合せなども今は却々お上手で「美」といふ事には大分苦心をされている跡がありありと見えますから眼の覺めるやうにお綺麗です、姿勢も若い方は袴を穿きますから前へ屈むやうな事はなく立派ですが舊弊な考へから行けば女らしい點が薄く見えます、第一私の頭に年に似ぬ

▲昔染みた　考へがあるものですから御婦人の品定めは申上げ兼れますしお交際致して居る方も只々お立派と許り見えますからお惡い處は少しも無いと存じられますの、とつゞましやかに述べて迷惑さうなのを兎に角何んな女がお好かと問へば、ホヽと口許を覆た袂から片靨を見せて、誰れと指しては申上げ兼れますが、鏡花さんのお書きになる小説には私の

▲大好きな方　が澤山御座いますの。女として何處までも女らしく、其女らしい内にもピリツとした誠に心持のよい江戸つ兒氣質のあるのが好いと思ひますそれにお召の模樣などもちよいちよい書いてありますがアヽ云ふ氣質の女にアヽ云ふお召を着せたらマア何んなによく似合ふでせうと、何時でも皆さんとお噺しを致して居りますワ、卒爾な申分では御座いますが畫を描きますにも是非女としてやさし味のたつぷりとある内にも「女」といふ神聖な犯し難い魂が潜んで居るやうにと心懸て居ります……如何にも要領を得ませんお答へで……と樂燒の急須に湯を移しつゝ、妹が丁度參りましたので何も彼も取亂れて居りまして誠に失禮を……榊原蕉園女史

蝶々の意匠


むかひ志やう羽蝶
かふと蝶
むかひ蝶
よろひ蝶ひし
丸ニ扇あげは蝶
眞向蝶の丸
三ツとび蝶
すぢ向ひ志やう蝶
ふせん蝶
三ツ胡蝶
扇揚羽蝶
三ツふせん蝶
こうりん蝶
むすび蝶
むかひ蝶
丸ニあげは蝶
蝶車
三ツむかひ蝶

●珍らしい婚禮菓子の話

△ビクトリア女皇の御菓子

歐米人の婚禮祝典などには一般に非常に立派な菓子か用ゐられますが、記錄に殘つて居る菓子の内で最も著名なのは、故ビクトリア女皇陛下御即位五十年祝典の際、ガンター氏の作つたものであります。此の菓子の重量は大したもので、二本の把手の附いた滑舟に載せて男二人でやつと引いたと申します。これは畏くも女皇陛下の一方ならぬ御嘉賞に預つてバッキンハム宮殿の饗宴室に納められたのですが、祝典の間は模造品を作つて席上に列れ、ガンター氏の作は切つて分配致しました。此の菓子は重量が一噸の四分の一、即ち六十八貫餘りで、丈が十二呎半あつたと言ひます。意匠は極く細かなもので、印度式の殿堂に、外を二匹の獅子が守り、内には王冠が安置してあり、堂の上部には、女皇陛下御即位五十年祝典を報ずる名譽と光榮との二神が喇叭を持つて立つて居り、更に一段上の堂には、愛の女神の像があつて、最頂上には双翼を張つた平和の女神が王冠を捧げて居る姿がありました。下の臺は白繻子で、英國皇室の略名と、諸殖民を代表せる人物が書いてあつて、其の間間に女皇陛下と皇婿との御姿の浮彫のあるメダルと、もう一種他のメダルとが交互にかいてありました。他のメダルといふのは千八百六十七年に加奈陀が英領となつて女皇が御即位あらせられた當時の御姿と千八百七十七年印度の女皇となり玉ひし際の御姿とが浮いて出て居りました。此の菓子製造に要した日子は凡そ四ケ月餘で、幾度か改作して漸く出來上つたものだと申します。殿堂の外を守る獅子は、畫家ランドンアー氏の畫を手本にしたもので、其の費用も三百弗餘りとかで、此の種の菓子中では比類なき立派な物でありました。其の翌年獨逸皇帝陛下が此の菓子の製作者の技量の非凡なのを嘆賞し給ふて、此の菓子の事に就て御演説を遊ばすといふので、其の模形をガンター氏に御注文になつたのを見ても、如何に立派な物であつたかゞ分ります。

△歐洲諸王家の御用品

王家ので著名なのは、一千八百六十三年に獨逸國ウエールスの太子の御婚儀の時のであります。是れは重量が二百十八貫近くあつて、それを切つて分けるのに鋸と小刀を使つて殆んど三日かゝつたといふ事です。此れは全體を悉く人工で少しも型を用ゐなかつたので有名です。

最近で著しいのは、コンノート殿下の王女マガレツト殿下と瑞典の皇子プスタヴアアトルフス殿下との御婚儀の時のもの、又アルハニーの皇女アリス殿下とテツクの皇子アレキサンダーとの御婚儀の時のものなどで、裝飾は前者は翠菊、後者は米蘭が主となつて居りました。

其他バツテンベルグの皇女エナ殿下と、西班牙王アルフオンソ陛下との御婚儀なども實に美を極めたもので、三層になつて居て、總量四十一貫に近く、最下層の直徑が三呎許りあつて、愛の女神の姿の刻んであるコリンス式の内柱で

入口に區劃されて居りました。其の內柱間の各面は世界に名高い西班牙の宮殿圖に因んで砂糖細工で築つた芝草を表はし、又各面とも櫻花、白檀木、白薔薇の花細工で裝飾してありました。是等は皆王妃御自身の御好みであつたさうです。又各層の裾の臺に接する處は美麗な花環で取り卷き、中層は下層より少し短いコリンス式の圓柱で四個の面に分ち、各面の中央には西班牙王家の冠と組字で王家の略名が上下に並んで出て居る楯を飾りにし、其の中層も下層に接する處は花環で取り卷き、最上層は四面に分れ、各面の主な裝飾は、櫻花や、桃、金鳳科、白檀木、白薔薇の花片で、非常な精巧なものでした。最頂上の構造は、一群の兒童が白磁の花瓶を捧げて居る姿で、花瓶に挿した花からは四條の長い枝が垂れ下り、先は最下層に届いて、全體の調子がまことに優雅で美麗でした。臺になつて居る大盃はバツテンベルグの皇女ヘンリー殿下の御所有で、皇女御自身の御婚禮時にも同じくそれを用ゐられたと申します。

△其他の著名な菓子

或る富有な米人は其娘を英國の貴族と結婚させた時、身分ある婿のために、婿の住へる町を模寫した菓子を作つて祝つたのですが、局部の微細な點をも模倣して作つたさうで、隨分微細な道具が要つた丈に、實に見事な菓子であつたと申します。

又かういふのがあります。米人の女と英國の男子と結婚したのです。其の英國人は米國の婦人は一般に新を競ふ趣味の盛なことを知つて居たので、花嫁に贈つた菓子には美しい其の花嫁の肖像を飾りに着けました。肖像の高さは五呎あつて、其の頭にダイヤモンドの冠冕が載り、一方の手に精巧な花束を持つて居たのです。ちよと新奇なやり方でせう。そして此れは今迄述べたものゝ内では一番高價な菓子で、冠冕丈けでも數千磅を下らなかつたと言ひます。

△精緻なる竪琴の意匠

けれども婚禮菓子は總て右のやうに飾り立てた者許りではありません。當時の一般の傾向は却つて意匠も製作も成るべく單純にやるといふ風になつて居ります。即ち重量も價格も安く、十圓餘りも出すと、重量十七磅とあつて裝飾の綺麗な菓子を、上等の製造人から買はれ、少し奮發して三四十圓も出すと、恍惚するほど綺麗なのが買はれると言ひます。注文するには大抵自分で意匠をして製造人を指圖するやうですが、色々六ケしい注文があるので、製造人もなかなか苦心するやうです。つい近頃の話ですが英國屈指の菓子製造人の處へ、ウエルシュの竪琴を意匠の中に入れて呉れと注文して來た者があつたとか。で製造人は實物を忠實に寫すため態々王立音樂學校に行つて略圖を作らうとした處が、其の竪琴は九十の絃があつて、それを皆精巧な砂糖細工でやらねばならぬので、大いに閉口したといふことです。それゆゑ菓子製造人は一種の美術家で、其の裝飾には美術家としての技術を十分に揮ふ所があるのです。



和歌

佐佐木信綱選

一等

〇　美作　出雲井田鶴子

廿とせを草深き野にひとゝなり知らですごしぬ海も都も

評、ひろき海のうつくしさを想ひやり、賑はしき都を夢みつゝあるらむ少女心よくあらはれたり。

二等

〇　陸前　沼倉たか

身もあらず泣くべき事を笑ひつゝきく性持てるあはれなる子よ

評、あはれなる境遇におひたちし人のあはれさ、人生のあるものをよくとらへ得たり。

二等

〇　伊豫　有田百々代

燧灘君ます島の見えぬまで浪たちさわぎ暮れにけるかな

評、海そひに住める可憐なるをとめのおもひを、よくうたひられしよ。

三等

〇　淺草　渡邊富美子

双六を圍む灯かげの七人に春はうつくし花の香もして

評、こは今の道中双六、まはり双六のたぐひならで、萬葉の歌、枕の草紙などに見ゆる双六盤なるべし。今もさる事好む人の家には行へり。みやびたる遊びわざなり。

三等

〇　布哇　淺海あしの

夕闇に螢飛ぶごとひた搖るゝ白コスモスは星の夜によし

評、海のあなたの國にありて、夕闇にこすもすのゆらめくを眺めつつ、歌おもふ人やさしともやさし。

三等

〇　橫濱　しげ子

やすらかに母のみ胸によるごとも月にふけゆく冬の天地

評、歌もまたやすらかなり。

秀逸

本郷　横田佐久

四十九里佐渡は眠りて沖遠く月出る頃を梅の花散る

評、前句原作梅の花さくとあり。散るの方まされり。よみ味はひてさとられよ。

○　日暮里　木村純子

數ふれば疾の床にふしてより三年はかなき春を迎へぬ

評、作者の境遇をさながらうたひ出でたる歌ならむには、あはれとおぼえて。

○　栃木　鳥居須磨子

ちからなき夕日に海人の唄きゝぬ他郷の磯の冬のさびしみ

評、初句原作てりしほむ。

○　佐賀　百合子

牡丹雪つもる宵なりまとゐして歌の題などえらみけるかな

評、女友だち四五人のうつくしきまとゐなるべし。

○　羽後　伊藤百合子

春はまだ夕風さむき戻り道ふとなき母を面影に見つ

評、いづこにてかゝる趣の歌を一たび見しやうの心地す。我がひがおぼえにやあらむ。

○　伊勢　駒越くに子

谷の戸の鶯ならぬ冬籠り春たつ空の都戀しも

評、地方にありて都會の初春を戀ふる、一等に選びし歌と同じ趣なれど、こは上句いさゝか劣れり。

○　下谷　廣瀬春代

さわがしき都はわびし磯の村靜けき春のこひしかりける

評、二十とせをと谷の戸をとの作者はひなにありて都を戀ひ、こは又都にありてひなを戀ふる、とりどりに。へだゝりをるものがうつくしく見ゆる習はしなるべし。

○　栃木　早乙女たか子

ほゝけたる穗すゝきしげる野の家に昔こひしき古き師とひぬ

○　長野　淺輪久子

雪の夜は靜かにふけて母とわれ言葉すくなにぬふ春着かな

評、北國の冬の夜の感じのあらはれたる歌。

○　東京　中川しげ子

泣きぬれてながむる遠の川波にあしの葉なびき雪ふりいでぬ

佳作

○

わたりどり行年はくらし佐渡ヶ島今宵一夜は我庭の木に　長岡　佐久間露子

○

はり上とわか水くみてうち仰ぐ空は靜に星うすく見ゆ　三河　金澤梅香

○

濕りたる重き空氣を動かして君住む里へ渡り行く鐘　伊豆　堀井露子

○

しめやかに小雨降る宵しめやかに琴ひく君の月のにうかびぬ　大阪　野村綾子

○

都人根室の里を訪れば沖の氷を花と見るらん　根室　山本千代

○

山行けば野行けばそゞろ過ぎし日の思出添ふる花も咲くかな　北海道　矢萩ちよ子

○

別れては枯れたる葦のざはめきに遠方なる人の思はるゝかな　東京　小堺しづ子

○

とろ／＼ととけて流るゝ蠟のごと濃青の空を春の雲ゆく　信濃　湖山阿黄子

○

春の灯にまだあどけなき妹の桃破れのつ浮ぶもめぐし　下總　月沖百合枝

○

梅さけば人と別れしひくき丘かはせみ色に若草の萠ゆ　牛込　平塚白百合

○

あゝ涙いとしづやかにあふれきぬ眞靑靄わく高原の丘　攝津　和久かつ子

○

まど近き杉の大木に鳥なきて空心地よき小春日の朝　芝　飯田榮子

○

障子をば半ば照して秋日和中に少女のまゝごとのこゑ　神奈川　原よし

○

かなしみし昨日の我を耻らひぬ空ほゝ笑ふる初春の朝　秋田　加賀谷まさ子

○

落葉燒く煙の末に月見えてまひろ靜かに山茶花の散る　日本橋　平山さと

○

幼な兒を抱くが嬉しく京の家にひねもすありき十六の頃　攝津　森島繁子

○

愛らしうまはらぬ舌にたれよりも好きと云はてうれしきこゝろ　東京　佐藤千代

○

春は來ぬ日ざさぬ草のかげにありと花もつ菫きみは知らずや　京都　北川絹子

○

こゝろいまうつろとなりて眸たゞ雲を眺めぬ三月來る日　川越　吉田とも子

○

落日は炭やく煙あかくてらし靜かに暮るゝ山沿の家　深川　佐久間貞子

○

曉や山かげつたふ水の音にふと失へる夢の淋びしき　名古屋　森井せき子

○

朝曇り高なる鐘に白鳩の小さきがとひぬ清水の塔　米國　村越光子

○

君を送りきみがうはさの絶えぬまに月夜となりぬしら梅咲きぬ　新潟　田中せき

金屏に灯ゆらぐ雛壇や匂ひこぼるゝ緋桃白桃

○　讃岐　大倉金子

朝晴の障子に映る鳥影をうつくしと見ぬ初春の窓

○　美作　青山いまこ

紅葉もおほかたすみし山里の庵しづかに初冬に入る

○　蒲原　かう子

うつら／＼空に漂ふ紫煙を見つめてありぬ午後の一と時

○　能登　栗倉すみれ子

又一つよはひ重ねて羽子板のよきをほこりし昔戀しも

○　能登　栗倉一子

折にふれて今年こそ肩上げとれと強ひられて母をうらみぬをみな心

○　山口　三宅うめ子

わざ訪へてさびしの思ひ迫り來るあはれなるかなわれはみなし兒

○　埼玉　吉田和歌子

人たえて吹く風寒き夜のまちに物賣るをとめ見れば悲しき

○　麹町　三田村あき

母を呼び亡き母を呼び泣きつかれ父の背に眠るみどり兒の顔

○　相模　齋川嘉め子

落日のなごりの光花やかに相模灘ゆくましら帆に照る

○　神戸　森中かず子

美しき言葉の裏の間道を人はにげ行くかなしき日かな

○　山口　たえ子

山茶花のたゞほの白き夕のまどこよひを嫁ぐ人の上思ふ

○　名古屋　森井せき子

雪止みし石山寺の山門を下る法師のまゆ白きかな

○　伊勢　岩本淑子

襲着氣に入らぬとて日もがすら母にすわつる昔戀しき

○　伯耆　山崎槙子

芥津の湖月明かき夜は波の音にまつはりて鳴く濱千鳥かな

○　東京　花儀

水仙は仄に薫りぬ漂ひぬ圓き柱にわが文机に

○　函館　はな子

晴れの衣にほふ高髷あゝかくて處女てふ名に別れ嫁くわれ

○　清國　瑞枝

心なく語りし君の別れては淋しさ知りぬ二十二の今日

○　越後　岩本芳子

雪の日やわら屋根がくれ下りくる二羽の雉子見る山のやどかな

○　横濱　小豆澤しげ子

ふと心別れのまへのひと時のはえあるゑみにおぼれんとしぬ

○　下野　片岡浪子

亡き母と語りし夜半の夢さめて芭蕉に寒き雨の音きく

○　四坂島　渡邊梅子

寶廟の燈火もれて白梅の花の香寒むう月ふけ渡る

○　仙臺　南琴代

月色の溶けたる夜の肌寒き大氣の底に梅白う咲く

○　福井　伊藤愛子

浮藻草むらさきに咲く沼を背に廣き野を見る松立てる家

○　堺　さくら子

水仙の黄なるが咲きぬ手鞠などつきて遊びし若き日思ふ

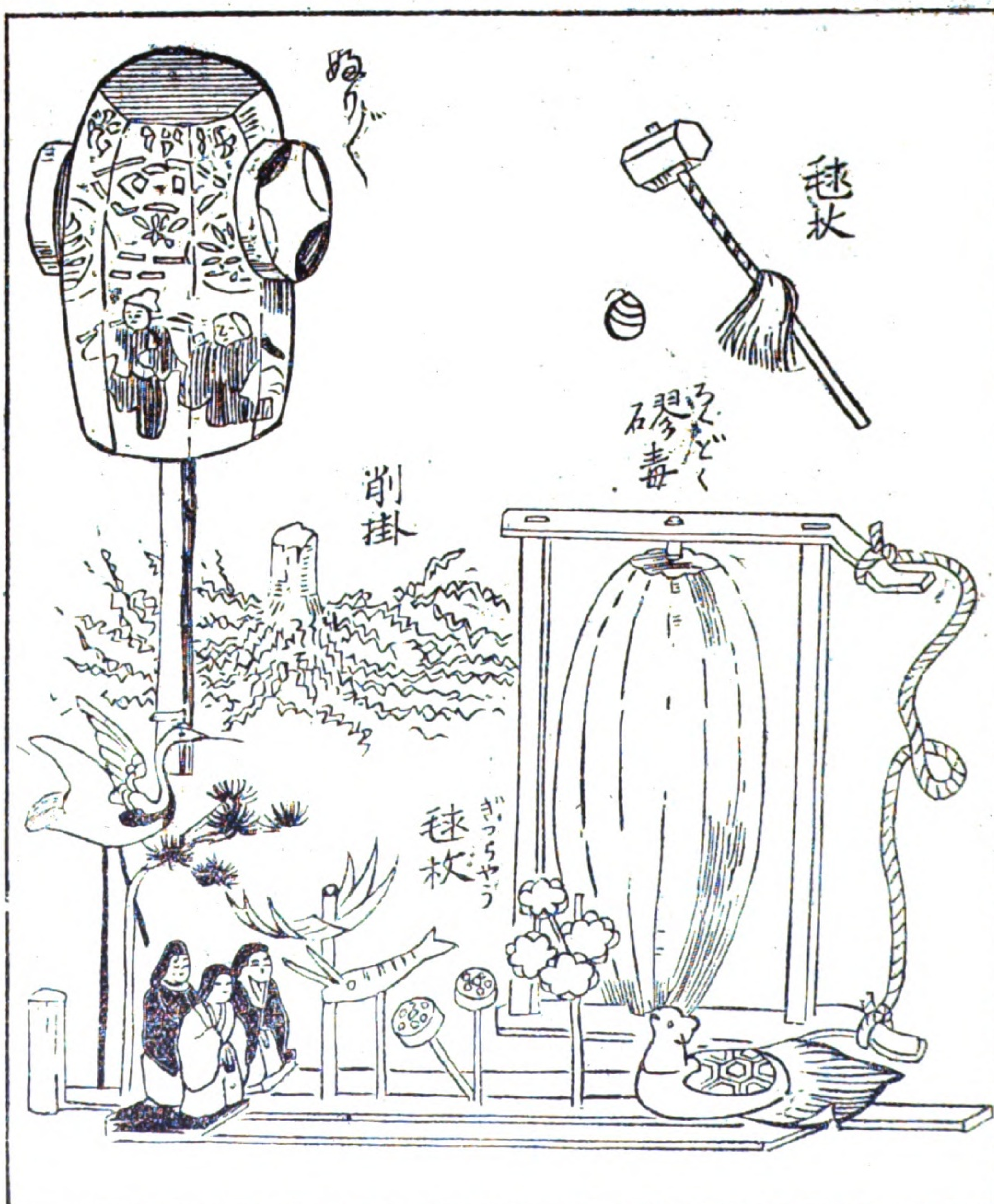
むかしの翫具

△毬杖　打毬の變じたもので、現今のテニスのやうな遊戯です。これは凡そ十間位を隔てゝ、男の子供が双方に別れ、其の中央の地上に線を引いて境界を作り、甲より玉を投ぐれば、乙は我が領へ玉を入れじと爭ふので、それを打止め得ずして、自分の領へ入れゝば敗に歸し、首尾よく打とむれば勝となるのです。

△ふり〲　これは魔を除くと言つて昔年始に男の兒の弄んだものです。

△礐毒　これは馬把の如うに、牛馬の尻につけて用ゐたもので、農事をすゝむるの意から、正月の玩具としてよく作つたものです。

△削掛　これは地方によりては亂ひ木、削花、ぼいたけ棒などとも申します。柳の皮を去り、其端を絲の如うに、幾條にも削りて作ります。もとは神に供へる和幣で、昔時は正月十四日に注連を取り拂ひ、軒端門等に之を下ぐる風習がありましたが、現今は殆んど絶えました。



美容法資料

女の生際

峰香欝女史

▲垂髮の美

かの常陸宮は御境遇と云ひ御標緻と云ひ御可哀相なお身の上でありましたけれども、お髮が勝れて見事であつたと紫式部が褒めて居ります。實に髮は女の生命でございますからその形の變遷を考へて見るのも趣味深いことゝ存じます、大古の埴輪土偶にも結髮は有りますけれども、日本風俗史には「女子は古へより髮を垂れる習ひであつたのを天武の朝に結髮の命を下されましたが改り難く文武天皇時代の結髮の令制も普く行はれませんで平安朝には悉く垂髮の風に移つた」とございます。女の結髮は慶長時代からと覺えて居りますが、して見ますと二千餘年の久しい間髮を垂て居たのでございませう。心身共に餘裕があつた影響か競ふて伸ばす工夫を用ゐた爲か垂髮時代の女の髮は身長より二尺も餘つて地に曳くのもあつたとのことで御座います、古より聖人偉人は體格も常人より勝れて居るのではありますが、興福寺に藏さるゝ光明皇后の御髮は御長一丈に餘ると吉野拾遺にございます。室町時代には髮丈も少し短くなつたものか風俗が大業になつた爲めか髢を用ゐ、寢る時は枕許へ打亂箱を置て髢を納め或はこれを枕屛風、簾臺にかけ、歩む時は侍女に末を持せたさうです。但し勞働する下流の女なぞは垂髮を右肩の上に束ねてその結目を紙でくゝり肩外と稱へたさうですが、これが御殿女中の片外の權輿だと申すことでございます。垂髮時代の婦人は物の本などに見ると何となく美人らしく思へるのは、房々とした黑髮が玉のやうな額際に垂かゝつて居る恰好が宜かつた爲であらうと存じます。

▲輪廓

顔の輪廓を美しく見せるのは生際の恰好一とつでございますが、扨この生際が疎ならず密ならず櫛目がくつきりと立て根際から豊かに膨みを持ち、額に自然の陰影を作ると云ふ婦人は少いもので、先づ百人に一人も覚束ないかと思はれます。垂髪時代の婦人が毛をとき滑らして額を隠し、元祿時代の女子が前髪を澤山切下てまで陰影を作つたのも顔の輪廓と生際の缺點とを隠す工夫でございましたらう。唯今の婦人のやうに生際を明瞭に現はすのは何の位不利益か知れません。光線の向に依てはつむりの地の中まで、見え透ます。薄毛の者などは生際を餘り明らかに現はして居りますと人と對話して居ても女の情として、時に不安の念が兆さないともかぎりません。清少納言が始めて宮中に召れし時伊周公になぶられて羞したる扇を取上られた。鬢そぎの髪を額に振かけて隠さんと思へどと云ふ草紙の文はよくこの邊の心持を穿つたものと存じます。

▲東西婦人生際の作り方

手近いところが支那の婦人は御覧の通りの抜額で、あれは生際の毛を思ひ切て毛抜でぬきとり、書たやうにくつきりと輪廓を拵へ、朝鮮婦人も毛をかき分て一定の形式に生根の處を隠して居ります。西洋婦人は持前の波打つ髪のうねりを利用し或はわざとくせを拵へてまで額際にふくらませ大輪の牡丹花が咲かゝつたやうに奥ゆかしく輪廓の味を添へることをつとめて居ります。方法こそ違へ何國の婦人も生際を餘程注意をいたして居ることは確でございます。我邦近世の婦人は髷の恰好に工夫しつゝある割合に生際と額との關係を一寸閑却されて居りはしまいかと思ひます。尤も近頃束髪の廂で陰を作る加減が日本髪にも應用されて周圍に少し味ひを持てまいつた傾が見えますが、矢張流行の型を萬人一様に當はめて居るので、婦人各自が自分の顔形に應じて工夫すると云ふことは少いやうです。これは誠に惜いことゝ存じます。上部が膨んで下部が縮つた卵形の輪廓はヱーヌス形の動かせない美人形でございませう。まあさうとも定りませんが各自生れ付

の輪廓に應じて感じのよい型に拵へる工夫を生際に用ゐて見るのが必要でせう。

▲作り過ぎた髪形

結髪の恰好を公平な眼で評しましたらどうしても元祿時代の風が美の絶頂でございませう。德川時代の御主殿風なぞはあの服裝によつて釣合を持たせたのでせうが、餘り人工が過て堅く



なつたと思ひます。島田は作つてあつても中のからくりが見えませんけれども、丸髷の中を見せたのなぞは確に技工が過たに違ひありません。丸髷はあのテガラの處のいざこざを現はさずに髷形の代りにすき毛を心に入て、ぐるりと丸く播て了いたいものです。而して中挿は帽子止のやうに兩方からずぶりと差込みますと花の折枝の簪でも二つ揃つてさへ居れば

どんな形でも似合ひまして餘程優美に見えませう。實のところ私も二十代にはこれを試みて見ました。近頃佛國婦人が眞似る丸髷もこんな趣向らしく見えます。兎に角人工の極、天然を十分に働かせて人工らしく見えないところを程度といたしたう存じます。ちと餘事のお話かもしれませんが、新橋のおあい(戸根)のあの自由な手腕を以て。今すこし高尚な眼を養成する折を得させたいものです。例へば一寸した繪畫彫刻の主眼の處や歴史風俗の大體を處を知つてもらつたらどつまらぬことを思つて見ます。

▲不用意の時に見る鏡

流行の奴隷となるのは潔くありませんが、全然流行を脱することも却々難しいものです。流行にも捕はれず、突飛に流れぬやうに顔の輪廓を整へる工夫は指折の髪結でもむづかしいので且大勢の方々に一々細かには行屆きませんから自分で注意するに限ります。誰でもいざと鏡に向つた時は知らず〳〵の内に我が形の良いところを映して見て居ますからいくらか自分に胡麻かされてをりますが、試に他家の食堂なぞで皆の姿に混つた形をふと見た時よく自己の缺點を知るものです不用意の時に見る鏡の姿を最もよき參考として斟酌しましたら性情や天姿に反いてまでも流行を模すると云ふ弊を免れませう。

▲女に頭痛持の多い一原因

嘗て露伴先生が『女が頭をこはす時にいろんな雑物が轉げ出すのを見ると滑稽で堪らない』と仰つたことがございますが、全く女の頭はお荷物が多いに違ひありません。貞享頃の草子に『今世の女は昔無つたことを仕出たり、先首筋より上ばかりに要る物も、髪の油鬢つけ、小まくら、平髷結、忍髷結、笄、指櫛、前髪立、臙脂、白粉、歯黒、黛、おもり頭巾、留針、浮世つな等とありますが、更に六十年を經て延享頃には頭の粧具が二十餘品となつたとか申します。當今はこんな道具立も用ゐませんけれども、それでも太い髱を

くゝり付け、大きい髷形を頂いたまゝの寝醒の心地はどの位不愉快か知れません。永い習慣で格別の弊害も自覺しませぬが血の道持の頭痛持の一原因は確かにこれもあらうと思ひます。髱なぞも頸脚を細く見せる程度を通り過て今のやうな燕尾になりましては勢ひ猫脊になつて胸部は屈するばかりです。衛生の八釜しい今の世間にあの髱の流行が不思議でなりません。頸元も大切に違ひありませんが矢張生際が隠れる程度で宜しいのです。



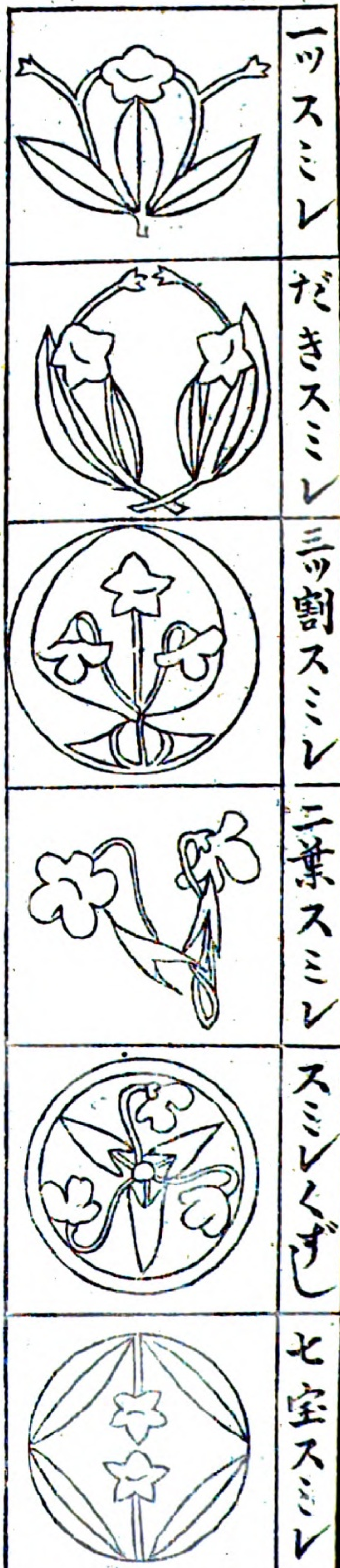
▲おつくりの意義のあるところ

束髪は日本髪より制裁を免れて居る點に於ても、輪廓を加減する點に於ても便宜はございますが、年齢に依つて相應しい装飾の具が未だ熟しませんから十分ともまゐりますまい。女の髪も今は矢張過渡の渦にさまよふて居るので致方もありませんが、追々理想的に近くことゝ期待して居ります。女も毛髪に彈力ある盛り時代には兎も角も天然の幸に助けられて居りますが、

定過て膨みも艶も失せ初る頃から人知れぬ苦心をしなければならぬのは餘義ないことでございませう。況して白髪の媼とまでゆき過ない途中、引つめた束髪も頑らしく、去りとて疲れた頭を髱に苦しめられるのも物憂ことでありませう。これらを考へまするとつむりをいぢめず、生際の缺點を隱し倘定過る淋しみを忘れる花の帽子の工夫を感心せずには居られません。併しこれも今は未だ實現は遠ふございますから成る可く頭の荷を減じて活々とした心地を持つやうに髷の心配は第二にして輪廓と生際の關係に重を置た方が差向德だと考へて居ります。それも富士額や雁金に作るのも時代の心持に合ませぬ。一々具體的にも申されませんが非常の病的でない以上は、癖毛でも猫毛でもそれなりに利用して顔との釣合をよくする工夫は、日本髪にも束髪にも出來やうと思つて居ります。つまり自覺した形容の缺點を取繕ろい、心の欲する自分の動作と餘りかけ離れたくない。甚しく他を僞らざる程度に心持よく外觀を保持するのがおつくりの意義のある所かと存じます。いよ〳〵是ではお洒落博士になれませうか。

猶處女と夫人との區別が分明として欲しいと思ふこと又主と家來の關係を以て一緒に有る時はやはり差別を心がくべき事等は種々の考へから左樣あるべきが道理であると思つて居りますが茲ではお話の主意が變りますから申しませぬ。

すみれの意匠



春の海濱料理

なぎさ

アラ一面の銀世界、昨夜から大層寒かつたのも無理はない。寒中春の様に天氣つゞき寒あいてからこんなに、降られても困てしまふ。海つたらマア白蛇が岩をもかみ砕きさうだ。これではまた二三日お魚がないかしらん、主人は毎日出勤で淋しい、晝食を愛子と二人ですますと同時に、中原奥様の御出、いつも御尻のながいこと、今日もいろ／＼御話の末、御歸りになつたのが三時、もうそろ／＼夕食の仕度と思つて居たら、魚屋が來た。珍らしく鱒の半身を持て居るから、それと烏賊とを取て置く、鱒もまだ脂がかゝつて居ないからまあこんな事にでもいたしておきませう。昨日東京の姉様から送て下すつたウドもあるからそれも用ひませう。

一 清汁（かじみ麩、海苔、薬味、蕗のとう）
二 烏賊の丸煮
三 鱒のマイナイソース
四 ウドの三杯酢

一、鱈を鹽出しゝて煮出汁に鹽を少し入れ、鱈が煮えた處で、醤油で味をつけ、海苔をあぶつて手にてもみ、蕗のとうもみぢんに刻みて汁を盛る時に入れる。

二、普通の味噌汁より少し濃い位に味噌を溶き砂糖を少々入れ、烏賊を丸のまゝ手だけはなして、一時間半もクツ／＼煮ると、崩れて盛り難いまでに柔くなる。

三、鱒の切り身にシホを一寸ふり、よくふかしてマイナイソースをかける。

マイナイソースの製法
湯煮玉子の黄身一ケをうらごし生玉子の黄身一とツ小匙一杯の鹽半匙の砂糖と辛子胡椒を少し加へ、サラダ油大匙三杯西洋酢大匙一杯を入れてよく氣ながに湯煎す。

四、ウドを皮のまゝ湯煮て皮をむき、短册に切りて三杯酢をかける。

雪はなほをやみなく降るけれども、昨日よりはすつかり暖かく、海も大分穏になつて來た。今日はとう／＼魚屋も來ず、牛肉も少しあるばかりだから、油揚飯でも焚いてお菜はざつといたしておきませう。

一 プリングマカロニトマトソース
二 清汁（ウド、椎茸）
油揚飯

あげに熱湯をかけて油氣を取り、細かく刻んで醤油味淋で下煮をなし、煮汁のみにては味が足らぬから酒醤油を適宜に足し、葱を細かく刻で一しよに御飯に焚き込む。

一、割合は肉五十目パン二十目
牛肉をよくたゝき、パンは皮をのぞきて水にひたし、よく絞りて前の肉にまぜ、玉葱を細かく刻んで加へ、鹽胡椒にて味をつけ、玉子一ツを交ぜて別にマカロニならば結構です。けれども田舎にはありませんから、うどんを湯煮てバター空鑵の中まはり一面にバターをぬり、うどんを渦巻きにおき、其の上に肉を適宜の大きさに切り、罐のまはり位の大さに平にのばして入れ又其の上にうどんを渦にまき、肉をのせ、別に玉子一個を割り、一寸泡立てゝスープを少しま

ぜ、其の上にかけてむすなり、むし上がつたらば庖丁にてまはりをはがし爼板にあげ眞中より縦に二タに切り、切り口を下に皿に盛りトマトソースをかける。

トマトソースの製法

トマトを生のまゝ皮ともにうらごしにかけ、ソース鍋に入れて鹽胡椒にて味をつけ、メリケン粉を入れてドロ／＼になつたものを瓶につめ密封しておけば一年位は保つ、用ふ時にスープにてのばし、更にシホ胡椒メリケン粉にてかげんなし湯煎にす。

二、うどを短冊に切り、水にはなしてあく出し干椎茸を洗て湯につけ、一方並の煮出汁を作り椎茸をつけておきし汁も交ぜて味をつけ椎茸を入れ終りにうどを入れて煮る。

今朝から日がさして暖かなので、雪とけの雨だれの音もやかましく、海も昨日のしけは何處へやら、丁度油を流した樣に、島々の間に釣船も見えるから、さぞ今日も珍らしい魚も澤山だらうと、思たら何のこまかいかれいばかり、これぢやよい客へもつかない、ところへお隣から小さいながらも鯛一尾頂だいたから、大助かり早速仕度に取りかゝりませう。

一フライ(小鰈南瓜)ブダー酒ソース

二鯛の刺身　附合ウドワサビ

三味噌汁(鯛のお頭お菜細々)

四口取(二色玉子、クルミよせサツマ芋、海苔卷)

御母樣が大層栗がお好だから幸ひ罐づめの栗もあるからセリーマセドアンをこしらへませう。

一、小鰈の腸を取り、よく洗て別にメリケン粉をドロ／＼に溶て砂糖を少し交ぜ其の中で鰈をまぶしてゴマ油で揚げ、新聞紙にて油を切る。

能く熟した南瓜の保存物を適宜に切り、湯煮て皮を去り、すりつぶして大匙五杯を鉢にとりメリケン粉大匙二杯玉子一ケ砂糖大匙二杯をよく交ぜ、匙ですくつて油で揚げ、新聞紙にて油を切り二品盛り合をブダー酒ソースをかける。

ブダー酒ソースの製法

一合の水へ料理用ブダー酒大匙二杯砂糖二杯加へて煮立ちし處へ葛を中匙一杯水で溶て入れしもの。

二、鯛を三枚におろし刺身に作る、ウドを細かくせんにうちて附合せに用ふ、なほわさびを添へる。

三、白味噌汁を作り、鯛のお頭及び刺身を作りし折の殘物うすはらなどを入れる、盛る時湯煮しお菜をこま／＼に刻みて入れる。

四、湯煮玉子を白身黄身別々にうらごし、砂糖を適宜に加へて味をつけ、鹽のかはりに白身の方へスジ子を一粒々々にはなしてよき程に交ぜ蒸し箱にみの紙をしき白身の方を平にならし、其の上に黄身を置きてふかす、白身に赤きスジ子の點々と一寸綺麗に見える。

くるみを一寸湯がいて鍋に飴を溶かし、酒少しとホンの一滴の醤油をたらし込み、其の中にくるみを入れてかきまはしながら汁の煮つまる迄煮る。

サツマ芋を湯煮てうらごし砂糖鹽にて味をつけ海苔卷ずしを卷くと同じに海苔を火にあぶつて其の上に芋を平にのばし、心に紅生薑を細かく繊に切り卷き込みやはり海苔卷位の厚に切る。

セリーマセドアン

ゼリー天九枚を五分間水につけ水五勺一合を煮立て、砂糖大匙二杯を溶かし、其の中へゼリー天を入れてよく溶かし、うらごしして型器に栗をならべ、其の上にゼリーを注ぎ込み、更に又栗をならべ、段々にかくしてゼリーを注ぎ冷す。

今日は悉皆雪も消えて大層暖いから、午後から一二家御たづれして歸たら四時、アラ大變大車輪で夕食の仕度をせねばならぬ。昨日の鯛のおのこりを用ふ事にして庭の水溜りから鮒でも取てきませう。

一　鯛のソース煮
二　鮒の雀燒
三　金柑のあんかけ
四　蕗のとうの甘露煮

一、鯛を刺身より少し厚目に切り、布巾にてよく水氣を取り、ザット一しほなし、メリケン粉をまぜて玉子でくるみ、パン粉の中に入れ、ラードでフライして置き、一方にバター一杯でメリケン粉一杯をいためてスープ少しと牛乳とを入れドロ／＼になし、なほ卓上ウヰスターソースを入れて味かげんをなし、先のフライを入れ一寸煮ておろし皿に盛る。侑める時湯煮玉子の黄身一個をうらごしして上にかける。ウヰスターソースも自分でこしらへるやうになつてからは惜しげもなく用はれて重寶だ。

ソースの製法

牛の骨付を一斤鍋に入れて水を澤山入れ其の中へ玉葱三個人參三本ばかり入れて弱火にかけてスープを作るべし、汁煮つまりて一升五合ばかりになつたらこれをうらごしして醬油五合蕃椒五六本、玉葱五個、人參二本、酢四合カレー粉少し、山椒片手一ヶ入れてなほよく煮て再びうらごしして用ふ、最も酢は終りに入れる。

二、鮒を背わりにしてよく洗ひ一度白燒にいたしてゴマ油を一面にぬり、酒につけ再び燒き此度は照り燒の汁をつけては燒き、つけては燒きかくする事三四度にて出來あがる。照り燒の汁は醬油味淋砂糖にて適宜にかげんして煎じおく。

三、蜜柑の皮をむき袋もとりて實を細々になし皿に盛り別に葛をうすく水にて溶き、火にかけて砂糖鹽を少々加味し葛がかへつたらおろす前にわさびをすりおろして入れる。此のあんを蜜柑の上にかける。

四、粒の揃つて開かぬ物をえり、上皮をむき鍋にて湯煮二日位水にひたし置き時々水をかへて苦味を去り、味淋一合砂糖百目醬油少しの割にて土鍋に入れて煮る、鍋に入るゝ前に蒸器にかけて一寸息をあげ紙ぶたをして弱火で崩れぬやうに煮る。

夜珍らしく渡邊樣御出下さるいつも似よつた菓子ばかりだ此の人至て甘黨だから千プダーのかはりに林檎でも用ひてパンプリングでもこさへて差し上げませう。パンのまはりの厚皮をむき角四ッに切り茶筒の如きブリキ製のものゝ内部にバターをぬりメリケン粉をふりかけ前の角に切りしパン一片を入れ皮を取り、サイの目に切りし林檎をならべ又パンを重れ段々にかくして四ツとも重れ別に玉子三個砂糖大匙一杯コンデンスミルクの溶きしもの一合五勺ばかり混和してレモン汁を加へて前のパンの上よりかけ新聞紙をかけてふかし、ツックリ皿にあけてナイフを添へ侑む。

社會觀察

寒中の無料宿泊所

覆面記者

髯を短かく刈つて、顔には薄墨を塗りたくつて、睦組の印絆天に破れ股引、跣足足袋と云ふ扮装。焦茶色がドス黒くなる迄に古ぼけた中折帽の中折をグンコツで衝き伸ばしたのを、ヤケにグイと被ぶつて外へ飛び出した。

昨夕から降り續いた雪雨は、先刻止んだが、道路はズル〳〵辷つて歩きにくい。それはまだしも、宵ながら呼吸が白く烟る迄に寒い一月十一日の黄昏。

落ち行く先は深川の第二無料宿泊所――寒中の貧民生活――上野で電車に乗つた時、廣小路邊は黄に紫に光る電燈の線を其の儘顔に浴びて、まだ初春の娯しさを色に浮かべた少女や、空想に疲れた青年や、貪慾に窶れた紳士や、虚榮に惱む若い女や、馬車、自轉車、車、犬に迄一樣に際だつのを眺めながら、――それからそれと想像の糸を繰り返す間に、早や高橋の畔にまで運ばれて了つた。橋の袂の自働電話室にお客は見えないが、其のそばの小さな行燈に赤く、牛にこみと書かれた屋臺の鍋から騰つとたつ煙を取卷いて、車屋、手代、人足などが三四人頻りにパクついて居た。〇にこみ〇――四本一錢――勿論牛と云ふは名ばかりで、鳥の百尋や、犬、猫、牛屋の鍋、殘りまで敲き込んだ代物それに舌鼓を打つかと思へば、遉がに貧民窟の相場も讀まれる。日はトップリと暮れて東森下町の通りは何時もながら不景氣であるが、處々に、おでん燗酒を攻めて、元氣よく怒鳴り、謳ふ――と云ふ連中の群が見えては、今日も相應しい仕事があつたのだらうと人事ながら嬉しく思つた。

軈て秋橋を渡つて眞暗な道をトボ〳〵と四五町も來た頃、此四邊には珍らしい大きな家があつた。マッチ箱を幾萬倍したと云ふ造作ではあるが、兎も角西洋館

らしい建築で‥‥硝子戸を開けて這入つた時は、早や七八人の先客が受付口に彳んで居た。所は目ざす、——それである。左は應接室、右が婦人室、まだ奥に大廣間があつて、火鉢に火がおこつて居た。鐵瓶の湯がタギつて居るやうだが、音は周圍を取卷いて今日の仕事の話をして居る五六人の話聲にさまたげられて、よく聞えない。

「お前は何處だ」、「お前はどこだ」と、突當りの受付に居る若い男が尋ねて、帳面についた者は右側の通路から奥へ這入つて行く樣子だ。少時して僕の順番が來た。原籍、姓名、年齢を問はれた。正直に白狀して、一夜の宿を借りる事になつた。自宅に居れば、寢衣も溫めて貰へる。床もとつて貰へる。——が此處ではそんな贅澤どころの騷ぎでない。みんなと一緒になつて例の通路を拔けた。

と突當りに水道があつて、錻力の錆びた金盥が二つ重なつてある許り。無論鍋釜のあらう筈はない。其の右の突當りに便所がある。割合に淸潔だ。水道と對して梯子段がある。みんなが其處へ上がつて行く樣だから自分も上がらうと、洗足足袋を拔いだ。

「こんな處に草鞋を置くと明朝無くなるぞッ」

と云ひながら、泥だらけの草鞋を持つて、ウロ〳〵して居る六十許の爺さんが居た。羅紗の外套を着た三十歳許りのヒドク黒い男が、便所の上へ自分の草鞋を隱しながら、コワイ目で踏臺の上から、顏だけを此方へ向けてジロリと僕の顏を見た。イヤな目をした男だと思ふた。

軈て二三人のものと段梯子を登つた。下の座敷より少し汚れた疊が敷いてあるが、三十餘疊の廣間で、向ふに、阿彌陀如來の掛圖を掛けた佛檀がある。左側に南條文雄氏の筆で、

「今日一日の事、一今日一日三ツ君父師の御恩を忘れず不足言ふまじき事、一今日一日決して腹をたてまじき事、一今日一日噓を言はず無理な事すまじき事、一今日一日人の惡しきと我がよきとを言ふまじき事、一今日一日の存命を喜び家業を大切

にすべき事、」

と書いた額面が掲げられてある。それを讀了つて右手の火鉢の傍へ來た。一服しやうと腹掛から敷島を出して火を付つた。

「吸殼はそつちの、煙草盆へ入れて呉れッ」

五十許りの意地の惡るさうな男が、僕の顏を睨みながら言ふた。

此の火鉢を取卷いた十人許りの人は皆一樣に僕の顏を見た。モー四十人許りの人が這入つて居るが、皆左の側で煙草を吸ふて居る。十五六の小僧から六十歳位のお爺さんも居た。僕はお爺さんの傍へ行つて吸ひ初めた。

會の正月風俗



グルリと一團になうて煙草を吸ふて居る。片膝を立てたの——のさばつたの——頬かぶりをしたの、兩膝をへの字にしたの！—兩足を投げ出したの——横になつたの——思ひ〳〵の格好で色々の話をして居る陽にやけて眞黒なのや、格別青いのや、髯ムシャ〳〵なのや霜やけで手も足もふくれたのや‥‥皆印絆天で、中に三四人小綺麗のが居るが、大抵は色の褪せた、破れた許り着て居る。三四人は外套と無理に名付けられるやうなものを着て居た。股引と云ふても、手拭と云ふても、皆三年

も、おしたちで養しめたやうな色ばかり、それが白ボケた絆天と眞黒な顔、光つた目、頭や髯、蓬々したのと對照されて言ふべからざる惡感が起つて來る。煙草の匂が無くなれば、何んとなく小便嗅ひ匂が鼻を襲ふて來る。その中に寂しい笑、陽氣な話をして喜んで居るのもある。

「どうだい、誰か浪花節でも、唸れよ、」

「隅――ダ川――ワ、ドン〳〵」

と調子を取つて足踏をした景氣に驚いて階段からおつこちた男があつたが、幸に負傷は無かつた。

「ナンダイ間抜奴ッ」

「可哀想な事を言ふない、」

「義理も人情も昔のとだイ、今日暮しのものにや、チと通過ぎらア、どうせ、此方人等こんな處へ來る奴ア出世の出來る手合じやネイや、」

「そうも見限つたものおやネイよ、」

「どうだい此の節は儲かるかい、」

「暮れと正月は幾何か可いが、この末から三月迄は霜枯れだ、食ふや食はずの生活をするかと思ひや儲けネイや、」

「此方人等のやうに、文無ぢや、活動寫眞の前を通つたつて目に入らネイ、」

「本をよんだつて頭に這入らネイ。」

向ふに雜誌を聲高に讀んで居たのが混交かへした。

「勉强する質でもネイ、」

「落膽するなイ、殘飯屋が付いて居らア、」

「心細いナ、一笊二百で、オカズが五文だ、」

「デモお前、殘飯屋だつてズルいや、夏は腐るから安價いが、此の節ぢや大分値上げぢやネイか、」

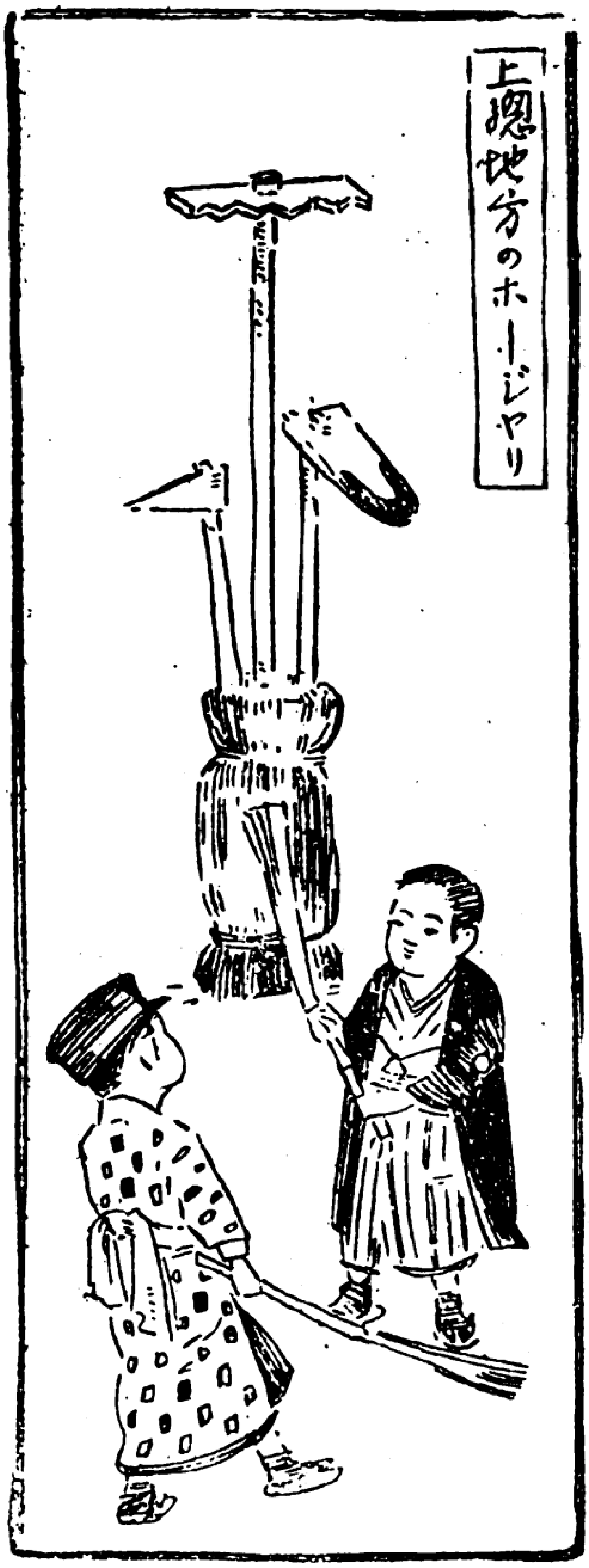
「末から二月へかけて、尙ほひどいや、」

「難有くもネイ値上だ。飯の中から魚の骨や澤庵の食ッ端が出る代物と來てるだらうぢやないか、」

「そんなに、厭なら無錢飲食でもすりや、御馳走がスコタマ食へるせイ、」

「巡公も引張つて行かネ、此方人等ぢや、テンから四分六が當て込みだからナ、」

◎上總地方のホージヤリ――上總邊では、正月一日から十日までの間に十二三歳以下の小兒が打寄つて、ホージヤリといふ豐年祝を行ひます。先づ豫め定めて置いた宿に集り、紙繩で藁を結んで小さき米俵様の物を作り、之れに栗の木の皮を剝いで鍬、鎌、熊手の三種を模造したのを挿し添へ、軒別に門先より破竹を鳴し乍ら之を桝に入れて差出します、すると家々では之を神棚に供へ、米と錢とを桝に入れて返しますが、この集めた米で飯を炊き、錢でお菜を求めて一同樂しく之を食します、此れ等は都て大人の手を借らずに、男の子が貰ひにあるけば、女の子は宿に殘つて三度の炊事を司ります、そして夜は宿の庭に火を燃し、子供等は其の周圍に坐り、各々木片を打鳴しつゝ「ホージヤリ〳〵」と可笑げに聲を揃へて唄ふのです。



「ひどい奴だなア、アハヽヽ」

「萬年町の乞食の方が氣が利いてらア、アノ公園の野郎なんか、日に二三貫から九貫位も働いてヨ、地べタへ頭を付けて額に泥を着けアがつて泣き聲の可い野郎が金になるつて騷ぎだ、それでも自宅へ歸りア、フタコかなんかのサッパリした重着をして、子供の守なんかして居ると云ふ始末さ、」

「此方人等の暮しをする位なら、監獄が氣が利いてらア、」

「デモお前、惡い事も出來めい、」

「ツリアお前、性分ぢやネイか、いくら貧乏したつてそんな事が出來るもんか、」

「武士は食はねど高楊枝かネ、」

「武士は、だけアよして呉れ、今日なんざア、吾妻橋の立ちんで八百だ、芋も食へないで、武士面もネイもんだ、アハヽヽ、」

「立ちんの事を言ひや、近頃馬鹿に增加たな。どこの辻でも同類で持切つてヽア、頼む方で馬鹿威張サ、」

「魚がしから新橋まで二貫七百も貰へる事もありア、目黑から三田まで八百の事もあらア、」

「水商賣の仲間だネ、アハヽヽ、」

「見ず商賣だ、誰か寄附でもして呉れりア可いナ」

「ロハで宿めて貰つて、おまけに貰ひぢや、動けメイ、」

「ぢや、何か事あれかしかネ、」

「水害の時にア、龜井戸で日に五兩ヅヽになつたせ、牛を三頭引上げりや五兩だ、」

「觀音樣に寢ころんで居て、五貫貰つたせ、」

「何、俺ナザア、握飯攻めで往生した、アハヽヽ」

「アハヽヽヽ」

一同哄と噴飯した。

「燒討の時に、こう見えたつて河野さんの部下人足で日に二兩になつたせ、」

「子分がをかしいや、」

「デモ子分ぢやネイか、使はれたんだ、豪氣だネ大將、」

「大將今日報恩寺あたりで何か演說をしたさうだせ、」

「ア、報恩寺の事言ひや、アノ報恩寺橋から横川町あ

◎土龍打ち――筑前福岡地方では、正月十三日の黄昏から十四日の明方まで手頃の青竹の葉先を小縄で巻きつけたのを、家々の子供等が各々携へて、宅地の近邊を「十四日の土龍打ち、ノヤタレコキタレ打廻せ、」と叫びつゝ打つて廻りますが、かうすれば其の年は土龍が出ないと申します、又其の竹を折つて、柿、梨の木などに掛けて置く時は、能く實が出來るといひます。

たりの瓦釜の中に寝てる奴もあるヨ、」
「瓦釜ぢや暖かいだらう、」
「ア暖かい、俺も五六回寝たがネ、一釜に三人と云ふ割だ、近



頭ァ少し八釜しいが、何時かなんザァ釜の中で乞食の嫁取があつたと云ふ騒ぎだ、アハヽヽ」

此時ドカ〳〵と登つて來たのは一人の婦人。將に之れ萬緑叢中の紅である。野郎共の話はモー聞き飽きたので、僕は衝と坐を起つて女を迎へた。續いて登つたのは當宿泊所の主幹東京監獄の敎誨師沼波靜軒氏である。法衣の儘、靜かに如來に燈明を點じて、經讀にかゝつた。此の機逸すべからずと其の婦人に聞き初めた。

姓は吉田、名はたねと云ふ。今年三十を超えること一つ。千葉縣東葛飾郡布佐町の者である。代々農を以て立つた家に生れたが、彼れが十七の春、都の花は上野に墨田に咲き亂れたと、花の一枝を手折つて封じ込んだ一通の手紙を手にしてより、娘心に、しみ〳〵と東都の空の戀しさが增した。況して都の友より、草深き郷里にくすぶつて、一生を送らんより、花笑ひ鳥謳ふ都に來たらば、また出世の折もあるべきにと、言越されては、矢も楯も耐らず、若干かの金を懷中に飛び出したが、そも誤りの原因で、今は淺草のロハ臺に寢る身となつたのである。職業として何も之れと云ふものもない。初めは虛榮の滿足を得やうために、男を捕虜にしやうとして、反つて捕虜となつて、銘酒屋女に賣られたが、遂に病氣で、十分な働きも出來ぬ處から解雇され、新吉原に落花生を賣つて、漸く一命を繫いで居るのであつた。さても淺墓な女よ――と憐れを催したのである。讀經の聲は「穴賢々々」と響いた時、

「穴賢と云ふのは、いくら貧乏しても、安心して極樂へ行けと云ふ事だ」

と一人の怜悧さうな男が少年に說明する聲が耳に入つたので、女との話は止めた。

「こゝの旦那は可い人だ、本所の方はツン〳〵して癪に障るネ」

こんな事を話した男も居た。讀經が終ると、沼波氏も此の女も下へおりて行つた。時計は八時を過ぐる事廿分、

「サ床を敷いて寢るんですよ、」

受付に居た事務員が温和な聲で、命令すると、一同は四列に坐つた。

「今晩は滿員ですから、寒くとも辛抱して下さい、」

床を敷いたり、色々世話をやいて居る男がかう云ふと、皆んなが、不平らしい顏をする樣子も無い。斜めに寢轉ぶもの、手をヅッ張るもの、足を伸ばすもの——色々な姿に變つたが、軈て床の中の人となつた。安らかな眠りでは無からう。併し一日芋ばかりを食ふて疲れた身體を温めるには、不足のあらう筈は無いのである。

「野宿をすることを思ひや、難有いもんだ、」

と嬉しがる男も居た。

「明日は何處へ行く、」

床の中でも樣々な話が出る。

「片道(葬式)がありア可いな、」

「二貫七百に光り(蝶々とも云ふ、祝儀の意)が二貫ありア豪氣なものだ、」

「旗持が三貫から三貫五百だ、」

「アッア お前樂だ、プウカ〳〵(音樂隊のこと)の後に跟着いて歩きさへすりア可いんぢやネいか、」

「意氣地の無い話だ、」

「當前よ、此方人等に意氣地がありア、こんな姿になりアしネイ、」

「俺なザア お前親類へだつて行けねい、何か手土産でも持つて、小綺麗な服裝でもしなけりや、來るなッて言ひやがる、情けネイ話しだが仕方がネイ、」

「現金な身内だな、」

「仕方がネイ、今の世の中だ、」

と云ふた聲は、恐ろしく寂寥を帶びて響いた。軈て高鼾も聞え初めた。僕は此の夜の總ての出來事を腦のドン底から繰返し呼び起して容易に眠られない。

十二日朝、六時の時計を合圖に一同は起きた。昨日の勞れは忘れた樣な顏で、二十分と經たぬ間に西に東に……思ひ〳〵の活動に入つた。僕も冷たい足袋を穿いて外へ出た。拂曉の寒い風は小雨さへ加へて、用捨もなく古絆天の破れ目から胸に浸みた。

林田翰長の嫁の心得

衆議院書記官長林田龜太郎氏の令孃一代子は(十八)歳、今回法學士羽塚商太郎氏と華燭の典を擧げられたが、父の林田氏は、結婚當日我子の行末を思ふて、家の爲め夫の爲めまた嫁の爲めにもなれかしと左の如き都合十五ケ條の嫁の心得なるものを書き綴り、一册の本として一代子に與へられたさうでございます。

夫れ婚禮は人生の一大本なり。今日其式を神前に擧げ、夫婦互に終生渝らざるべきを誓約し、之を親戚朋友に宣言す。父母たる者亦此機會に於て教誨するありて神明の加護を祈る所なくして可ならんや。茲に嫁の心得十五ケ條を授け、以て婦道を示明す。

▲第一　女一たび嫁するときは、夫の家は即ち我家也。我家の外に生家ありと思ふべからず。

▲第二　人は容貌の美醜よりも心の美醜を第一とす。容貌に於て既に劣る者若し心に於ても亦劣らんか、何を以て立たんや。汝は他人より一層注意を加へて女の道を格守し夫に仕ふべし。

▲第三　夫は一家の主長なり。故に言語擧作に於て之を敬重すべきは勿論、何事たりとも決して其命令に背くべからず。夫にして若し諫むべきものあらば、徐にすべし。決して爭ふべからず。

▲第四　夫、夫たるの道を盡さゞるも、妻は妻たるの道を怠るべからず。妻一意專心妻たるの道を盡すときは、神人共に感應して、終には夫をして眞夫たらしむべきなり。

▲第五　夫に對して寸毫の秘密あるべからず。交友然り、信書然り。

▲第六　嫉妬は如何なる場合たりとも之を愼むべし。

▲第七　夫の許可なく、又其命令に依らずして、決して外出すべからず。

▲第八　家の經濟は妻の最も重要なる務也。夫の指揮に依り其月收以內に於て家政の豫算を立て、收支必ず豫算に據るべし。奢侈は移り易し、戒むべし。身分相當と云ふ事を忘るべからず。負債は桎梏なり。負債ある者は自由の民にあらず。妻の贅澤又は不取締よりして負債を生じ、爲めに有爲の夫をして終身驥足を展ずるを得ざらしむるの例尠とせず。日々の買物は必ず現金を以てすべし。而して委任せられたる定額內より幾分の餘裕を生む樣注意すべし。而して此餘裕は相當の銀行に預け入れ、又は郵便貯金とし、以て不時に備ふべし。此貯金は萬已むを得ざる場合の外決して使用すべからず。而して家政より節儉貯蓄したるものは私財にあらざれば、之を使用する時は夫の許可を經べし。奈何なる事情あるも決して內顧の患なく十分に其天賦の材能を發揮せしむるは妻たるものゝ義務なり。忠孝道を全くするの基也。

▲第十　忿怒は我儘より生ず。若し抑制する所なからんか、不平不滿の心自ら顯はれて夫の機嫌を損ずべし。我儘は夫ある身に取りては絕對的に禁物也。

▲第十一 妻は一家の衛生上の監督官也。朝夕の食事の選擇及鹽梅一に夫の嗜好に依るべし。內外の洒掃に一點の懈怠を許さず。夫たるものをして汚染破綻したる衣服を纏はしむるは恥辱也。

▲第十二 舅姑其他の尊長に對しては夫に對する以上の敬意を表すべし。卑僕に對しては同胞の子弟に對すると同樣慈愛を以て之に接すべし。

▲第十三 家事の閑には修身及家政に關する書籍を讀むべし。稗史小說の如きは夫と共にする場合の外決して之を繙くべからず。

▲第十四 芝居寄席の類の如き夫と同行する場合の外斷然之に臨むべからず。

▲第十五 育英及慈善事業は甚だ好し。然れども其身分と財産とに相應するを要す。決して虛名を衒ふの誹を受くべからず。

以上は妻たるものゝ心得の一端を示すに過ず。左れば汝の入るべき新生活の意義を了解し、責任の重大なる事を考慮し、何事に限らず決して苟且に附すべからず。汝若し其務を惰りて其本分を失はんか、其實忽ち父母に歸すべく、不孝之より大なるはなし。汝每朝此の書を捧讀して一刻も服膺を惰る勿れ。父より。

第二回少女大會

本館少女世界主催の少女大會は、第二回を、紀元節正午より、兩國國技館にて開會 小波山人其他名家の講話、餘興等ある由、入場劵は少女世界二月號にあり。



新橋

浦鹽の冬

あふひ

（其の一）

霧にしめれる敦賀の埠頭、棧橋に立ち給ひし紫紺色のお被布召したる貴女のお姿、撫肩をすべる薄色の絹ショールが、たそがれの仄暗きうちに一際目立ちて、遠く離れても猶それと相分り申候。あの汽笛が淋しき灣内にひゞき渡り、墨繪のやうな松原、金ヶ崎城址より手筒山につゞく紅葉の色、しばしの別れながら名殘惜しく、打振りしハンケチも雫にぬれ申候。

日本海沿岸に暴風雨ありし後、僅か二三日の事とて、立石の岬を離れそめてよりは、波はなく靜かにみえて、大うねりにうねり出し、夕食の鈴は鳴りひゞき、隣室の美しいロシヤの二婦人は、薄ものゝ裳ひきずりて食堂に繰込み候へど、私は帶とく暇も苦しく長じゆばんのまゝベッドに横はり申候、斯うなつたら最後精功なるフランス卷も風にも吹かせじと思ひしふくよかな前髮も、鳥の毛深き枕の中に埋め込み候て、さらに〳〵遣瀬なく存候。しかし同じ女に生れながらロシヤ人の強さをおもひ候へば、流石に口惜しく唇かみしめ申候。

十數分の後コト〳〵とあわてた靴音のして、先きのレデーがかけて來り候、たぶん部屋にとび込んだらしく、バタンと戸の大きな音がきこえ申候。あとにて聞けば、箸つけると間もなく氣分惡くなつたとの事にて矢張りお仲間なりと安心いたし候。

月は淸く一尺の丸窓よりさし込み候へど、世の中にこれほどつらひと思ひつゝ眺むる月はまたとあるまじく、折々は金比羅樣や水天宮樣をたのみ念じ候、苦しい時の神だのみとは此事とをかしくも思ひ候。

翌る廿一日は波の上に暮れ、敦賀より三十六時間にてアスコルド燈臺の見えそめたのは午前六時、薄霧に包まれし海面は、だん〳〵と曉の歩さめて、東天紅の色あざやかに染められ申候、それより二時間にて浦鹽棧橋につき候まゝ、生き返りたる心地にて甲板に出候處、雪は綿をちぎつたやうに大きく降り、耳とつまさきに強き寒さを覺え申候、見渡せば敦賀の紅葉に引かへ、いづれの山も眞白にて急に秋より冬にうつりし心地いたし活動寫眞みたいに思ひ候。

やかましき稅關も無事通過いたし、うつかりすると、滑べりさうな雪に氷つた路を、やう〳〵パウロスカヤ街の宅へ着き申候。途中支那の苦力なぞに混つた朝鮮人が、振り返つてみたりすると何となくギヨッといたし候、出發前浦鹽の朝鮮人は亂暴だから、氣をつけるやうにと皆樣の御注意も思ひ出されて、ズドンとやられさうな御人物ぢやないくせに……。

日本の新聞雜誌は檢閲濟を待てば、一ケ月おくれとの事に御座候、それ故女學世界のみは船員にたのんで、ポッケットに忍ばせてもらふ事に約いたし候。

これよりは船の便毎に御文頂きたく待上候。

敦賀かめ子様　（ペンザ便）

（其の二）

此前の便ぢや何しろ着早々だつたから繪葉書にペンの走りがき、粋がつてる秀ちやんの事だから、定めし野暮つたいと笑つたでせう、そんな事氣にして居たら大變。ゆふべなぞれ、私の昔から仲好のホンメンナ十番の銀行の大和夫人を訪問したのよ。其いでたちが頗る振つて居るの、白巾を頭かぶり、ロシヤ式でれ、夜分なぞお芝居の歸りにみんなやりますわ、まづそれはいゝとして、外套が無いの、いつも眞夏の二ヶ月避暑がたく來るばかりで冬知らずでせう。それで大に考へた末、主人の日本式のトンビれ、あれを着て、毛のついてる襟をたてるのよ、胸までは一寸ごまかせるけれど、下は日本服に下駄はいてるんだから實に滑稽よ、あなたがみたらお腹の皮よるわ、迄一ヶ月前まで歌舞伎や本郷の桟敷にあなたは高島田私は丸髷と、流行の粋をあつめた氣で氣取つて居た女とは誰も思ひますまい、だから玄關へ出ると直に馬車に乗りたいつて言つたの、さうしたら主人がどうしても歩けつていふのですもの、人が悪いのよ。

浦鹽の道は隨分ひどいのよ、着いた日は雪がちらく降つて路も氷つてたけれど、きのふは上天氣だつたので、とけて流れておしる粉になつてしまつたの、其處を御者が向ふみずに走らせるので、折々は深い穴の出來た處に、わだちが喰込んで引つくり返りさうになるの、アレーつてほろにつかまると、ひげもぢやの御者が、大きな毛の帽子の中から青い眼で振り返つて笑ふのよ、赤い着物に黒いチヤンく着て、其の上から桃色の帶しめて、むくくとふくらんで居るの、隨分呑氣でゆく街の名を云ふと、無暗に走り出すから、乗つてるお客が曲り角へ來ると、右とか左とか言つて、目指す家へ來ると止れと指圖するの。

私の家には主人と私の外に、滋さんと書さんといふ若い人が居りますの、滋さんは一ツ橋出なのよ。もう浦鹽に三年居ますから、浦鹽通を以て自任して居るの。

「奥さん芝居はいかゞ。」

「結構よ。」

「先達者はペテルスブルゲ一番のオペラ役者が來てれ、三日間の給料が一萬五千圓、四十越した女だけれど美人でれ、大きなダイヤを頭から胸に一ぱい光らせて、動く度にヂカくして、歌よりも顔よりもその方が見物だつた。」

「あなたのやうにダイヤにおどされる興行主があつたら私も一寸女優になりましようかホゝゝゝ。」

「ロシヤ語また始めますか。」

「エゝ。」

「先生はなるべく美人にして下さいね。」
「どうして。」
「僕うまく成りたいんですよ、けれどれどうしてもロシヤの女を美人にしなければだめですつて。」

猴さんは二ヶ月ばかり前、往来で船の火夫から印度産の猿を買ひ取つたの、ケオツカの料に困つて日頃馴れた可愛い猿を、金三圓五十錢で手放したの、全く繁助はノミスケね、名はヤーシカ、（前持主の呼んだまゝ）林檎と玉子がすきで、そばへゆくと私の手をそつと押へては、指輪のうちでもルビーの赤いのが眼につくとみえて、幾度も〳〵つまんでみては不思議さうに首を傾けるの、お天氣の日には戸外散歩としやれるのですつて、少しづゝ藝を仕込んで居ます、あなたの御意に召すやうなら送つてあげますわ。

けふは鳳山丸の出帆日です、また次便にかくわ。左様なら、

東京　秀ちやんへ

○お伽噺集赤い船

小川未明作　京文堂發行　五拾錢

小說家としての氏が子供の時分の空想を今の圓熟した筆で平易に書かゝれたもの、表紙口繪、插繪は宮崎與平氏が筆、赤い船、青蛹探檢隊、馬と金持、電信柱と妙な男、外十數編を收む、少年少女諸君の長夜のお伽として最も適したもの。

○おとぎ七草

小波作耕花畫　博文館發行　七拾五錢

小波山人得意の輕筆、特に少女の爲めにと意をそゝがれしものにして、ねむるもの七編、外に小公子の作者バアーネット女史の作「小天使」一編を加ふ、少女諸子半宵の清興を助くるに餘りあらん。

○少女小說姉妹

沼田笠峰著　本郷書院發行　三拾八錢

純然なる小說に非ず、純然たる教訓に非ず、著者が美しき趣味ある筆に、三分の教訓を含めしもの、姉妹の情溢れて一讀誰れしも其の優に泣かん、少女の心緒を知らんと欲する者は本書を讀め、教科書以外清き情操に接せんと欲する者は本書を讀め、收むる所十編友愛の情紙間に滿つ。

○ヨヘイ畫集

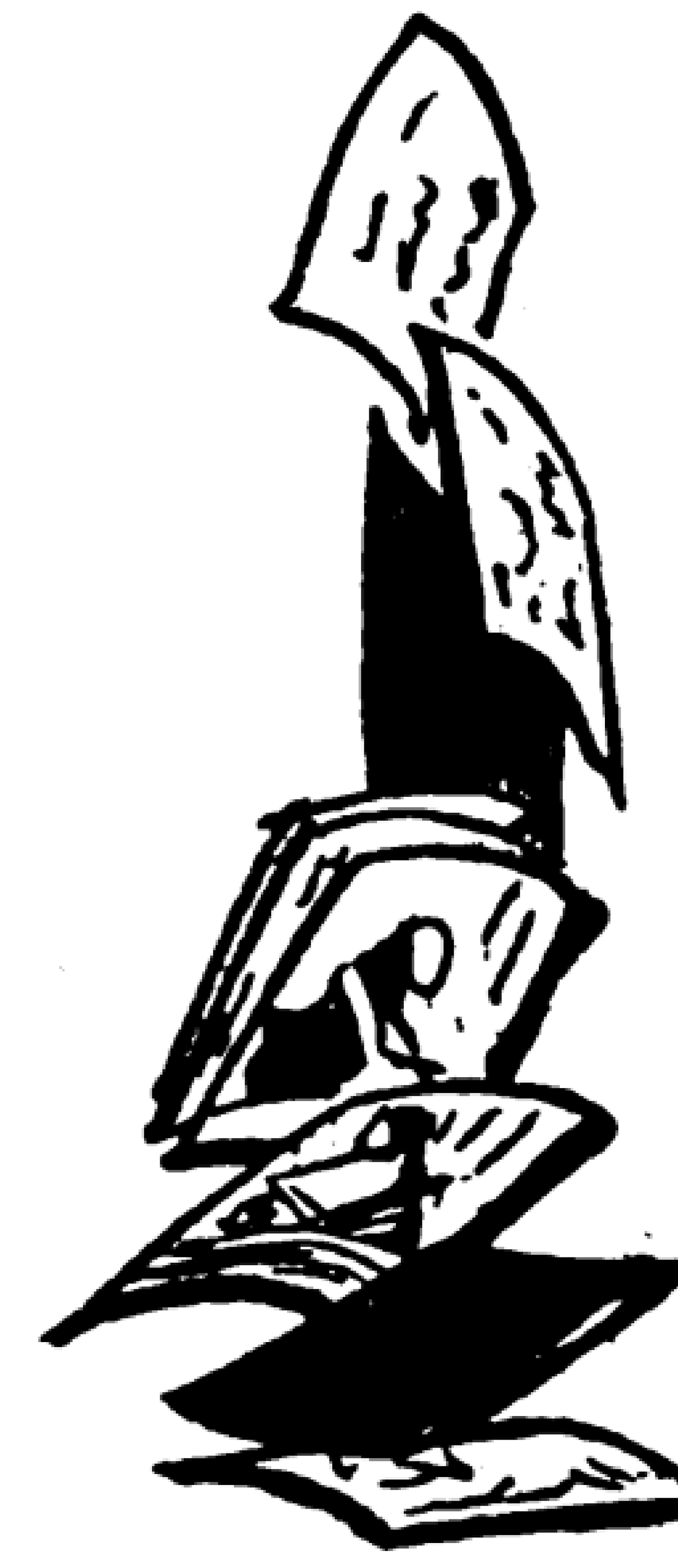
宮崎與平作　春秋社發行　七拾五錢

作者獨得の線と點と、集まりて此の畫集成る一條の線此處に意あり、一個の點此處に趣あり、一紙の裏此處に藝術あり、表裝紙容亦最も此の類の書に相應し、一本を座右に備へんか以つて藝術を語るに足らん。

○俳諧阪ニ車

樋口銅牛作　樂山堂發行　五拾錢

從來存せる俳風の解說は用意周到、一々佳句を摭へて奇拔なる批評に蕭洒なる諧謔を交ふ一讀俳林に遊ぶ思あらしむ。



我が處女の春

(始めて光にあひし少女)

花　筐

我が人生の春は、セカンドの小刻な音と共に、かけ足をして走り去らうとして居る。

美くしい、そして高くそゝりたつ城門が見える、私は刻々にその門に近づいて、今はもう中へ足をふみ入れて了つた。こゝは人世の春の宮である。私はこの城へ進み入つたのでした。甘い歓楽に酔はされて、いつまでもこゝに止まつて居たいと思ふけれど、私の足は心もとなく前へ進む。

こうして進んで行つてこの城の裏門が見えそめたらどうだらう！　私はまだ門を入つたばかしだからいゝけれど、かうして進んでゆけば、どうせつかねばならぬ城門だもの！

かくて過ぎゆく人の世の春、たのしい春は刻々に去つてゆく、はなれてゆけばもう二度と私の許へ歸つて來ることはないのだ、この望みある處女の春、美しい理想を胸に描きながら、私は奥ふかく進もうとするのです。

處女の春！　女は誰しもこゝをすぎてゆく、病める人も親なき人もこの光明に照らされる、この光りをあびると等しく、寂しい中にも希望がある、涙の中にも誇がある、富めるもの貧しいものへだてなく、人世の春は暖かい。

けれどもその光りを、濃く浴びる人と　薄くうける人とのけじめはあるだらうと私は思ふ、その一度ゆきでまた歸り來ぬ處女の春を、捕へやうとして十分に捕へられなかつた人も、ほしいまゝにした人もある、たとへ幸にせよ不幸にせよ、誠の春の光は人それ〲

の心にあつて、いくら身に美くしい衣をまとふたからとて、人世の眞をうけた人とは云へないだらうと思ひます。

こゝに光をうけし人うけざる人、私の胸をめぐつて一人づゝ御紹介いたしませう。

◎人生の春を捨た靜緒樣

お母さまにお別れ遊ばしたのは十歳の時、御難産で赤さんはお生れになるとすぐお亡くなりになつて了ふあとのお日立が悪るくて、お母樣はどつと床におつき遊ばす。

「私の手をしつかり握つて何か仰有つたさうたつてよその時の母さまのお手の細かつた事……何か私に云ひたいとお思ひになつたんでせうに……」

ゝて、よく靜緒さんが泣いちや私におつしやいましたつけ、その後父樣は血を吐くおん病で永のわづらひ、たくはへも大方つかひ盡して了つた上旬、十四になる靜樣一人を殘して、遠く魂を天外にとばせてお了ひなさいました。僅ばかりの知人に引きとられて、それからはいた〳〵しい程心をおつかひなさいましたのよ、明けて暮れて暮れて明けて。四度の年を更た夏、かりそめのなやみと許り思つた病がもとで、お父樣と同じおん病ひに、どつと床についてお了ひなさいました。

もう死はとつくから覺悟してゐらしつたらしいのですよ、病中私に下すつたお手紙をおめにかけませうか……たつた一つだけね。

長らふべくもあらぬ命の、せめては辛き運命より逃れて、優しき母の膝元に、すがりて泣かむを祈る我れなり。ゆるさせ給へ！宵々の夢路に相見る母の面影忘れかねて……。

私は弱い氣をお出し遊ばすなよつて申上げたんですけれども、…それは今思へば無理でしたわねえ、無理でもさうさせなけりやならなかつたんですもの、親もなく同胞もなく、家も財産もないたつて十七の弱い少女の身、そりや死にたいともおもひますわ。

明けて十八の春、寂しい病床に逝きました。なぐさ

めでくれる人もなく、涙を落してほんとに泣いて呉れる人もなく、たゞ一人の友を呼んだ私の手を握つて、いまわのきはまでなつかしんで居たお母さまのお傍へとう〳〵逝つて了ました。今も遺品となつて殘つてゐるのは、思出多き日記帳と三尺の繪絹に描いた私の姿なのです、何もない靜緒さんは繪の才をもつてゐらつしやいました、それこそ靜緒さんのもつてゐらしつた一つのものなのでした。



人世の春を捨てゝ迄も、母樣のお膝にすがつた靜緒さま、私は靜さまの死はかへつて幸福なのかとも考へました、おそらく靜緒さまの春は此からなのでせう。

◎物質に不足な富子樣

お家が豪商だといふので富子樣のお鼻は五尺ものびてゐらつしやるどんな方でも十分もお話すればもうすつかり當てられて了ひますのハイ〳〵ツて御感心申し上げて居ればいゝんでせう

けれど、私にはつひそれが出來ませんでね、皮肉つて上げますのよ、雪枝樣なんて傍ではら〳〵居らつしやいますのホ、、、、でもね少し位の皮肉り方ぢやもう平氣でゐらつしやいますわ、一糸亂れぬルイザ卷、お髮にばかりお女中さんが二人もかゝるんですつて！　大變ですわねえ、お襟にもダイヤだかガラズだか半襟とお召と兩方に龍の目のやうなのを光らせてゐらつしやるですよ、えゝ、まア廣告人形ね。

　富子さんなんて物質上の不平なんてまありませんわね、御自分ぢや精神上も滿足なんでせうけれど‥‥私ならまつ平ですわ、まだ靜緒さまの方がいゝ。――

◎人妻となつた久代樣

　今年十八の若奥樣、だけどまだ處女もおんなじですわ、まるで飯事してらつしやるやうなのですもの、日曜になんて伺ふとそりやもうをかしいのですよ、久代樣御自身も雛まつりのおけいこでもしてゐらつしやるおつもりなんでせうよきつと‥‥旦那樣はまたお部屋住ですの、えゝ帝大の法科へ通つて居つしやいます。

　いつでしたつけ、私が遊びに上りました時――さうねまだ嫁らつしやりたてでしたわ‥‥久代さんとお話してますとね、うしろの襖が明ぢやございませんか、私お小間さんだとばかり思つて振向くと、それが久代さんのあれなんですもの、すつかりあわてゝ了ひましたの、でもね、吃驚したのはあちらの方が遙に上らしうございましたよ、だつて、やあッて云つたまゝ赤い顔してお了ひなさるのですもの、久代さんも眞紅になつてその風つたらありませんのよ、

「若奥樣が何でせう」

つて、私後で叱つて上げましたけれど――。

　久代さんは處女の夢から覺めないうちに、もう人妻になつてお了ひ遊ばしたのでせう、ですから少女の春と同じ輝やきをもつて居るのです。

　やがて人妻といふ名になれて、少女の誇を失なつて後また人の世の春からはなれたその時は、久代さんの胸はどんなに寂しく囁やきをするでせう？

◎處女の春なき元子樣

お家は會社員、女ばかり五人の御總領、學校は今年御卒業になつたお十九、思ひ切つて根上りな束髮、學校は素通りでもなすつたと見えて、とんと覺えてゐらつしやらない、だつて尋常五年のお妹さんのお裁縫さへ見てお上げになれないんですもの、袱巾一尺五寸とはどうも痛み入りますわ、詩や歌はよんだあとから解釋をしてゆかなければならないからとて、俗に碎けた講談や落語の愛讀者、その癖お居間の本立や本箱には金文字のいかめしい洋書や詩集などが肩を並べてをりますのよ、元子さんには、飾り本と讀む本との區別がちやんとついてゐるから妙ですわ、でもイングリシユはチヤンなんですつて、まア御自稱遊ばすんですけれど、當にはなりませんわ、だつて御本はまるつきりいけないんですもの、ちよい／＼お言



葉の中へおはさみになるんですよ。

何だかさつぱりわけのわからない方。身に何の御不足はなくとも、心にすきがあつて氣が足りない。女學校は六年もかゝつて頂いた免狀はあつても、誇るべき處女の春を、こんな無趣味に暮すなら――あゝ私はほんとにいやだ。

◎柳に風の雪枝樣

お嫂樣によくお仕へ遊ばすことつたら、私どもが傍で拜見してさへも涙が出る位、意地の惡い嫂樣もすつかり甲を脱いでお了ひなすつて、何でも雪さま〳〵つて下へもおかぬやうに遊ばしてゐらつしやる、矢つ張り柳に風つて云ふんですわね、お音なしい方ですけれど、氣のつかぬうつけものぢやなくつて、何でもよく目端のきく方、「皆さんはどうしてお年寄がお嫌ひなんでせうね」とはこの方の御持論、これには私だつて贊成ですわ、他人の姉樣だからつて、母樣と同じやうに少しは甘へてもごらんなさる、これがまたいゝんですわね、いくらよくしてさし上げても、あんまり遜々しくしちや、いけませんのでせう。

* * * * *

まアこの位で切り上げませうね、そりや青春時代の理想たつて、それ〴〵おあんなさいませうけれども、私には人樣の事よくわかりませんわ、私だつてまだ十七、まだ半分も春の光にうたれない身ですもの、いざとなつて眞正面から切りこまれちや、ちとあわてますねえ、まアお茶濁しに私の日記をおめにかけませう、

××日　晴れ

始めて鶯の聲をきいた。

日當りのよい南の緣、針箱とり出でゝ長襦袢縫い乍ら、いつもの樣に歌を考へる、まづ心あたりを、京、梅、尼とこのへんにきめて、糸をしごきながら考へ始める、どうしても思ふやうに作れない、少しやけ氣味になつて了つたところへ、ホーホケキヨ……すぐ近くで美しい聲がするんだもの、そつと首を上げて見たがどこだか姿が見えない、緣まで出やうと思つたけれど

もう逃げて了つちや後の聲が聞かれないから、ぢつと我慢して惜しいけれど坐つたまゝ梅の梢をあさる。

ホヽヽヽケキョ――まだ聲がとゝのはない、藪のまゝの鶯なのだ、この方が風流だと、雅人めいて耳を傾ける、だつてまだ一月の中だもの、鶯には少し早いえゝつまらない遲くなつて了つたと、また紅の絹糸を通して縫ひはじめる、つひうつかりして居たものだから、おゝ痛い、まア、こんなに血が――

午後二時頃やう〳〵に仕立上る、襟をつまんで少しはなして眺める、上等眞綿を少し許り入れたのだから八つ口のふつくらしたあたり、少女の誇がひそんでゐるやうでなつかしい、紅地に白の疋田絞り、淡紫の亂菊模樣、「あんまり地の好い縮緬だから、千鶴の手には合はないだらう」つて母樣のおつしやるのを聞き流して手をつけたのだつたけれど、地が硬い上に少し縫目が弱つて居るので、工夫するのも一苦勞だつた、而しかう仕立て見るとさう馬鹿にしたものでもない、誰もこれを縫返しだなんて思ふものはあるまい。

立板の下におしに入れて、床の琴の袋をはづす、柱を置いて調子を合せて何を彈かうかと思つてゐると、「千鶴呑氣ですねえ、お裁縫は出來たのですか……。」つてまア母さまが――「三時ですよ、お茶においで。」つて笑つてゐらつしやる「えゝ」とすぐ立たうとすると「そこをちやんとしてゐらつしやい」だつて！折角出したのをまた片づけてお供してゆく。

お茶がすんで立たうとして思ひついたので「母樣何かお仕立て物は？」つて申上げると「それぢや」と仰しやつて御自分のお羽織を出して下さる「下手なんでございますよ」と云ふと「知つてるから宜うござんす」だつて……。

「こゝへもつてゐらつしやい、母樣も一緒にしますからね、杉もこゝへおいで三人でしませう」と仰しやつて下さるので針箱をもつてお傍へゆく、母樣は相變らずつくろひ物、杉は大きい手で何だか小さい物縫つてゐるので「なアに」つて聞くと「これでございますか、赤ん坊の帽子でございますよ」つていふ。

四時半から杉と二人で勝手へ立つ、母樣はお座敷をそこ〻片づけてゐらつしやる。

夕刻お父樣のお歸りをお玄關へお迎へして、食事をとゝのへて座敷へ上ると、植込みに花鋏の音がして、父樣はもう先刻の嚴めしい姿ではなかつた。

××日　曇、細雨降る

三の日なのでお花へゆく、お稽古始めの日に優梨子さまの方がお早やかつたから、今日は私の方が早く行きませうと思つて大急ぎでゆく、格子に手をかけてお玄關を覗くと、もう二三足の履物が脫捨てゝある、優梨樣と同じ鼻緒の千代田が交つてゐたので、はつとしてたゝずんで居ると、障子がさと開て美江子さんが首をお出し遊ばした、「ま、千鶴さまどう遊ばしたの、優梨子さんをまつてゐらつしやるの？」「ゐら優梨子さんまだ？」ホ、、、、。

今日は梅と水仙、なか〳〵自由にならないので泣きたくなつて了ふ、優梨子さんはまだお見え遊ばさない歸らうとする時やつといらしつた、もう皆さんおすみ遊ばした方が多いのに……。優梨樣の今日のローマの形容のよい事「まア、素的」つて小さい聲で申し上げ「千鶴さんまた桃割？もうおよし遊ばせよ、貴女にはお下げの方がよくおうつりなさるわ」つて仰しやる。

さうかしら？私もお下げの方がいゝんだけれど、母樣がお下げだと子供ぢみて十五六位にしか見えないつて仰しやるもの！

「ご一緒に參りませう、お待ち遊ばして頂戴な」つて優梨子さんが仰しやるから、拜見し乍らお待ちする、

「お千鶴さん！　私の包に晶子樣の佐保姫がありましてよ、ごらん遊ばさなくつて？」つて優梨子さんがいく度もおつしやるのを「えゝ難有う、えゝ難有う」つて聞流しにすまして拜見してたものだから、とう〳〵本音を吹いてお了ひになつて、「ねえお千鶴さん！後生ですからお讀みになつて頂戴な、でなけりやお目を閉つてゝ頂戴」なんて仰しやるものだから、皆さんがお笑ひ遊ばした。

かへり時分雨が少し降り初める、優梨樣はお下駄を

はき乍ら、「千鶴さん貴女お草履？　私もうすつかり要心して來ましたのよ」つておしつやる、私さつきの事思ひ出して可笑しくて堪らなかつた。

ぱつと開いた蛇の目の傘新らしい紺の香に包まれて優梨様と二人花をかばひながら歩む、私はこの傘の紺の香と、ケリオソートの匂とヨードホルムの香とは大好なのです。

家の門まで優梨様に送られる、お入り遊ばせつて申上げるのにどうしてもおきゝなさらない、「折角こゝまでゐらしつて頂いてこのまゝお歸し申上げちや、千鶴が母様に叱られて了ひますわ」つて云つたら「お千鶴さんだつて花が可愛いでせう、私もお花が可愛いのですもの」つてとう／＼振り切つてお歸り遊ばした。



内玄關の格子にもたれてあれ文ちやんが立つてゐる曲んだ紅いリボンをなほしてやりながらよく來たわねえ」……草履を脱いで上る私の袂につかまつて「私ね姉様のところへ來たの、それだのに居ないんですもの」と恨みがま

しい。
「ごめんなさいよ、本當によく來らしたわねえ、お一人?」「あゝ竹が來るつて云つたんだけれどあたし一人で行かれるつて云つて來たの、だつて姉樣が居ると思つてたんですもの。」
文ちやんの手をとつてずんずん奥へ通ると、
「大變遲かつたねえ、文ちやんがさつきから姉樣々々つて待つて居たよ」つて母樣が仰有る。
只今歸りましたとおくれ走せに襖の陰に手をついて母樣のお傍へいざり寄る、「朝傘を忘れたものですから歸りに困りましたの、えゝ優梨子さんに入れて頂きました。」
「文さんがお前、姉樣が居ないつてもので涙ぐんで了ふので困りましたよ、…あゝ今日は土曜だからゆつくりねえ。」
もう今日は土曜日!?學校へ行かないとつひ忘れて了ふ、「濡れやしないかへ、」暖まつてますよ、お着更へなさい」と云つて下さる、「えゝ、大丈夫のやうですわ、まアこれを活けて了つてからにいたしませう」と杉の用意してくれた花活の前へ坐る、「いゝお花だねえ」と母樣は感心したやうに……。
活けるとすぐ着物更へに立つ、母樣はお茶を入れてお三時の支度をなさつて下さる、お茶を頂き乍らふと思ひついて「母樣! 文ちやんのことを番町へおしらせ遊ばして? 番町でも一人でお寄こしになつて心配なすつてゐらつしやるでせうから」つて申し上げると、
「あゝ文ちやんが來るとすぐ杉に電話をかけさせましたよ、さうして一晩泊めてやつてくれつて仰しやつてね、ぜひおまへにも遊びに來てくれとお云ひでしたよ文さんを送り乍ら、千鶴明日の夕方番町へ行つてお出で」矢張母樣だ、私なんて今やつと氣がついたんだのに……。
「姉樣これ何に」ふり向くと御機嫌の治つた文ちやんが、どこで見つけて來たのか古い仙臺萩の錦繪を眺めながら云ふ、それもいゝけれどその繪の隅へ鹿の子の豆をうづ高く盛り上げてすましてゐる鹿の子が一番好

きで、その辨豆をとらなけりやたべないのだからおかしい。

「文ちやんその豆をね、このお茶碗の中へ入つて頂戴そしてそれからお話をして上げませうね」つてお湯呑に入れさせて、御伽をする。

此の前に宿つた時、お父樣にだつこされて寝て、大きないびきに驚いて了つたものだから、今日は日の暮れない中からもう私姉樣とよつて幾度となく云つて居る。

文ちやん寝狀がよくなくつちや姉樣はいやよつて云つたら、「あたしずゐ分よくつてよ、お床の外へころげ出やしないもの」つて眞面目になつて辯解する、「ぢやア寝みませうね」と承知すると、「お噺して頂戴よ」つて第二の問題が出る、姉樣をお話の問屋と思つて居るのが可愛い。

×××日

昨夜は如何してか目が冴えて寝られなかつた、十時に床に就いてから、十二時も聞いた一時もきいた、強ひて目を閉ぢると、目の前を赤だの靑だの黄だの紫だのゝ更紗模樣のやうなものが、くる〳〵ともつれ合つてまはつてとぶものだから、とう〳〵浮かされて二時まで――それでも二時を聞いたかしら、一時はたしかに覺えて居るけれど、私はいつ眠つたのだつたか――輝代さまのおみ帶のよかつたことや、元子さんが昨日ゐらしつたのは重ねの御自慢にゐらしたのだなど考へて、果は羨やましくなつて來たが、元子さんなんて衣裳の他に大した樂しみもないお身だけれど、私なんて衣裳の方は門外漢なんだから、私が私の樂しみをしやうとするのと、元子さんがお衣裳をお造らへになるとちつとも變りはありやしない、それにあちらぢや、一つのたのしみをするのは數十圓のお金がかゝる、私のは靜緒さんかぶれのたゞ紙と筆があればいゝ、お金がたんとかゝらないだけ、私が德をしてゐるのだと、まあ思つて居たんだが――。

ほんとに私は何時眠つて了つたんだらう？

お手洗をつかふとすぐ御佛檀を掃除する、これは私

の役目の一つ、そんな事は母樣のする仕事、お前は他の事をおしなさいつて母樣は仰有るけれど、澤山時間のかゝる事ではなし、すれば心地のよい事だから「母樣はお祖父樣もお祖母樣も御存じで親切に遊ばしたからようござんすれど、私はおめにかゝらないのですもの、ですからせめて佛樣だけは私にさせて下さいましな」とお願ひしたんだけれど、「それぢや母樣がすみません」つてどつちともつかず掃除をする、御佛檀のお燈火だけは母樣が忘れずにお上げになる。

ふと見るとお花が少し萎れかけて居るので、花屋の來る迄を庭の水仙切つてさす、紅い灯影に白い葩が染まつたやう、ゆら〳〵と花がゆらめく。

日本人は內氣だ

私は母が日本人で父が佛人で、今の夫は獨逸人で私の籍は獨逸に置いて有ります、日本人の方とは十分交際もいたし、亦私は外人よりも內地の人の方を矢張りヒイキに思つて居るんですから日本人のことを非難されると實に殘念ですよ。只一つ最も我が言ひたいのは、日本の方はホテル事業に對して餘り無頓着だらうと思ひます。外國では十分立派なものが有りますから外人が日本へ漫遊して一番驚くのはこのホテルの不完全なることです、帝國ホテル只一つと言つても可い位なんだから實に殘念ですよ。他の方面では十分力を注いでお遣りになるがこのホテルに對しては冷淡です、去年觀光團が來た時なんかも隨分困りましたよ。殊に五十年の大博覽會を控へて居て世界中から幾百千の人を引かうとして居て萬一ホテルの完全なものがなかつたら一體どうなさるんでせうね。

次に日本の婦人の方は餘り內氣だと考へられます。然しその方が婦人らしくて可いと仰せらるゝ方も有るやうですから、一概に不可とは言へませんけれ共、今少し活潑になさる方が可いだらうと思ひます。でも近頃は大變運動なんかをなさるやうだから、頰の赤い婦人をチヨイ〳〵見るやうになつたのです。誠に結構な事です。次に日本の婦人はダンスに對する趣味が大變少いやうに見受けられます、先年彼の有名なミックスさんを招聘してお志望の方を五六人集めて此處でダンスの稽古を遣りましたが、どうも長續きがいたしませんでした。次に日本人一般の方が最も世界の人に對して優れて居られるのは親切心の發達して居る點だらうと考へます。自分が恩を受けたら屹度其の恩返しをせなけりや止まぬといふ立派な性質です。(ミスセンダー)

欺され易い女の賃仕事

露子

或の時の事でした。別だんする事もなく、只遊んで居ても仕方がないと思つて、何か家に居て出來る仕事はないかと心掛けて居ると、新聞の廣告に、自宅寫字生を募集して居るのがありました。筆を持つて居る事ですから、一寸人の目にも內職か何か分らないで、是れはよからうと思つて出かけて行きました。町ではありますが、裏の方で穢い家です。開雲社とかむづかしい札が係つて居て、格子を入ると若い男の書生が出て來ました。奥では嬰兒の泣き聲やら、妻君らしい人の聲が聞えて居ました。

「何々新聞の廣告で見て來ましたが、どう言ふ物を寫すのですか見せて頂き度いのですが」と、申しますと、ぢつと私の風を見て居た其の書生は、

「貴女がなるのですか」と妙な顏をしてきゝますから、

「さうです、私に出來るなら家で遊んで居ても仕樣がありませんから」と言ふと、

「はいさうですか、少しお待ちなさい。」と奥へ行きました。やがて色の生白い薄髭の生えた二十七八の、銘仙カスリの着物をぞろりと着た男が出て來て、

「今書生の話ですが、何ですか貴女がしたいと言ふのですか」といやに大風に金縁の眼鏡越しに、見乍らきくのです。

「私にや出來ない樣な事でせうか」ときくと

「いや何出來ますとも」と立つて持つて來たのはロールの原稿用紙と、古い活版刷の小說のほごしたのを十枚ばかりとで、朱點の折つてある處を拔いて寫すのだと言ふのです。規則として五十錢の手數料に壹圓の保證金を入れて原稿紙壹枚について壹錢五厘の寫字料だと言ふので、私は形の如く手續を濟まして、其れを少しばかり持つて歸り、暇を見ては、一生懸命に寫しました。小さい活版の字を寫すのですから却々骨が折れます。でも初めのは寫し上げて持つて行くと、又後を

よこすのが、其れが何にするのかと思へる程下らない物なのです。斯して壹枚何程と金を拂つて寫さしてどういふ處で使ふのかと私は寫し乍らよく思ひました。其内段々度々持つて行く樣になつて、行く度に世間話などもする樣になりました。で其の主人が問はず語りに種々な事を言ふ内に、

「私は早稻田大學を出て或る女學校の敎師をして居たけれど、自分は一生敎師などで終るのを好まない、自分の望みはどうかして多くの靑年を養成して、其内から一人でもいゝから人物を出したいと思つてこんな事をして居る」などゝ人を感心させる樣な事を言つて居ました。妻君は未だ若い人ですが、同じ樣にむづかしい言葉を使つてはやはり大きな事を言つて居るのです其内に或る時、其の男から手紙が來て、頼んだ物の事で少し御話仕度い事があるから、何時頃に來て呉れろと言ふので、こちらでは眞實仕事の事と思つて正直に出かけて行つて見ると、

「私と一緖に來て呉れろと」言ひ乍ら、何と問ふ間もなくずん／＼と先へ立つて行くので、仕方なしに後から行くと、或る處の小料理屋へ入りました。仔細分らずについて上ると、酒などを言ひつけて飮み初め乍ら、

「今日は少し貴女に聞いて頂き度い事がある、私は此頃は實に不快に暮して居るのです、此れも貴女が家へ來初めてからの事で、あゝして時々貴女が寫したのを持つて來る、其の後で私が貴女を賞るとか噂をするとか言ふ事があると、妻が非常に怒る、そして每日其の事を言ひ出しては何につけ一々口答へをすると言ふ有樣で、實に此頃の私の家は不愉快極る、私も實はあの妻は元はよいつもりでもらつたのだが、段々此頃になると、實にふしだらな女で氣ばかり強い、でとうてい事業をする上に於てもあゝいふ者が妻になつて居る以上とても成功はしないと思ふので、私の思ふのでは實は貴女ならば適して居ると思ふが、私の妻になつて一ツ共に遣つて見る氣はありませんか」と、どうも意外な事を言ひ出されました。私はこんな事を聞くのは初めてなのでとても眞面目に取り合ふべき事ちやないと

思つて、

「私などとても夫を助けて成功するの、内助のと言ふ事は出來ません、病身ではあるし、そんな眞面目な考へは持つて居りません。別だん食べるのに困ると言ふわけもなく、其れに相續人になつて居るし、まあさう言ふ御話は御免を願ひませう、然し奥さんとの中にさういふ不和を生じさせたのは大變に濟みませんでした、明日でも一度上つて極りをつけてもう上りません様に仕ませう」と言ふと、



「今になつてそんな事を言つて逃げると言ふ事はない私が是までに言ひ出したのを只其んな事で斷れると思つて居るのですか、あんな穢い家にこそ住んで居るが是れでも私が一つかうと思へで壯士の十人廿人は直に集まりますよ貴女は知らぬのだらうが、私のしてゐる商業、寫字ですね、貴女も其の寫字生の一人だが、其の人等へ皆な規則通りに寫字料を拂ふて居ると思つてるのですか、さう思ふと大きな間違ひでさ、手數料は返さずとよし、保證金は一年過ぎなければ返さぬ事に

なつて居る、そして寫して來るのは、貴女のでもさうですよ、屹度一枚に一ヶ處やそこらは間違つて居る、一字なりと間違へば寫料は拂はない事になつてゐるのだから、出す金と言つては安いロール紙の代位だ、てんであんな物を寫させた處が何に入る物ですか、唯手數料と保證金を融通するだけの事で樂に遣つて行かれる、ね、こうして網の目をくゞつて居る私です、優しく出て居る内はよいが一つ敵にしたら取り返しはつきませんよ」とまるで強迫です。私も惡い者にかゝつたと思ひました。どうしたらよいかと種々考へて、

「私も親のある事ですから、いくら貴郎からさう言ふ事を伺つても、直ぐにどうと言ふ御返事も出來ず、又現在奥さんのある人に何と言はれても眞面目に御答へも出來ませんから其處邊をよくお極めになつた後に又御話を改めて伺ひませう」と言つて、とう／＼其の一點張りで漸々其の場を逃げて來ました。外へ出ると後から追すがつて來て、

「其れでは貴女の方の言ふ事はよく分りましたが、私の言つた事も御忘れない樣にね、改めて親御の方へきつと申込みますから」とあくまでも恐ろし氣に言つて別れました。私の方では別だん疚しい心もなしするので、さ程恐ろしいとも思ひませんでしたが、女と言ふ者は氣をつけるものだと思ひました。其れぎりもう行きもせず居ますと、或る日書生が手紙を持つて來ました。其れには、未だ妻の方の片がつかぬので延びて居るが遠からず運びをつけるが、今少し都合があるので濟まないが金子を何程貸して與れとの文意です。うまく口に乘らないので到底駄目だと思つて、金を取れるだけ取らうとでも思つたのでせう。其後新聞を見る度に其れに類似したのをよく見かけますが、其れを見る度に私は是れに欺されてとんだ目に逢ふ御方がありはせぬかと思ふと、實に恐ろしくも思ひます。自分の愚か故でせうけれど、全く新聞などの廣告の當にならないと言ふ事を人樣にもお知らせ仕度いと思ひます。中には其れによつて學校へ通ふなどゝ思ふ地方の御方もあるでせうが、實に危險な事と思ひます。



文苑

信濃路より

長野　小野あざみ

美しき御筆の跡、お懐しさに波立つ胸に深く〳〵巻き納め申候。ほんとに寒中とは申し乍ら昨今のお寒さ。殊に雪深き信濃路の嚴しさは又一しほにて候。明日の寒明けも只名許り、餘寒の程もさこそと偲ばれて。毎日祖母がお相手と云ふ名の下に、炬燵に許りしがみつき、誰かのお尻に根がついてなど當事云はれ居り申候。軒のつらゝや、木花咲く位ゐは毎朝の事乍ら、今朝などは洗面してかきあげし髮が氷ると云ふ始末。いくら產聲擧げし地とは申せ、つく〴〵愛想もつき、そゞろに春風早く訪づる都の空戀しく覺え申候。まして君居ます處「山里の雪の三月は寢て暮す。」まさか其れ程にも候はじが。四面雪に閉されて何の趣もなき此の里も、只一つ、今日此頃の冷い大氣を振はせて、「紅召しませ寒の紅」、紅賣る少女のなまめかしく冴えた聲に彩られて……。あゝ早く紅添へて、花に憧がれる春をとのみ待ち暮し居り候。(二等)

故郷より友へ

東京　若むらさき

胡馬北風にいななき、越鳥南枝に巣くふとか。まつたく故郷忘じ難くて、暮の中にはあれ程氣の强い事云つて居ましたけれど、やつぱり大晦日の終列車で歸つて參りましたの。だつて皆樣嬉しさうな顏して左樣なら〳〵と終業式の終るのを待ちかまへて歸つて、おしまひになつた後の淋しさつたら、寢ろにも起きろにも只一人。私淚がこぼれて來て、たまらなかつたのですもの。東京の賑かなお正月よりも淋しくとも、田舍のまゆ玉でもこしらへてお祝するお正月の方が私には面白いの。……けれど最うあと二日限り、七草には何うしても名殘惜しい故郷を立たなければなりませんの。きつと七日には雨でも降るでせうよ。私の淚雨で……。(秀逸)

來客日記

近江　平塚てる子

今日こそはゐらつしやるだらうと、お花の稽古にも行かずに待つた甲斐あつて、午後の汽船で伯母樣は見えた。恰度四年遇はないので、もう懷かしくて〳〵つて仕方がない。母樣も天にも地にも一人の姉なので、下にも置かぬ御待遇。相變らず快活な方。それにしても伯母樣の御若く見える事。四年前と些とも變らない。內の母樣などずつと前から總髮にしてゐらつしやるのに、伯母樣は前髮わけて、あのお髷の格好のよさ。內の母樣の姉だと、誰が思ひませう。今も瀧がどちら樣がお姉樣でと尋ねた位。私のお土產はリボンと菅原饅頭。「いつまでも子供だと思つてゐたら大間違ひ、惡い事でした、歸宅早々何かいゝ物を送ります」と大諧

び。先刻も並んでお話承つてゐたら、「おや、これはしたり、もう一人前ですね」と肩をお叩きになつた。夜は久し振りで得意の高砂の曲を聞いて頂いた。（秀送）

放課時間

千葉　戸村登志子

歴史の時間が濟むと、空想好きの道子さん、歌の上手な春子さん、それに妾と三人の仲よしは、打連れて暖い圖畫の教室の南へ行つた。白いカーテンの窓の下へ、先に行つた道子さんが立ち止つて「おや」と叫んだ「犬ころですわ」。「何處から來たんでせう?」。まだやつと眼の明いたばかりの白い犬が、眠りから醒めて驚いた樣にクンクン啼いて居る。

「綺麗な毛ね、赤いリボンで頸を卷いてやつたら屹度うつりがいゝわ。」

「まあそれよりか道ちやん寒いだらうから陰にならないでおやりよ。」

「さうね、おやもう止みましたよ。矢張ヤオゲニスさんのお友達だわ。」

折柄窓の開く音がして、「おゝ可愛らしい犬ころだな」と色の褪めた洋服を着た髮を無茶に延した、ヤオゲニスとニックネームの附いた圖畫の先生が首を出された。春子さんは切りに道子さんをつゝいて居る。

待つ夜半

京都　喜美子

何時の間にか風も止んだらしい。夜は靜に更けて行く。あの足音は：：お歸りかしらと耳傾けて居ると、「北白河の――宮とて――」：：後は口笛になろ。針を持つと又しても靴の音が。今度こそさうかしらと、ランプ片手にいそ／＼立たうとすると、「思へば涙が出るわいなか。」憎らしい。誰だらう。時はもう十二時に五分前。鐵瓶のお湯がチン／＼煮立つ。もうお歸りになりさうなもの。不意にベスが吠え出したので、雨戸を開けると、すゝ寒むし。月が手洗鉢に氷りついてゐる。

みとりの夜

近江　平塚てる子

叔母樣と交代に來た時は、痛みも納まつたと見え、現のやうに目を閉ぢてゐた。邊りはシーンとして薄暗い。ランプの灯に照された蒼白い婦美さんの顏がハッキリと浮んで見える。「婦美さん、どうですの、少しさすりませうか」と覗き込むと、驚吃したやうに目を開いて、「おや、いつ來て下すつたの、妾母樣だとばかり思つて居たのよ」と淋しう笑ふ。「本當に遠慮しないでね」。「難有う御恩は必と……」と早や涙ぐむ。「まあ餘計な心配など止してそれより早くよくなつてね、ほらあなたの好きな八重衣でも合奏するやうになつて頂戴」と言ふと、餘程嬉しかつたと見え、「ホ……でも斯う細くなつて仕舞つて爪が缺るかしら」と痩せ衰へた手を差延べた時は、思はず涙が頰を傳ふた。

遺物

山形　あわゆき

祖母樣の三七日も昨日に過ぎた。四十九日にはそれ／＼配るお形見もきめて置かなくては、と母樣や姉樣は祖母樣のであつた簞笥や長持のものをすつかり出して見てゐらつしやる。紋羽二重のお紋付や、黑縮緬のお羽織や、その他遺物のかず／＼。長らく東京の叔父樣のところへいつて被在つた祖母樣は家に似合ぬ御衣裳持であつた。○○の伯母樣にはこれが丁度いゝでせう? と姉樣は二三度しかお召しなさらなかつたとい

ふ糸織の袷をお取出しなさる。これは叔父様がこしらへてお上げになつたのだから叔母様によいかと思つてゐたがねえ、と紋羽二重のお袷布を明るい方にひろげて見ながら仰有る。私は黄八丈か何かの上に、このお袷布を召した、祖母様の少しお腰のお曲りなさつた撫で髪のお品のよいお姿が目に浮んだ。

芝居歸り

愛知 永田ふみ

眞闇で、私共の提燈までが、ともすれば闇に吸はれて終ひさう。鐵棒を引ずつて行く火の見番がお伽噺にある鬼王の様だ。

劇場から出たまんま遲つて居る娘さんの手には、手袋の筋の金絲が、ちら／＼光る。

何處かで時計が一つ鳴つた。

「娘さん」。「えゝ」白い顔がひらめく。

「あの初菊は、夫の首途に何と云ふ佳い表情でせう。」

娘さんは默つてゐる。見れば眼には夜目にも著き露の玉。

思はずはつとした。

一しきり吹荒んだ木枯の止息の間を、下駄の音のみ強く／＼刻んで行く。

新婚の人

大阪 中島麻子

今日は、お歡ちやんと、○○町へ行く約束がしてあつたので、早晝たべて出掛けた。淋しい野路を、二人は寥寂小聲に歌ひつゝ歩るいた。街道筋へ出たら、ステトションの方から、若夫婦らしい二人連れ。誰かと思つたら、まア俊様！ 暫らく見ない中にすつかりハス振つて、金縁の眼鏡に、縞ラシヤ背廣を着込んで、「殊に鼻下のプリンス式のお髭が振つてると思つた。「暫らく……」と叮嚀に頭を下げ遊ばした奥様は、おつこちさうな大丸髷に、緋のお手柄榮えて。夢温かな新婚の春、輝く様なるお顔に、笑かたむけて、しとやかにご挨拶遊した。俊様は絶えず微笑んで奥様を見返つてゐらした。

故山の友に

大阪 麻子

鈴子さま、絶えて久しき二年振りの便り、よしや現世の血は分けずとも、互にかはるな、かはるまじと、固く契りし私がふつゝり音信を絶しとは情なき人間よと、さぞや恨み居給ふは必條なれど。よく／＼の事情のひそみ居り候事、よもやご存知あるまじく候。病の床の明暮れに思出られ候は、かつ散る花吹雪二尺の袂に受けて、三人が、「見よ甘泉の花散りて……」を歌ひし、あの夜。花の下影。あの時おん許様には十六、私は十八の春にて候ひし。今も心に殘るは、只あの夜にござ候を……。これも運命にて候べし。鈴子さま、何卒妾が苦しさ、この胸の想ひお汲み取り下されたく候。かしこ。

春

新潟 山崎しづ子

寺の内から木魚の音が長閑に聞こえて、それと共に靜念様の若々しい讀經の聲が微にもれて來る。入口の寒梅も散り初めて、土塀際からは土の香の高い陽炎がほやり／＼と、靜に音もなく昇る。裏の墓塚にはへなへなになつた造花が二三本捨てられて居る。村には午を告ぐる鶏の聲が

長閑に響いて、御仙茶屋の名物だんごの旗がひら〳〵と舞ふ。若い女が地藏に向つて何やら祈つて居る樣子。それがすむと懷から奉納旗を出して、手洗小屋の釘にかけて行つた。靜念様の讀經はまだ止まない。

冬の日記

福島　木村つね子

しみ透る寒さにとう〳〵一時間寢過ごした。大急ぎで雨戸を明けたら寒いも道理、山の峰々がまつ白。髮結ふ手先きがこゞえて冷たい。

部屋に引込んで枕の草子を讀んで居ると、勝手口に御免と云ふ聲。行商人か何かの樣に思はれたので、調子の上らぬ返事をし、渋々出て見たら珍、らしくも藤井の叔父樣だつたので、とんだ失禮、相變らずの御元氣で丞此間病神に危い命を取止られたと伺つたは嘘のやう。お話が面白くつて皆んなでお留め申したけれど、お聞き入れなく、とう〳〵夕方お歸り遊ばした。食後母樣露子を連れて原樣へ入らつしやる。父樣は早くお休み遊ばして、姉樣とたつた二人新聞を讀んでお饒舌をしてお歸りを待つ。川瀨の水音が折々下駄の音に聞えて何度か耳をかたむけた。

私の姑

京都　梅原美枝子

夕陽は西に傾いて、軒に雀の雛呼ぶ聲までが病める身には何となうあはれに。そとは木枯颯々として如何にも寒むさう。それでも子供は元氣なもの、未だ追羽子の音が手に取る樣に聞ゆ。とう〳〵半年になつたが未だなほらぬ。あゝ執念深き此病氣、いつまで私をいじめるのだらう。浦田の奥樣は今しがたお風呂に入らしたやうだが、走元で「懐ろの日中に子供を置いて風呂に行くなんて、今の嫁は皆何うしてこんなに氣まゝだらう」。姑樣の御聲らしい。世間の姑樣は皆あんなのかしら。私の姑樣はイツも私を可愛がつて下さる。中年病んで居ても只の一度も御いやみらしい事は仰しやらない。イツもにこ〳〵として慰めて下さる。私は病んで居ても幸福である。

ある夜

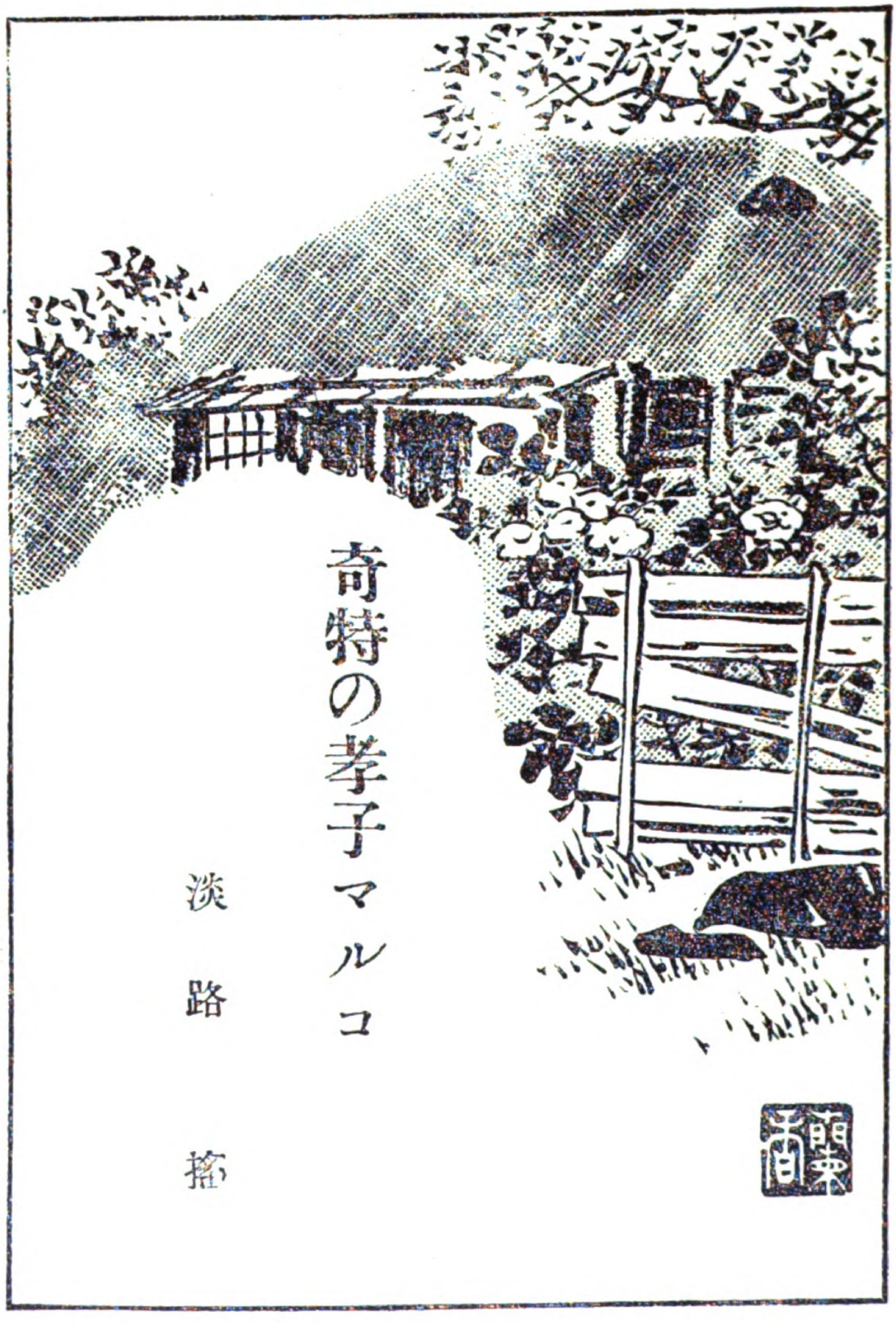
山形　すみれ

けたゝましい郵便の一聲に、今まで讀書して居た私は、はつと我にかへつて、思はずかけだしました。おや私にと思つて見れば、なつかしいエムさんから。あゝ幾夜まちこがれしこのおとづれよ。部屋にかへる間ももどかしう封おしひらきよみ下す。其ふし〳〵「菫さん、私は高き理想をいだき、望多き將來を樂しみしもつかの間、今は、はかなき夢ときれはてゝ、記すだに筆運び得ぬ逆境にたち至りました、友よ不甲斐なき妾……」にぎれる手はひとりでにふるひ、心はあやしう物狂ひて、記せる文字だにさだかならず。あゝ友よ、うらみし罪をゆるしたまへ。かゝる境遇に泣けるとは、神ならぬ身のつゆ知らざりし。あゝ不運の友よ!!

病める妹

大阪　くれ葉

八疊の襖ひきめくらした屛風の中に、久子は胸を病んで寢てゐる。少さな病みこけた顏をけだるさうに枕から下して、彼の微笑む每にゑくぼの見えし頰は衰れにも殺げ盡し折々動かす眉目の間には死の神が宿つてゐる。只昔の儘に房々とせる黑髮の四五本、瘦せたる顏に懸れる樣のいたいたしさよ。夜はいたく更けぬ。病める久子は如何なる夢に襲はれけむ一聲たかくさけびしが、又すや〳〵と眠りぬ。折々またゝきし燈火もいつしか細くなりゆく。



奇特の孝子マルコ

淡路　搖

△其一

少年マルコは、お母さんを捜す爲に、獨りで伊太利のゼノアから遙々南亞米利加のアルゼンチンまで、艱難辛苦して出掛けて行つた。これには色々哀れな話がある。

マルコの家は元は相當に財産もあつて、暮しに困るやうなことはなかつたが、色々不仕合が續いた爲めに段々暮しが苦しくなり、後には借金なども出來たので、お母さんは氣健にも決心をなし、アルゼンチンへ行つて、暫くの間何所か善い家に奉公をして金を拵へ、又以前のやうに、樂に暮しの出來るやうにしやうと思つて、二年程前に同國の首府のブエノスアイレスへ出かけて行つた。かゝる目的で遙々亞米利加まで出かけて行く勇ましい婦人は伊太利には少くはない。行けば善い給金が取れるから、二三年すると大概の人は幾千リーラ(一リーラは四拾錢ばかり)かの金を持つて歸つる來るので、アルコのお母さんもそれを樂みにして出掛けたのである。當時十八歳の娘と十一歳のマルコに別れる時には血の涙を流して悲むだけれども、心には大なる望みを懷いて勇ましく出かけた。

海の上は幸にして無事であつた。ブエノスアイレスには夫の從弟がズット前から店を出して居たので、其の人の世話で、着くと直ぐに善い奉公先が見附かつた。給金もよく、扱ひも親切な善い家であつた。其後家とは斷えず手紙の往復をして居つた。家の方からの手紙は、從弟の所へ當てゝやれば、從弟から彼の女の所へ屆けてくれ、彼の女からのも、やはり從弟に賴み、從弟が其れへ二三行自分の便りを書き足して、家の方へ送つてくれるやうになつて居た。給金は月に八十リーラであつたが、自分では少しも使はずに三月目〳〵に可なりの金を家へ送つて居た。そしてマルコの父は義理堅い人で、自分でも仕事に精を出したから、今までの借金も段々拂ふ事が出來て、再び以前のやうに人人から信用を受くるやうになつた。

こんな風で萬事都合がよくなり、其れに妻も間もな

く歸る筈だからと思つて父は非常に滿足であつた。否彼の女が早く歸つて來なければ、暮し向きはどのやうに都合がよくなつても、父は滿足出來なかつた。妻の居ない家はガランとした明家のやうに思はれた。マルコは又非常に母親に懷いて居たので、母親が遠くへ行つてからは、其れはもう沈み込むでしまつて、一向元氣がなかつた。

△其　二

かれこれして一年ばかり立つた頃、アルゼンチンから、短い手紙が來た。其の中にどうも身體の工合がよくないと書いてあつた。一家の者は非常に心配して、次の便りの來るのを待ち兼ねて居たけれども、信りは其れつきりで來なくなつた。家の方からは二度までも從弟の所へ手紙をやつたが、從弟からも何とも返事が來ない。奉公先きへも出して見たが、屆いたのか、屆かないのか、矢張り何とも返事がない。何か變事があつたのではないかと思つて、ブエノスアイレスの伊太利領事館へ賴んで調べて貰つた。で三ケ月後に領事館から來た書面を見ると、新聞へ廣告を出して探して見たけれど、誰れも出て來る人もなく、手紙をよこす人もなく、一向手がゝりがないと書いてあつた。之れ程手を盡しても分らないとはどうしたのだらう、奉公などをして居るので外聞が惡いと思つて、名前を變へて居る爲めに知れないのか、其れとも實際何か變つた事があるのかと、家の方では色々と心配した。

其れから數ケ月立つても、未だ何の便りもなかつた。家では父も子供も心配で心配でならなくなつた。特にマルコは鬱ぎ込んでばかり居た。さて何うしたらよいだらう、誰れに賴んだらよいであらう。父は或は自分で亞米利加まで行つて見やうかとも思つたが、其れでは自分の仕事が出來なくなる。二人の子供を誰れが養つてくれるであらう。其れを思へばどうしても自分で行く譯には行かない。年上の子にしても、この頃少しづゝでも金を取ることを覺えて暮しの助けになつて居るのだから、之れも出かけて行つては困る。といふや

うな譯で、三人は只だ心配ばかりして居た。毎日々々同じやうな悲しい言葉を繰り返すか、互に默つて顏を見合せてゐるのがせめてであつた。

ところが或る晩、年下のマルコは、如何にもキッパりした口調で、「僕がお母さんを探しに亞米利加へ行つて來ます」と云ひ出した。

父は悲しげにたゞ頭を打ち振つた。マルコの考へはまことに、殊勝であるが、とても出來さうな事ではない。一月もかかる旅行を僅か十三歳の子供がタッタ一人で、どうして出來るものではない。然れどマルコは是非行くと云つてきかなかつた。其の日も其の次ぎの日も、如何にも落ち附いて、大人の云ふやうな道理を言つて云ひ張つた。「外の人も行つたんですもの、船にさへ乘れば僕だつて行かれないことはありません。行つてお父さんの從弟の店を探がせばいゝんです。あすこには伊太利人がイクラも居るから、道なんか誰れでも敎へてくれるでせう。從弟が見附かれば、お母さんの居所は直ぐ知れます。若し從弟が見附からなかつたら、領事館へ行きます。其れから奉公先きを探します。どんな事が起つたつて僕の身は大丈夫です。亞米利加では誰れでも仕事が出來るから、僕も何かやります。さうすれば家へ歸つて來る位の金は必ず取れます」と言つて父に說いた。マルコは元來利口な勇氣のある子供で、是迄も色々苦難に慣れて居たのであるが、此度は大事の母親を探すと云ふ尊い目的がある爲めに、其の善い性質は一層著しく現はれた。そして知人で船長をして居る人が此の話を聞いて、マルコの爲めにアルゼンチンまで三等客として無賃で行かれるやうに骨を折つてくれたので、父もとう／＼同意した。

乘る船も立つ日も定まつて、着物は一の袋の中へ入れられた。マルコは二三クラウンの金と從弟の所書きとを貰つて四月の或る天氣のよい日の夕方に皆んなに見送られて船に乘つた。

船が今しも動き出さうとする時に、父は船の梯子の上に立ち、目に涙を浮べながら、「マルコや、身を大事におしよ、お前は尊い仕事を始めたのだから……。父

は神様がお前を助けて下さるやうに祈つて居る」と云つて最後のキッスをした。

△其　三

マルコは固い決心を持つて居た。どんな困難が起つて來ても、其れに堪へて行く丈の用意は出來て居た。けれど美しいゼノアの町が地平線上に見えなくなり、出稼の百姓等のゴタ〳〵と集まつて居る船の中に、一人の知り合ひもなくたゞ一つの小さな袋を持つて、獨り大海に漕ぎ出たのだと氣附いた時には、急に心細くなつて來た。



食ふともろく〳〵せず、舳先の方に犬のやうに蹲まつて、色々頭を惱ませた。時にはお母さんは既う無くなつてしまつたのだ

と云ふやうな考も起つた。こんな事は暫々あつた。眠れば屹度苦しい夢を見る。夢にはよく知らない顏が現はれて、氣の毒さうにシゲ〳〵と眺め、耳元に口をよせて『お前のお母さんは無くなつたよ。』と云ふ。ハッと思つて目を醒まし、思はず聲を立てやうとしては無理に其れを抑へて居た。

　ヂブラルタルの海峽を過ぎ、始めて大西洋を見た時には、いくらか元氣も附き、心に望も湧いて來たが、其れもホンの暫くの間で、何所まで行つても果てしのない廣い滑らかな海や、次第々々に增して來る熱さの苦しみや、あたりに居る貧しい人々のミヂメな有樣や、誰れも知り合ひのない淋しさなどの爲めに、再び心細くなつて來た。毎日々々同じやうな日が明けては暮れ、明けては暮れして、後から考へて見ても、何の日が先きで何の日が後であつたか解らない。頭はぼうッとしてしまつて、既う一年も海の上に居るやうな氣持がした。そして自分は亞米利加へ行く爲めに、この廣い太洋の上に獨り泛んで居るのだと思ふて、今更のやうに驚いた。折々甲板の上に落ちて來る美しい飛魚も、大きな雲が血か火のやうに眞赤になつて居る熱帶地方の壯大なる夕日の景色も、夜、燃え立つやうに美しく見える燐光も、マルコには總て夢のやうに思はれた。海の荒れる日には、室にある物はコロ〳〵轉がつては打ち當り、大勢の人々は苦しみ悶ゆるので、ゾッとする程恐しく、終りの日が來たのだらうとも考へた。又た海が穩かで暑さの酷い日には、衰へ弱つた乘客は、板の上にチット横はつて死んだ人のやゝ　なつて居る。もう退屈で〳〵で仕方がない。之を凌ぐのもなか〳〵苦痛であつた。

　何所まで行つても海は盡きない。明日も今日と同じく、次の日も其の次の日も、何時までも、何時までも同じ事を繰り返して果しがないのかと思つた。

　マルコは船べりに倚りかゝつて、渺茫たる海を眺がめつゝボンヤリとお母さんの事を考へて居た。其のうちに、何時の間にか目は閉がり、頭はグッタリと垂れて、知らず識らず睡つてしまつた。すると又た例の顏

が現はれて、不憫さうに彼れを眺め、耳元に口を寄せて、『お前のお母さんは無くなつたよ』と云つた。マルコはビックリして目を醒し、再び目に飽いた地平線を眺めつゝ、夢のやうな考へに沈んだ。

△其四

航海は二十七日間續いた。おしまひ頃は天氣は善く氣候も涼しかつたのでマルコも大分元氣が出た。そして同じ船に乗つて居たロンバーデイから來た一人の老



人と近づきになつた。此の人は息子がロサリオと云ふ町の近くで農業を營むで居るのを尋ねて行くので、それに自分の身の上を殘らず話して聞かせた。老人はひどく同情して手でマルコの脊中を撫でながら、『大丈夫、大丈夫、お母さんはキツト壯健で御居でなさる』と幾度も繰り返して言つた。

此の知り合ひが出來てから、マルコは餘程心に希望を持つ

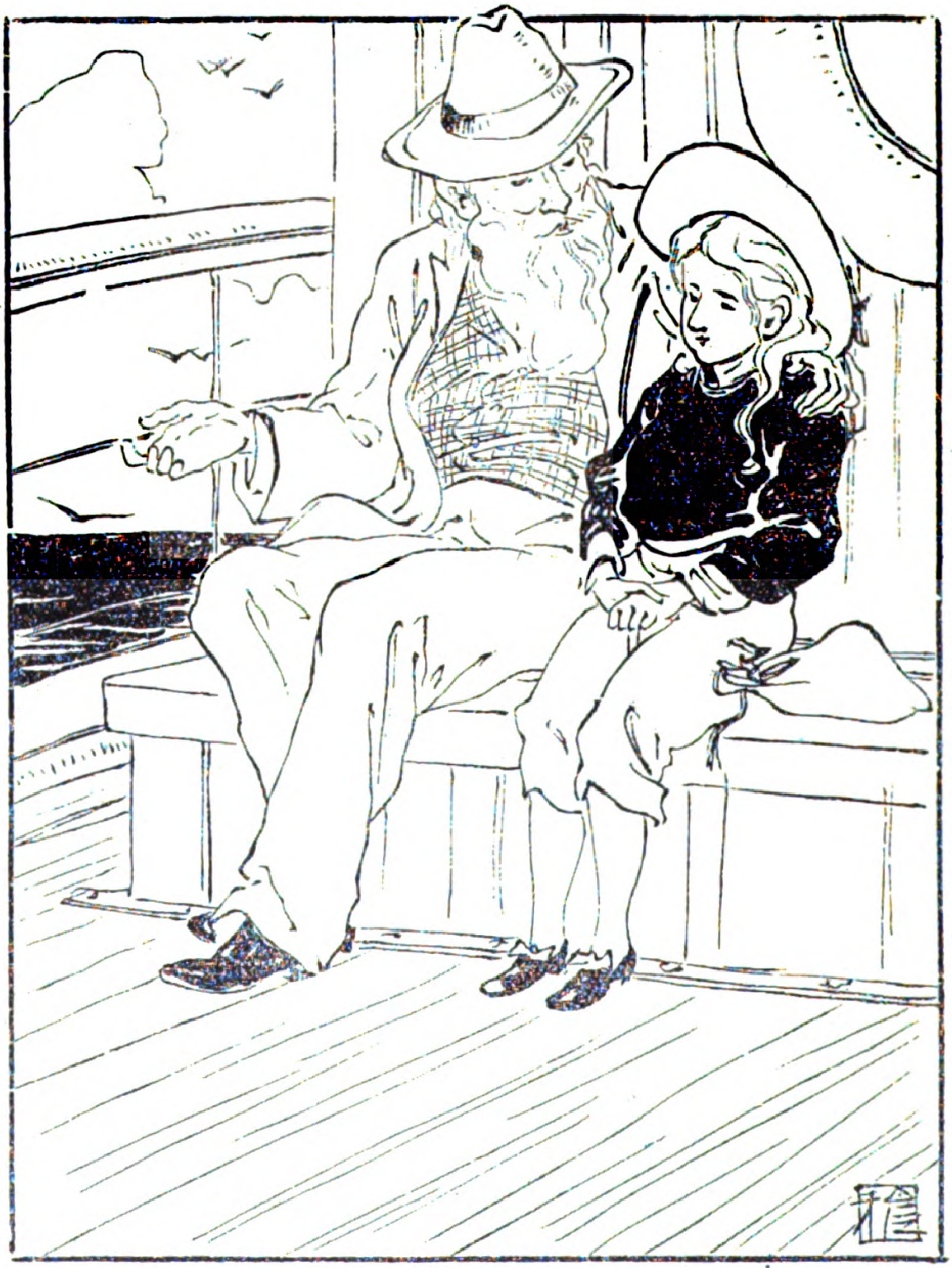
た。是迄は前途は全く暗黑だつたが、今はたゞ嬉しい事が先きに待つて居るやうな氣持ちがするやうになつた。星がキラ〳〵輝いて居る美はしい晩には、老人と並んで舳先の所へ腰を降ろし、外の人々が歌を歌つて居る中でブエノスアイレスへ着いた時の有樣を幾度となく想像した。そして――自分は從弟の店が見附つて從弟の所へ飛むで行く。「お母さんはどうしたでせう、直ぐに一緒に行つて見て下さい、直ぐに〳〵。」二人は一緒に急いで行く。上り段を上ると、戸が開かる――と此所まで想像する每に、お母さんが懷かしくつて、頸に掛けて居る小さな十字架をソツト引き出して、其れにキツスをしながら、口の中で祈りをした。

家を出てから二十七日目、五月の或る美くしい日の朝に、船はプラータ河の入口に錨を降した。ブエノスアイレスは此の河岸にあるので、天氣はよし、マルコは嬉しくて〳〵ヂツトしては居られなかつた。彼れは最早やお母さんの所から僅かに三哩しか離れて居らぬ。モー二三時間もすると遇はれるのである。彼れは今亞米利加に居る。新世界に居る。大膽にも一人で此の遠くまで來たのである。長い長い航海も、今となつてはマルコにはほんの一時のやうで、夢のうちに飛んで來て、今目が醒めたやうに思はれた。マルコはポケツトへ手を入れて見た。家を出る時には貰つた金を二つに分けて別々にポツケツト・へ入れて置いたので、かうして置けばたとへ落しても一度に殘らず無くする氣遣ひはないと思つたからであるが、見れば二つに分けた金はたゞ一方外見附からなかつた。其れでも別に驚きも悲しみもしなかつた。其れ程彼は喜んで居たのである。一方の金は盜まれて、あとには二三リーラ外殘つて居ないが、もうお母さんの近くへ來たのだから、其んなことはどうでもよいと思つて居た。さて袋を手に持つて、外の伊太利人等と一緒に小蒸汽に乘り移り岸の近くまで行つて又ボートに乘り移つて波止場へ着いた。陸へ上がつてロンバーヂイの老人に挨拶して、町の方へ向つていそ〳〵と歩いた。

最初の通りの入り口に達した時、マルコは通りかゝ

つた人を呼び止めて、ロスアルテスと云ふ町へ行くにはどう行つたらよいかと尋いた。其の人は伊太利人の勞働者で、珍らしさうにマルコの姿を見て居たが、やがて、字が讀めるかと聞いたので、マルコは「ハイ」と頷いた。

『ソレではね』と勞働者は自分が今來た方角を指しながら、『町の角々で其の町の名を讀み讀み此所をスットト眞直に行くと其町へ出る』と敎へて呉れた。



△其五

其の通りは長い〳〵幅の狹い通りで、兩側には小さな別莊のやうな低い白い家が立ち並び、通りには人や馬車や荷車が一パイで、喧しくつて耳が

潰れさうである。船の出るのを知らせる爲めに、白赤青などの大きな旗が其所此所に立てられて、其れに船の行先を大きな文字で書いてある。少し行く毎に四つ角がある。其所から右左を眺めると、其所にも眞直な通があつて、兩側には矢張り低い白い家が立ち並び、通りは人と車とで一パイになつて居る。其の遙か彼方には、果しのない亞米利加の平原が、海の地平線のやうに見えて居る。マルコは、幾日歩いても、幾週間歩いても、こんな通りが右にも左にも續いて居て、亞米利加中がこんな町であるやうに思つた。彼れは町々の名前を氣を附けて見て行つたが、何れも聞き慣れない名なので、讀むのになか〳〵骨が折れた。新しい町へ來るごとに、自分の探がす町でないかと思つて、胸がどき〳〵した。其のうちにもお母さんに遇ひはせぬかと思つて、婦人に逢ふ毎に氣を附けて見た。先きに行く婦人の姿が母に似てゐるので、血を躍らせて追ひ附いて見ると、黒人であつたやうなこともあつた。次第次第に足を早めて、先きへ先きへと進んで行つた。餘程歩いて一つの四つ角へ來た時に、町の名前を讀んで見るとロスアルテス町とあつたので、其所へ根が生えたやうに立ち止まつた。其町へ這入つて行くと百十七番地と云ふのが目に附いた。從弟の店は百七十五番地である。彼れは一層足を早めた。殆んど走る位に歩いたので、百七十一番地へ來た時には息が切れさうになつた。立ち止つて息つぎながら「お母さん、お母さん、もう直きにお目にかゝれるんですね」と心の中でさゝやいた。彼は又駈けて小さな小間物屋の店へ着いた。此所が尋ぬる家である。其の店へ近づくと其所に白髮の目鏡を掛けたお婆さんが居た。

「何を上げますか」とお婆さんは西班牙語で言つた。

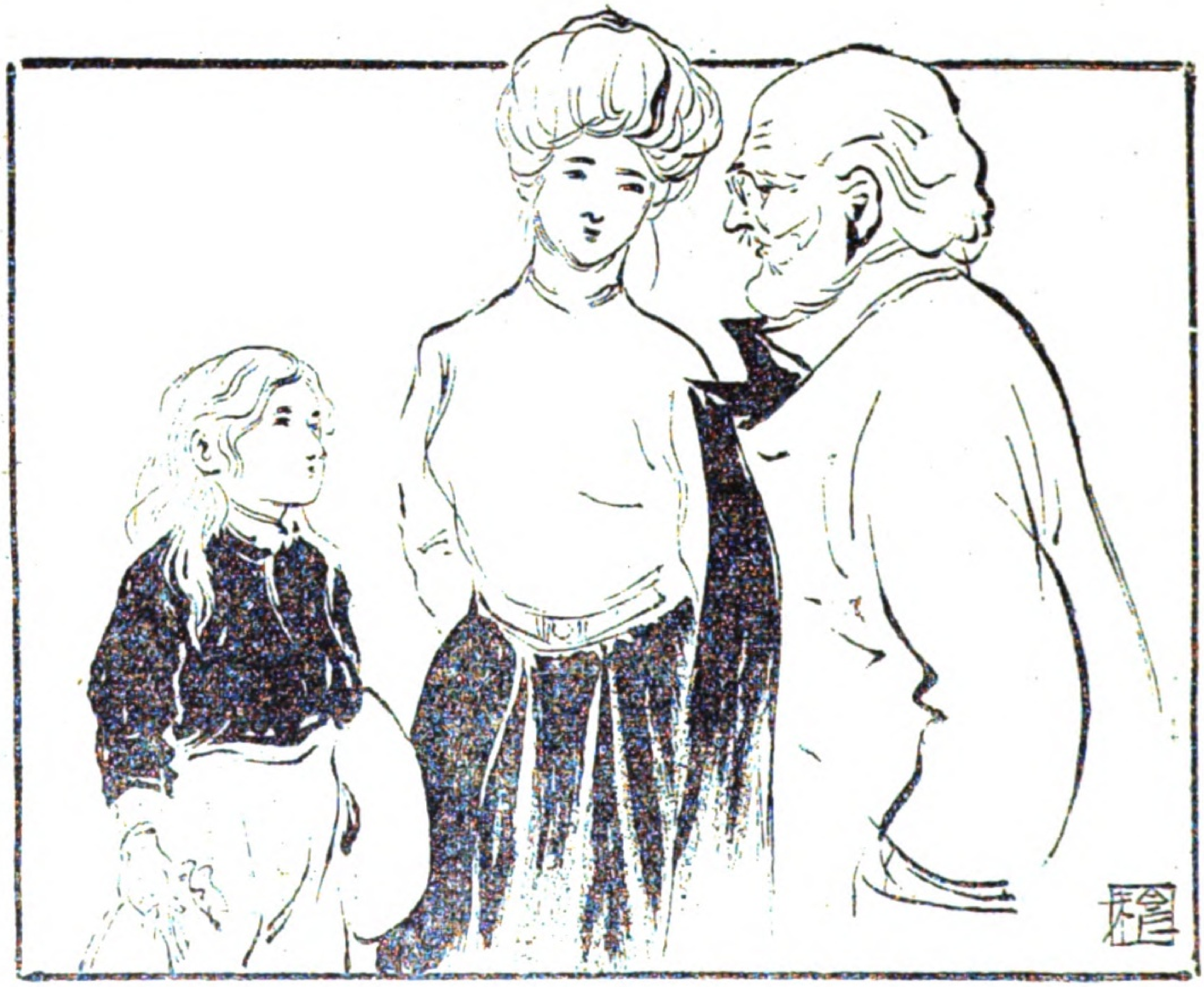
「此處はあの、」と云つて、マルコは更にハッキリした語調で「フランセスコメレイの店ではありませんか」と尋ねた。「フランセスコメレイは亡くなりましたよ」とお婆さんは伊太利語で答へた。

マルコはひどく驚いた。

「何時無くなつたんです!?」

『そうですね、もう餘程前ですよ。幾月か前に、商賣が都合が惡るくて逃げて行つたので、人の話では、バヒアブランカへ行つたと云ふ事ですが、其所へ行くと直ぐに亡くなつたんです。此の店は今は私の店なのです』とお婆さんが云つた。

　マルコは靑くなつてしまつた。そして『メレイさんは私のお母さんを知つて居たのです。お母さんはメキネズといふ人の所に奉公して居るのですが、お母さんの居る所はメレイさん丈が知つて居



たのです。私はお母さんを探しに伊太利から來たので、どうしても探さなければならないので』と云つて非常に落膽した。

『マー可哀想にね、私は知らないけれど、其所の庭に居る子供に聞いて見て上げませう。あの子はメレイさんの使をして歩いた人の事を知つて居るから、何か解るかも知れません。』

　と言ひながらお婆さんは店先へ行つて子供の名を呼ぶと、直ぐ子供がやつて來た。『ねー、お前知つてお居でかい、メレイ

さんとこの若い人が、何所かに奉公をして居る女の人の所へ、折々手紙を持つて行きはしなかつたかい』と、お婆さんが尋ねると、『メキネズさんの所へ行きましたよ。時々行きました。ロスアルテスの端れの所です。』と其の子供が答へた。

『ア、、有り難う御座いました』とマルコは心からお禮を述べながら、又其の子供に向かつて、『番地は何番地ですか、あなた之れから直ぐに私と一ショに行つてくれませんか、私はまだ少しばかり御あしを持つて居ります。』と熱心こめて云ふと、子供も彼れに同情して、お婆さんの言葉も待たずに、『いらつしやい』と云つて、直ぐサッサと出かけて行つた。

長い〳〵町の端れまで、二人は一言も口を利かずに、殆んど一走りに走つた。そして一つの小さな白い家の入口を這入つて美しい鐵の門の前に立ち止まつた。門から中を見ると、小さな庭の中に花鉢が一パイに並べてある。マルコは呼びリンを引つぱつた。

若い婦人が現はれた。

『メキネズさんのお家はこちらでせうか』とマルコは心配しながら尋ねた。

婦人は伊太利語を西班牙風に發音して『モトはメキネズさんの御宅でしたが、今は私共が此所に居ります』と答へた。『其れぢやメキネズさんは今はどちらにおいでゞせう』とマルコは尋ねた。彼の胸はどき〳〵して居る。

『コルドヴアへ御出になりましたよ。』『コルドヴアへ！』とマルコは大きな聲を出した。『コルドヴアつて何處なんです。奉公人も一緒に行きましたか。奉公人て私のお母さんなんです。私のお母さんが奉公して居たのです。お母さんも一ショに行つたんでせうか。』

婦人はマルコを見つめながら、『私は存じませんがね、事によつたら父は存じて居るかも知れません。あの方達が御立ちの時分、父はあの方々と知り合ひになつて居たのですから。一寸御待ち下さい。』と云つて去つた。

婦人は驅けて行つて父親を連れて戻つて來た。父親

は脊は高く、鬚白く、髮の毛は黄金色で、鷲のやうな鼻を持つた人である。ゼノアの子供をヂット、眺めて、語調の惡るい伊太利語で、

『あなたの御母さんはゼノアの人かね』と尋ねた。マルコは『ハイ』と答へた。

『アーそれぢや其の人も一緒に行きましたよ。さうです、間違ひありません。』

『何と云ふ所へ行つたんでせうか。』

『コルドヴアと云ふ市です。』

マルコは嘆息した。けれども仕方がなかつた。暫くして『其れぢやコルドヴアへ參りませう』と云つた。

『あー、氣の毒な子供だわい』と婦人の父親は西班牙語で叫んだ。『可哀想に、コルドヴアへは何百哩かある！』

其六

マルコは死人のやうに青くなつた。そして片手で勾欄につかまつてやつと身を支へた。

婦人の父親は氣の毒でならなくなつて、『何とか工風がありさうなものだ』と云ひながら、戸を開けて、『マー、一寸お這入りなさい。何とか考へて見やう』と云つた。そして自分も腰を掛け、マルコにも腰を掛けさせて、マルコに身の上を物語らせて、熱心に聞いた。と暫く考へ込むで居たが、やがて決心した風で、

『アナタ、お金が無いでせうね』と云つた。

『まだ幾らか有ります。少しばかり』とマルコは答へた。

婦人の父親は暫く考へて居たが、やがて机の所へ行つて手紙を書き、封をして其れをマルコに渡し、

『ね、子供さん、よくお聞きなさい、之れをボーカと云ふ所へ持つて行くのです。ボーカは此所から二時間ばかりで行かれる町で、其所の人は半分はゼノア人だから、道は誰れに聞いても解かる。其所へ行つたら、此手紙の宛名の人を探すのです。誰れでも知つて居る人です。其の人に此の手紙を渡せば、其の人が、明日はあなたをロサリオと云ふ町へ送つてくれ、其れより

其町の人に頼んで、又あなたがコルドヴアまで行かれるやうにして呉れる。其れから之をお持ちなさい。』と云つて、マルコの手に二三リーラの金を持たせた。『では氣を落さんやうにして御いでなさい。何所へ行つても御國の人が居るから、キット誰れかゞどうにかしてくれます。ぢあ、左樣なら。』

マルコは只だ、

『有りがたう』と云つて、袋を持つて外へ出で、案內の子供にも別かれて、此の大きな騷々しい都の中をボーカの方へソロ〳〵と出かけた。胸には悲しさと驚きとが一パイであつた。

それより此の日の夕方までにあつた事實は、ボンヤりして、全く夢のやうであつた。其の晩はボーカの或る見すぼらしい宿に、港へ荷物を運搬する勞働者と一緒に寢むだ。次の日は積み重ねてある材木の上に腰を掛けて、夢を見るやうな心持ちで、澤山の船や、ボートや小蒸汽を眺めて暮した。そして其の日の夕方に、ロサリオ行きの大きな帆前船に乘り込むだ。其の船は荷物船で、三人の日に燒けた丈夫さうなゼノア人が動かして居た。其の人々が語るゼノアの言葉や、發音を聞いて、マルコは幾らか心を慰められた。

怒りは短命の相

事に激して起る憤怒を、生理上から解剖すると、第一に神經の血管が擴張して充血し、其に次いでは反對に血管が縮小するから、怒つた初めは顏の色が赤くなるが、終には青くなるが、常だ一層激く怒ると全身の筋肉堅く緊りて齒軋りをしたり、腕を扼したり、拳を振つたりするが、血管の强健な若い時代なら兎も角も、血管の脆くなつて居る老人になると動もすれば血管破裂の危險が伴ふのだ、但し若いからつて怒つて善いことはない、憤怒の度の超えた神經衰弱とかヒステリーとか、精神病になつたのには夫れ〳〵治療法も備てあるが、普通人の憤怒に對しては能く對手（例へば妻が夫に對するとか奉公人が主人に對するとか子が親に對するとか）の平生の氣心を呑込んで居て、彼樣すれば斯樣する斯樣すれば彼樣すると云ふ樣に仕向けて往くの外はない、又た他人の憤怒の惡癖を癒して遣りたいと思ふ親切心があるなら憤怒の場合に口を出さずに、精神の靜かである平素に於いて憤怒の凡ての方面に害になることを勸告するが好い、次に自分に注意をして若しも憤怒の念が萌した節は第一身體に力を入れぬ事、第二手、口、頰の邊を緩める樣にする事である、左樣すれば大體は憤怒は外に發しないで靜まつて仕舞ふ、手に力を入れたり口を尖らしたり頰を膨らしたり眼に角を立てたりすると心の靜かである時でも何となしに神經が亢奮して來る氣持ちがするものだ。

讀者俱樂部

▲内藤千代子様、毎々溢るゝばかりの諧才よ縦横にお振ひ遊ばし、此の誌上を獨專してお出遊ばすお筆の綾、たゞ驚くの外は有りません、ですが私此方については不思議でならない事が有りますの、いつぞや何誰様が御習ひ遊ばした様に、毎年々々十八でお出になりますのね、まさか今の世に萬年娘でも有りますまいし、それかと云つて、千代子様の所丈お正月が避けて行く譯でも、有りますまい、それ所か彼方はお正月が大の〳〵お好きでは有りませんか、私屹度此方は年を隱してお出になるのでせうと思ひますわ、何ぱ何でも十八やそこいらで、あんなに人情學に通じて居る筈が有りませんわ。(露草)

▲皆様、新年はさぞ賑かでしたでせうれ、當地は雪道で少女ざかりの私どもは羽根がつけませんで、なにより殘念でした、併し元日さう〳〵コタツ番も致されず、一句位は洒落れて見ました、張りつめて氷なとくや初日の出(物河日和)

▲上原綾子様、此方も内藤様に、まさるともおとらない御達筆、何所迄も華なやか、おつとりとした、令孃風、ですがお書き遊ばす事が餘りに貴族的で私等平民には向きませんわ、綾子様は青柳様の若様御存じの御様子、どなたか大學にお出遊ばしますの、武明様此頃は目白の寮にお出でゝ、土曜日曜に自轉車、又はお馬では御本宅へお歸りになります、あの學習院の制服で馬上ゆたかにお歸り遊ばす所、ほんとに畫に書き度い様です。(露草)

▲記者様にお尋れ致します、皆様の出されたる新年のマダムとか或はクラスメート花くらべとか言ふ種々の記事は、皆自分勝手に沒書せられるので御座いますか、また和歌は新派でなければ沒書せられませんか。(丹波夕榮)——記事はどちら自由に御投書になつてもよろしく、和歌はどちらでも良いのを採ります。

▲東京あたりは存じませんが、京都邊では物を懸で買ふ時は買物帳を持つて行きます、其の買物帳を或る時紛失致しました、そして月末に買ひもせぬ物が書出しについて居りましたので、始めて買物帳で誰かゞ買つたものと知りました氣をつければなりません。(京都福子)

▲玉露様、野菊様、お二方とも大好きです、野菊様女學校卒業になつて、太田のさる小學校のティーチャーの所へお嫁き遊ばした御様子、其分に安んじて少しも不平を口に遊ばさず、よく脊の君に侍き給ひ、様々の教訓談など、時折お書き遊ばしては、私共に御示し下さる優しき御心、何時も〳〵感謝いたして居りますのよ、それに少しも高ぶると云ふ事なく、「はかなげに咲く野菊一輪」なんてケンソンしてお出になるのですもの、私大好き、どうぞ野菊様、おひまの節はどし〳〵お書き遊ばして頂戴、私貴女様の様な方の、一人でも多くなる様に、祈つて居ります。(露草)

▲樂しかつたお正月の中で、私の最も嬉しかつたのは、私の絶えず御慕ひ申してゐる秋香様や花散里様の御作がそろつて出てゐた事です、皆様の中でお二方の現實の御境遇を御存じの方は誌上で是非くはしく御知らせ下さいまし、御願ひで御座います。(姫路片田舍にて殘月)

▲長谷川よし子様の御尋ねにたいして(一)會話は少し出來れば白人の家に働く事は出來ます、(二)渡航早々必要なのは申迄でも無く會話と自分の目的の道をかへぬ事と私は思ひます。(三)有夫の女子は夫と共々に白人の家にてウエバ又は子供のもりに雇はれます。(四)若き女子の働きとしては三の如く或はスクルガルとして學校に通ふ等です。(五)市外にては殆ど家内働きはなく、田舍働きは何れも有ります。(六)當地はサンフランシスコの近くにて、加州大學の有る所なれば、スクルボイ(ガル)として大中小學校に通はるゝ人と、他は白人の家にクツク、ウエ

々、又は日々出働きに行く人、其他商店等種々にて、五百名ほど日本人が居られ、内一割は女子です、學力の如何は存じませぬ、自由なので只うか〳〵と日を過しやすい樣です、堅く志をもつて居れば、大した事もないかと存じ候、多忙に付是で御めん下さいませ。(在北米バクレ市福村北子)

▲十二月號の美文欄に農村日記をお出しになつた内田露子樣、あなたはもしやかど子樣ではございませんか、秩父の方だといふ所からもどうしてもさう思はれてなりません、もしそんなら私同村の者、同じ學舍に生ひ立つた女でございます、あれを拜見して何だか昔なつかしの情に堪へませんで、直接お手紙上げやうと存じましたが、あまり失禮かと思ひまして誌上でおうかがひ申します。(小田卷の里まがき)

▲二三年前よく痛快な事をお書き遊ばした、元鱗姉さんとお云ひの方、今はどう遊ばしたでせう? 其當時はよく男子だとか、何とか隨分それは今の萩香樣以上の評判でしたが、其後少しもお見えになりませんのね、女でもあの方位、世の中の事が痛快に書けたら、面白いでせうれ、近頃餘りお名が見えませんが、秋雨樣の御文が好きですが、其方の御性格を承知して居るだけに、何ですかお云ひ遊ばす事が、平生の事と一致しない、机上の空論の樣に思はれて仕方が有りません。あゝ悪口云つて、さぞまあクシャミ遊ばしたでせうれ、お氣の毒れ、やめませう、餘り調子なの事と終ひには、ボロが出さうですから。(露草)

▲晶子樣の痛快なお筆つき、男子もあのお觀察にはかなはないでせう、「男をも灰の中よりひろいたろ釘のたぐひに思ひなすこと。」(岐阜の芳子)

▲一月元旦早々まことに有益な御話を種々拜見して、實にうれしうございました、與謝野晶子さまの雜記帳いつもながら面白う敬服の至りでございます、記者樣、後生ですから晶子女史の御容姿誌上で拜見さして下さいませんか。(和歌山縣有里郡廣村かげろふ)

▲記者樣、投書する原稿には、皆かなを附けて置かればなりませんか、どうぞ御敎へ下さい。(忘れな草)――假名のあつた方が結構です。

▲平塚白百合樣、女學世界はじめ諸雜誌を通じて、才筆をお振ひになるのは、此方が一番でせう、詩に和歌に、美文に、新體詩何でもお上手なのれ、お羨ましいわ、貴女樣は私を御存じないかも知れませんが、私よく存じて居りますよ横寺町にお出の時分、お見上げ申したのは一度では有りません、ホヽヽヽ私誰だかお分りになりまして？(琴子)

▲十二月の誌友倶樂部でお目にかかりました佐渡の一女樣、御なつかしう存じます、私も故高山樗牛先生崇拜者の一人で御座います、以後誌上で御交際を。(豐前一愛讀者)

▲淋しい片山里に本誌を友として居ります者です、お優しい皆樣、妹と思召して御導き下さい在米の御方にも御交際致したいのですがもし御心がありましたら、異國の事でもおもらし下さいませ、御返事は屹度いたします。(長野縣長野市長門町二二樋口ろり子)

▲おなつかしき平塚白百合樣恐れ入りますが下名迄御住所御もらし下さいますやう御願ひ致します。(牛込區西五軒町十四番地竹田不二子)

▲一昨年當地高等女學校卒業いたし、目下當地某小學校に奉職いたしてゐます、事情ありて今回東京地方に何か就職いたしたいと存じます、皆樣の御同情を仰ぎたく存じます、御通信は廣島市十日市町坪井春一方CM子。

▲私は幼少より逆境に育ち、今尚苦境中にあります、賴みに思ひしたつた一人の叔父も、上京して數年の勉學も空しく今は病床に横つて居ります、のぞみは全く絶えました、父が叔父が成功した時は勉強もさせうと云つた言葉もあだとなりました、多くの弟妹は未だ幼く、とても力

になりません故、私上京して苦學でも致したいと思ひますが、さし當り參る處がなくて困つて居りますから、小間使でも女中でもよう御座いますが、御情けある諸姉樣方、不幸なる私をあはれと思召して御世話下さる樣御願申ます御手紙下さる時は下名の所で御座いますから（北海道白老郡白老村丸子露花）

▲皆さんの内に、四十二年九月の増刊滑稽習字競べお持ちの方は、御めぐみ下さいませんか、御禮としては名所繪葉書御送り致します。（山梨縣中巨摩郡西條村押原清水くら子）

▲皆樣、新年號はほんとうに面白うございますれ、私は京都がなつかしくてなりませんの、京都の皆樣、何とぞ御交際をねがひます。（兵庫島崎倭文子）

▲私、今までは少女世界を愛讀して居ましたが今年から女學世界を愛讀致すやうになりました誌上の皆樣方よろしくお導き下さいませ、（近江にて都子）

▲記者樣初め諸姉上樣、今年も相變らず御交りを願ひます、昨年は皆々樣に失禮のみいたしました、今年は、もらさず御返事いたします、私事京都府久世郡御牧村字森、田中藤三郎方へ參つて居りますから、以後は何卒田中方へレターを下され度し、終りに皆々樣の御健康と本誌の隆盛ならん事を祈ります。（大西民子）

▲誌友の皆々樣、私は田舍に淋しく只本誌を唯一の友として居る者で御座いますが、何卒私はがきの交換をして下さいませ、御思召が御座いますお方樣は御交際をねがひます。（丹波氷上郡佐治新町肥田勢い子）

▲愛讀者の君へ申上げます、私は只今萩の里で淋しく暮して居ますからどうぞ、御交際下さいませ。（山口縣阿武郡萩町槑田梅子）

▲妾は女學世界の愛讀者ですが、皆々樣と御交りを願ひます、又繪葉書の交換を願ひます。（京都市萬壽寺通り御幸町西へ入大橋琴子）

▲各地の名所繪葉書の交換を願ひます。（靜岡市上八幡町柴田和吉方菊瀨多代子）

▲愛讀者諸姉樣、私は至つて不束者で御座いますが、以後お玉章の御交際をお願ひ申します。（東京市神田區岩本町八番地齋藤しん子）

▲皆樣、何卒おいとまにはお手紙下さいませ、及ばずながら御返事さし上ますから。（福岡縣築上郡廣津後藤文子）

▲皆樣の中にもしヴ井オリン御不用のお方は、何卒〳〵下名までお送り下さい、おれがひでございます、お禮はきつと致します、もしお送りのお方はお手がずながら下名まで一度おしらせ下さいませ。（石川縣上金石本町二柄川幸子）

▲備後の御方、私は一生を獨立でそして氣の晴れる樣な處で暮したいのですが、どこぞよい處はないでせうか備後中でも深安靜中が望ましいのです、何卒御氣が付いたら次號で御敎へ下さい一生の御願ひですから。（備後すみ子）

▲品小枝子さまの「春の天然より得たる敎訓」並に花筐さまの「我が處女の春」は人生の春懸賞第四等に當選したものと思召下さい、又照代さまの「たてその記」は特別寄書に入りました。（記者）



募集（二月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文

天賞畫圖、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞畫圖、地賞五拾錢、人賞參拾錢

每月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）　金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內一定刊數……十二冊
一增刊四回　一、五、九、十一月價格同一

郵税　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	一行	四半頁	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	廿三圓	五十五圓
一等	……	……	十九圓	四十五圓
二等	……	十圓	十四圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	……	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十四年一月廿三日印刷納本　第拾壹卷第參號

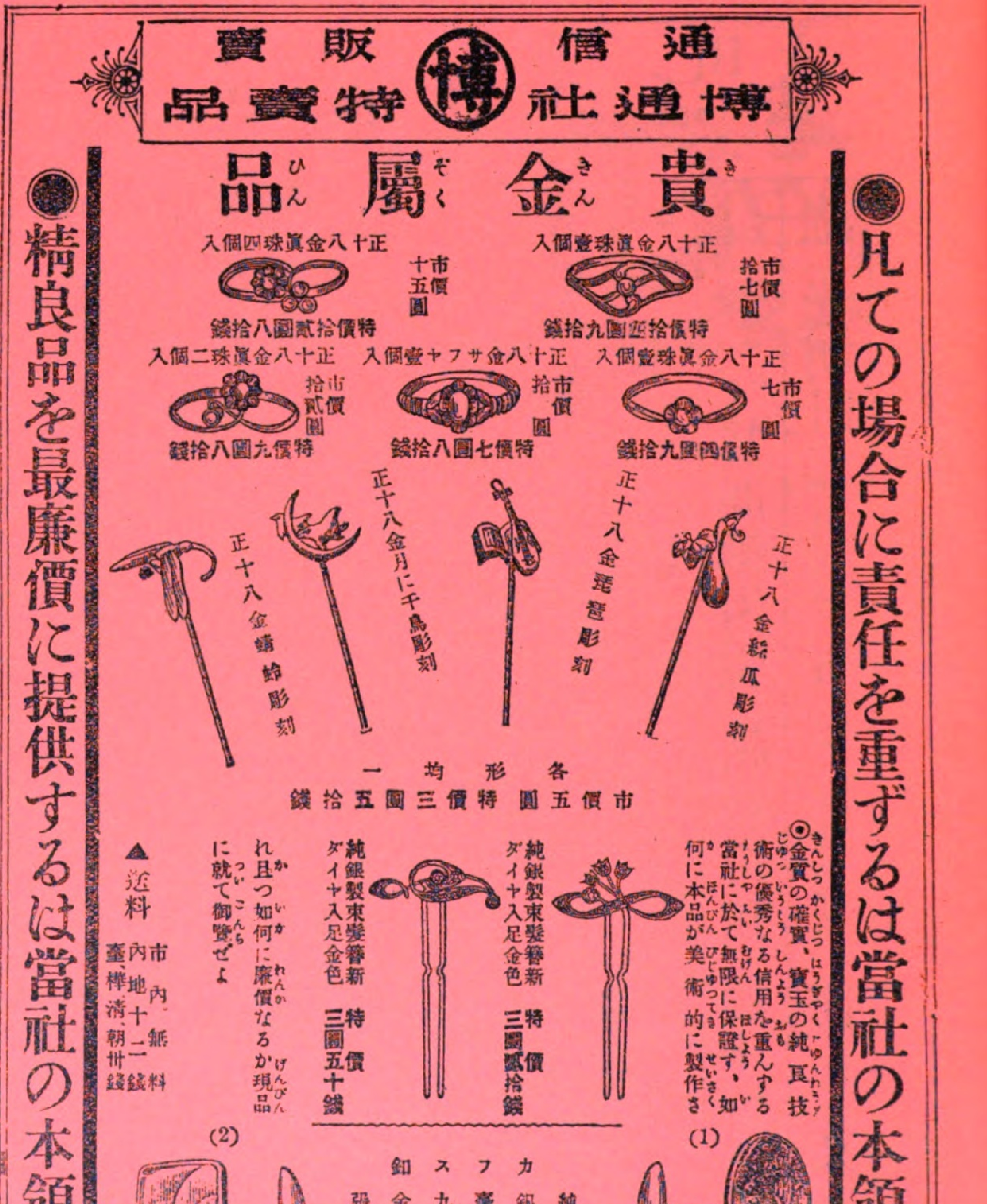
編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番



通信販賣
博通社特賣品
博
貴金屬品
正十八金眞珠壹個入
市價拾七圓
特價拾四圓九拾錢
正十八金眞珠四個入
市價十五圓
特價拾貳圓八拾錢
正十八金眞珠壹個入
市價七圓
特價四圓九拾錢
正十八金サフヤ壹個入
市價拾圓
特價七圓八拾錢
正十八金眞珠二個入
市價拾貳圓
特價九圓八拾錢
正十八金絲瓜彫刻
正十八金琵琶彫刻
正十八金月に千鳥彫刻
正十八金蜻蛉彫刻
各形均一
市價五圓 特價三圓五拾錢
◉金質の確實、寶玉の純良、技術の優秀なる信用を重んずる當社に於て無限に保證す、如何に本品が美術的に製作され且つ如何に廉價なるか現品に就て御覽ぜよ
純銀製束髪簪新ダイヤ入足金色 特價三圓貳拾錢
純銀製束髪簪新ダイヤ入足金色 特價三圓五十錢
▲送料 市内無料 内地十二錢 臺、樺、滿、朝卅錢
(1)
(2)
カフス釦
純銀臺九金張
市價二圓
特價金壹圓五拾錢
凡ての場合に責任を重ずるは當社の本領!!
精良品を最廉價に提供するは當社の本領!!
大橋メール・オーダー、ビジネス
東京日本橋區本町一丁目
博通社
振替口座東京五十番
電話本局六三十八番

女(後付の一)

立身出世の活法

◉蘆川忠雄著

洋裝四六判全一册

新處世術

定價 金四拾五錢
郵税 金六錢

本書は著者獨特の健筆を揮つて、青年子弟のために、**立身出世の活法**を示したる新著なり、**學校卒業後の青年**にして、**處世の術**を解し得ず、他人と交際しても圓滿に出づること能はざるやうにては、折角會社官廳に奉職する身となりても、失敗蹉躓して**一身の不利**を見るに至るべし、若し一たび本書を繙讀して、**處世應對上の急所根本**とする所を學び得て、之を實際に活用せば、**其圓轉滑脱**と**嶄新奇拔の頓才**とを修養して**立身活躍の光明**忽ちに開くに至らん

發賣元 東京本町 博文館

太田三郎先生著並畫

草花繪物語

▼草花繪物語は其技既に世に定評ある太田三郎先生が東西洋諸國に殘れる花の傳説を華麗なる文と清新なる繪とに依て物語られたる花の如き花の書なり

▼草花繪物語はこれ一面人生の情史にして平明流暢の筆に一味靄然たる温情を載せて描き出されし戀や涙や死や夢や力や其如何に痛切に現代の人の若き心に響き亘るかは素より弊堂の呶々を要せざる所

▼草花繪物語の滿巻繪畫は悉く著者苦心慘澹の作而もその描畫の材料に種類を異へ油繪、水彩畫、鉛筆畫、装飾畫ペン畫等あらゆる畫法に依て其蘊蓄を遺憾なく傾注せられたるもの多技多能、事として適せざるなき才人の絢爛花の如き面目は躍如として此の一巻に生動せり

▼草花繪物語の繪畫複製には弊堂の最も意を用ひたる所にして其作品の多様なる如く製版の術も亦三色版、石版、亞鉛凸版、手摺極彩色木版、寫眞版、コロタイプ版の類現今の文明が爲し能ふ限りの技術を應用したり潜に誇らくは觀者親しく先生の肉筆に接すると寸毫の差異なき興味を享受するを得れんか、敢て此の書を現代紳士淑女青年男女諸君の座右に献づ。

菊判。絹紬仕立。
金縁。堅牢箱入。
空前の美本
定價金壹圓五拾錢
郵税金拾錢

東京市日本橋區本町
發賣元 博文館
（振替口座二四〇）

女(後付の四)

（女、後付の五）

女(後付の六)

を述へたる二大少年叢書生る

現代專門諸大家執筆　博文館編

少年百科叢書

洋裝細長形頗美本
紙數每編二百八十餘頁
美麗口繪數葉挿入
定價一冊金廿八錢
郵稅一冊金四錢

少年は修學の時代也、故に其一日を怠れば、百年の悔を殘さん、殊に學海の波浪滔々として漲り、嶮山幾重に峙ちて、其前途や又決して安心すべからず、然るに學海の燈臺となり、學山の栞となすべき健全なる良參考書に乏しきは、亦昭代の一缺點にあらずや。即ち此缺陷を補ふべく茲に創刊さるゝもの我少年百科叢書なり。嗚呼修學の一路を求むる帝國幾萬の少年諸子は、此書によりて文明の新智識を享受し、學校の敎科と相俟って更に偉大なる効果を收め得るや必せり。少年机上の寶典之を措て他に求むべからず。讀め天下の少年諸君！

第一編　先哲至言　**勉學訓**　近刊

第二編　**讀書法**　近刊

第三編　**世界名君傳**　三月發行

第四編　**世界名臣傳**　四月發行

第五編以下每月一冊又は二冊宛續々發行

女　後付の七）

振替東京二四〇　**博文館** ◀



新薬に就きて

最新發明 肺病肋膜

獨逸ドクトル高平氏報告（醫事週報二一七號報告再錄）

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本藥服用後は常溫下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を增進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞賛により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）女子三年前發病遂に末期重症の**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盜汗動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々喀血し非常に羸痩す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥蓐せしもの屋外に出で日光に曝などゝろに至ろ連用三十日病全く治し食慾進み體重を增加せり

●兵頭某 卅一歲男 **肋膜炎**（喀血無し肺病初期の疑あり）胸部痛み食不振身體倦怠盜汗。咳嗽、頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へ、いかに新治療劑が肺病。肋膜、肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歴を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	無効
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	全治
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

成績	患者	性	病名
全治	籠谷	男	兩肺結核末期
全治	宮本	女	結核性肋膜炎
微効	岡田	男	氣管支加答兒及肺炎
全治	阿崎	男	右肺結核及腹膜結核
全治	神村	男	肺結核初期

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名醫の發明藥として報告する義務あるを信ず又効力多大にして持長服藥するも副作用なく殊に**喀血**と其豫防に可驚効あるを以て醫藥の傍ら服用最も妙ならん吾人は病者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むと共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく、貧者にも療法あり）遠慮なく送料郵券二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製藥所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代貰ひ得らる、故是非一讀あれ益する處多からん、之れにより全治の幸福を得らるべし

藥價

壹週金二圓
貳週參圓九十錢
參週五圓七拾錢
四週七圓貳拾錢
五週九圓

東京神田竪大工町 療養院 製藥所 **村尾明治堂**

電話本局參千七百五十二番
振替口座東京壹四參壹九番（私書函神田本局第三號）

明治四十四年一月廿三日印刷納本　第拾壹巻第參號　（明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可）

泣いて暮らしませうか 笑つて暮らしませうか

過去幾億未來永劫の天地間に、僅か五十年、而かも再ひ得られない貴重な人生は、何方も幸福に愉快に送りたいと云ふのが御希望でせう、然るに世間には人生の最大幸福たる健康を害した爲めに、遣る瀬なく煩悶し夜半の涙を小さき袂に包む御婦人は、決して少なくありませぬが、誠に御同情に堪へない次第であります、さて心配は身を削る鑢であると皆さんが能く仰つしやいますが、心配ほど身體に障るものはありませぬ、弱き御婦人が、一方病魔の責苦に會ひ、一方心の煩悶に惱まさるゝならば、どうして身體が持ちませうか、愉快なれ弱き婦人、樂しく此日を送られよ、併し身體が弱くて煩悶の止まない方に、たゞ笑つて暮らせと言つても、煩悶の動機たる病氣の全快を計らねば所詮駄目であります、凡そ生物として、生命を愛せぬものはありませぬ、蟲螻でさへ打てば逃げます、萬物の長たる人間が、生命を愛する事は言はずもあれ、自分の身體を最も愛するものは自己である事も知れ切つて居ります然るに御婦人中には、いたく健康を害し、憂愁に沈み、悲嘆に暮れ果ては世を儚み、人を怨み、徒らに暗黒の中に彷徨する人がありますが、是等の婦人は、健康回復に對し、盡くすべき手段方法を盡くさずに居るのではありますまいか、前に述べた通り處世の第一義は、笑つて暮らすにありますが、弱き御婦人が笑つて暮らすには、健康回復に向つて、全力を注がねばなりませぬ、然らば御婦人の健康を計る方法は何であるか、我田引水の誹りがあるかも知れませんが、自宅療法として、中將湯の服用か第一であります、弱き御婦人は力めて中將湯を服用せらるゝならば、健康は忽ち回復し、五十年の生涯も笑つて過ごせます、さて中將湯の効能は

●子宮病 子宮内膜炎にて白帶多く前だれ又下腹腰足の引つり痛む人
●婦人神經(ヒステリー)血の道にて氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦にし夜眠れず
●月經不順 月經滯り等にて吹出物多く又た何んとなく身體惡しき人
●逆上 頭痛 眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣強く手足痺れ水腫れ
●十七八歳になりて月經よく血ぶとり又た月經前後に下腹痛む人
●白帶 赤帶 滯下多く顔色蒼白き人●冷症にて難產流產の癖ある人
●產前何となく常ならざる人、嘔吐、產後古血の滯り或は日立惡く
●此外子宮血の道月經不順に起因する諸病にてぶら〳〵と惡しき人

定價は二日分廿錢●四日分卅五錢●一週間分六十錢●二週間分一圓十錢●三週間分一圓六十錢●五週間分二圓五十錢です本舖は東京市日本橋區通四丁目津村順天堂で取次店は世界到る處にあります●本舖には加減藥あり病狀詳しく御申越あれ

定價金貳拾錢●郵稅貳錢